

問題児たちが異世界から来るそうですよ？～  
月の姫君～

水無瀬久遠

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界は、いつだって不条理に、不合理に全てを奪い去っていく……

三年前の天災、魔王の再来よりずっと眠っていた少女の物語

※永久試運転、亀よりも遅い更新ですので、どうぞ気長にお読みください

# 目次

YES!ウサギが呼びました!

序章	奪われた世界	1
二章	穏やかな世界の裏	10
三章	白日に曝す咎	40
四章	時間の止まった街	60
五章	湯煙と月光	88
六章	ゲームは森の中	106
七章	暗雲立ち込める闇夜	149
八章	雨模様なお茶会	193
九章	星を討て	216
十章	穏やかな夜空	267

あら、魔王襲来のお知らせ?

十一章	やはりこうなる	290
十二章	逃げる問題児、追う兎	
十三章	売り言葉に買い言葉	349
十四章	蠢く影と見えない敵	404
十五章	迷宮へいざ	461
十六章	黒き風の暴挙	529
十七章	太陽と月	608



YES！ウサギが呼びました！

## 序章 奪われた世界

この世界はいつだって、不条理と不合理が牙を向き、全てを奪い去っていく……燃え盛る劫火の中、少女はへたり込む様に座っていた。

元は上等な生地であっただろう小袖は、劫火に炙られたせいで煤け、見事な刺繍が見る影もない。

そして、彼女が纏う袴は赤黒く濡れ、元の色が全く分からなくなってしまっていた。まるで地獄の様な景色の中、少女は無気力な瞳で自身の膝元を撫でる。

そこには、既に息絶えている少年の屍があった。

つい先ほどまで……笑い合い、励まし合いながら、戦っていた大切な家族。

だが、彼はもう見る影もなく、その大半を劫火によって焼失してしまっている。むせ返る様に感じる血と肉が燃える悪臭。

その中でも生きている彼女は『異常』の一言しか浮かばない。

世界が闇に包まれている中、少女は天を仰ぎ、小さく微笑んだ。

私を………死なせてください………」

「誰でもいい」

その一言を残し、少女の世界は崩壊した。

☆☆☆☆

箱庭二一〇五三八〇外門居住区画、第三六〇工房。

「……うまく呼び出せた？黒ウサギ」

「みたいですねえ、ジン坊ちゃん」

黒ウサギと呼ばれた十五、六歳に見えるウサ耳少女は、肩を竦ませておどける。

その隣で小さな体躯に似合わないダボダボなローブを着た幼い少年が溜息を吐いた。

黒ウサギは扇情的なミニスカートとガーターソックスで包んだ美しい足を組み直し、人差し指を愛らしく唇に当てて付け加える。



「まあ、後は運任せノリ任せつて奴でございますね。あまり悲観的になると良くないですよ？表面上は素敵な場所だと取り繕わないと。初対面で『実は私達のコミュニティ、全壊末期の崖っぷちなんです！』と伝えてしまうのは簡単ですが、それではメンバーに加わるのも警戒されてしまうと黒ウサギは思います」

握り拳を作ったりおどけたりと、コロコロ表情を変えながら力説された少年も、それに同意する様に頷いた。

「何から何まで任せて悪いけど……彼らの迎え、お願いできる？」  
「任せました」

ピョン、と椅子から黒ウサギが跳ねる。

そのまま『工房』から出ようと扉に手を掛けた時、小さな影が扉へ体当たりするかのような勢いで、工房内へと入ってきた。

突然の来訪に、二人は目を丸くする。

「り、リリ?!?」一体どうしたの!?!」

息を切らし、来訪してきた少女……リリに、慌てて二人は近寄る。

リリはゆっくりと息を整えると、感極まる様な表情で叫ぶ様に告げた。

「か、カグヤ様が……カグヤ様が目を覚まされました!!」

その一言で、ジンと黒ウサギの表情に喜びの笑みが灯った。



最初に見えたのは、薄い硝子の幕と見慣れない天井だった。

眠る様に横たえられた自分の身体は、長い先月を過ごしたかの様に固く、少し動かすだけでも激痛が走る。

呻くかの様に顔を顰めていると、バタン、と大きな音が響く。

普通の扉が開く音の筈なのに、酷く鼓膜が痛む。

筋肉が軋む音を立てている様な錯覚に陥りながら、少女は腕を動かし、耳を押さえた。

「本当に……本当に目を覚まして下さったんですね、カグヤ様!!」

脳を直接揺さぶる様な大きな声。

ゆつくりと身体を起こし、硝子の蓋へと手をかけ――

少女、カグヤは二度目の生を受けた様な、そんな悲惨な気分ですの主を見詰めた。

•

## 二章 穏やかな世界の裏

場所は箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベッド通り・噴水広場前。  
箱庭の外壁と内側を繋ぐ階段の前で戯れる子供達がいた。

「ジン〜ジン〜ジン〜！黒ウサ姉ちゃん、まだ箱庭に戻ってこねえの〜」  
「もう二時間近く待ちぼうけで、わたし疲れたー」

口々に不満を吐き出す彼ら。

その様子にジンが苦笑していると、彼の傍にいた者から、叱る様な厳しい声がかかる。

「我儘も大概にしろ！それでも、コミュニティの世話を任された者の態度か!!？」

「ご、ごめんなさい……」

「も、もう我儘言いません……」

牙をむき出しにして唸る彼に、傍らにいた少女が諫める様に、ポンポン、とその背を

擦る。

すると、先程まで苦笑していたジンが一步前へと出た。

「皆は先に帰っていいよ。僕達は新しい仲間をここで待っているから」

柔らかい声でそう促すと、全員が少しだけ落ち込んだ様子でトボトボと帰路を歩いていく。

その様子に、カグヤは少しだけ悲しそうな表情で見送る。

「……カグヤ、あんまり悲惨な顔してると、新しい同士が気にするぞ？」

「……………」

「……はあく。後で謝っておく。確かに、言い過ぎたかもしれない」

懺悔する様に告げる彼に、カグヤは表情を綻ばせ、頷く。

それがいい……とでも言いたげに。

と、彼はスンツ、と鼻を鳴らし、入口へと視線を向ける。

そして、小さく笑みを浮かべた。

「…どうやら、きたみたいだな」

「ジン坊ちゃーん！新しい方を連れてきましたよー!!」

彼の言う通り、外門前の街道から黒ウサギと、見知らぬ女性二人が歩いてきた。

と、黒ウサギはかぐやの姿を見つけると、涙ぐまん勢いで駆け寄ってくる。

「カグヤ様!!」

感極まるとでも言いたげの黒ウサギへ、カグヤは淡く苦笑する。

その様子に、傍らにいた銀狼がはあ、と大げさに溜息を漏らした。

「黒ウサギ、お客様をほったらかしとは、良いご身分だな」

「そ、そのお声は!!」

どこだどこだ、と辺りを見渡す黒ウサギに、ショートヘアの少女がチョンチョンと銀狼を指差す。



「今の声、この子の」

「な、なんですと!!?み、みかど帝様が狼に……!!?」

なんて事だ!!と嘆く黒ウサギに、後ろにいる女性二人は困惑気味。

これでは、話が進まな過ぎる。

はあ、と再度溜息を零す銀狼。

「あゝ……とにかく、召喚されたのはお二人なんだな?」

「はいな、こちらの御三人様が——」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

カリン、と固まる黒ウサギ。

「……え、あれ?もう一人いませんでしたっけ?ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児!』ってオーラを放っている殿方が」

「ああ、十六夜君のこと?彼なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ!』と言って駆け

出して行つたわ。あっちの方に」

あっちの方に。と指差すのは上空4000mから見えた断崖絶壁。

街道の真ん中で呆然となった黒ウサギは、ウサ耳を逆立てて二人に問い質す。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか!」

「〃止めてくれるなよ〃と言われたもの」

「なら、どうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!？」

「〃黒ウサギには言うなよ〃と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です!実は面倒くさかつただけでしょう御二人さん!」

「うん」

ガクリ、と前のめりに倒れる。

どうやら、想像以上の問題児集団を召喚してしまった様だ。

流石に、彼もこればかりは溜息も出てこない様で、もう知らん、とでも言いたげに体を丸めて寝る体制になっている。

と、ジンが蒼白になって叫んだ。

「た、大変です！ “世界の果て”にはギフトゲームの為、野放しにされている幻獣が」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に “世界の果て” 付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー？」

「ゲーム参加前にゲームオーバー？……斬新？」

「……結構薄情なお嬢様方だな」

身も蓋もない言い様に、寝る体制のまま銀狼が呟く。

とはいえ、ついさつき呼び出された仲でいきなり仲間意識が出来るとは思ってはいない。

黒ウサギは溜息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ……ジン坊ちゃん、カグヤ様、そして帝様。申し訳ありませんが、御二人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

ジンの声に合わせて、コクリ、と頷くカグヤ。

相変わらずの寝る体制な銀狼は、パタリ、と尻尾を一回だけ振る事で応える。

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに———箱庭の貴族」と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

悲しみから立ち直った黒ウサギは、怒りのオーラを全身から噴出させ、艶のある黒髪を淡い緋色に染めていく。

外門めがけて空中高く跳び上がった黒ウサギは、外門の脇にあった彫像を次々と駆け上がり、外門の柱に水平に張り付くと、

「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと、箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

黒ウサギは、淡い緋色の髪を戦慄かせ、踏みしめた門柱に亀裂を入れる。

全力で跳躍した黒ウサギは弾丸の様に飛び去り、あつという間に全員の視線から消え去っていった。

その様子に、カグヤは淡い笑みを浮かべると、ヒラヒラと手を振って見送る。巻き上がる風から髪を庇う様に押さえていた女性が、ポツリ、と呟く。

「……。箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「ウサギつてのは、この箱庭を作った奴らの眷属。ちよつと特殊な一族なんだよ」

「力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが……」

「寧ろ、俺は彼奴が負ける姿を見たくないけどな」

少し不安そうに黒ウサギがいた場所を見るジンとは違い、相槌を打つ銀狼は寝る体制を崩していない。

と、呆れた様な表情でカグヤが銀狼の背を叩く。

面倒そうに体を伸ばし、起き上がる銀狼。

「黒ウサギも堪能下さいと言っていたし、御言葉に甘えて、先に箱庭に入るとしましう。エスコートは貴方達がしてくださいさるのかしら？」

「え、あ、はい。コミュニテイのリーダーをしているジン＝ラッセルです。齢十一になつ

たばかりの若輩ですが、宜しくお願いします。二人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

「それで、さつきから無言の彼女と喋る狼さんは？」

「俺は帝。月影帝。諷あつて狼の姿をしているが……これでも人間だ。それでこつちが、カグヤ。月宮カグヤ。こいつは好きで無言なんじゃなくて……話せないんだ」

「話せない？」

「……声を奪われちゃってな。でも」

カグヤの傍らで足を折る帝。

と、それに促される様にカグヤはその背へとゆっくり座る。

それを確認し、帝は立ち上がると二人へ近寄る。

そして、カグヤは二人の手を握るとふわり、と花が綻ぶ様に笑った。

《初めまして、飛鳥様、耀様。月宮カグヤ、と申します》

「え……？」

「……？頭に直接響く様な……」

《はい。私が所有しているギフトの一つでございます。言葉を発する事は出来ませんが、こうして意思疎通をする事は出来るのです。本日より、皆様の身の回りのお世話やゲーム時のサポートを帝共々させて頂きますので、よろしくお願いします》

頭に響く、鈴を転がした様な美しい声。

それを発しているのは、目の前の少女だと告げられ、二人は目を丸くする。

その様子に、クスクスと帝が笑う。

「今は必要がないから、こうして必要最低限に使わせてる」

《ですので、私が触らない限りお二人には、私の『声』が聞こえなかつたのです。ご無礼をお許し下さい》

「そ、そんな……気にしてないわ」

「うん。私も気にしない」

申し訳なさそうに頭を下げるカグヤに、二人は軽く手を振って、諫める。すると、カグヤも頭を上げ柔らかな微笑を浮かべた。

《箱庭に召喚され、さぞお疲れでしょう。宜しければ、軽い食事でもしながら、お話をさせて頂けないでしょうか?》

「何時までも、こんな場所に突っ立ってたら通行人にも怪しまれるしな。それでいいか?ジン」

「そ、そうですね。では行きましょうか」

帝に促されるままに、ジンは慌てて導く様に手を伸ばす。

それに気分を良くしたのか、飛鳥は胸を躍らせる様な笑顔で箱庭の外門をくぐっていった。



☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆

箱庭二一〇五三八〇外門・内壁。  
帝に乗ったカグヤの先導で、全員は石造りの通路を通って箱庭の幕下に出る。

すると、ぱっと全員の頭上に眩しい光が降り注ぐ。遠くに聳える巨大な建造物と空を覆う天幕を眺め、

『お、お嬢！外から天幕の中に入った筈なのに、御天道様が見えとるで！』

「……本当だ。外から見た時は箱庭の内側なんて見えなかったのに」

三毛猫の指摘を受け、耀が空を見上げ首を傾げる。

確かに、天幕を上空から見た時、箱庭の街並み等見えなかった。

すると、クスリ、とカグヤが笑う。

《箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ》

「あれには、太陽の光を弱める効果があるらしくてな。本来、太陽の光を浴びる事が出来ない種族なんかも、普通に生活できるって優れものだ。それにしても、外部の猫つてのは視力がメガネ君並だつて聞いてたが、その三毛猫はかなり良いのか？」

「!?……三毛猫の言葉、分かるの？」

「俺もこの通り、狼なんぞな。カグヤも聞こえてるだろ？」

《はい。言語に関しては、知能が単細胞でない限りは認識できますよ》

驚きましたか、と笑う彼女に、耀は素直にコクリ、と頷く。

その様子に、全く話が分からないらしいジンと飛鳥が揃って首を傾げた。が、気を取り直したらしい飛鳥は、青い空を見上げ、皮肉そうに言う。

「太陽の光が苦手って……この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますけど」

「普通にいますだろ」

《はい。いらつしやいますよ？》

「……………。そう」

平然と二人と一匹に肯定され、何とも複雑そうな顔をする飛鳥。

どうやら、同じ町に住む事が出来る種とは思えない様だ。

暫く街並みを眺める様に歩くと、帝が足を止めた。

「店はここでいいだろ」

「あ、はい。そうですね」

クルリと振り返り、尻尾で店を示すとジンが慌てて同意する。

元より、彼は全てを黒ウサギ任せにしていた為、ほぼノープラン。

帝もカグヤもそれを察しているらしく、周囲で旗を確認しつつ、彼女達の雑談相手をしていったのだ。

全員で、“六本傷”の旗を掲げるカフェテラスに座る。

すると、注文を取る為に店の奥から素早く猫耳の少女が飛び出してきた。

「いらつしやいませー。ご注文はどうしますか?」

「お薦めって何なのかしら?」

「取り敢えず、人数分の紅茶と……軽食でいいだろ」

《帝、これがいいと思いますよ?》

「……だな。ジン、後は頼んだ」

「あ、はい!紅茶を四つ」

「おーい。お前は俺を動物扱いたいのか?」

《……帝、その姿で紅茶を飲めるんですか?》

「……ぐすん」

溜息混じりのカグヤの指摘に、ふてくされた様に帝はクルン、と体を丸めてしまった。本人としては、人間として扱ってほしいらしいが、姿故に出来ない事は多い。

パタパタと不機嫌に尻尾を床に叩き付ける彼に、カグヤは淡く苦笑すると、その背を優しく撫でた。

《ジン、お願いします》

「あはは………。すみません、紅茶を四つと軽食にコレとコレと」

『ネコマンマをー!』

「はいはい。ティーセット四つにネコマンマですね。それから……そちらの狼さんは？」

困った様に苦笑する店員に、カグヤはメニューを眺めるとアイスティーを皿で、とジェスチャーで伝える。

その仕草に、はい、と彼女は快く伝票へと書き込んでいく。

店内へと帰っていく彼女を見送り、ふとカグヤは目を丸くしたままの三人に気づき、小さく首を傾げた。

《どうかしましたか?》

「…今の人?も、三毛猫の言葉が分かった。箱庭って凄いな」

「今のは、猫族だからだよ。猫同士で言葉が通じない方がおかしいだろ?」

「でも、帝もカグヤも分かるよね?」

「俺もカグヤも、そういつたギフトを所持してるからな」

「ちよ、ちよつと待つて。貴女達もしかして、猫と会話が出るの?」

和やか(?)に会話している二人へ、珍しく動揺した声で飛鳥が問う。

それに対し、耀と帝、カグヤがコクリ、と頷いて返す。

ジンも興味深く質問を続けた。

「もしかして、二人の様に猫以外にも意思疎通は可能ですか?」

「うん。生きているなら、誰とでも話は出来る」

「それは素敵ね。じゃあ、そこに飛び交う野鳥とも会話が?」

「うん。きつと出来……る?ええと、鳥で話した事があるのは雀や鷺や不如帰ぐらいだけど……ペンギンがいけたからきつとだいじよ」

「ペンギン!?!」

「う、うん。水族館で知り合った。他にもイルカ達とも友達」

耀の声を遮る様に飛鳥とジンの二人が声を上げる。

飛鳥が驚く事は至極当たり前だとは思うが、流石のジンも先程召喚されたばかりの彼女がそういった力がある事に驚いているのだろう。

《耀様は、沢山のお友達がいらっしゃるのですね》

「うん……でも、人間のお友達はいない」

褒めたつもりだったのだが、どうやら彼女の痛い所だったらしい。

シユン、と頭を垂れる彼女に、カグヤはあわあわしてしまう。

その姿に、フン、と帝が鼻を鳴らす。

「なら、この箱庭で作れよ。ここは耀以上に異様な奴等の宝庫だからな。人型の友人なら五万と出来るぜ?」

「…本当?」

「ああ」

「それにしても……全ての種と会話が可能なら心強いギフトですね。この箱庭でも幻獣との言語の壁はとて大きいですから」

「そうなんだ」

「はい。一部の猫族やウサギの様に神仏の眷属として言語中枢を与えられていれば意思疎通は可能ですけど、幻獣達は難しいというのが一般です。箱庭創始者の眷属に当たる黒ウサギでも、全ての種とコミュニケーションを取る事は出来ない筈ですし」

「…カグヤと帝も？」

「理解不明な言語飛ばしてくる幻獣もいるからな」

《私も同じくです》

聞いてきた耀へ、二人は苦笑気味に答える。

「そう……春日部さんは素敵な力があるのね。羨ましいわ」

笑いかけられると、困った様に頭を掻く耀。

対照的に飛鳥は憂鬱そうな声と表情で呟く。

あまりにも彼女らしくない態度に、耀が心配そうに見つめた。



「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ。宜しくね、春日部さん」

「う、うん。飛鳥はどんな力を持っているの？」

「私？私の力は……まあ、酷いものよ。だって」

「おんやあ？誰かと思えば東区画の最底辺コミユ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」

品の無い上品ぶった声でジンを呼ぶ。

その声に、かぐやは視線を鋭くし、帝が唸り声を上げる。

そこにいたのは、2mを超える巨体をピチピチのタキシードで包む変な男がいた。

ジンは顔を顰めて、男に返事をする。

「僕らのコミユニティは〃ノーネーム〃です。〃フォレス・ガロ〃のガルド〃ガスパー」  
「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミユニティの誇りである名と旗印を奪われて、よくも未練がましくコミユニティを存続させる等できたもの」

《———黙りなさい》

厳しい一括に、ガルドと呼ばれたピチピチタキシードは、驚いた様に辺りを見渡し、カグヤへと視線を向けると、驚いた様に目を見開く。

「まさか……目覚められているとは……もしか、貴女は『歌姫』ではありませんか？」

興奮した様な口調で問う彼に、カグヤは侮蔑にも近い視線だけを投げる。

彼女に寄り添う様になっていた帝は、今にも襲いかからんと毛を逆立て、臨戦態勢。

それを是としたのだろう、ガルドは四人が座るテーブルへ、手短にあつた椅子を取ると、無理矢理割り込ませる様にして座る。

相手の失礼な態度に、初対面である二人は冷やかな態度で見る。

「三年前より昏睡状態だったと、風の噂で聞き及んではいましたが、まさかこの様な場所でお会いできるとは、夢にも思いませんでしたよ！」

「口を慎め、獣風情が。それ以上、カグヤに近づくなら首を噛み千切る」

底冷えする程の低い唸り声に、ガルドは口を閉ざす。

宝石の様だった瞳には暗い殺気が宿り、不気味な色合いでヌラヌラと光る彼に、先程の穏やかさはない。

「失礼ですけど、同席を求めるなら、まず氏名を名乗った後に、一言添えるのが礼儀ではないかしら？」

緊張状態とも思える中、飛鳥の苛立った声にガルドはハツとし、慌てて愛想笑いを取り繕う。

「おっと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ “六百六十六の獣” の傘下である」

「烏合の衆の」

「コミュニティのリーダーをしている、ってマテやゴラア!! 誰が烏合の衆だ小僧オオ!!!」

ジンに横槍を入れられ、ガルドは怒鳴り声を上げた。

その顔は先程の人間に近いモノではなく、肉食獣の様な牙とギロリと血走った眼が激しい怒りを象徴するかの様。

小さな子供なら、泣いてしまいがただがジンは毅然とし、彼の横槍がお気に召したのか帝はニタニタと馬鹿にした様に笑う。

「口を慎めや小僧オ……紳士で通っている俺にも聞き逃せねえ言葉はあるんだぜ……？」

「森の守護者だった頃の貴方なら、相応に礼儀で返していたでしょうが、今の貴方はこの二二〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」

「ハッ、そういう貴様は過去の栄華に縋る亡霊と変わらんだろうがッ。自分のコミユニティがどういふ状況に置かれてんのか理解できてんのかい？」

「ハイ、ちよつとストツプ」

険悪な二人を遮る様に、飛鳥が声を上げる。

「事情はよく分からないけど、貴方達二人の仲が悪い事は承知したわ。それを踏まえた上で質問したいのだけど——」

飛鳥が鋭く睨む。

しかし、その相手はガルドではなく、

「ねえ、ジン君。ガルドさんが指摘している、私達のコミュニティが置かれている状況……というモノを説明してただける？」

「そ、それは」

「俺達のコミュニティは、ほぼ子供しか残ってない存続も危うい弱小コミュニティなんだよ」

「帝様!?!」

サラツ、と言う帝へ、ジンは声を荒げる。

それは、黒ウサギと口裏を合わせて隠していた事だ。

それを、彼は特に興味もなさそうに簡単に口にしてしまった。

動揺するジンへ、帝は苛立ちを込めた鋭い視線を向ける。

「ジン。お前は自身をリーダーと名乗った。その事に俺もカグヤも反対はしないし、お前に協力だつてする。三年も眠り続けた罪滅ぼしの意味を込めて、俺達にはそれをする責務があるからな。だが、この二人はお前の都合で呼び出された客人だ。これ以上、お

前や黒ウサギが彼らを騙してでもコミュニティへ連れ込むっていうなら、俺もカグヤもお前達に義理立てする気はない」

《ジン、貴方はあのコミュニティを復興させようって思っているのでしょうか？それなのに、プレイヤーを騙して、コミュニティへ連れ込もうだなんて……私達には容認できません。お二人には、きちんと説明した上で、本人の意思でコミュニティを選んで頂きましょう？》

厳しい言葉に、ジンは俯く。

これを見ていたガルドは獣の顔を人に戻し、含みのある笑顔と上品ぶった声音で、

「レディ、貴女の言う通りだ。コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教えるのは当然の義務。しかし、彼はそれをしたがらないでしょう。例え、このお二方が幾ら言おうとも。宜しければ『フォレス・ガロ』のリーダーであるこの私が、コミュニティの重要性和小僧——ではなく、ジンⅡラツセル率いる『ノーネーム』のコミュニティを客観的に」

《その必要はございません》

ガルドの言葉を遮り、カグヤは涼やかな『声』で告げる。その表情は、真剣そのもので、凜とした美しさを纏う。

《私より、ご説明させて頂きます。この箱庭と呼ばれる世界を……そして、ノーマム」と呼ばれる私達のコミュニティについて、を。もし、私が誤魔化す様な事がありません、そのガルドが指摘するでしょうから、ご安心下さい》  
「……そうね。お願いするわ」

飛鳥は一度だけジンを見、そしてかぐやへ頷く。

ジンは、未だに俯いたまま口を堅く閉ざしたままだ。

《はい。まず、コミュニティですが、これは読んで字の如く、と言いましうか。複数名で作られる組織の総称です》

「受け取り方は人其々。コミュニティを家族とも組織とも国とも言う。まあ、幻獣達は“群れ”って言った方がしっくりくるらしい」

「それぐらいは分かるわ」

《そうですか。ですが、これがこの箱庭では重要な意味を持ちますので、少しだけ詳しく

言わせて頂きました。そしてコミュニティは、活動する上で箱庭に“名”と“旗印”を申告しなければなりません。特に“旗印”はコミュニティの縄張りを主張する大事な物です。……そうですね。このお店に掲げられている旗がありますよね？あれがそうです》

カグヤは少しだけ辺りを見渡し、店頭に掲げられた“六本傷”が描かれた旗を指す。

《六本の傷が入ったあの旗は、このお店を経営するコミュニティの象徴です。その為、このお店は南側に本拠を構える“六本傷”が運営している、と一目で分かる様になっています》

「だが、コミュニティが複数あるなら争いだって起こるだろ？自分の領土を広げたいってのは、誰にだってある野望だ。だから……コミュニティにとって大事な“旗印”と“名”をかけて、両者同意の末に『ギフトゲーム』を行い、負けた方は勝った方の傘下へと下る。この場合、負けた方は“名”も“旗印”も奪われ、勝った方の“名”や“旗印”を提示する義務があるんだ。そうだな……例えば、俺達のコミュニティがこの店を欲したとする。その場合、相手側が同意するならこの店をかけて『ギフトゲーム』をする。勝てばこの店には俺達の“旗印”が掲げられ、負ければ相応のモノが奪われる」



「紋様が縄張りを示すというのなら……この近辺はほぼガルドさんのコミュニティが支配していると考えていいのかしら？」

飛鳥がガルドの胸に刺繍された虎の紋様をモチーフとしたそれを指差し、首を傾げる。

確かに、見渡す限りの商店や建造物には同じ紋様が飾られていた。

《はい。そう思っていただけで構いません。……次に、私達のコミュニティについてはです。私達のコミュニティは、数年前までこの東地区の大半を領土と置く、最大手のコミュニティでした》

「あら、意外ね」

「因みに、リーダーはジンジャねえぞ？ちゃんとした大人の男だ。ギフトゲームは全戦全勝。正直、本当に人間なんだろうかって疑った事すらあったよ。彼奴らが持つてるギフトゲームの戦績は人類最高の記録で、未だに破られてない」

《東西南北に分かれたこの箱庭で、南北のコミュニティとも親交が深かったです。これは、極めて珍しい事なんですよ？本来、それ程深く関わらない他地区のコミュニティが認める事は、まずありませんので。……今でもあの方々は尊敬しております》

「……だが、それも長くは続かなかった」

冷めた様な声に、ビクツ、とジンの肩が跳ねる。

「俺達のコミュニティは、厄介な相手に目をつけられた。そして、ギフトゲームを仕掛けられ……一夜にして滅ぼされた。この箱庭における最悪の天災によって、な」

「天災？」

飛鳥と耀は同時に聞き返した。

彼らが語る通りの巨大な組織が、一夜にして滅んだ理由が天災、というのはあまりにも不自然に感じたのだろう。

《そのままの意味、です。私達はこの箱庭で唯一最大にして最悪、最凶の天災——俗に“魔王”と呼ばれる者が作ったコミュニティによって、全てを奪い尽くされたのです》

•

### 三章 白日に曝す咎

噴水広場のカフェテラスで、コミュニティの説明を聞いていた飛鳥と耀は、其々に出されたカップを片手に話を反復する。

「成程ね。大体理解したわ。つまり『魔王』というのは、この世界で特権階級を振り回す神様 e t c. を指し、ジン君達のコミュニティは彼らの玩具として潰された。そういう事?」

「大まかには、な」

《神仏は古来より、人間を苦しめる事を娯楽としている種がいますので……散々遊んだ挙句、息の根を止められる事は、よくある事なのです》

口にしたはいいが、やはり辛いのだろう。

少しだけ俯く彼女は、どこか悲しげに瞳を揺らす。

と、ガルドは芝居がかった様に大きく両手を広げ、皮肉そうに笑った。

「名も、旗印も、主力陣の全てを失い、残ったのは膨大な居住区画の土地だけ。もしもこの時に新たなコミュニティを結成していたなら、前コミュニティは有終の美を飾っていたんでしようがね。今や名誉も誇りも失墜した名も無きコミュニティの一つでしかありません」

「……………」

「ガルド……貴様……」

「そもそも、考えても見て下さいよ。名乗る事を禁じられたコミュニティに、一体どんな活動ができます？ 商売ですか？ 主催者ホストですか？ しかし名も無き組織等信用されません。ではギフトゲームの参加者ですか？ ええ、それならば可能でしょう。では、優秀なギフトを持った人材が、名誉も誇りも失墜させたコミュニティに集まるでしょうか？」

「そうね……………誰も加入したいとは思わないでしょう」

「そう。彼は出来もしない夢を掲げて、過去の栄華に縋る恥知らずな亡霊でしかないのですよ」

ピチピチのタキシードを破きそうな品の無い、豪快な笑顔でジン達とコミュニティを啜う。

ジンは顔を真っ赤にして、両手を膝の上で握りしめていた。

その横で、支える様にカグヤが手を重ね、帝は今にも殺さんとする程の視線をガルドへ向ける。

だが、二人の口からそれを否定する言葉は出てこなかった。

それが、現実なのだと受け入れているかのように……

「もつと言えばですね。彼はコミュニティのリーダーとは名ばかりで、殆どリーダーとしての活動はしていません。コミュニティの再建を掲げてはいますが、その実態は黒ウサギにコミュニティを支えてもらうだけの寄生虫」

「……っ」

「魔王の暴挙によって、三年も昏睡していたカグヤをほったらかしにし、やっと目覚めたと思えば用人扱い。私は本当に、黒ウサギとカグヤが不憫でなりません。ウサギと言えば『箱庭の貴族』と呼ばれる程、強力なギフトの数々を持ち、何処のコミュニティでも破格の待遇で愛でられる筈。コミュニティにとってウサギを所持しているというのは、それだけで大きな『箔』が付く。

カグヤも一代で『箱庭の歌姫』とその名を轟かせる美しき姫君。その歌声や舞に全財産を投げ打つ事もいとわなと言わせる程に、彼女の存在は今や伝説と言っても過言ではありません。

なのに、彼女達は毎日毎日糞餓鬼の為に身を粉にして走り回り、僅かな路銀で弱小コミュニケーションを遣り繰りしている」

《……私がそう呼ばれたのは、遙か三年も前のお話です。今の私は、声を失った使用者。伝説でもなければ、生き恥を晒すだけの存在でございますよ》

「っ!?!カグヤ様……」

自身を卑下する彼女の発言に、たまらずジンが顔を上げる。  
傷ついた様に揺れる彼の瞳へ、カグヤは穏やかな表情で優しく微笑む。

《飛鳥様、耀様。これが、私達 “ノーマーム” の現状です。直ぐに説明しなかった事、本当に申し訳ありませんでした》

深々と頭を下げるカグヤ。

それに倣う様に、ジンも頭を下げる。

その様子を、ガルドはニヤニヤと嫌な笑みで見つめていた。

「どうですか、レディ達。もし宜しければ黒ウサギ共々、私のコミュニケーションに来ませんか

「？」

「なっ……!!!？」

突然の申し出に、ジンが言葉を失う。

帝は、奥歯を軋ませながら、憎々しげにガルドを睨んだ。

「てめえ……それが目的だったか」

「人聞きの悪い……私は、こんな寄生虫に使い潰される黒ウサギやカグヤが不憫でならないですよ。そして、これからそれを背負わされるであろうレディ達も」

何とも白々しい言葉に、帝は反吐すら出そうだった。

その後ろで、辛そうに顔を顰めるジンをカグヤが支える。

だが、彼らから引き留める言葉は出ない。

それ程までに、彼らのコミュニティは崖っぷちなのだ。

「……で、どうですか、レディ達。返事はすぐには言いません。コミュニティに属さずとも、貴女達には箱庭で三十日間の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出し



たコミュニケーションと私達「フォレス・ガロ」のコミュニケーションを視察し、十分に検討してか  
ら——」

「結構よ。だってジン君のコミュニケーションで私は間に合っているもの」

は？、とジンとガルドは飛鳥の顔を窺う。

これには、流石のカグヤと帝も対応できず、目を丸くして彼女を見詰めてしまっている。

だが、それに構う事なく彼女はティーカップの紅茶を飲み干すと、耀に笑顔で話しかける。

「春日部さんは、今のお話をどう思う？」

「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけなもの」

「あら意外。じゃあ、私が友達一号に立候補していいかしら？ 私達って正反对だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」

「確かに、正反对位が友人には丁度いいだろうな。自分にはない視点ってのも、案外面白いと思うぞ?」

飛鳥の発言に、帝が楽しげに口添えする。

耀は無言で暫し考えた後、小さく笑って頷く。

「……うん。飛鳥は私の知る女の子とちよつと違うから、大丈夫かも。それから……カグヤと帝は友達になつてくれないの？」

《お友達……ですか？》

驚いた様に聞き返すと、耀はコクリ、と頷く。

カグヤは暫し目を丸くし、嬉しそうに頬を高揚させ笑う。

《私の様な者で宜しければ、どうぞ友人として仲良くして下さいませ！》

「はは。そりゃあ、いい。カグヤも同年代位の女の子友達つてのは黒ウサギ位だったもんな。ま、カグヤ繋がりて俺も頼むよ」

「うん。カグヤも帝も友達だね」

『よかつたな、お嬢……お嬢に友達が出来て、ワシも涙が出る程嬉しいわ』

ホロリと泣く三毛猫。

そして、リーダーそっちのけで盛り上がる三人と一匹。

ガルドは全く相手にされなかったことに顔を引き攣らせ、それでも取り繕う様に大きく咳払いして二人に問う。

「失礼ですが、理由を教えてくださいも？」

「だから、間に合ってるのよ。春日部さんは聞いての通り、友達を作りに来ただけだから、ジン君でもガルドさんでも、どちらでも構わない。そうよね？」

「うん。でも、カグヤと帝が友達だから、ジン君のコミュニケーションがいい」

「そう。そして私、久遠飛鳥は——裕福だった家も、約束された将来も、おおよそ人が望みうる人生の全てを支払って、この箱庭に来たのよ。それを小さな小さな一地域を支配しているだけの組織の末端として迎え入れてやる、等と慇懃無礼に言われて、魅力的に感じるとでも思ったのかしら。だとしたら、自身の身の丈を知った上で出直してほしいものね、このエセ虎紳士」

ピシヤリ、と言い切る。

その言い草が入ったのか、帝はニヤリと口元に笑みを浮かべ、小馬鹿にした視線をガルドへと向ける。

そのガルドはと言うと、怒りに身を震わせながらも、必死に自称紳士としての言葉を必死に選んでいるようだ。

「お……お言葉ですがレデ

「黙りなさい」

ガチン！とガルドが不自然な形で、勢いよく口を閉じて黙り込んだ。

本人は混乱した様に口を開閉させようともがいているが、全く声が出ない。

その様子に、ギョツとした様にカグヤは帝へ視線を投げた。

《帝!!?》

「俺じゃねえよ。第一、この姿でのギフトは制限されちまうだろうが」

怒ったような声で名を呼ぶ彼女へ、帝は身の潔白を示す様に、自身を指す。

ならば、一体誰が……

そう思った瞬間、カグヤの視線が飛鳥を捕えた。

「私の話はまだ終わってないわ。貴方からはまだまだ聞き出さなければいけない事があるのも。貴方はそこに座って、私の質問に答え続けなさい」

飛鳥の言葉に力が宿り、今度は椅子に罅が入る程勢いよく座り込む。

ガルドは完全にパニックに陥っていた。

どういふ手段かは分からないが、手足の自由が完全に奪われて、抵抗する事さえできなくなっているのだ。

その様子に、驚いたのはカグヤと帝だ。

彼女の言葉に従い、彼は動いているのだ。

それに、二人には見覚えのある光景でもあった。

《……声を媒介にしたギフト》

「内容は違うだろうが……一族のギフトと同じ性質をもったギフトの所有者って事か」

「お、お客さん！当店で揉め事は控えてください——」

「丁度いいわ。猫の店員さんも第三者として聞いていって欲しいの。多分、面白い事が聞ける筈よ」

空気の不穏さを感じ取ったらしい店員が、慌てて仲介に入ろうとしたが、それを飛鳥が制す。

「貴方はこの地域のコミュニティに『両者合意』で勝負を挑み、そして勝利したと考えていいのよね？ だけど、私が聞いたギフトゲームの内容は少し違うの。コミュニティのゲームとは『主催者』とそれに挑戦する者が様々なチップを賭けて行う物の筈。……ねえ、ジン君。コミュニティそのものをチップにゲームをする事は、早々ある事なの？」

「や、やむを得ない状況なら稀に。しかし、これはコミュニティの存続を賭けた、かなりレアケースです」

「それに、間違いはないかしら。カグヤ？ 帝も」

「ああ。存続を賭けたゲームなんて、魔王とやり合う時位だ」

《私も同意です。コミュニティをそう易々と賭けられる者など、この箱庭には存在しません》

彼らの言葉に、聞いていた猫耳の店員も同意する様に頷く。

「そうよね。訪れたばかりの私達でさえ、それぐらい分かるもの。そのコミュニティ同士の戦いに強制力を持つからこそ、『主催者権限』を持つ者は魔王として恐れられている筈。その特権を持たない貴方が、どうして強制的にコミュニティを賭けあう様な大勝負を続ける事が出来るのかしら。教えてくださる？」

スウ、と瞳を細め、問う飛鳥に引き攣った表情のガルドは口を開く。

その様子は、誰が見ても異様だった。

そして、この異様な異変を起こしているのが、他ならぬ飛鳥である事には、誰もが気づいている。

彼女の命令には……絶対に逆らえないのだと。

「き、強制させる方法は様々だ。一番簡単なのは、相手のコミュニティの女子供を攫って、脅迫する事。これに動じない相手は後回しにして、徐々に他のコミュニティを取り込んだ後、ゲームに乗らざるを得ない状況に圧迫していった」

「まあ、そんな所でしょう。貴方の様な小者らしい堅実な手です。けど、そんな違法で吸収した組織が、貴方の下で従順に働いてくれるのかしら？」

「各コミュニティから、数人ずつ子供を人質にとつてある」

《そんな……》

悲痛な声。

絶句した様に言葉を失うカグヤ。

言葉や表情には出さないものの、飛鳥を取り巻く雰囲気には、嫌悪感が滲み出てきた。コミユニティには無関心な耀でさえ、不快そうに眼を細めている。

「……そう。益々外道ね。それで、その子供達は何処に幽閉されているの？」  
「もう殺した」

その場の空気が瞬時に凍りつく。

ジンも、店員も、耀も、飛鳥でさえ一瞬耳を疑って、思考を停止させた。  
そんな中、帝の瞳に強い殺意が光る。

「初めて餓鬼どもを連れてきた日、泣声が頭にきて、思わず殺した。それ以降は自重しようと思っていたが、父が恋しい母が愛しいと泣くので、やっぱりイライラして殺した。それ以降、連れてきた餓鬼は全部まとめて」



「耳障りだ、口を閉させ」

静かな殺意。

ガルドの口は、ガチン！、と勢いよく閉まる。

牙を剥き出しにし、爪を相手の膝に食い込ませ、帝は低く唸る。

この場で殺すかの様な空気に、カグヤがその首へと腕を巻き付け、ギュツと抱きつく。

「……………離せ」

先程までの声とは違う、氷を纏う鋭い刃を思わせる声。

それだけだと言うのに、その場にいた誰もが恐怖で心臓を鷲掴みにされる。

それ程……………今の帝は恐怖の対象ではない。

そんな中、唯一人彼に抱きついたままのカグヤは、必死に首を横に振る。

《ダメです!!止めて下さい!!》

「カグヤ……………お前も黙らせるぞ?」

《それでも、ダメです!帝が……………兄さんが、自分を穢してはいけません!!》

悲鳴にも近い訴え。

帝は暫しカグヤを睨みつけ、再度ガルドを睨むと、ゆっくり瞳を閉じ息を吐く。彼が深く息を吐き終えると、凍りついていた恐怖が柔和していった。

「……悪かった」

短い謝罪。

その声を境に、帝はガルドから離れ体を丸める。

もう、この件には関わらないとでも言いたげな仕草に、カグヤはほう、と息を吐き、その背を優しく撫でた。

「……ねえ、今の証言で箱庭の法が、この外道を裁く事は出来るかしら？」

「厳しいです。吸収したコミュニティから人質を捕ったり、身内の仲間を殺すのはもちろん違法ですが……裁かれるまでに彼が箱庭の外に逃げ出してしまえば、それまでです」

調子を取り戻したらしい飛鳥が、ジンへと問う。

箱庭の外への追放は、それだけでもある意味で裁きと言えなくもない。

リーダーであるガルドがコミユニティを去れば、鳥合の衆でしかない「フオレス・ガロ」が瓦解するのは目に見えている。

しかし、飛鳥はそれでは満足出来なかった。

「そう。なら仕方がないわ」

苛立たしげに、眩くと帝へと視線を投げる。

「ねえ、帝君。彼を自由にしてくれないかしら」

「主導権は、飛鳥のままだ。お前の意思で解除出来るだろうさ」

面倒そうに眩き、尻尾を振る。

飛鳥はそれを了承し、パチンと指を鳴らす。

それが合図だったのだろう。

ガルドを縛り付けていた力が霧散し、身体に自由が戻る。

怒り狂ったガルドは、カフェテラスのテーブルを勢いよく砕くと、

「ハ……………この小娘がアアアアアアアア!!」

雄叫びと共にその体を激変させた。

巨軀を包むタキシードは膨張する後背筋で弾け飛び、体毛は偏食して黒と黄色のストライプ模様が浮かび上がる。

彼のギフトは人狼等に近い系譜を持つ。

通称、ワータイガーと呼ばれる混在種だった。

「テメエ、どういふつもりか知らねえが……俺の上に誰が居るか、分かっただろうなあ  
!?!箱庭第六六六外門を守る魔王が、俺の後継人——」

《黙りなさい》

静かな一括と共に、床へと叩き付けられる。

何が起こったのか、誰も分かってはいない。

ただ、目の前の現状を解説するならば、床へと這い蹲るガルドを、カグヤが押さえ込

み、その首筋へ鉄扇を宛がっている。

正に、一瞬の出来事。

ガルドを見下すカグヤの瞳には、静かな怒りが燃えていた。

その様子に、飛鳥が楽しそうに笑った。

「さて、ガルドさん。私は貴方の上に誰が居ようと気にしません。それはきつとジン君も同じでしょう。だって、彼の最終目標は、コミュニティを潰した『打倒魔王』だもの」

その言葉にジンは大きく息を呑む。

内心、魔王の名が出た時は恐怖に負けそうになったジンだが、自分達の目標を飛鳥に問われて我に返る。

「……はい。僕達の最終目標は、魔王を倒して僕らの仲間達を取り戻す事。今さら、そんな脅しには屈しません」

「そういう事。つまり、貴方には破滅以外のどの道も残されていないのよ」

「く……くそ……！」

組み伏せられたままのガルドは、視線だけで飛鳥を睨む。

だが、それから守る様に耀が飛鳥を守る様に前へと体を滑り込ませた。彼女の瞳にも、冷たい怒りの色が映る。

「だけどね。私は貴方のコミュニケーションが瓦解する程度の事では満足できないの。貴方の様な外道はズタボロになって、己の罪を後悔しながら罰せられるべきよ。————そこでみんなに提案なのだけれど」

飛鳥の言葉にうなずいていたジンや店員達は、顔を見合わせて首を傾げる。

先程まで我関せずだった、帝は何か面白い空気でも感じたのか、ピクン、と耳を反応させ、彼女の続きを待つ。

飛鳥は身動きの取れないガルドの顎を、細長い綺麗な指先で掴み、

「私達と『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の“フオレス・ガロ”存続と“ノーネーム”の誇りと魂を賭けて、ね」

•

## 四章 時間の止まった街

日が暮れた頃に噴水広場で合流し、話を聞いた黒ウザキは案の定ウサ耳を逆立てて怒っていた。

突然の展開に嵐の様な説教と質問が飛び交う。

「な、なんであの短時間に『フォレス・ガロ』のリーダーと接触して、しかも喧嘩を売る状況になったのですか!」「しかもゲームの日取りは明日!」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「準備している時間もお金ありません!」「カグヤ様と帝様がついていながら、どうしてこんな事に!」「一体どういう心算があつての事です!」「聞いているのですか、五人とも!!」

「『ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています』」

「黙らっしやい!!!」

《あ、ははは……》



誰が言い出したのか、まるで口裏を合わせていたかのような言い訳に、激怒する黒ウサギ。

それを見て失笑するカグヤ。

その状況に、ニヤニヤと笑って見ていた十六夜が止めに入る。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売った訳じゃないんだから、許してやれよ」  
「い、十六夜さんは面白ければいいと思っっているかもしれないですけど、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ？この『<sup>ギアスルール</sup>契約書類』を見て下さい」

黒ウサギの見せた『<sup>ホストマスター</sup>契約書類』は『主催者権限』を持たない者達が『主催者』となつてゲームを開催する為に必要なギフトである。

そこにはゲームの内容・ルール・チップ・賞品が書かれており、『主催者』のコミュニケーションのリーダーが署名する事で成立する。黒ウサギが指す賞品の内容はこうだ。

「『<sup>プレイヤー</sup>参加者が勝利した場合、<sup>ホスト</sup>主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニケーションを解散する』——まあ、確かに自己満足だ。時

間をかければ立証できるものを、態々取り逃がすリスクを背負ってまで、短縮させるんだからな」

因みに、飛鳥達のチップは「罪を黙認する」というものだ。

それは今回に限った事ではなく、これ以降もずっと口を閉ざし続けるという意味である。

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は……その、」

黒ウサギが言い淀む。

彼女も「フォレス・ガロ」の悪評は聞いていたが、そこまで酷い状態になっているとは思っていなかったのだろう。

「そう。人質は既にこの世にはいないわ。その点を責め立てれば、必ず証拠は出るでしょう。だけど、それには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのに、そんな時間をかけたくないの」

「それに、彼奴には後ろ盾がいる。そこに逃げ込まれれば、将来的にはぶつ殺せても、今の段階では裁く事は愚か、取り逃がす事になっていただろうな」

箱庭の法は、あくまで箱庭都市内でのみ有効なモノ。

そこから出てしまえば、様々な種族によってルールも異なってしまう。

だからこそ、逃げられる前に「契約書類」によって、逃亡を防止する事も大事な事だったのだ。

「それにね、黒ウサギ。私は道徳云々よりも、あの外道が私の活動範囲内で野放しにされる事も許せないの。ここで逃がせば、いつかまた狙ってくるに決まってるもの」

「ま、まあ………逃がせば厄介かもしれないですけど」

「僕もガルドを逃がしたくないと思っっている。彼のような悪人を野放しにしちやいけない」

「それに、丁度いい肩慣らしになるだろ。飛鳥と耀の実力を測る意味でも、カグヤのギフトがどれだけ通用するかを確認する意味でも」

ジンが同調する姿勢を見せ、帝が軽い調子で言葉を重ねる。

彼らの言葉に、黒ウサギは諦めた様に頷いた。

「はあく……。仕方がない人達です。まあいいです。腹立たしいのは黒ウサギも同じです。『フォレス・ガロ』程度なら十六夜さんが一人いれば、楽勝でしょう」

それは黒ウサギの正当な評価のつもりだった。

しかし、十六夜と飛鳥、そして帝が怪訝そうな顔をする。

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ?」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ」

「十六夜の参加は無理だろ。参加者は、あの場で喧嘩を売った俺達なんだからな」

フンツ、と鼻を鳴らす二人と、少し呆れた調子で告げる一匹。

黒ウサギが慌てて三人に食って掛かる。

「だ、駄目ですよ! 御二人はコミュニケーションの仲間なんですから、ちゃんと協力しないと………って、なんですとお!!?」

帝の指摘により、再度食い入るように「契約書類」を見詰め、

「……うう」

確かにそう書いてある事により、黒ウサギはその場でガックリと膝を折る。

シクシクと泣声すら聞こえてきた為、カグヤが慰める様に彼女の背を撫でている。

「そうじゃなくても、この喧嘩はコイツらが売った。そして、奴等が買った。なのに、俺が手を出すのは無粋つてもんだろ？」

「あら、分かっているじゃない」

「………。ああもう、好きにして下さい」

丸一日振り回され続け、疲弊した黒ウサギはもう言い返す気力すら残ってはいない。どうせ失う物は無いゲーム、もうどうにでもなればいいと呟いて、肩を落とすのだった。



☆☆☆☆

椅子から腰を上げた黒ウサギは、横に置いてあつた水樹の苗を大事そうに抱き上げる。

コホンと咳払いをした黒ウサギは、気を取り直して全員に切り出した。

「そろそろ行きましようか。本当は皆さんを歓迎する為に、素敵なお店を予約して色々とセッティングしていたのですけれども……不慮の事故続きで、今日はお流れとなつてしまいました。また後日、きちんと歓迎を」

「いいわよ、無理しなくて。私達のコミュニティってそれはもう崖っぷちなんでしょう？」

驚いた黒ウサギは、すかさずジンを見る。

かれの申し訳なさそうな顔を見て、自分達の事情を知られたのだと悟る。

カグヤと帝が淡く苦笑した。

「客人が気にするな。確かに、現状としてはそれ程裕福とは言い難いけどな」

《私と帝の私物を売れば、歓迎会の資金位容易に御仕度できますから》

「い、いけないのですよ！カグヤ様！帝様！！御二人がそんな身を切る様な真似を……」

《いいんです、黒ウサギ。元より、三年も眠り続けていた私達の私物を、貴女もジンも手付かずに残してください。私達はそれだけでも、十分なんです》

「それに、元々彼奴らに押し付けられた品が多いしな。正直、俺の趣味と違うし、部屋も広くなって一石二鳥だな」

やんわりと微笑むカグヤと、楽しげにカラカラと笑う帝に、ウサ耳まで赤くした黒ウサギは恥ずかしそうに頭を下げた。



「も、申し訳ございません……御二人も……騙すのは気が引けたのですが……黒ウサギ達も必死だったのです」

「もういいわ。私は組織の水準なんて、どうでもよかつたもの。二人も、自分の物を売つてまで資金にしなくて結構よ。春日部さんはどう？」

黒ウサギが恐る恐る耀の顔を窺う。

耀は無関心なままに首を振った。

「私も怒ってない。そもそもコミュニティがどうの、というのは別にどうでも……あ、けど」

思い出した様に迷いながら呟く耀。

ジンはテーブルに身を乗り出して問う。

「どうぞ、気兼ねなく聞いて下さい。僕らに出来る事なら最低限の用意はさせてもらいます」

「そ、そんな大それた物じゃないよ。ただ私は……毎日三食お風呂付きの寢床があればいいな、と思っただけだから」

ピシツと音が聞こえそうな程に、ジンの表情が固まった。その様子に、帝がケラケラと笑う。

「そうだよな。三人揃って、水には困った事のない国から呼ばれていりや、風呂は絶対条件だよな」

《帝、そんなに笑うのは失礼ですよ》

「いや、だってよ。自分で『気兼ねなく聞いて下さい』って言つときながら、固まってる訳ねえだろ」

ククツと喉の奥で意地悪に笑う彼に、ムツとカグヤが顔を顰める。

この箱庭で水を得るには買うか、もしくは数kmも離れた大河から汲まねばならない。水の確保が大変な土地でお風呂というのは、一種の贅沢品なのだ。

その苦勞を察した耀が慌てて取り消そうとしたが、必要ないと帝が首を振る。

「了解。風呂位準備させてもらう」

「で、ですけど、帝様」

「俺のギフトを使えば、水の確保は何とかなるだろ。後は火を起こせば……」

ふむ、と唸る帝へ、黒ウサギが嬉々とした顔で水樹を持ち上げる。

「大丈夫です、帝様！十六夜さんが、こんな大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから！これで水を買う必要もなくなりますし、水路を復活させる事も出来ますよ」

彼女の言葉に、ジンの表情も一転して明るいモノへと変わる。

これには、飛鳥も安心した様な顔を浮かべた。

「今日は理不尽に湖へ投げ出されたから、お風呂には絶対入りたかった所よ」

《み、湖ですか!?!》

「それには同意だぜ。あんな手荒い招待は二度と御免だ」

「……そりゃ酷いな」

「あう……そ、それは黒ウサギの責任外の事ですよ……どうか、カグヤ様も帝様も黒ウサ

ギを睨まないで下さいまし」

召喚された三人の責める様な視線と、二人の叱る様な視線に怖気づく黒ウサギ。ジンも隣で苦笑する。

「あはは……それじゃあ、今日はコミュニティへ帰る？」

「いや、三人は先にギフトを鑑定してもらおうべきだろ」

「はい。黒ウサギもそう思います。なので、ジン坊ちゃん達は先にお帰り下さい。『サウザンドアイズ』に皆さんのギフト鑑定をお願いします。この水樹の事もありませんし」

十六夜達三人は、首を傾げて聞き直す。

「『サウザンドアイズ』？コミュニティの名前か？」

「YES。『サウザンドアイズ』は特殊な『瞳』のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

《白夜王なら、私達を邪険にはしないでしよう》

「ま、大概の商業コミュニティってのは、『名無し』を信用しねえからな。今の段階で、多分話を聞いてくれる物好きは、白夜叉くらいだろうな」

朗らかに笑うカグヤと、淡く苦笑する帝。

それに、『ノーネーム』は社会的立場も危ういのだ。

「ギフトの鑑定というのは？」

「勿論、ギフトの秘めた力や起源等を鑑定する事です。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出所は気になるでしょう？」

同意を求める黒ウサギに、三人は複雑な表情で返す。

思う事は其々あるのだろう。

《大丈夫です。知ったからといって、どうこうなるモノではありませんよ》

「ま、血液検査程度な感じで構えてればいい。俺達は一足先にコミュニティに戻って、ご

「馳走でも作らせてもらうぜ」

「お、そいつは楽しみだな」

「おう!! 気合いをいれて、野兔の姿焼きを——」

「なんですか!!? その黒ウサギに対してのダイレクトな嫌がらせは!! 帝様は、黒ウサギに同族を喰えと仰るのデスカ!!?」

《帝、それは流石に……》

「そうか? じゃあ、野兔の唐揚げとか、野兔の生姜焼きにでも——」

「何故にウサギから離れないのですか!!? 帝様は黒ウサギを苛めて、楽しんでいるのですか!!?」

「うん。ちよーたのしー」

「うなあああああ!!!」

素直な感想に、黒ウサギは頭を抱えて泣き出す。

カグヤは小さく溜息を零し、帝の頭部をポカリと殴った。

《帝……》

「へいへい。もう苛めないって」

責める様なカグヤに、帝は愉しげに笑い、黒ウサギへと謝罪する。その様子に、ちよこんつと彼女の傍へと移動した耀が聞く。

「(こ)うなの?」

《はい。どうにも、帝は黒ウサギの反応が面白いらしく、彼女がコミュニティに所属して以降、(こ)うしてからかうんです》

彼女の質問に、カグヤは苦笑する。

昔から、彼の態度は変わらない。

あれさえなければ、よい兄貴分だとは思っただが……そこは言わないでおこう。

「(う)う……では、行きましようか。御三人様」

「あ、(そ)う(そ)う。黒ウサギ」

「………今度はなんでしょう?」

先程のからかいが尾を引いているのだろう、帝の呼びかけに恨めしそうな顔で黒ウサ

ギが振り返る。

問題児三人に加え、いじめっ子の相手までしているせいも、普段よりも精神的疲労感が半端ではない。

「白夜叉に伝言を頼む。月が傾く時に、とだけ」

「……………？はい、そうお伝えすればいいんですね？」

「おう、頼んだ」

黒ウサギの先導で、街へと消えていく四人を見送り、ジン・帝・カグヤの三人はコミュニケーションへの帰路へとついた。





☆★☆☆☆☆

“ノーネーム” 住居区画、水門前。

四人の帰りを待つために、ジンとコミュニティの子供達、そしてカグヤと帝が清掃道具を手に、水路を掃除していた。

「帝様あくく、これでいい？」

「ん、上出来。ほら、次に行くぞ」

獣の姿では、出来る掃除も限られる。

その為、子供達では手の届かない場所へ、子供達を背に乗せて手伝っていた。ふわふわと手触りのいい彼の背に、子供達はキヤツキヤツと楽しげな声を上げた。その様子を眺め、カグヤも手に持つモップで砂や苔を落とすと、

「あ、みなさん！水路と貯水池の準備は調っています！」

「お帰り。どうだったんだ？」

《お帰りにさいませ》

「ご苦労様です、ジン坊ちゃん♪帝様とカグヤ様も。皆も掃除を手伝っていましたか？」  
帰ってきた彼らへ、労いの言葉を投げる。

すると、ワイワイと騒ぐ子供達が黒ウサギの元へ群がる。

「黒ウサのねーちゃんお帰り！」

「眠たいけど、お掃除手伝ったよー」

「ねえねえ、新しい人達って誰!？」

「強い!?!カッコいい!?!」

「ほら、お前ら！新しい仲間の前で見つとも無い態度を見せるな！整列!!」

帝の一括で、子供達は一糸乱れぬ動きで横一列に並ぶ。

数は大体二〇位だろう。

中には、猫耳や狐耳といった動物の耳を所有している少年少女もいた。

(マジで餓鬼ばつかだな。半分は人間以外の餓鬼か?)

(じ、実際に目の当たりにすると、想像以上に多いわ。これで六分の一ですって?)

(……。私、子供嫌いなのに大丈夫かなあ)

《心配は御座いませんよ。彼らは年長組です。皆様を支える責務を負う、きちんとした躰はされていますので》

三者三様の感想を胸の内に呟いていると、カグヤが察したのかやんわりと口添えする。

今後とも、彼らと生活していくのなら、不和を生まない様にする事は必須と言ってもいい。

コホン、と仰々しく咳き込んだ黒ウサギは、三人を紹介する。

「右から逆廻十六夜さん、久遠飛鳥さん、春日部耀さんです。皆も知っている通り、コミュニティを支えるのは力のあるギフトプレイヤーです。ギフトゲームに参加出来ない者達はギフトプレイヤーの私生活を支え、励まし、時に彼らの為に身を粉にして尽くさねばなりません」

「あら、別にそんなのは必要ないわよ？もっとフランクにしてくれても」

《いえ、これは大事な事なのです》

飛鳥の申し出を、カグヤが一蹴する。

その瞳は、厳しい色に染まる。

《コミュニティはプレイヤーの方々で成り立っている、と言っても過言ではありません。この箱庭で生きていく以上、ギフトゲームへ参加し、恩恵を齎す事を第一とするプレイヤーに甘える事は、コミュニティの墮落を意味します。この箱庭で生きていたいのであれば、参加できない者達はプレイヤーの為に働く事が必須。子供だからと甘やかす事は、この子達の将来を台無しにする行為なのですよ》

「……………そう」

カグヤの気迫に押され、飛鳥が黙る。

それは今日まで、この箱庭で生きてきた彼女達の考え方なのだろう。

だが、同時に思ってしまった。

自分達に課せられた責任は、飛鳥が思っているモノよりも遥かに重いと言う事も……。

「カグヤも言ったが、此処にいるのはコミュニケーションの中では年長組だ。ゲームには出られないんだが、見ての通り獣のギフトを持っている子もいる。何か用事がある時や、簡単な質問程度ならこの子らを使ってくれ。お前らも、それでいいな？」

「「「宜しくお願いします！」」」

キーン、と耳鳴りがする程の大声で、二〇人前後の子供達が叫ぶ。

三人は、金づちで殴られたかのような状況。

近くにいた帝に至っては、想像以上のダメージだったのか、顔を顰めている。

「ハハ、元気がいいじゃねえか」

「そ、そうね」

(……………。本当にやっていけるかな、私)

ヤハハと笑うのは十六夜だけで、他の二人は何とも言えない複雑な顔をしていた。

ここでの生活に、早くも挫折しそうな予感がした。

話をそこそこに、十六夜より水樹を受け取り、台座へと置く。

そして、根を覆っていた布を外すと、そこから大波の様な水が溢れ返り、激流となつて貯水池を埋めていった。

最初は腕で抱えられるくらいだった水樹は、その根で台座を覆い、大きな樹へと成長し、絶やす事無く水を放出し続ける。

「はは、こりやいいな」

《そうですね》

みるみる貯水池を埋めていく水に、子供達が歓声を上げる。

これで当面の水不足は解消される事だろう。

ほう、と胸を撫で下ろし、二人は貯水池に広がる波紋を眺めた。



## ☆☆☆☆

本拠地となる屋敷に着いた頃には、既に宵闇が辺りを包み込んでいた。月明かりによって浮き彫りになるそこは、まるでホテルの様な巨大さ。耀は本拠地となる屋敷を見上げ、感嘆した様に呟く。

「遠目から見てもかなり大きいけど……近づくと一層大きいね。何処に泊まればいい？」

「コミュニティの伝統では、ギフトゲームに参加できるモノには序列を与え、上位から最上階に住む事になっております」

《とはいえ、現在この屋敷に住むのは私と帝、黒ウサギにジンのみです。皆様には、それぞれ私達に近い部屋を準備させて頂きました。何かあつた際に、すぐ近くに私達がい

方が何かと便利だと判断しまして》

「そうね。ところで、そこにある別館は？」

飛鳥は屋敷の脇に建つ建物を指す。

「ああ、あれは子供達の館ですよ。本来は別の用途があるのですが、警備の問題で皆此処に住んでいます。飛鳥さんは、一二〇人の子供と一緒に館の方がよかったですか？」

「遠慮するわ」

飛鳥は即答した。

苦手ではないにせよ、そんな大人数を相手にするのは御免被りたい。

クスツとカグヤが楽しげに笑う。

《大浴場の準備は出来てます。お湯ももう少しすればいい温度になるでしょうから……えっと、どうしましょうか？》

カグヤが困った様に笑う。

それは、女性と男性のどちらが先に入るか、という事だろう。

「俺は二番風呂が好きだな男だから、特に構わねえよ」

《……では、女性から先にどうぞ》

「ありがとう。先に入らせてもらおうわよ、十六夜君」

カグヤの先導の元、女性三人は真っ直ぐに大浴場へと向かった。

## 五章 湯煙と月光

大浴場へ着いた女性陣は、すぐさま脱衣所で服を脱ぎ、湯何処へと入る。

初めは辞退すると言っていたカグヤではあったが、飛鳥と耀、そして黒ウサギによる説得に折れ、彼女も彼ら同様に湯何処へと来ていた。

身体を洗い流し、湯に浸かつて、漸く人心地がついた様に寛ぐ。

天井を見上げれば、箱庭の天幕と同じなのか、天井が透けて夜空には満点の星が見える。

黒ウサギは上を向き、長い一日を振り返る様に両腕を上げて背伸びしていた。

「本当に長い一日でした。まさか新しい同士を呼ぶのが、こんなに大変とは想像もして  
おりませんでしたから」

《……黒ウサギ、それをこの場で言うのはどうかと思いますよ？》

「あら、黒ウサギ。それは私達に対する当て付けかしら？」

「め、滅相もございません！」

バシャバシャと湯に波を立て、黒ウサギは慌てて否定する。  
その様子に、カグヤは苦笑。

耀は隣でふやけた様に、ウツトリした顔で湯に浸かっている。

「このお湯……森林の中の匂いがして、凄く落ち着く。三毛猫も入ればいいのに」

「そうですねー。水樹から溢れた水をそのまま使っていますから、三毛猫さんも気に入ると思います。浄水ですから、このまま飲んでも問題ありませんし」

「うん。………そういえば、黒ウサギも三毛猫の言葉が分かるの？」

「YES♪ ジャツジマスタ “審判権限” の特性上、余程特異な種でない限り、黒ウサギはコミュニケーション可能なですよ」

「そっか………カグヤと帝も、似た様なものなの？」

《そう、ですね。私と帝のギフトは言葉を媒介とするギフトがありますので……その影響もあり、ある程度はコミュニケーションが取れます》

耀の質問に、カグヤは言葉を濁す。

「どうやら、それにはあまり触ってほしくないらしい。」

飛鳥は長く艶のある髪を纏め直し、夢心地で呟く。

「ちよつとした温泉気分ね。好きよ、こういうお風呂」

肌を擦れば、それだけで綺麗になる錯覚があつた。

「水を生む樹……これも“ギフト”と呼ばれるものなの？」

「はいな。“ギフト”は様々な形に変幻させる事が出来、生命に宿らせる事でその力を發揮します。この水樹は“靈格の高い靈樹”と“水神の恩恵”を受けて生まれたギフトでございます。もしも恩恵を生き物に宿らせれば、水を操る事の出来るギフトとして顕現していた筈です」

「水を操る？水を生むのではなく？」

《ギフトとはいえ、無から有を作れないのですよ、飛鳥様。一応は出来なくもないのでしようけど、靈樹の様に浄水する事は難しいでしょう。あの水樹も、大気中の水分を葉から吸収し、増量させて水を生みだしているのです。もし、無から有を生むのであれば、白夜王や龍位でなければ、とても……》

そう、と空返事する飛鳥。

満点の星空を見上げながら、ふ、と思いついた様に呟く。

「龍、ね……それもギフトゲームで手に入れたの？龍のゲームはどんなゲーム？」

「そ、それは流石に黒ウサギは分からないのです。黒ウサギがコミュニティに入った頃には既に台座に飾られていましたから。カグヤ様は？」

《私は参加してませんが……帝は同席していたと思います。確か、力に関係したゲームだったと思いますが》

「そうなの？明日のギフトゲームの参考になるかしら？」

小首を傾げる飛鳥へ、黒ウサギは杞憂だと笑う。

「まさか！『フォレス・ガロ』がそんな大層なゲームを用意する事等不可能でございませよ。相手のコミュニティの存続がかかったゲームですから、得意分野の『力』を競うモノになると思いますが、飛鳥さん達なら問題ないでしょう。余程運に頼ったゲームでない限りは、心配ご無用です。それに、帝様も参加されるんですし」

《……いえ、帝は参加しないと思いますよ？》

ピタツ、と動きを止める黒ウサギ。

「み、帝様が参加なされない!?、それはどういう見なのですか!!まさか、また黒ウサギへの嫌がらせが………っ!」

《く、黒ウサギ!落ち着きなさい》

うがああ、と打ちひしがれる黒ウサギ、を慌てて宥める。

どうやら、彼の嫌がらせはそういった類にまで及んでいたらしい。

カグヤが苦笑する。

《そうじゃなく、ですね。多分、帝は試したいんだと思います》

「……?試す?」

《飛鳥様と耀様の実力を、そして私が戦えるのか、をです》

「あら、彼は私達を信用していないのかしら?」

不機嫌そうに顔を顰める飛鳥。

湯船でふやけていた耀も、少しだけ怒った様に顔を顰めている。



カグヤは小さく頷く。

《帝が信じているのは、現実のみです。例え、どれだけ優れたギフトを持つとも、戦果がなければ唯の持ち腐れ。それが彼の理解です。》

「……それなら、帝君はどれだけの戦果を上げたのかしら？」

飛鳥の言葉に、黒ウサギはウサ耳を萎らせる。

「帝様の戦果は、多数あります。こここの宝物庫に鎮座されている強い力を持ったギフトは、帝様が勝ち取ったモノだと聞いております」

《それに……帝は魔王とのギフトゲームを単独で勝ち上がった経験もあります》

静かに告げるカグヤの言葉に、二人が目を丸くする。

問い質す様な視線を黒ウサギへ向けると、彼女も黙って肯首する。

「……そう。彼はそれだけの実力者って事ね」

「狼ってそんなに強い？」

「い、いえ！帝様があのようになられたのは……三年前でございませう」

「三年前？それって……」

《このコミュニケーションを壊滅させた魔王とのギフトゲームです。帝は、子供達や黒ウサギ

からもギフトを奪おうとした彼らへ交渉を持ちかけ……ある「恩恵」を受けました》

「ギフト？それは一体……」

《「呪われし狼」。帝は……人である事を捨て、その身を獣に落としてまで守ろうとしたんです》

《ウルヴス・サーガ  
呪われし狼》

は、その身を狼へと変化させるギフト。

ある一定条件をクリアすれば、限られた時間でのみ人に戻れる。

だが、このギフトが発動している間は他のギフトは殆ど使えない状態となる恐ろしい「呪い」。

「……あれ？でも待つて。それなら」

「どうして、帝様が人語を話せるか、でございませうね？」

黒ウサギの言葉に、耀は静かに頷く。

彼は確かに『そういったギフトを使っている』と言った。

それならば、彼は『呪われし狼』ウルヴス・サーガ以外のギフトを使っているという事になる。

つまり、カグヤの説明とは矛盾するのだ。

「帝様が他のギフトを使える理由は、カグヤ様なのです」

「……カグヤさん？」

「YES。カグヤ様が所持していたギフトの一つ、『創造神の悪戯』リメイク・ギフトの力によって、帝様はその呪いが発動中でも、人だった頃に使っていたギフトを霊格を落とした威力で使えるのです」

『創造神の悪戯』リメイク・ギフトは、相手に触れる事によって発動するギフト。

一定の時間、そのギフトの効力を改ざんする事が出来るという特殊な恩恵ギフトなのだ。

《上層部との『運氣』を試すギフトゲームで頂きました》

「ふうん……それは、どういったギフトゲームなのかしら？」

《サイコロを転がして、相手より大きな目を出した方が勝ち、といったゲームです》

「そ、そう」

カグヤの返答に、飛鳥は複雑そうに顔を顰める。

それだけの高位ギフトを手に入れる方法が、ただサイコロを転がすだけ、とは少々華がなさ過ぎる気もする。

だが、それ程のギフトをサイコロ程度でホイホイ渡してしまう、相手が想像できない。

《……ですが、このギフトでは帝が他のギフトを使える様になるには、やはり役不足でした。ですので、私はこのギフトを使って、<sup>リメイク</sup>創造神の悪戯<sup>ギフト</sup>、事態を改ざんする事にしたんです》

そのギフトの力で、効力事態を改ざんするという、規格外な事に挑み、結果として帝が受けた<sup>ギフト</sup>“呪い”の改ざんには成功した。

だが、その代償として三年もの昏睡状態へ陥ったのだ。

「……そのギフトって、今でも使えるの？」

《殆ど劣化してしまい、“改ざんする”ギフトから“一定時間追加する”ギフトになってしまいました。一応は機能致します。ですが……リスクが付く様になってしまった

ので、それ程使い勝手のいいモノではありませんね》

純粋な好奇心から来る耀の質問に、カグヤは暫し考えてそう告げる。

それ程いい話題ではない、と判断したのだろう。

黒ウサギが、パタパタと腕を振る。

「折角の裸の付き合いです！よかつたら、黒ウサギもお二人様の事を聞いてもいいですか？ご趣味や故郷の事などナド。カグヤ様も聞いて見たいですよね！」

《そう、ですね……良く考えてみましたら、私は生まれてからずっと、箱庭以外の世界を知りません。よろしければ、お聞かせください》

「あら、そんなものが聞きたいの？」

「それはもう、黒ウサギの好奇心でございますヨ！ずっとずっと待ち望んでいた女の子の裸の付き合い、黒ウサギはお二人様に興味津々でございます♪」

《……失礼ながら、私もです》

嬉々とした笑顔で詰め寄る黒ウサギと、恥ずかしそうにおずおずと手を上げるカグ

ヤ。

それは裏も他意も無い言葉だったが、二人は気が乗らない様な顔をする。それというのも、手紙にはこう書かれていたからだ。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

その捨ててきたものを、今さら顧みる様な真似は、なるべくしたくない。

「けど、そうね。これから一緒に生活する仲だもの。障りない程度なら構わないわよ」

「私はあまり話したくない。けど、質問はしたい。黒ウサギとカグヤには興味ある。髪の色が桜色になるなんて、ちょっとカッコイイし、カグヤと帝の事も聞きたい。」

「あやや、黒ウサギってばカッコイイですか?」

「それなら、私も気になっていたところよ。なら、お互いに情報交換、という事でいいかしら」

《はい。答えられる範囲でしたら》

ほんわかと笑うカグヤに、全員が楽しげに笑う。

「そういえば、カグヤさん。あの時なのだけれど……ほら、貴女が帝君を止めに入った時」

《はい。覚えております》

「その時、貴女はこう言つたわよね? 『兄さんが』 って」

《はい。実は、私と帝は双子の兄妹なんです》

「双子? じゃあ、帝が人間になつたらカグヤそっくりなの?」

《あ、いえ……どうでしょう? 昔の仲間達からは賛否両論でした。似ている、と言う方もいましたし、似てないと言われた方もいます。黒ウサギはどう思います?》

「むむ……黒ウサギは似てないに一票です。カグヤ様はこんなにお綺麗でお優しいのに、帝様は傍若無人で黒ウサギをよく苛める、いじめっ子様です」

むう、と唇を尖らせる黒ウサギに、カグヤは苦笑する。

……そういえば、本抛へ戻ってくる際に帝の姿が見受けられなかった。

耀はぼんやりとそう思い、空に見える十六夜の月を眺めた。





☆☆☆☆

「サウザンドアイズ」二一〇五三八〇外門支店。

既に閉店したその店で、白夜又は自室にいた。

空には煌々と聳える十六夜の月。

その明かりを楽しみつつ、御猪口に次いだ酒を煽る。

と、そこに一人の影が伸びる。

「……ふふ、久しいの『箱庭の御子』」

「そんな古臭い名で呼ぶのは、お前位だろうか。白夜叉」

邪魔する、と部屋へ入ってきたのは青年だった。

月光の様な白い髪を後ろは短く切り揃え、モミアゲはそれと対照的に胸近くまで長く伸ばし、左側には淡蒼いメッシュを入れている。

身に纏うのは、ブーツとダメージ加工したジーンズ、そしてYシャツと黒のベスト、赤い紐と月のブローチで出来たループタイという、これまたアンバランスな出で立ち。彼は、空色と董色のオッドアイを楽しげに細めて笑う。

「言葉を交わすのは、三年ぶりだったか？」

「で、あろうな。姫君は息災か？」

「ああ。『フォレス・ガロ』とのギフトゲームに参加させる予定だから、楽しみにみていれればいい」

青年の言葉に、ほう、と白夜叉が珍しそうに笑う。

「よもや、姫君命だったおんしが、進んでその姫にゲームをせよと申すか」

「事情が事情だ。それに……俺も正直、彼奴を守ってやれる自信がない」

白夜叉の向かい側に座り、月を眺める。

その目は、不安と後悔がさざ波の様に揺れ、白夜叉はそれ程までに彼が自分を追い込んでいる事を悲しく思った。

この青年は、こんな悲しい瞳をするような子供ではなかった。いつでも強い意志を宿し、血の滲む努力の末に大事な姫君を守る「騎士」だった。だが……三年前の悲劇が彼から自信や安息を奪ってしまった。それが、何よりも白夜叉の胸を締め付ける。

「……して、おんしが来たのはこれじゃな？」

飲んでいた猪口を置き、自身の袂を探る。

そして出てきたのは、二枚のカード。

一つはムーンシルバー、そしてもう一枚はブラッディダーク。

相反する色合いのそれを目に、青年の顔つきが真剣なモノへと変わる。

「三年もの間、我々のギフトをお守り頂いた事、感謝致します、白夜の王よ」

「よいよい。それも先代より頼まれた事。おんしが頭を下げる事ではあるまいに」

渡されたギフトカードには、昔の様な旗印はない。

それを沈痛な面持ちで眺めると、青年はカードをしまう。

もう帰ろう。

そう思い、立ち上がった時、すう……と白夜叉がもう一對の猪口を彼へと差し出す。

「月見酒に一杯付き合うくらい、よかろう？ 私も一人では、少々味気なくてな」

「………了解した。これも、恩義だからな」

ニシシと悪戯つ子の様な笑みを浮かべる白夜叉から猪口を受け取り、彼女の酌を受け  
る。

並々と次がれたそれを眺めると、青年は一気に煽る。

酒を飲むのは、いつ振りだろう。

少しだけ喉の奥がカツと熱くなる感覚に、淡く苦笑が漏れる。

「かなり上質な酒だな」

「ふふ。ちよつとした秘蔵の酒だ。おんしの故郷の味に近いのではないか？」

「……あそこの酒は、泥水同様の味しかなかったよ」

青年は苦々しげに顔を顰めると、彼女へと酌を進める。

互いに酌をしつつ、ゆっくりと傾いていく月を眺め、暫しの歓談となった。

## 六章 ゲームは森の中

箱庭二一〇五三八〇外門。

機能のカフェテラスにいた猫耳の少女からのエールを受け、  
“ノーネーム”の面々居住区画を目指す。

と、ピヨコンツ、と興奮した様に黒ウサギのウサ耳が跳ねる。

「あ、皆さん！見えてきました……けど、」

あまりの変わり様に、目を疑う。

人々が住まう区画は、今や密林へと変貌していた。

鬱蒼と生い茂る木々を見上げ、耀が呟く。

「……。ジャングル？」

「虎の住むコミュニティだしな。おかしくはないだろ」

「いや、これは異常だろ」

「はい。『フォレス・ガロ』のコミュニティの本拠は普通の居住区だった筈……それに、この木々はまさか」

ジンは、そつと木々に手を伸ばす。

その樹枝はまるで生き物の様に脈打ち、肌を通して胎動の様なものを感じさせた。

《……完全に『鬼化』してます。こんな事が出来るのは》

「ジン君、カグヤさん。ここに『ギアスロール契約書類』が貼つてあるわよ」

飛鳥が声を上げる。

門柱に張られた羊皮紙には、今回のゲームの内容が記されていた。

『ギフトゲーム名『ハンティング』』

・プレイヤー一覧 久遠飛鳥

春日部耀

ジンⅡラツセル

月宮カグヤ

月影帝

・クリア条件 ホスト本拠内に潜むガルドIIガスパーの討伐

・クリア方法 ホスト側が指定した特定の武器でのみ討伐可能。指定武器以外は  
契約<sup>ギアス</sup>”によつてガルドIIガスパーを傷付ける事は不可能。

- ・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。
- ・指定武器 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、”ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

”フォレス・ガロ”印

「ガルドの身をクリア条件に……指定武器で打倒!?!」

「こ、これはマズイです!」

ジンと黒ウサギが悲鳴の様な声を上げる。

声には出していないが、それを見ていたカグヤと帝も苦しい表情をしていた。

飛鳥は心配そうに問う。



「このゲームは、そんなに危険なの？」

「いえ、ゲームそのものは単純です。問題はこのルールです。このルールでは飛鳥さんのギフトで彼を操る事も、耀さんやカグヤ様のギフトで傷付ける事も出来ない事になります……！」

飛鳥が険しい表情で問う。

「……………どういふこと？」

「つまり、あの虎野郎は『恩恵』<sup>ギフト</sup>では勝てないと踏んで、『契約』<sup>ギアス</sup>で身を守る事にしたんだ。自分の命をクリア条件にする事で、あの虎野郎はお前らのギフトを無効化したって事だ」

「すいません、僕の落ち度でした。初めに『契約書類』を作った時にルールもその場で決めておけばよかったのに……！」

《……厳しい条件になりましたね》

ルールを決めるのが『主催者』<sup>ホスト</sup>である以上、白紙のゲームを承諾するというのは、自

殺行為に等しい。

ギフトゲームに参加した事がないジンや、ゲームから遠ざかった生活をしてきたカグヤは、ルールが白紙のギフトゲームに参加する事が如何に愚かな事かを理解していなかった。

《……こうなる事を分かっていたよな？帝》

厳しい声で帝を睨む。

彼はこの中で誰よりもギフトゲームの経験が豊富なのだ。

ならば、あの場でサインをしているジンを止める事だつて出来ただろうし、ルールを決める大事さも分かっていた筈だ。

帝は軽く尻尾を振って、獰猛に笑う。

「だつたらどうした？」

《っ!?!》

「魔王打倒を掲げた以上、これ位の事で恐れをなしてどうする？いいか、魔王とのギフトゲームってのは、一方的なモノだ。こんな、ルールを話し合う暇も与えられず、いきな

り拒否権なくゲームへ参加させられる。条件が五分五分にされた位で、怖気づいたのなら………プレイヤーなんて止めちまえ」

冷たい刃の様な言葉が、胸へ突き刺さる。

彼の言葉に、脅しも文句もない。

それは、絶対的な事実なのだ。

カグヤは、グツと唇を咬み、彼を睨むしかなかった。

「敵は命懸けてるか。観客にしてみれば、面白くていいけどな」

「気軽に言ってくれるわね……条件はかなり厳しいわよ。指定武器が何かも書かれていないし、このまま戦えば厳しいかもしれない」

そう呟く飛鳥は、厳しい表情で“契約書類”を覗き込む。

彼女が挑んだゲームに責任を感じているのだろう。

それに気づいたカグヤは、飛鳥の手を優しく握り微笑んだ。

《大丈夫です。 “契約書類” に書かれている以上、必ずヒントは存在致します。それで

なければ、黒ウサギがルール違反だと審判して下さいますよ。そうですね?」

「YES! この黒ウサギがいる限り、反則はさせませんとも!」

力強く頷く黒ウサギに続き、耀も飛鳥の手をギュツと握る。

「大丈夫。黒ウサギもこう言ってるし、私も頑張る」

《御二人には、このカグヤが絶対に傷一つ付けさせません。絶対に、です》

「……………ええ、そうね。寧ろあの外道のプライドを粉碎する為に、コレくらいのハンデが必要かもしれないわ」

三人の励ましにより、飛鳥も奮起する。

これは売った喧嘩で買われた喧嘩、勝機があるなら諦めてはいけない。

その陰で、十六夜はジンに昨夜の事を話していた。

「この勝負に勝てないと俺の作戦は成り立たない。だから、負ければ俺はコミュニケーションを去る。予定の変更はないぞ。いいな御チビ」

「……………分かっています。絶対に負けません」

ここで蹟く訳にはいかない。

そう心に誓い、顔を上げるジンを横目に、帝が前へと出る。

「カグヤ」

《………?》

女性陣で励まし合いながら、笑っている時に呼びかけられ、カグヤは首を傾げる。

帝はどこから出したのか、ムーンシルバーのギフトカードを取り出すと、彼女へと差し出す。

それを受け取り、カグヤは信じられないとも言いたげな表情で、彼を見る。

《私の……ギフトカード!?帝、これは》

「白夜叉に預けていたモノだ。彼奴らの指示で、俺達の主要なギフトは全部彼女に預けてあった」

その言葉に、カグヤのみならずジンや黒ウサギも息を呑む。

それは、つまりコミュニケーションの主となる戦力プレイヤーが負ける事を覚悟していたという事だ。そして、未来を自分達に託したという意味でもある。受け取ったカードを握る手に、自然と力が籠る。

「カグヤ……お前はこのゲームで負けた場合、〃ノーネーム〃から出ていけ」

《っ!!?》

「み、帝様!!いくらなんでも、カグヤ様への意地悪が過ぎるのではありませんか!!?」  
「てめえは黙ってろ!!」

牙を剥き出しにして怒鳴る帝に、黒ウサギは身を竦ませる。

彼はからかいや意地悪程度で、コミュニケーションから出ていけ等言わない。

それは、妹であるカグヤが一番よく理解してた。

「白夜叉には、俺から話をつけてある。お前は、このゲームで負けた場合、それから俺が戦えないと判断した場合はコミュニケーションから抜けて、〃サウザンドアイズ〃の庇護下に置かれる」

《……どうして、勝手にそう決めたのですか?》

「俺は、お前が戦えないと思ってるからだ。このコミュニティにお荷物はいらない」  
「なっ……帝様!!それは言い過ぎだと思えます!!」

流石の言い様に、ジンが非難の声を上げる。

しかし、カグヤは暫し瞑想し、次に瞳を開いた時にははつきりと闘志をみなぎらせた瞳で帝を見据える。

《本気、なんですかね?》

「ああ」

《そっか……なら、帝。一つ条件をつけます》

「……言ってみろ」

《もしも、私が戦えると判断出来たなら……今日の夜は大人しく簀巻きになって、本拠の玄関に吊り下げます》

それでいいですね?と問う彼女は、拗ねた様に口を尖らせる。

それは想定してなかったのか、帝は面食らった様に目を見開き、愉しげに笑う。

「良いぜ。今日の夜だけだからな？」

《十分です。それだけでも、帝の傲慢なプライドはズタズタでしょうから》

キツと睨む視線が、互いに火花を散らす。

それを最後に、参加する四人は門を開け、突入した。



## ☆☆☆☆

門の閉閉がゲームの合図だったのか、生い茂る森が門を絡める様に退路を塞ぐ。

光を遮る程に密集した木々は、どうみても人が住める場所とは思えない。

街路と思われる煉瓦の並びは、下からせり上がる巨大な根によって、本来の美しさは見る影もなく破壊されていて、どうにも歩き辛い。

緊張した面持ちで慎重に進もうとする三人へ、耀が助言する。

「大丈夫。近くには誰もいない。匂いで分かる」

「あら、犬にもお友達が？」

「うん。二十匹くらい」

耀のギフトは、獣の友人を作れば作る程強くなる。

身体能力がずば抜けて高いのもそのためだ。

嗅覚や聴覚などの五感は十六夜や、獣の帝よりも優れているだろう。

「詳しい位置は分かりますか？」

「それは分からない。でも風下にいるのに匂いがないのだから、何処かの家に潜んでいる可能性が高いと思う」

「では、まず外から探しましょう」

四人は森を散策し始める。

出来るだけ、些細な情報も漏らさぬように注意深く。

ギフトゲームにおいて、小さな情報こそが大事だと、カグヤは帝より教わった。

普段なら、あんなことを言わない兄の言葉。

ふと、カグヤは木へと手を置くと、沈んだ面持ちで空を仰ぐ。

彼は、自分を戦わせたくない事はずっと知っていた。

そして、あれだけの戦果を上げる為に、毎日毎日血が滲む様な……文字通り、血を吐くような思いで訓練し、自分を守ってくれていた事も。

そんな彼が、自分に戦えないなら出ていけ、と言った。

それだけ……一人戦っていた兄は追い詰められてしまったのだろう。

そう思うだけで、カグヤの胸は悲鳴を上げる。

甘えていた……そう思わない日等なかった。

コミュニケーションの為に、給仕しか出来ない自分へ苛立ちを感じ、泣いた日だってあった。それでも、今日まで幸せに生きてこれたのは、自分を犠牲にして守ってくれた帝がいたから。

「カグヤ、大丈夫？」

足を止めてしまったカグヤを労わり、先頭を歩いていた耀が駆け寄る。

彼女は、瞳に滲んだ涙を払い、笑って見せた。

《大丈夫です！絶対に負けたりしませんし、帝に負けたと認めさせてみせます!!》

「……すいません。僕がしっかりしていないばかりに」

《ジンのせいじゃないんです。それに……私もずっと兄の後ろに隠れるだけの存在に、甘んじていた部分がありました。何があっても、帝なら助けてくれる……そんな甘えが、彼を追いつめてしまったんです》

「……そう。大変なのね、貴方達って」

まさか、こんな事になるとは思っていなかった飛鳥が、沈痛な面持ちで告げる。

彼女にしてみれば、このゲームでまさか兄妹の間に亀裂が生まれるとは思ってもみなかったのだろう。

その責任で、顔色が優れない飛鳥へ、カグヤは小さく首を横に振る。

《私を思っていただけるのでしたら、このゲームに勝ちましょう？ 私だって、戦えるんです。それを帝に……兄に認めさせたいんです》

「ええ、分かっているわ！あの外道のみならず、帝君もギャフンと言わせてやりましょう！！」

強く頷く飛鳥へ、カグヤも嬉しそうに笑って頷く。

だが、こうしても特に収穫はない。

カグヤは暫し考え、一旦止まる事を告げた。

《このままでは、多分勝てません。ジン、今までの情報を整理しませんか？》  
「整理、ですか？」

《はい。耀様、辺りにガルドの気配はありますか？》

「……ううん。でも、少し高い位置からなら、もっと分かるかもしれない」  
《では、警戒をお願いします》

カグヤの言葉に、耀はコクリと頷くと軽い調子で高い樹へと飛び乗る。

その間に、カグヤは二人へと向き直る。

《この木々は、通常のモノとは異なる気がします。多分、鬼化していると推測しています  
が……どう思いますか？》

「僕もそれと同意見です。このフィールド全体が鬼化した植物で覆われている、と言っ  
ても過言ではないかと」

「……ねえ、その『鬼化』っていうのは、どういう事かしら？」

《そうですね……分かりやすく言いますと、吸血鬼になっている、でしょうか》

だが、これだけの広い土地を丸ごと鬼化してしまう吸血鬼等、カグヤとジンの記憶の中では一人しか思い浮かばない。

もしくは、その人物からギフトを奪った第三者と考えるべきだろう。

そして、これは二人とも同意見なのだが、これをガルドが作った訳ではないという事。それは、彼が自分の命を使ってまでゲームに挑むとは思えなかったのだ。

《このフィールドが鬼化した状態から推測して……ガルドは、面倒な事になっていると思います》

「面倒、ね。でも、この状況の方が余程面倒だと思うわよ？」

《それもそうです。耀様!!ガルドを見つける事は可能ですか?》  
「もう見つけてる」

彼女の言葉に、全員が樹の上を仰ぎ見る。

彼女は、静かに残骸でしかない街路を指し、

「本拠の中にいる。影が見えたんだけど、目で確認した」

彼女の瞳は、普段の耀とは違い、猛禽類を彷彿とさせるような金の瞳で本拠を見詰めている。

鳥の視力を以てすれば、この程度の距離など問題ではないらしい。

「そういえば、鷹の友達もいるのね。けど、春日部さんが突然異世界に呼び出されて、友達は皆悲しんでるんじゃない？」

「そ、それを言われると………少し辛い」

しゅん、と元気をなくす耀。

飛鳥は苦笑して。パンパンと肩を叩き、四人は警戒しつつ、本拠の館へと向かった。道中をその侵入を防ぐかの様に張り巡らされた木々が、彼らの行く手を困難なものへと変えている。

それでも、慎重に進んでいくとそこに聳えたつ不気味な館が眼下へと入った。

「見て。館まで呑み込まれてるわよ」

“フオレス・ガロ”の本拠は、見る影もない程に破壊されていた。

虎の紋様を施された扉は無残に取り払われ、窓ガラスは砕かれている。豪華な外観は、塗装もろとも蔦に蝕まれ、剥ぎ取られていた。

《これは……いよいよもって、キナ臭くなりましたね》

緊張した面持ちで、カグヤは館の塗装を撫でる。

これならば、内装は考える必要もない程に酷い有様になっているに違いない。

「ガルドは二階に居た。入っても大丈夫」

耀の言葉により、慎重に館の中へと入る。

案の定、内装は酷い有様となっていた。

こうなつては、流石にこの舞台の異常さを感じざるを得ない。

「この奇妙な森の舞台は……本当に彼が作ったものなの？」

「……分かりません」

《『主催者』側はガルドのみが縛られますが、舞台は代理を立てても構わないんです》



「代理を頼むにしても、罨一つもなかったわよ?」

その疑問に耀が応える。

「森は虎のテリトリー。有利な舞台を用意したのは奇襲の為……でもなかった。それが理由なら本拠に隠れる意味がない。ううん、そもそも本拠を破壊する必要なんてない」  
《……多分、彼にとってあの場所が誇りなのでしょう》

あの場所、とカグヤが示したのは、二階。

そこは、耀が遠目からガルドが潜伏していると推測した場所。

《彼にとって、この屋敷も豪華な調度品も、見事な居住区も、意味のないモノ。あの部屋こそが、ガルドの誇りであり、継るべき場所なのだと思います》

「……どうしてそう思うの?」

《私も、同じだからです。私にとって、“ノーネーム”で自分に与えられた部屋は……誇りと自慢、そして大事な思い出の詰まった、私だけのテリトリーです。たとえ、帝であろうとも黒ウサギであろうとも譲渡したくはありません》

二階へと向ける視線には、哀愁と強い愛着の意思が滲む。それだけ、彼女にとってコミニティは大事な場所なのだろう。

四人で一階を散策してみたが、武器らしきものは見つからなかった。

もうこうなってしまうえば、二階に陣取っているとされるガルドが所持している、と思う方が自然な流れだと言ってもいいだろう。

四人は、緊張した面持ちで二階を見上げる。

「二階に上がるけど、ジン君。貴方は此処で待つてなさい」

「ど、どうしてですか？ 僕だってギフトを持っています。足手まといには」

《ジン、貴方には退路を守る役目をお願いします。それに、いざ逃げるとなった時……一番逃げる事が難しいのは貴方でしょう？》

カグヤの言葉は、見事に的を射ている。

確かに、襲われる場合その中で最も弱い者から狙われる事は極々当たり前だ。

この中で言うならば、一番幼いジンだろう。

それに、退路を守らねばならない、というのも確かに重要な事だ。だが、ジンは不満だった。

これでは、自分が足手まといの様だ。

だが、彼女達の考えの方が正しいと理解し、ジンは渋々階下で待つ事にした。

飛鳥と耀、そしてカグヤは根によつて変形させられた階段を、ゆっくりと登っていく。

互いに辺りを警戒し、出来るだけ物音を殺しながら。

階段を上った先にあつた最後の扉の両脇に立つて、三人は機会を窺う。

意を決した二人が勢いよく飛び込むと中から、

「ギ……………」

「……………GEEEEYAAAAAaaaa!!!」

言葉を失つた虎の怪物が、白銀の十字剣を背に守つて立ち塞がった。

☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆

門前で待っていた三人の元に、獣の咆哮が届く。

森に忍び込んだ野鳥は一斉に飛び立ち、一目散に逃げていく。

「い、今の凶暴な叫びは……?」

「ああ、間違いない。虎のギフトを使った春日部（耀）だ」

「あ、なるほど。って、声を揃えてそんな訳ないでしょう!?! 幾ら何でも今のは失礼でござ  
いますよ!」

ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

十六夜も帝も本気で言った訳ではなく、互いに肩を竦ませて訂正した。

「じゃあ、ジン坊ちゃんだな」

「いやいや、飛鳥かもしれねえぞ?」

「ボケ倒すのも大概になさい!!」

専用のハリセンで、ツツコミを入れる。

よっぽど暇を持て余していたのだろう。

十六夜は門からはみ出した、奇妙な樹の枝をへし折って笑う。

「今の咆哮といい、舞台といい、前評判より面白いゲームになってるじゃねえか。見に行ったらマズイのか？」

「お金をとって観客を招くギフトゲームも存在しておりますが、最初の取り決めにならない限りは駄目です」

「何だよつまんねえな。 ジャツジマスター 審判権限」と、との御付きつて事にすればいいじゃねえか」

「だから、駄目なんですよ。ウサギの素敵耳は、此処からでも大まかな状況が分かっています。状況が把握できないような隔絶空間でもない限り、侵入は禁止です」

チツ、と舌打ちした十六夜は、手の中で蠢く樹を縦に引き裂きながら呟く。

「……………貴種のウサギさん、マジ使えね」

「せめて聞こえない様に言ってお下さい！本気でへこみますから!!」

ペシペシペシと叩く黒ウサギ。

それを見て、愉しげに笑っていた帝は自身のギフトカードを取り出すと、そこから硝子玉を取り出す。

十六夜が不思議そうにそれを摘まんだ。

「……うーなんだ、これ」

覗き込んだ瞬間、煌々と光り出した硝子玉は壁に現状を映し出す。

それは、ゲーム内の映像だ。

「見たい場所を映し出す千里眼だ。これで俺達でもゲーム内がよく分かる」

「へえ……随分と便利なモノを持ってんな」

「部屋に埋もれてるのを見つけた。俺もカグヤの様子が気になるしな」

ククツと笑って、帝は壁に映る現状を見守る。

この鬼化した植物は、正直尋常ではない。

多分、このゲーム自体が仕組まれたモノ。

ガルドを利用して、ここを作った第三者は何かをさせたいのだろう。

（これだけの植物を鬼化させるだけの生き物は、彼奴しか考えられねえ。なら、ゲーム自体には不備はない筈だ。こつちには、黒ウサギもいるんだからな。………だが、安全が確保されているかは別だろ）







☆☆☆☆☆

目にも留まらぬ突進を仕掛ける虎を受け止めたのは、飛鳥を庇った耀だった。辛うじてガルドの突進を避けた耀は、階段に突き飛ばした飛鳥に向かって叫ぶ。

「逃げて！」

互いに後の言葉は続かない。

ガルドの姿は先日のワータイガーではなく、紅い瞳を光らせる虎の怪物そのものとなって、四人を待ち構えていたのだ。

階段を守っていたジンは、ガルドの姿を見るや否や、彼の身に何が起こったのかを理解する。

「鬼、しかも吸血種！やっぱり彼女が！」

「つべこべ言わずに逃げるわよ！」

飛鳥はジンの襟を掴んで、階段から飛び降りる。

標的を飛鳥とジンに定めたガルドも、階段から飛び降りて立ち塞がる。

「G E E E E Y A A A A a a a !!」

走る二人の背に、ガルドの爪が襲いかかる。

その瞬間、強い突風が彼の攻撃を阻む。

《今の内に早くお逃げください!!》

視線を上げた先に、鉄扇を構えて下の様子を窺うカグヤの姿があった。

どうやら、今の風は彼女のギフトらしい。

「ま、待って下さい！まだ耀さんとカグヤ様が上に!!」

「いいから逃げなさい！」

飛鳥の命令に、ジンの意識は津波に巻き込まれた様に途切れた。

意識は逃げ出す事だけに集中し、飛鳥の手を掴んで一言



「いっのっ!!!」

襲い来るガルドと全く動けないカグヤとの間に入ったのは、白銀の十字剣を持った耀だった。

突進する形で腕を上げたガルドの足裏に、剣の切っ先が浅い傷をつける。

「っ!!? GEEEEEEEE YAAAAaaaaaa!!!?」

「がっ!!」

痛みで暴れるガルドの爪が、耀の右を捕える。

成すすべなく壁へと叩き付けられた耀に、カグヤが悲鳴を上げた。

《耀様!!!》

慌てて駆け寄り、彼女を抱きかかえる。

触診でも分かる程に右腕は裂け、多分肋骨にも罅が入っていると思ってもいいだろ

う。

脂汗を浮かべ、まだ使える左手でカグヤの袖を掴み、耀が呻く。

「カグヤ、逃げて」

《っ!!!》

その言葉に、カグヤの瞳に涙が浮かんだ。

耀は恐怖で動けないでいたカグヤを庇って、こんな傷を負ったのだ。

全ては、自分が弱いせい。

（何が絶対に傷付けない、だ。私はこんなにも、臆病者で弱いというのに……っ!!）  
口先だけの自分に、嫌気と苛立ちが募る。

「GEEEEEEYAAAAaaaaa!!」

《っ!!!》

間近で聞こえた咆哮。

カグヤはすぐさま反応し、耀を抱えてその場から飛び退く。

次の瞬間、ガルドが頭から壁へと激突する。

《うぐ…》

逃げが甘かったのだろう。

カグヤの背に相手の爪が傷を残す。

背に感じる痛みと熱に、カグヤは顔を顰めた。

このままでは、二人揃って餌になるだろう。

《耀様、その剣をしつかりと握って下さい》

「カグ、ヤ………？」

訳が分からない、とでも言いたげに聞き返す様へ、カグヤは精一杯の笑顔を向ける。  
そして、片手で耀を抱え直すと、鉄扇を構えた。

《一旦引きます。舞なさい芭蕉扇!!!》

ブンツ、と勢いよく鉄扇を振るう。

次の瞬間、部屋一杯に疾風が駆け抜け、窓も天井も破壊していく。

墜ちる瓦礫を回避し、遠ざかっていくガルドを尻目に、カグヤはすぐさま破壊された窓より飛び降り、逃走を始めた。

「誰？」

「……私達」

暫く走っていると、丁度何やら話し合っていた飛鳥とジンに出くわした。

二人の顔を見た瞬間、ほうとカグヤは息を吐き、その場で膝を折る。

二人の散々たる姿に、ジンと飛鳥は悲鳴の様な声を上げた。

「か、春日部さん！カグヤさんも!!大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃ……ない。凄く痛い。ちよつと、本気で泣きそうかも」

脂汗が浮かぶ状況で、耀が呻く。

カグヤの方は、息も絶え絶えでとても話せる状況には見えない。



彼女は、手傷を負った状況でも耀を担いで、ここまで運んできたのだ。粗、体力気力共に限界が近いと考えていいだろう。

薄れだした意識を無理矢理叩き起こし、カグヤは耀の傷へと触れる。

すると、ぽう……と彼女の手には淡い緑色の光が宿り、みるみる内に耀の傷を跡形もなく消し去った。

ありえない光景に、三人が目を丸くする。

「……………治ってる」

先程まで痛んでいた腕をブンブン回し、耀が呟く。

どうやら、完全に回復しきった様だ。

「カグヤ、ありがとう」

とう……

そう続く事はなかった。

カグヤの身体はゆっくりと、その場に崩れ落ちる。

倒れる彼女を、飛鳥と耀が慌てて抱き起す。

「カグヤさん!!しっかりして!!」

「カグヤ!!」

抱いた手を、カグヤの血が汚す。

このままでは、出血多量で彼女の命が危ない。

本来なら、すぐさま止血をして応急処置をするべきなのだろうが、今はそんな道具はない。

飛鳥は悔しげに彼女を見る。

「時間がないわ。今からあの虎を退治してくるわ。ジン君はここで待ってなさい」

「あ、飛鳥さん!? 駄目です、一人じゃ無理です!」

「大丈夫。私も一緒に行く」

耀はジャケットを脱ぐと、地面へ敷き、そこへカグヤを横たえる。

ちよつとの刺激にも呻く彼女に、辛そうに表情を歪めた後、十字剣を手に取り立ち上がった

た。

「行こう、飛鳥」

「ええ」

力強く頷き合う二人。

これは、大事な試合なのだ。

彼女をコミュニティに残す為の、大事な……

《飛鳥様……耀様……》

微かに聞こえた声。

二人が視線を向けると、苦痛に喘ぎながらも真っ直ぐに自分達を見るカグヤがいた。

「カグヤ、待ってて」

「一〇分で決着をつけるわ。少しだけ我慢して」

《はい。私は……信じております。……飛鳥様と耀様なら……絶対に勝利して下さい、

と……》

“いつてらっしやい”

そう送り出す様に、手を小さく振る彼女へ二人は微笑むと、森の中へと疾走していった。

その姿を最後に、カグヤの意識は闇の奥へと落ちて行ったのだった。

☆★☆☆☆

ゲーム終了を告げる様に、木々が一斉に霧散した。  
それを合図に、帝が走り出す。

その後を、黒ウサギと十六夜が追う。

「おい、黒ウサギ！治療器ってのは、コミュニティにあるのか!？」

「YES！コミュニティの工房なら、どんな大怪我を追っても治せるだけのギフトが揃っております!!」

「黒ウサギ！早くこつちに！カグヤ様が危険だ!」

風より早く走る三人は、瞬間にジン達の元に駆け付けた。

廃屋に隠れていたジンは、三人を呼び止める為に叫ぶ。

カグヤの容体に、帝と黒ウサギが言葉を失う。

「カグヤ!!」

「すぐ、コミュニティの工房に——」

《み、かど……》

微かに漏れる声。

視線を向けると、ボロボロの身体をしたカグヤが必死に手を伸ばし、帝の前足を掴む。

その瞳は、既に正気を失っているのかぼんやりと暗い。

多分、彼女は意識が回復しない状況で動いているのだろう。

ただ、己の信念の為に……

《私……戦えた、でしょ？》

「カグヤ……もういい。このゲームはお前達の勝ちだ。早く治療を——」

《奪わ、ないで……》

「カグヤ様……？」

《私から……居場所を……大事な思い出を……奪わないで……奪っちゃ、嫌だよ……お兄ちゃん……》

泣き出しそうな程悲しみに満ちた呟きを最後に、カグヤはその場で力尽きる。

眠る様に気を失った彼女へ、帝は頬へ伝う涙を舐めとると、黒ウサギの方を向く。

「カグヤを頼む」

「お、お任せください!!」

カグヤを抱えると、黒ウサギは全速力で工房へ向かった。

黒ウサギが踏み込んだ地面にはクレーターの様な亀裂が走り、通った後には土埃が渦

を巻いて立ち上る。

その姿を見送り、帝は辛い気持ちを嘔み殺す。

(…本当に、これが正しい事なのか?)

自分に問うが、その答えは依然として闇の中。

ただ、妹が無事である様に、今は祈る事しか出来なかった。



## 七章 暗雲立ち込める闇夜

十六夜、飛鳥、耀、ジンは本拠へ戻ってすぐにカグヤの容体を確認しに行く。

先に戻った帝の姿を探し、彼女が既に自室で養生中だという事を聞かされた時、飛鳥と耀の瞳に涙すら浮かびそうになった。

「随分と早い治療だな。流石は神様の箱庭ってことか」

「YES!……と、言いたい所なのですが、元よりカグヤ様の自己治療力が高かった事が幸いしました」

「俺とカグヤの一族は、それなりに身体能力、自己治療力が高いんだ。普通の人間種よりは能力値も高い」

「そっなの?」

「YES!もし、飛鳥さんや耀さんが同じ傷を受けたなら、きつと二、三日は絶対安静だったと思います」

そう聞かされてしまえば、彼女の治癒力は異常の部類なのだろう。これも恩恵なのか、と問えば、帝は首を横に振る。

「元より、そういう作りになつてゐるらしい。詳しく説明出来たらいいんだが……俺達の一族……いや、コミュニティは数千年前に消失してるんだ。生き残ってるのは、俺とカグヤのみでな」

特に興味がないのか、軽い調子でそう告げると、帝が振り返る。

「カグヤに会っていくか？ 多分、もう目を覚ましてもいい頃合いだしな」

「でも、迷惑じゃない？」

「いや……友人がお見舞いに来てくれるなんて、彼奴が泣きながら喜びそうだが？」

クスクスと笑う帝の表情は、本当に嬉しそうだ。

彼にしてみても、妹を大事に思ってくれる見た目同年代の友人がいる事は、嬉しいモノなのだ。

十六夜と黒ウサギがそれを辞退し、飛鳥と耀を連れてカグヤの部屋へと向かった。

「カグヤ、入るぞ」

前足を器用に使い、帝が扉を開ける。

横になっていたらしいカグヤは、ゆつくりと体を起こすと驚いた様に目を丸くした。

《飛鳥様……それに耀様も》

「あら、そのままでもいいのよ？」

「具合、どう？お腹すいてない？」

心配そうに近寄る彼女達に、カグヤは俯く。

一向に顔を上げないカグヤの様子に、何事かと慌てる二人を余所に、帝がニヤリと笑った。

「照れるな照れるな。……顔、真っ赤だぜ？カグヤ」

《み、帝は意地悪です!!》

狼狽える様な声と共に、上げられた表情はこれでもか、という程に真っ赤に染まっていた。

その様子が可愛くて、キュン、となってしまうたのは内緒である。

《御心配をおかけしました。私は大丈夫です。明日一日休めば、すぐにでも完治するだろう、と黒ウサギにも言われましたので》

「そうなの……」

「でも、無理しないでね？」

《はい、ありがとうございます》

ふわりと微笑むカグヤ。

「ほら。立ち話は疲れるだろ？」

トコトコと頭で椅子を二つ押してきた帝の勧めにより、二人はベット横へと座る。その間に、カグヤは近くに置いてあった桂を羽織った。

「……カグヤの私服って、袴よね？」

《はい。幼い時からずっと……一応、振袖も持つてはいますが、舞を披露しない時は動きやすい袴姿の方が、何かと楽なので》

「振袖？カグヤも沢山持つてるの？」

《はい。……その衣装箱の中に》

彼女が指差す先には、大きな葛籠を思わせる竹の箱。

どうやら、それが彼女の衣装箱の様だ。

と、不思議そうに耀が首を傾げた。

「そういえば、どうしてカグヤの怪我は治せないの？」

《？》

「だって、カグヤ。私の怪我、治してくれたよね？」

それはゲーム中の事だろう。

その質問の意味を理解したカグヤは、自分の袂より一枚のカードを取り出す。ムーンシルバーのそれは、彼女自身のギフトカードだ。

《私が所有するギフトの一つです。 ラファエル 大天使の祝福》と言います》

《ラファエル 大天使の祝福》は、治癒系の恩恵の中では最高位の威力を持つ、数少ないギフトの一つ。

その力は、どんな傷でも病でも治せる反面、自分には使えないという欠点がある。

「……それは、凄いわね」

《いいえ。傷と病は治せても、与えるギフトによって与えられた病や呪いは治せません。症状を軽くする程度は出来るのですが……それも、気休め程度でしょう》

「でも、そのおかげで私達は勝てたんだよ。ありがとう、カグヤ」

「そうね。あの時逃がしてくれた事にも、感謝しているわ」

「ああ、芭蕉扇な」

カグヤ、と帝が呼ぶと、カグヤはギフトカードより鉄扇を出す。

「これが、芭蕉扇。西遊記位は知ってるだろ？」

「……まさか、その西遊記に出てくる『芭蕉扇』なの？」  
《はい》

どうぞ、と差し出すと、飛鳥が恐る恐る受け取る。

持った感触は、普通より重い鉄の扇子といった所だろう。

だが、これを一振りするだけでこの部屋をポロポロにするだけの威力があるのだから、見た目で騙されてはいけない。

「これ、どんなギフトゲームで貰ったの？」

「いや、ゲームじゃねえぞ？」

《その芭蕉扇は、昔、牛魔王様方の館で舞を披露した際に、親愛の証として羅刹女様より頂いた品なんです》

「こ、これを貰ったの!?!」

目を丸くし、驚きの声を上げる飛鳥。

芭蕉扇と言え、羅刹女が所有する扇。

その一振りで、火の海を吹き飛ばすだけの威力があると綴られている。

その為、西遊記では孫悟空一行が彼女より借受ようとして、戦った話があるのだ。それ程有名な武具を、無償で渡したくなる程に、彼女の舞とは魅力的なのだろうか。興味をそそられる。

「ねえ、カグヤさん。体の調子が戻ったら、私達にも一曲舞つて下さらない?」  
「私も見たい」

目を輝かせる飛鳥と耀。

それに、目を丸くしたが、すぐさま嬉しげに笑うとしつかりと頷く。

《喜んで。お二人と十六夜様の歓迎の意を称して、一曲と言わず、何曲でも舞わせて頂きます》

「そりや、豪勢だな。『箱庭の歌姫』と噂されるカグヤの舞と歌声は、どれだけの宝石や金品を次ぎ込んででも、一見する価値があるって言わせる位だからな」

《帝。何度も言いますが、大げさです……それより、です》

先程まで笑っていたカグヤの瞳が、すう……と細くなる。



その目には、怒りの色が濃く見えた。

《この勝負、私が勝ちました。……それでは、帝兄さん。約束は覚えておりますか?》

「……………」

ふふふ、と口元に笑みを浮かべるカグヤ。

普段の可憐な笑みには程遠い程に、冷たい色を灯し、ゾクリと帝の背筋を凍らせる。

自然と後ずさる後ろ足。

と、それを不自然な形で止めるモノがあった。

帝が振り返った先には、満面の笑みを浮かべる飛鳥と、どこから出したのかロープを握ってウキウキしている耀。

「そうだったわね。帝君には、今日の夜中簀巻きで吊り下げの刑だったのよね?」

「……………覚悟」

「ちよっ!!早まるな!!」

慌てて逃げようとする帝。

だが、それを許す程彼女達は甘くはない。

「止まりなさい！」

「っ!!？」

飛鳥の言葉によって、四肢を拘束される。

無理矢理動かこうとするその体を、素早く耀がロープで締め上げた。

なんとという連携プレイ。

芋虫状態となった帝を眼下に、彼女達はハイタッチを交わす。

《帝、簀巻きで吊り下げです。大丈夫ですよ、明日、気が向いたら降ろして差し上げますから》

「ちよっ!!お前、完全に恨んでるだろ!!？」

《兄さんが、部の悪い賭けをするからそうなるんです。昔から言っているでしょう？運を司るゲームならば、私の方が強いですよ、と》

晴れ晴れと笑う妹の姿に、もう観念したのか、帝は陰鬱な表情で溜息を零す。

確かに、今まで賭け事で彼女の勝った試しがない。

それは、彼女の運がいいのか、それとも自分の運が悪いのか……  
帝は絶対に後者だと自覚した。

《では、耀様。よおしく!!吊るしてあげて下さいね》

「うん。任せて」

何が任せてなのだろう。

帝は耀に担がれながら、諦めた様な状態でそう思った。

☆  
★  
☆  
★  
★  
☆

「あゝゝゝゝゝゝ………暇だ」

自分の下に広がる夜空を眺めつつ、帝はぼんやりと呟いた。

どうして、眼下に夜空なのかと言えば……彼が逆さ吊りの状態で放置されているから、というのが正しいだろう。

長時間この状態で放置されれば、頭に血が上り、生命的にも危険なのだろうが、そこはうまく体を弾ませて事なきを得ている。

……本当に器用な狼だ。

「ん~~~~ん?」

スンツと鼻を鳴らす。

この姿になって以来、一番得したと思う事は嗅覚の発達だ。少しの匂いだけでも、帝の鼻は敏感に感じ取る事が出来る。

微かに感じる血と甘い香り。

これは、今だからこそ分かる嘗ての仲間の匂い。

「……レテイシア?」

眩いて、帝は顔を顰める。

彼女は、別のコミュニティに所有される身だ。

そして、その彼女を巡ってギフトゲームが開催されるとジンから聞かされている。

それには、十六夜が出場するという約束になっているそうだが、その景品たる彼女がここを訪れる事は、少々腑に落ちない。

それに、彼女は「フォレス・ガロ」を鬼化させた張本人である可能性が高い。

妹や客人を試す様な言動をした手前、あまり言えた立場ではないが、それでも鬼化したせいでゲームの危険度も増し、現在カグヤは自室で養生する事となった。

申し訳ないが、レティシアへの怒りが無い訳ではないのだ。

どうするべきか……

ぼんやりと考えていると、物凄い爆音と共に館が揺れた。

「おおつとおおお?!?!」

ビヨンビヨン、と哀れな芋虫が如く、バンジージャンプ宜しく跳ねた帝の身体は、ブチツ、と簡素な音と共に地面へと叩き付けられる。

「ぐへ……」

まるで、押しつぶされたカエルが如き呻き声。

何とか受け身を取ったからいいものの、もし取れなければ今頃彼の頭部は潰れたトマトの様な惨状となっていた頃だろう。

(……仕方ない)

帝は内心で妹へ詫び、爪でロープを引き裂く。

逃げる事はいつでも出来たが、妹と賭けをした手前、こういった反則はしたくなかったのだ。

取り敢えず、一大事やもしれないと音の出所へと走る。

そこにいたのは、ハラハラと状況を見守る黒ウサギと楽しげに笑う十六夜。

そして……自分と同じ大きさと云っても過言ではないランスを持つ元仲間にして、元

魔王——レティシアがいた。

「ふっ——！」

レティシアは呼吸を整え、翼を大きく広げる。

全身を撓らせた反動で打ち出すと、その衝撃で空気中に視認できる程巨大な波紋が広

がった。

「ハアアア!!!」

怒号と共に放たれた槍は、瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線に十六夜に落下していく。

流星の如く待機を揺らして舞い落ちる槍。

その情景に、帝は嫌な予感に襲われた。

それは迎え撃つ十六夜に、ではなく、レ・テイシアに対してだ。

その予感は、見事に的中する。

「カツ————しゃらくせえ!!」

殴りつけた。

「——は………!?!」

素つ頓狂な声を上げるレ・テイシアと黒ウサギ。



しかし、これはまた比喩ではない。

彼は、平然とした態度で隕石級の速度をした槍を、たった一撃で只の鉄塊にし、さながら散弾銃の様に無数の凶器となって、レティシアにむけられたのだ。

(ま、まずい……！)

ありえない現状。

なんと馬鹿馬鹿しい破壊力。

これを受ければ、レティシアは肉塊と化す危険性すらあるだろう。

慌てて回避行動に移ろうとするが、身体が追いついてこない。

(こ……こ……これほどか……！)

着弾する間際、彼女の口元に苦笑が浮かぶ。

尋常外の才能を目の当たりにしたレティシアは、自分の目測の甘さを恥じ入る。

しかし、それ以上に安堵した。これ程の才能ならばあるいは……と、血みどろになつて落ちる覚悟を決めた時、

「馬鹿かつ?!?!」  
「っ?!?!?!」

聞き慣れた声に、ハツとする。

鼻先まで迫った鉄塊に構う事なく、誰かがレティシアの襟首を掴み、地上へと舞い降りる。

声には聴き覚えがある。

だが、その存在を見た瞬間にレティシアは混乱した。

「お、狼!？」

「悪かったな、この若作りヴァンパイア」

けつ、と彼は憎まれ口を叩きながらも、ゆっくりとレティシアを降ろす。

乱暴な癖に、他人への配慮に気を配る……その姿は、嘗ての仲間に良く似ていた。

いや、そうではない。

この狼こそが、彼なのだ。

「……帝、なのか」

「久しぶりだな、レティシア」

「お前……その姿は……」

言葉を失うレティシアに、帝はどういえばいいのか分からずに、小さく尻尾を振るう。慌てて近寄ってきた黒ウサギは、落ちたカードを広い絶句する。

「ギフトネーム ロード・オブ・ヴァンパイア 純潔の吸血姫” ……やつぱり、ギフトネームが変わっている。鬼種は残っているものの、神格が残っていない」

「っ……………」

さつと目を背けるレティシア。

黒ウサギの言葉に、帝は思考し……最悪の考えに行きついた。蒼白になった顔色で、レティシアを見る。

「お前……まさか、自分のギフトで交渉したのか？」

呟くような声に、答える者はいない。

歩み寄った十六夜は、白けた様な呆れた表情で肩を竦ませた。

「なんだよ。もしかして元・魔王様のギフトって、吸血鬼のギフトしか残ってねえの？」  
「……はい。武具は多少残してありますが、自身に宿る恩恵は……」

十六夜は隠す素振りもなく、盛大に舌打ちした。

そんな弱り切った状況で、相手にされた事が不満だったのだろう。

「ハッ！ どうりで歯ごたえが無い訳だ。他人に所有されたら、ギフトまで奪われるのかよ」

「いいえ……魔王がコミュニケーションから奪ったのは人材が主です。私やジン坊ちゃん、そして子供達が所持しているギフトは帝様がその身を差し出す事で回避して下さいました。それに、武具等の顕現しているギフトと違い、『恩恵』とは様々な神仏や精霊から受けた奇跡、云わば魂の一部。隷属させた相手から同意なしにギフトを奪う事は出来ません」

「レティシア、沈黙は是とみなすぞ。全部洗いざらい吐け」

帝の厳しい声音に、レティシアは苦虫を噛み潰した様な顔で、目を逸らす。

そのまま沈黙を保つ彼女へ、十六夜は頭を掻きながら鬱陶しそうに言う。

「まあ、なんだ。話なら取り敢えず館に戻ろうぜ」

「……確かに、ここで話していても埒が明かないな」

十六夜の言葉に、帝は溜息混じりに同意すると、玄関へと向かう。

異変が起きたのはその時だった。

顔を上げると同時に遠方から褐色の光が差し込み、レティシアはハツとして叫ぶ。

「あの光……ゴーンゴンの威光!? まずい、見つかった!」

焦燥の混じった声と共に、レティシアが前へと出る。

どうやら、十六夜と黒ウサギを庇おうとしているのだろう。

チツと帝が舌打ちする。

「十六夜!! 黒ウサギは後方へ跳べ!!」

彼の怒号に従い、二人が其々別方向へと飛ぶ。

帝は疾走すると、その勢いを殺さずにレティシアを跳ね飛ばす。

光は誰にも当たたる事はなく、近くにあつた木々を石化させるだけに留まつた。

「っ!?帝!!何を……!!」

「うるせえ!!テメエは黙つてろ!!」

低い唸りをあげ、上空を睥む。

そこには、翼の生えた空駆ける靴を装着した騎士風の男達が大挙して押し寄せてきた。

「なっ?!外れただと?!」

「例の“ノーネーム”もいるようだが、奴等の仕業か!」

「邪魔する様なら構わん、斬り捨てろ!」

「ふざけんな!!そのまま動くな!!!」

「っ?!」

帝の怒号が、ここにいる全員の四肢を硬直させる。

誰一人として、その場から動けずにいる中、十六夜が不機嫌そうに、尚且つ獯猛に笑つて、帝の隣へ移動する。

「まいったな、生まれて初めておまけに扱われたぜ。手を叩いて喜ばいいのか、怒りに任せて叩き潰せばいいのか、帝はどっちだと思ふ？」

「……俺としては、お前が動ける方がよっぽど驚きなんだがな」

霊格が落ちているとはいえ、相手が神仏相応の霊格を所持していない限りは、今の帝でも縛る事が出来る筈なのだ。

だが、十六夜は全く意を返す事無く、平然と動いている。

本当に、バケモノ並のギフト保持者だ、と帝は内心で毒づく。

「それで？……これが、あなたのギフトって訳か？」

「……かなり霊格は落ちてるがな。それでも、命令に従わせ・る位は出来る」

「へえ………つまり、帝のギフトってのはお嬢様とは似ている様で、全く別種のギフトって事か」

楽しんで笑う十六夜。

その様子に、帝は苦笑しつつ空に浮かぶ騎士風の男達へと言葉を投げる。

「ここから去れ。レティシアに関しては、今から『サウザンドアイズ』へ送り届けてやる」

「な、何を言うか!!名無し風情の分際で!!」

「……聞こえなかったのか?」

辛うじて動く舌で暴言を吐く男に、帝の視線が突き刺さる。

氷をも凌ぐ絶対零度の瞳に、誰かがヒツと短い悲鳴を上げた。

「レティシア、文句はないな?」

「み、帝様!!!」

「…いや、いいんだ黒ウサギ」

非難の様な声を上げる黒ウサギへ、レティシアがやんわりと制止を掛ける。

こうなる事は百も承知だったのだろう。



彼女は、少し寂しげに笑った。

「帝の言う通りだ。私は、他人に所有される身なのだから、これ以上ここに留まる訳には  
いかない」

「で、ですが……」

「聞き分けるよ、黒ウサギ。今回は、帝とレティシアが正論だ」

尚も喰らいつこうとする黒ウサギを、十六夜が呆れた声で諭す。

確かに、レティシアは今や別のコミュニティが所有している。

その彼女が主の命に背いて、ここへ着ている以上、彼女を庇う事は出来ない。  
辛そうに唇を咬み、俯く黒ウサギ。

その姿を帝は横目に、パシントンと尻尾を振る。

「そうだな……お前らは朝までそこにいろ。夜が明けたら、戻れ。」

ピクツと男達の四肢が痙攣する。

これで、彼らは夜明けまではここで立ち往生だろう。

フンツと鼻を鳴らす帝と、新しい玩具を見つけた子供の様に目を輝かせる十六夜。  
……ここだけの話だが、黒ウサギにはこのタツグが一番危険な気がした。

「おい、帝。お前としては、どうするつもりなんだ？」

「ん？……おいおい、それを俺に聞くのか？ そうだな……俺としては、コミュニケーションの敷地を穢された事に、かなり腹を立ててる。十六夜、お前は？」

「俺としては、一回くらい伝説に名高い『ペルセウス』つてのと、戦ってみたいな。だが、コミュニケーションとしては白夜叉と問題は起こしたくない……そうだな？」

「ああ。だが話を聞きに行く位は……してもいいよなあ？」

ニタリ、と帝が笑う。

それにつられ、ニコオリと十六夜も笑う。

ゾワゾワ、と毛を逆立てる黒ウサギ。

嫌な予感がヒシヒシと感じる。

その横にいるレティシアも、表情を引き攣らせて状況を見守っている。

「黒ウサギ、他の連中も呼んで来い」

「え、えっと……十六夜さん？帝様？何をなさるんでしょうかあ？黒ウサギめには、さっぱり分からないのですが？」

冷や汗を流し、引き攣った笑みで尋ねる。

二人はニツコリと笑い、声を揃えてこう言った。

「決まってるだろ？『サウザンドアイズ』ヘカチコミに行くぞ!!」

楽しげに笑う問題児二人に、黒ウサギはシクシクと涙を流した。



☆☆☆☆

夜も更け、夜空には星が加賀谷していた。

流石に屋敷に誰も残さないのはマズイ、という事でジン、カグヤ、耀の三人が残る事となり、現在は十六夜、帝、飛鳥、黒ウサギ……そして、事の発端であるレテイシアの五名が「サウザンドアイズ」二一〇五三八〇外門支店を目指す。

案の定、というべきか、「サウザンドアイズ」の門前に着いた一同を迎えたのは、無愛想な女性店員だった。

「お待ちしておりました。中でオーナーとルイオス様がお待ちです」

「黒ウサギ達に来る事は承知の上、ということですか？あれだけの無礼を働いておきながら、よくも」

「はい、ストップ」

怒った口調で捲し立てそうな黒ウサギを、帝が遮る。

何をする、と言わんばかりに憤慨しそうな黒ウサギへ、帝は溜息を零す。

「店員に当たつてどうすんだ。その怒りは、中にいる馬鹿へ怒鳴る為に残しとけ。悪いな、ちよつとウサギがお怒りなんだ。定例文は必要ないから、大至急案内してくれ」

「……では、こちらへ」

店員は一度だけ会釈すると、店の中へと消える。

それに従い、一同は中へと入った。

中庭を抜け、離れの家屋に向かう。

中で迎えたルイオスは、黒ウサギを見て盛大に歓声を上げた。

「うわお、ウサギじゃん！うわー実物初めて見た！噂には聞いていたけど、本当に東側にウサギがいるなんて思わなかった！つかミニスカにガーターソックスって随分エロいな！ねー君、うちのコミユニティに来いよ。三食首輪付きで毎晩可愛がるぜ？」

「あ〜………はいはい。三下は黙ってましようねえ。つか、俺は白夜叉と話に来たんだから、部外者が出てくるな」

「なっ………!!!?」

舐める様に黒ウサギを見るルイオスの視線を遮り、帝は平然と口にする。  
それに便乗する様に、飛鳥が黒ウサギの盾となる様に前へ出る。

「これはまた……分かりやすい外道ね。先に断っておくけど、この美脚は私達のものよ」  
「そうですそうです！黒ウサギの足は、って違えますよ飛鳥さん！」

突然の所有宣言に、慌ててツツコミを入れる黒ウサギ。

そんな二人を見ながら、十六夜と帝が呆れながらも溜息をつく。

「そうだけ、お嬢様。この美脚は既に俺のものだ」

「そうですそうです、この足はもう黙らっしやいッ!!」

「馬鹿いうな。この美脚を育てたのは俺だけ？所有権は俺にある」

「誰が育てたですか!!?誰が!!?」

「よかろう、ならば黒ウサギの足を言い値で」

「売・り・ま・せ・ん！あーもう、真面目なお話をしに来たのですから、いい加減にして下さい！黒ウサギも本気で怒りますよ!!」

「馬鹿だな。怒らせてんだよ」

スパアーン!!とハリセン一閃。

今日の黒ウサギは短気だった。

ククツと喉の奥で帝が笑うと、白夜叉へと視線を向ける。

「さて、と……白夜叉、そちらさんが迷子にしていたヴァンパイアを届けにきた」

「ん……ご苦労じゃったな。レテイシア、もうよいのか？」

「……ご迷惑をかけた」

深々と頭を下げるレテイシア。

これで、普通なら終了となるのだろうが、それで終わる程甘くはない。

「で、ここからは俺達コミュニティが襲われた話をしたいんだが……」

チラツと後ろへ目配せする。

それに気づいた黒ウサギは、シャキッと自慢のウサ耳を立てる。



「はい!!そうですとも!!ぜひとも白夜叉様に聞いてほしいお話があります!!」

意気込む黒ウサギは、事の顛末を話し出す。

「——以上が、私達に対する無礼を振るつた内容です。ご理解頂けたでしょうか?」  
「う、うむ。『ペルセウス』の所有物・ヴァンパイアが身勝手に『ノーネーム』の敷地に踏み込んで荒らした事。それらを捕獲」  
「いや、違うぜ。白夜叉」

彼女の声を遮る様に、帝が笑う。

「捕獲じゃねえよ。賊が盗んだモノを取りにきいたんだ。その賊は俺達がきっちり捕まえてある」

「……なんだと、貴様」

ルイオスの目に、怒りが灯る。

だが、帝はそれに取り合う事無く、その存在を無視して話を続ける。

「そのヴァンパイアと、俺達は昔馴染みだ。だから、彼女は『ペルセウス』から盗まれ、賊の隙をつけて逃げたはいいが、帰り方が分からなくなり、自暴自棄に暴れた場所が偶々俺達のコミュニティだった……そうだろ？ レティシア」

「……その通りだ」

帝が何をしようとしているのか、それを察したレティシアが頷く。

白夜叉も何となく、彼が言わんとしている事を分かっているのだろう。

パンツと扇を広げ、その影でニタリと笑う。

「成程。つまり、おんしはこう言いたいんじゃない？ 賊によって、レティシアを連れ去られた。そして、おんしらはそれを救って、ここへ連れてきた、と」

「ああ。因みに、その賊は今コミュニティにふんじばってあるぜ。処分は、東の『フロアマスター』階級支配者』に任せる」

「ちよつと待て!!!」

あまりにも自分を置いて、話が進む為、ルイオスが怒鳴る様に叫ぶ。

「それは、こいつ等が言ってる事だ。それに、この吸血鬼が逃げ出したんじゃないのか？  
それか、盗んだんだ!!こいつ等が」

「おやおやあ？言い掛かりも甚だしいな。その証拠がどこにある？」

「口裏を合わせているんだ!!その可能性は高いだろ!!？」

「そうか。それはあり得るな」

「ちよっ?!?!帝様!!！」

平然と納得する帝へ、黒ウサギが非難の声を上げた。

飛鳥も視線が鋭くなり、十六夜は成行きを見守る様に笑う。

「なら、言わせてもらおうが……名無し風情に商品を盗まれるなんて、どんだけペルセウ  
ス〃は地に落ちたんだ？」

「なっ……それは、白夜叉がお前らに手を」

「その証拠を、今この場に出せるのか？」

ゆつたりと笑みを浮かべる口元。

ルイオスが持つのは状況証拠であって、それをしたという決定的証拠ではない。それを知っているが故の切り口なのだろう。

チツとルイオスが舌打ちする。

「まあ、いい。俺はさっさと帰って、この吸血鬼を外に打ち払う手続きでもするかな」  
「箱庭の中でしか太陽の下を歩けないレティシア様を、箱庭の外へ!!? その意味が分かっているのですか!!?」

「こっちの商売に、口出す権利がそっちにあるわけ? 愛想のない女って嫌いなんだよね、僕。それに、身体も殆ど餓鬼だしねえ———— けどほら、見た目は可愛いからそういうった愛好家には堪らないだろ? 気の強いおんなを裸体のまま鎖で繋いで組み伏せ啼かす、つてのが好きな奴もいるし? 太陽の光っている天然の牢獄の下、永遠に玩具にされる美女つてのもエロくない?」

ルイオスは挑発半分で商談相手の人物像を口にする。

案の定、黒ウサギはウサ耳を逆立てて叫んだ。

「あ、貴方という人は……！」

「……黒ウサギ、話が進まないだろうが。少し深呼吸して落ち着け」

怒りは勢いを増長させる反面、冷静さを失う欠点がある。

怒りに燃える黒ウサギを軽く宥め、帝はレティシアを見る。

彼女は、自分の運命に薄々感づいてはいたのだろうが、流石にこうも露骨に言われてしまえば、どうする事も出来ずにただ暗い表情のまま俯くしかない様だ。

だが、その瞳は饒舌に悲しみを映す。

はあ……と帝は長く息を吐く。

「で？その手札<sup>カード</sup>を出してきたって事は、どう交渉しようとしてんだ？」

「……へえ、よく頭の回る狗だな」

「ネコ目イヌ科イヌ属に属した哺乳類の狼だ。お坊ちやまつてのは、随分と目が腐ってるんだな。俺もこうはなりたくない」

「……人を舐めるのも、いい加減にしるよ」

激昂した様に立ち上がるルイオス。

だが、帝は全く取り合う事なく、視線を白夜叉へと戻す。

「今回の件、謝礼を求めるともりはない」

「……おんし、この状況で私に話を振るのか？」

帝の態度に、白夜叉が苦笑する。

とはいえ、彼女も帝の性格は百も承知なので、特にそれ以上は言わなかった。

否、言つては面白くない。

「それで？おんしは……いや、*グノーネーム*は何を望んでおる？」

「そんなもん、決まってるだろ？今、この場でレティシアを侮辱したこのボンボンの謝罪だ」

「ふざけんな!!そもそも、煽ってきたのは、てめえだろうが!!」

「レティシアの方を向いて、『ごめんなさい。出来心だったんです。許して下さい。踏んで下さい』と100回言えたら、俺達は黙って退散してやるよ」

平然と言う帝へ、ルイオスは怒りが頂点を振り切ったのだろう。

パクパクと酸欠金魚の様に、口を開閉している。

十六夜と飛鳥は必死に噴出さない様、俯いて口を押える。

ここで笑つては、色々と台無しだ。

「それが、嫌なら……そうだな。『決闘』でも申し込もうか」

「こ、このクソ犬……!!!どこまで、僕を侮辱すれば気が済む!!!」

「侮辱？冗談はよせ。俺は正當な事しか言つてないぜ？それに、この決闘は俺達よりも『ペルセウス』側の取り分が多い様に感じるけどな」

「……なに？」

怪訝そうにルイオスが表情を歪ませる。

「『ノーネーム』でゲームに参加できるのは5人。更に戦力にもならない餓鬼が1人。だというのに、こちらには『箱庭の貴族』と言われる貴種のウサギに、『箱庭の歌姫』である月宮カグヤがいる。チップとして、これ以上の価値はないと思うがな」

帝の何気なく言われた事に、ルイオスは思考する。

確かに、彼らは名も旗印も奪われて最底辺。

だが、そこにいるのはこの黒ウサギと“歌姫”だ。

こちらの戦力を考えてみても、簡単に蹴散らして、双方を自分の物に出来るだろう。

今回の件で、“サウザンドアイズ”にはもういられない。

だが、貴種と“歌姫”が手に入れば、それだけでもコミユニティに箔が付き、稼ぎは良くなる。

ルイオスに厭らしい笑みが浮かぶ。

だが、この話には黙っていられないのか、飛鳥が力一杯畳を叩き、怒鳴り声を上げた。

「勝手な事言わないでくれる!!?それを、黒ウサギとカグヤが納得するとは、思えないわ!!  
もう行きましょう、黒ウサギ!こんな奴等の話を聞く義理は無いわ!」

「ま、待つて下さい飛鳥さん!」

黒ウサギの手を握って、出ようとする飛鳥。

だが、黒ウサギは座敷を出ない。

黒ウサギの瞳は困惑している。

それに畳みかける様に、帝が言う。



「『月の兎』であるお前が、仲間を見捨てるなんて行動は出来ないよな？ お前からウサギにとつて、自己犠牲つてのは本能に近いものだ」

「……………」

「くく……………お前さ、それでいい訳？ どう聞いても、僕の総取りだよな？ この話は」

「さあ？」

「あ、そ。ウサギは義理とか人情とか、そういうのが好きなんだろう？ 安っぽい命を安っぽい自己犠牲ヨロシクで、帝釈天に売り込んだんだろ!? 箱庭に招かれた理由が献身なら、種の本能に従って、安っぽい喧嘩を安く買っちゃまうのが筋だよな!」

「つ……………黙りな<rb>」

</rb>><rp>>(</rp>><rt>>.</rt>><rp>>(</rp>></rp>></ru  
by>」

「飛鳥!!!」

ピタッと飛鳥の声が止まる。

普段よりも鋭い怒声に、怯んでしまったのだ。

帝は、小さく溜息を零すとルイオスを見る。

「一週間……その間にコイツ等全員説得する。どうだ？」

「オツケーオツケー。それなら、取引ギリギリ日程だ」

にこやかに笑うルイオス。

その返事に気をよくしたのか、ルイオスはレテイシアを乱暴に掴むと、そのまま帰っていった。

その姿に、ククツと帝が笑う。

「ちよつと帝君!!黒ウサギを材料にするなんて、酷過ぎるんじゃないかって!!?」

憤慨する飛鳥は、黒ウサギの手を再度掴むと、足早に座敷から出ていく。

残ったのは、白夜叉と十六夜、そして帝のみ。

「お嬢様が怒るのも、無理ないと思うぜ?」

「俺も、口から反吐が出ない様に取り繕うので、精一杯だった。正直、次の交渉テーブルには黒ウサギに頼むとする」

うげえ、と呻く帝。

その様子に、白夜叉は溜息を零した。

「おんし、本当に道化を演じるのが上手いな」

「あの程度のゲス男、躍らせる位楽だって。と……一週間しか時間がないんだって。十六夜、ちよつと手伝ってくれるか？」

「ああ？それは、面白いことか？」

「面白いかどうかは、お前次第だと思うが……あのゲス男をぶつ殺す準備にちよいと肩慣らしをしないか、って言いたいんだ」

「どうだ？」と癡猛に笑う帝に、十六夜もニヤリと笑う。

「……ルイオスの阿呆め。おんし、とんでもない奴等を敵に回しおつた事を後悔しろよ？」

笑い合う二人に、白夜叉は人知れず溜息を漏らし——彼女自身も楽しげに笑っていた。

.

## 八章 雨模様なお茶会

あれから、三日が立った。

黒ウサギはジンに謹慎処分を受けていた。

飛鳥から話を聞いた彼が、黒ウサギが単身で「ペルセウス」と交渉しない為に、だ。自室の窓に滴る雫を指でなぞりながら、雨の降る箱庭の都市を見る。

(ああ、定期降雨の時期でしたっけ。南側と違って東側は天幕の開放がないですものね)  
人工降雨は一定のスパンで行われる。

その時だけ箱庭の天幕は可視状態となり、光学屈折で作りに出した雨雲を視覚に錯覚させる。

つまり、有りもしない雨雲を「ある」と錯覚させた上で雨を降らせているのだ。

……ぶっちゃけた話、かなり無駄な高等技術である。

だが、どうやら神仏というのは、俗物らしく、こういった細やかな無駄さが好きだよ

うだ。

(そういうえば、レティシア様は雨が苦手でしたっけ。血の臭いが湿気と共に立ち籠めるのは宜しくない、とか何とか)

吸血鬼のくせに、何を言っているのやら。

思い出して、黒ウサギは苦笑した。

と、コンコンと控えめなノックが響く。

「はい。鍵もかかっていますし、中に誰もいませんよー」

《それを言ってしまった時点で、中に人がいますよね？黒ウサギ》

「か、カグヤ様ですか!？」

扉越しに聞こえた声は、確かに彼女のモノ。

慌てて扉へと近寄り、鍵を開ける。

開かれた扉の向こうにいたのは、カグヤ……だけではなかった。

その後ろに、耀と飛鳥の姿もある。

「やや……飛鳥さんと耀さんも。黒ウサギに何か御用ですか？」

「その……カグヤに誘われたのよ」

「私も」

《はい。今日は雨ですので、室内でお茶会でもと思ひまして》

持つてきました、と見せる盆にはクッキーなどの洋菓子の他にも、大福などの和菓子も乗っていた。

どうやら、それをネタに話をしようという参段らしい。

黒ウサギは淡く苦笑すると、三人を室内へと招く。

自前の湯沸かし器でお茶を入れようとすると、やんわりとカグヤに制された。

《そういうのは、私のお仕事です。黒ウサギは座つてて下さいな》

「で、ですが、カグヤ様……」

《黒ウサギ。使用人がする仕事を、貴女がしてしまつては、私の立つ瀬がないではないですか》

だから、待つてなさいと言う彼女に、黒ウサギは苦笑して、席に座る。

楽しげな様子でお茶の支度をする彼女は、本当にそういった仕事が好きなのだろう。暫くすると、美しい桜柄の磁器に琥珀色のお茶が注がれた。

《ジヨルジです。御砂糖を入れなくても甘味のある紅茶ですので、お茶会にはぴつたりかと思えます》

どうぞ、と差し出されたそれは、ギリ貧で生活しているコミュニティには上等なモノ。

それを眺め、黒ウサギが問う。

「カグヤ様、これは……」

《いらぬモノを処分しましたら、思った以上に良い金額になりました……少しだけ奮発してしまいました》

ふふ、と楽しげに笑うカグヤへ、黒ウサギは蒼白になる。

どうやら、彼女は自分の私物を売ったらしい。



黒ウサギが何か言う前に、カグヤは首を横に振った。

《売ったのは、私自身が必要でないと買ったモノだけです。思い出の品や着物は一切売っていませんよ。それは、きつと帝も同じだと思えます》

「……カグヤ様」

《子供達が心配してましたよ。『黒ウサギのお姉ちゃん、飛鳥様方は喧嘩したのですか?』と》

カグヤの言葉に、三人は何とも言えない複雑な表情に顔を歪ませる。

“サウザンドアイズ”での事を話した結果、案の定と言うべきかジンも耀も反対した。

ジンはコミュニティのリーダーとして、耀は新たな友人として引き止めたのだ。誰に悪意があつた訳ではない。

ただ、お互いにカツとなつて、言い過ぎてしまったのだ。

そこに飛鳥も参戦して大事になり、結局カグヤの仲介もあつて、全員が頭を冷やすべきだという結論にいたり、全員揃つて自室謹慎を言い渡された。

こうなる原因を作つた帝と、あの時傍観者を決め込んでいた十六夜は、二人揃つてあ

の日以来帰ってこない。

もしかしたら「ノーネーム」に愛想をつかしたのかも、と誰もが思った。

そんな剣呑な空気を、子供達は察したのだろう。

だが、どうすればいいのか分からず、一番冷静だったカグヤへと相談を持ちかけたのだ。

《クッキーは子供達から、三人へとの事です。仲良くしてほしい、と必死に考えて泣きそうな顔で作っていたんですよ?》

少しだけ責める様な響きの声に、三人は互いに俯きあう。

「…そんなの、卑怯だわ。あの子達を悲しませるつもりなんて、私達にはないんだもの」  
「でも、きつかけをくれたんだね。それなら、ちゃんと仲直りしないと」

フン、と顔を背ける飛鳥と、決意を新たにする耀。

それを見た黒ウサギも、困った様に笑った。

「そうですね……黒ウサギ達がしつかりしないと、コミュニティの皆が困りますよね」  
《黒ウサギ、貴女がコミュニティから抜けるなんて、許されませんよ？このコミュニティの中心は、一人で必死に支えてくれていた貴女なんですよ？》  
「……はい、カグヤ様」

それはジンにも言われた事だ。

今、黒ウサギが脱退する様な真似をすれば、このコミュニティの存続に関わるだろう。勿論、彼女に頼り切りではいけない、とジンや年長組が頑張り出している。

それでも、このコミュニティの士気を保っている原因は、いつだって明るい黒ウサギの存在あつてのモノ。

それに、十六夜達を招いたのは黒ウサギなのだ。

「……飛鳥から聞いた話だけど。黒ウサギの言う『月の兎』ってあの逸話の？」  
「YES。箱庭の世界のウサギ達は総じて同一の起源をもちます。それが『月の兎』でいます」

——『月の兎』。

傷ついた老人を救う為、炎の中に飛び込んで自らを食べる様に捧げた、仏話の一つ。仏門における自殺は本来、大罪の一つに上げられるが、その兎の高位は自己犠牲の上になり立つ慈悲の行為として認められ、帝釈天に召され「月の兎」と成る。

箱庭の兎はその「月の兎」から派生した末裔なのだ。

「我々「月の兎」は箱庭の中枢から力を引き出している為、力を行使した際に髪やウサ耳が影響を受けて色が変わるのですよ。個体差がありますけれどね」

「そうなんだ。黒ウサギも戦えたりするの?」

「はいな。一部のウサギは創始者の眷属の名の下に、インドラの武器の使用権限が御座います。そんじよそこらの相手には負けませんとも!」

えっへん、と胸を張ってウサ耳を伸ばす。

「けど、ギフトゲームの出場制限がある、と」

「……………はいな」

一転して萎れるウサ耳。

喜怒哀樂が激しいウサ耳だと、耀達は感心した。

その時、ふと飛鳥の頭に疑問が浮かぶ。

「ねえ。それなら、カグヤさんも黒ウサギみたいにな、そういつた逸話があるのかしら？」  
《はい。私と帝は『竹取物語』に精通する一族の出です》

ふわりと微笑み、カグヤが肯定する。

『竹取物語』といえば、かなり有名な日本語の一つだ。

その起原は、日本史上でもっとも古い物語とされ、その起原や執筆者については数々の憶測が飛び交っている。

その物語に精通する、という事は彼女達の名前からよく分かった。

「だから、『カグヤ』で『帝』なの？」

《そう、だと聞いています。一族の次期当主……分かりますと言いますと、コミユニティの次期リーダーは、全員『カグヤ』と『帝』の名を継承するんだそうです》

「……？ 貴女の一族、なのよね？ どうして、そんなに曖昧なのかしら？」

《……………》

「え〜〜……あの、ですね？飛鳥さん。カグヤ様には記憶がないので御座います」

飛鳥の質問に、言葉を探すカグヤに変わり、黒ウサギが説明する。

カグヤはこのコミュニティに拾われる前の記憶が一切ない事。

彼女達の一族はカグヤと帝を残して、暫く前に魔王によって滅ぼされた事。

《……帝の話では、私はその情景を見て精神的に病み、記憶と色を失ったんだそうです》

「……色？」

「はいな。帝様からの受け売りですが、カグヤ様は幼い頃より美しい黒髪だったんだそうです。ですが、あまりのショックに色褪せてしまったんだとか……」

申し訳なさそうに呟く黒ウサギに、カグヤはやんわりと苦笑する。

流石に、こんな話に発展するとは思ってもみなかったのだろう。

飛鳥と耀が慌ててフオローする。

「ご、ごめん。そんな事だとは思わなくて……」

「私もよ。辛い事を言わせて、ごめんなさいね」

《いいえ。私はそれを受け入れていますし、帝が傍にいてくれますから》

記憶がない自分に、いつだって連れ添ってくれたのは兄だった。

それを心強くも思い、同時に申し訳なくも思っている。

と、飛鳥が不機嫌そうに顔を顰めた。

「私、今回の件で帝君には幻滅したわ。まさか、黒ウサギやカグヤさんを出しに使うなんて……」

《……違いますよ、飛鳥様》

怒った様に眉を吊り上げる彼女に、カグヤが笑う。

《帝は、絶対に私や黒ウサギをゲームの賞品にはしません》

「でも……」

《飛鳥様の話を聞く限りでは、レティシアの出荷まで時間がなかったと思います。兄は相手の気を引く事が得策だと思い、私と黒ウサギの名を出した。『月の兎』の話をしたのは、相手がより食いつきやすくする為、だと思えます》

「……そうかしら？」

《飛鳥様。これだけは、断言できます。帝は……兄は勝てる。と確信できなければ、仲間を賭ける様な戯言で、気を引いたりしません。そして、引き留める理由があつたんだと思います。レティシアは、相手コミュニケーションから逃走したそうですね。それなら、相手は早めに売買を成立させ、出荷させる様にすると思います。だから、私や黒ウサギを使ってギリギリまで出荷を遅らせようと思つたのではないでしょうか？》

口も悪ければ、態度も悪い兄ではあるが、カグヤにとつて唯一無二の肉親であり、誰よりも頼りにしている存在。

そして、彼は仲間を犠牲にする事を誰よりも嫌うのだ。

その帝が、自分達の名を出したという事は、それだけレティシアの身が危ないと思つたのだろう。

飛鳥の話聞く限り、ルイオスは好色家。

交渉のテーブルを準備するには、まず女で気を引く事が得策だと思つたのだろう。

《とはいえ、多分話が終わった後の帝は、口から反吐が出そうな勢いで、文句を永遠と言つてそうですが》



実際、本人も反吐が出ると散々呟いていたのだから、双子とは不思議なモノだ。とはいえ、これで帝がレティシアを諦めていない事が露見した。それによって、カグヤが楽しげに微笑む。

《だから、私達は考えましょう？私や黒ウサギが賞品とならずに、レティシアを取り戻す方法を》

それが大事ではありませんか？と首を傾げて問う彼女に、三人は驚いた様に顔を見合わせると、笑って頷く。

「そうだよね。やつぱり、ギフトゲームに沢山出て、手当たり次第にギフトを手に入れていくしかないと思うな」

「ダメよ。時間は残り少ないのももの。連中が是が非でも欲しい物を用意する為に、まずは探りを入れるべきだわ。黒ウサギは何か心当たりはない？」

「そ、そうですよね……」

相手はどうしようもない好色家。

女性以外を賭けの対象とする物で、相手がどうしても欲しいと思う物。

黒ウサギは顎に手を当てて思考する。

宝物庫には数々の貴重なギフトが眠っている。

宝剣、聖槍、魔弓など、名立たる武器が揃ってはいるが、どれも使い手を選ぶものばかり。

ギリシャ神話に縁のあるものもあるが、ルイオスが嘗ての同士の為に収集活動をする人間には思えない。

ルイオスと話してみた感じでも、望んで交渉に当たるとは思えなかった。

「……ううん、難しいですね。『ペルセウス』は組織内の力が極端にリーダーに偏ったコミュニティです。『ペルセウス』を動かすというのはルイオスさんを動かすという事に他なりません。彼は道楽者だと白夜叉様が言っていましたし、彼の趣向が分からない事にはどうにも」

《……そういえば》

「どうかしたの？カグヤ」

難しい顔で考えていたカグヤが、何かを思い出した様に呟く。  
耀が首を傾げて聞いた。

《黒ウサギ、あのギフトゲームは未だに健在でしたか？》

「あの、ギフトゲーム、でございますか？それは……む？」

カグヤの問いに、何か思い当たったのか、ピクッとウサ耳が揺れる。

「もしかして、伝説を再現したギフトゲームの事ですか？」

「それって？」

《ペルセウスのゴーゴン退治を御存じでしょうか？力のあるコミュニティは自分達の伝説を誇示する為に、伝説を再現したギフトゲームを用意する事があるんです。彼らは特定の条件を満たしたプレイヤーにのみ、そのギフトゲームへの挑戦を許すのです。自らの持つ伝説と——旗印を賭けて》

飛鳥は合点がいった様に息を呑んだ。

「旗印……！そうだわ、それを奪えば交渉材料になるかも知れない！」

「はい。ですが、伝説に挑むのですから相応の資格が問われます。提示された二つのギフトゲームを乗り越え、その証を示さねばなりません。いずれも厳しい試練です。クリアにどれだけの年月がかかるか……残念ではございますが、黒ウサギ達にそれだけの時間は——」

「よし！俺が一番乗りだったな！」

「くっそ……まさか、俺が霊長類に負けるとは」

「イヌ科の動物になったからといっても、俺にかけてっこで勝てると思ってる方が、俺としてはワクワクしたけどな」

何やら、外が騒がしい。

飛鳥、耀、黒ウサギ、そしてカグヤは話を中断し、互いに顔を見合わせる。

声は扉の向こう側から聞こえてきた。

開けるべきか、と黒ウサギが席を立つ。

その瞬間、

「邪魔するぞ」

ドガアン！と派手な音を立てて、ドアが見事に粉々となった。  
黒ウサギは驚いて声を上げる。

「い、十六夜さん！帝様も！今まで何処に、って破壊せずに入れないので御座いますか、貴方達は!？」

最早諦めるべきだとは思っていたが、それでも人様の部屋の扉を木端微塵に破壊する来訪者等、考えた事もない。

いや、寧ろ考えたくもない。

しかし、十六夜も帝も悪びれる事もなく肩を竦ませた。

「だって、鍵かかってたし」

「あ、なるほど！って、そんな訳ないでしょうが、このお馬鹿様!!」

「手で開けられなかったんだ。俺、狼だし」

「そ、そうでしたね！なら、普段からカグヤ様のお部屋へ入る際に、ノックして器用に前

足でドアノブ回しているでしょ、この苛めっ子様!!!」

力一杯所持していたハリセンで、二人を叩く。

十六夜はヤハハと笑いながら、脇に抱えていた大風呂敷を机へドガツと置く。それに従い、帝も口に銜えていた大風呂敷を置く。

「その大風呂敷、何が入ってるの?」

「ゲームの戦利品。見るか?」

ニツと十六夜が笑うと、二つの風呂敷を開ける。

すると、四人の表情がみるみる内に変わっていく。

あの、大人しく表情の変化の乏しい耀ですら、今は目を見開いて瞳を丸くしている。

「……………これ、どうしたの?」

「だから、戦利品だって言ってるだろ」

「無駄に遠いから、ゲーム以上に移動時間がかかったよな」

「ああ、違くない」

ヤハハと笑う十六夜と、ハハハと笑う帝。

あまりの手際に、飛鳥が小さく嘖き出す。

笑いを堪える様に口元を押さえ、半笑いのまま二人に話しかける。

「もしかして……貴方達、二人でこれを取りに行っていたの？」

「ああ。時間ギリギリまで集めてた」

「ま、二人で半々だから、時間は結構短縮できたんだが……場所が遠い事遠い事」

「ふふ、成程」

本当に、この二人は予想外の事を平然とやってくれる。

飛鳥はクスクスと笑いながら、カグヤの方を見た。

「確かに……貴女の言う通りだったわね、カグヤさん？」

《粗暴な人ですが、私の大事な兄ですので》

カグヤが少しだけ照れた様に、だが誇らしげな笑顔で告げた。

その兄はと言えば、十六夜と共に新たな玩具を見つけた子供の様に、輝いている。ただ一人、全く反応を示さないのは黒ウサギ。

どうやら、この光景が信じられない様だ。

ポカン、とした彼女へ、十六夜と帝が自信満々に笑う。

「これで、手札は全部揃ってるだろ？」

「こんだけあれば、オマエが『ペルセウス』とのゲームで賞品にされる心配はない。勿論、カグヤもだ。後はオマエ次第だ、黒ウサギ」

「まさか……あの短時間で、本当に？」

「ああ。ま、半分は帝の戦果だな。つうか、狼の分際で勝てるなんて、俺もビックリしたぜ」

「ふふん！舐めるなよ、小僧。お前とは、このコミュニティを支えるプレイヤーだった頃の年期が違うんだよ。分かったら、敬え」

「あー、あー、はいはい。御見それしてやってもいいぜ、狼」

和気藹々と話す二人。

流石に、男の子同士という事もあり、溶け込みも早い様だ。



だが、このゲームは口にする程楽なゲームではない。

黒ウサギは、大風呂敷の中身を大事そうに撫でると、瞳を潤ませながら笑う。

「ありがとうございます……………ごさいます。これで、胸を張って『ペルセウス』に戦いを挑めます」  
「礼を言われる事じゃねえさ。寧ろ、面白いのはここからだからな。……………所で、帝」  
「あゝ、ハイハイ。分かっている。今回はお前の勝ちだって。約束はきちんと守っている」

ニヤリと笑う十六夜へ、帝が拗ねた様に尻尾をブンブン振る。

ふざけ合っているが、これを誰の為でもないと言って笑う。

だが、誰に言われるまでもなく、コミュニケーションの為に戦ってくれた事に変わりない。

それだけで、黒ウサギの胸がいつぱいになる。

（コミュニケーションに来てくれたのが皆さんで……………黒ウサギは本当によかったと思つてます。帝様……………カグヤ様。お二人がまだこのコミュニケーションに居てくれる事にも、黒ウサギは感謝を忘れた事ありません）

溢れそうになる涙。

それを黒ウサギは一生懸命拭く。

だが、視界の歪みは全く取れない。

泣き出した黒ウサギへカグヤはハンカチを差出、優しくその背を撫でる。  
そして、

《……さて、帝と十六夜様?》

般若が降臨した。

《この壊した扉……一体どうするおつもりなのですか?》

ふわふわと笑ってはいるが、その目は絶対零度。

一瞬にして、部屋の体感温度がマイナスへと突入する。

流石に、羽目を外し過ぎたと帝は後悔した。

「あく……カグヤ? そのお……戦利品に免じて、今日は許してほしいなあ、なんて」

《兄さん？》

「俺が悪かった。扉はきっちり直すから許してくれ」

兄、陥落。

狼が土下座するなんて、滅多に見れない光景を見つつ、飛鳥と耀は思った。

カグヤだけは、怒らせるべきではない、と。

その後、十六夜と帝は正座のまま、六時間にも及ぶカグヤのお説教を滔々と聞かされた事は言うまでもない。

## 九章 星を討て

——二六七四五外門・“ペルセウス”本拠。

白亜の宮殿の門を叩いた“ノーネーム”一同を迎え、謁見の間で両者は向かい合う。交渉の席に着いたルイオスは終始にやけた顔で、黒ウサギやカグヤへ熱い視線を送っていたが、それを無視して黒ウサギは切り出す。

「我々“ノーネーム”は、“ペルセウス”に決闘を申し込めます」

「……オツケーオツケー。それで？チツプは“月の兎”と“歌姫”のどっちになったんだ？」

「いいえ、私でもカグヤ様でも御座いません」

にこやかに微笑み、黒ウサギが持っていた大風呂敷を開いて見せる。

そこにあつたのは、“ゴーゴンの首”の印がある紅と蒼の二つの宝玉が光り輝いている。

それを見て、傍に控えていた“ペルセウス”の側近達は眼をひん剥いて叫び声を上げ

る。

「ッ、これは?!」

「“ペルセウス”への挑戦権を示すギフト……!?まさか名無し風情が、クラーク海魔とグラリアイを打倒したというのか!」

困惑する“ペルセウス”一同。

本来なら、挑戦権を得たコミニティが出た場合、本拠に通達が行くのだが、気が付いていなかったらしい。

それもそうだろう。

ルイオスは、ここ数日の業務を全てサボっていたのだ。

その為、彼の部屋には書類が山積みになっている。

「ああ、あの大ダコとババアか。そこそこ面白くはあったけど、あれじゃヘビの方がマシだ」

「おいおい、十六夜。あれはタコじゃなくて、イカだぜ? クラークンって言うくらいだからな。でも、準備運動程度にしかならなかったのは、違くないな」

首を竦ませる十六夜と、ククツと馬鹿にした様に笑う帝。

この宝玉は、ペルセウスの伝説に出てくる怪物達をギフトゲームで打倒する事によって得られるギフトだ。

このゲームは、力のない最下層のコミュニティにのみ常時開放されている試練で、ペルセウスの武具のレプリカを与えるというもの。

様式も整った、立派なギフトゲームである。

“ペルセウス”への挑戦権を与えているのは、ペルセウスの伝説を描きつつ、下層のコミュニティの向上心を育てる為のモノだったが、ルイオスはそんな立派な志は残っていない。

ルイオスは宝玉を見詰めて、盛大に舌打ちした。

（ちっ。下層のコミュニティ相手なら、楽に戦えると思つて放置していたのに……！）

二代目以降から設置されたこの制度。

無くそうと思つていた矢先にこの事態だ。

ルイオスの不快感は絶頂に達していた。

「ハッ………いいさ、相手してやるよ。元々このゲームは思い上がったコミュニティに、身の程を知らせてやる為のモノ。二度と逆らう気が無くなるぐらい徹底的に………徹底的に潰してやる」

華美な外套を翻して憤るルイオス。

それを睨み、黒ウサギは宣戦布告する。

「我々のコミュニティを踏みにじった数々の無礼。最早言葉は不要でしょう。『ノーネーム』と『ペルセウス』。ギフトゲームにて決着を付けさせていただきます」





☆☆☆☆

『ギフトゲーム名 “FAIRYTALE in PERSEUS”』

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

月宮 カグヤ

月影 帝

・ “ノーネーム” ゲームマスター ジンIIラツセル

・ “ペルセウス” ゲームマスター ルイオスIIペルセウス

・ クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒

・ 敗北条件 プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・舞台詳細・ルール

\*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

\*ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

\*プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけない。

\*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

\*失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行する事は出来る。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

『ペルセウス』印』

ギアスロール

“契約書類”に承諾した直後、七人の視界は間を置かず光へと吞まれた。

次元の歪みは七人を門前へと追いやり、ギフトゲームの入口へと誘う。

門前に立った十六夜達は、辺りを見渡す。

白亜の宮殿の周辺は、箱庭から切り離され、道の空域を浮かぶ宮殿に変貌していた。

「姿を見られれば失格、ねえ……つまり、あのボンボンを暗殺しろって意味か」

白亜の宮殿を見上げ、帝が不敵に笑う。

今にも突っ込んでいきそうな彼に、カグヤは小さく息を吐く。

《それなら、あのルイオスという人は、伝説に乗っ取って睡眠中って事になりますか……  
そんな筈はないと思いますよ?》

「YES。そのルイオスは最奥で待ち構えている筈です。それに、先ずは宮殿の攻略が先でございます。伝説のペルセウスと違い、黒ウサギ達はハデスのギフトを持っておりません。不可視のギフトを持たない黒ウサギ達には綿密な作戦が必要です」

黒ウサギが人差し指を立てて説明する。

今回のギフトゲームは、ギリシャ神話に出てくる、ペルセウスの伝説を一部做つたものだ。

宮殿内の最奥まで「主催者」側に気づかれず到達せねば、戦うまでもなく失格となる。

《つまり、私達はルイオスを打倒する為の戦力とジンを、いかに上手く見つからせずに運ぶか、という事でしようか?》

「そうね。なら、大きく分けて、三つの役割分担が必要になるわ」

飛鳥の隣で、耀が頷く。

本来ならこのギフトゲームは百人、少なくとも十人単位でゲームに挑み、その一握りだけがゲームマスターに辿り着けるといふもの。

そんなゲームを、彼らは六人で挑まなければならない。

役割分担は必須だった。

「うん。まず、ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。次に索敵、見えない敵を感知して撃退する役割。最後に、失格覚悟で囷と露払いをする役割」

「春日部は鼻が利く。耳も眼もいい。不可視の敵は任せるぜ。それから、カグヤ。お前はジンと一緒にいろ。回復役は戦力の生命線だからな」

十六夜の提案に黒ウサギが続く。

「黒ウサギは審判としてしかゲームに参加する事が出来ません。ですから、ゲームマスターを倒す役割は十六夜さんと帝様にお願ひします」

「いや、あの程度の相手なら十六夜一人で十分だろ。と、というか俺はコイツとの勝負に負けたんで、ゲームマスターに挑む権利がない」

不機嫌そうに呟く帝に続いて、飛鳥もムツとした。

「あら、じゃあ私は囿と露払い役なのかしら？」

「らしいぜ。ま、俺と一緒に派手に一階部分の破壊と参りましょうかね」

不満そうな飛鳥へ、帝がケタケタと楽しげに笑う。

とはいえ、この中で一番脆いのは飛鳥だ。

彼女のギフトでは、相手を倒す事は出来ないし、何より不特定多数を相手にする方が、誰よりもその効力をフルに使う事が出来るだろう。

それを、飛鳥自身も理解している。

だが、理解していてもやはり不満がない訳ではないのだ。  
拗ねたままの二人へ、十六夜がからかう。

「悪いなお嬢様、帝。俺も譲つてやりたいのは山々だけど、勝負は勝たなきや意味がない。あの野郎の相手はどう考えても俺が適してる」

「うるせえ。かけっこで勝つた位で偉そうに」

《もう、帝つてば》

「分かつてる、分かつてる。今の俺じゃ、ルイオスの首根つこを噛み千切る事は困難だからな。きっちり仕留めて来いよ？」

「……私もいいわ。今回は譲つてあげる。ただし、負けたら承知しないから」

飄々と肩を竦める十六夜。

普段と変わらない彼らの姿に、カグヤは淡く苦笑した。

そんな中、黒ウサギはやや神妙な顔で不安を口にする。

「残念ですが、必ず勝てるとは限りません。油断しているうちに倒さねば、非常に厳しい

戦いになると思います」

全員の目が一齐に黒ウサギに集中する。

飛鳥がやや緊張した面持ちで問う。

「……………あの外道、それ程までに強いのか？」

「いや、あのボンボンは大したことない。多分、耀でも肉弾戦に持っていければ、楽に勝てる程度ってところだろ。だが、彼奴を相手取るのに最も警戒すべきはギフトだ。黒ウサギが言いたいのは——」

「隷属させた元魔王様のギフト、だろ？」

十六夜の補足に、全員が目丸くする。

しかし、素知らぬ顔で十六夜は構わず続ける。

「もしペルセウスの神話通りなら、ゴーゴンの生首がこの世界にある筈がない。あれは戦神に献上されている筈だからな。それにも拘わらず、奴は石化のギフトを使っている。——星座として招かれたのが、箱庭の“ペルセウス”。ならさしずめ、奴の首に

ぶら下がっているのは、アルゴルの悪魔ってところか？」

「……へえ。ただ力を振り回す事に酔ってるだけかと思えば、意外に頭の回転が速いみたいだな」

分からずに首を傾げる飛鳥達とは違い、帝は愉しげに笑う。

どうにも、この男は見どころがあり過ぎる。

《帝、アルゴルの悪魔とは？》

「ん？……ああ。ペルセウス座にある恒星、アルゴル。丁度、ペルセウスがメドゥーサの首を持っている構図の辺りにある星だ。この星はアラビアでは悪魔と言われていてな。これは推測だが、あの星はメドゥーサの首にあるが故に、メドゥーサと同等のギフトがある、と考えられる。だろ？」

「まあな。この前星を見上げた時に推測して、レイオスを見た時にほぼ確信した。とはいえ、機材は白夜叉が貸してくれたし、難なく調べる事が出来たぜ」

フンと自慢げに笑う。

黒ウサギは驚愕したまま、固まっていた。



彼は、この短時間でそれだけの考えに至ったのだ。

元より、予備知識のある帝とは違い、である。

黒ウサギは含み笑いを滲ませ、十六夜の顔を覗き込んだ。

「もしかして十六夜さんってば、意外に知能派でございます?」

「おいおい、さつき帝が言っただろ?俺は生粋の知能派だぞ。黒ウサギの部屋の扉だつて、両手を使わずに開けられただろうが」

「……………」

得意げな彼に、黒ウサギは嫌な情景が脳裏に浮かぶ。

彼が行った事といえば……

「………………。参考までに、方法をお聞きしても?」

やや冷やややかな目で黒ウサギが見詰める。

十六夜はそれに応えるかの様に、ヤハハと笑つて、門の前に立ち、

「そんなもん——こうやって開けるに決まってるッ！」

轟音と共に、白亜の宮殿の門を蹴り破るのだった。

《それは、開けたに入りません!!!》

カグヤが悲痛な声で、そう注意した。



☆☆☆☆

正面の階段前広間は、飛鳥と帝の奮戦による大混戦となっていた。

真正面から挑んだ十六夜達を捕えに来た騎士達は、飛鳥が持ち出したギフト——水樹によって阻まれているのだ。

「臆するな!! 相手はたかが小娘と犬だ!!」

「不可視のギフトを持つ者は残りのメンバーを探しに行け! 此処は我々が押さえるぞ!!」

発見された時点で、飛鳥と帝はゲームマスターへの挑戦権を放棄している。

彼女達の役割はあくまで囷。

だが逃げ回る事など、二人の性分ではない。

ここへ移動する際に、帝と飛鳥の持つギフトで同士討ちさせる事も話し合ったが、二人ともそれを是とは思わなかった。

折角のゲームにそんな華のない事は邪道。

それならいつそ——白亜の宮殿を破壊する方がいい、と。

「左右から来るわ！まとめて吹き飛ばしなさい!!」

一喝、水流が騎士達を襲う。

同時に、宮殿の華美な装飾は水樹の放つ水流に荒らされ、衰れにも水没していた。

本来のギフトゲームならば本抛の資材は全て宝物庫に保管されるのだが、今回は急なゲームだったが目準備が整っていない。

本抛を保護する恩恵<sup>ギフト</sup>さえ、準備不足だ。

飛鳥と帝はその隙を突き、徹底して本抛を荒らし回っている。

これだけの破壊活動をされては、幾ら不必要な戦闘だと分かっている、見逃すわけにはいかない。

「ふふ………ねえ、帝君。不可視の人間を除けば、粗方集まったのかしら?」

「だろうな」

帝は手近にいた騎士の鎧を噛み砕き、辺りを見渡す。

地上しか移動出来ない騎士達は、飛鳥が操る水樹の水圧に押され、既にへろへろだ。

空駆ける靴を履いた騎士に関しては、その圧倒的な水量に押され、どう攻めるか考えあぐねているのだ。

だが、戦闘経験の浅い飛鳥には隙がある。

彼女の死角へ回り込んだ騎士に関しては、帝がその牙と爪も持って撃退していた。

鎧を噛み砕かれた騎士達を、驚愕の表情が彩る。

「ば、馬鹿な!!これは強い防御のギフトが付属された鎧だぞ!!そう易々と砕ける筈が

……」

「フェンリル・ラグナロク神を喰らう大狼。ちょいと昔に北歐神話へ喧嘩を売った時があつてな。その戦利品と

して、フェンリルの牙を一本貰ってきたんだよ」

ニタリと笑い、自慢げに首を逸らせば、そこには紐で吊り下げられた肉食獣の牙がぶら下がっている。

これが、その恩恵<sup>ギフト</sup>の正体。

「このギフトは創作系でな。昔、仲間になんかあったのが得意な奴がいて、こうして加工してもらったんだ。効力は恩恵を噛み砕き、一時的に使用不能にさせる。」

「な、なん、だと……?!?」

元より、北欧神話でいうフエンリルとは大きいな狼を象ったバケモノ。

その牙は神々を滅ぼす力を宿し、『神殺しの狼』と言わしめる程なのだ。

その牙を貰い受けた帝は、そのギフトをずっとしまひこんでいた。

理由は、人間では使えないからだ。

「帝君、そのギフトがあればあの外道に、遅れをとる事はないんじゃないかしら?」

「いや、これには欠点があつてな。一つは恩恵の発動条件が相手に噛みつく事。もう一つは、与える系統のギフトは無効化できないって事だ」

群がる騎士達を薙ぎ倒しつつ、帝は懇切丁寧に飛鳥の疑問へ答える。

このギフトの使い勝手の悪さは、牙が相手のギフトに届かなければならないという

点。

逆に言えば、物にギフトが付与された物は無効化できるが、本人の魂に癒着しているギフトは無効化が困難という事になる。

人が持つギフトとは、魂の一部。

そこへ牙を届かせようとすれば、文字通り心臓を食い破る他ない。

正直、帝はそこまで獣にはなれなかった。

「それに、この恩恵は神々のモノ。使用制限があつて、ゲーム内ではしか使えない。襲撃を撃退するだけのギフトにはなれないって事だ」

その為、今砕いたギフト達はゲーム終了と共に、元通りになる。

そういう意味では、一番ゲームらしいギフトなのかもしれない。

「飛鳥、手がお休みだぜ?」

「あら……右上方、薙ぎ払いなさい!」

飛鳥の言葉に支配された水樹は刃物の様に高圧縮された水を高速発射し、翼の騎士達



を撃墜する。

さながら、ウオーターカッターの様な刃を掻い潜った騎士を、帝の牙が襲いかかり、簡単に地に伏せられる。

帝は、水樹を操る飛鳥を横目に、彼女のギフトを思考する。

(支配するギフト、ねえ……)

彼女の生い立ちや、使ってきた経緯を聞いて、黒ウサギが考えたギフト。

長年の経験により、飛鳥のギフトは『支配』という一点に凝り固まってしまった、と考へてのことであり、人を支配する事を恐れた飛鳥を見かねて、黒ウサギが『ギフトを支配するギフト』を提案した、とカグヤより報告を受けている。

だが、帝にはそれが納得できなかった。

確証は全くないが、黒ウサギの見解には些か突っかかりを感じたのだ。

簡単に言ってしまうえば、喉の奥に小骨が刺さった様な、嫌な違和感。

それは……本当に支配するだけのギフトなのだろうか、という疑問。

正直、今の奮闘を見る限りは確かに支配していると見てもいいだろう。

(その割には、水樹が元氣過ぎないか?)

勿論、水樹は飛鳥の指示を受けて、水を使っている。

だが、それにしても水量が尋常ではない。

幾ら、元気のいい水樹だとしてもこれ以上水を出し切れれば、水樹事態が痛む危険性がある。

だというのに、帝の目から見て、水樹が弱る傾向は一切見られない。

これではまるで………

「帝君!!」

飛鳥の鋭い声に、すぐさま回避行動へと移る。

案の定、帝がいた場所に敵騎士の槍が突き刺さる。

帝は一旦思考を全て捨て、騎士達の撃退へと意識を切り替える。

今は、自分の役割を精一杯務めるべきだ。

ニツと唇に笑みを浮かべ、帝は地を疾走した。



☆☆☆☆

飛鳥達と二手に分かれた十六夜達は、彼女らとは対照的に息を殺して状況を窺っていた。

時折、宮殿が揺れる様な振動を起こしている為、どうやらあの二人はこれでもかと言うほどに暴れているのだろう。

《……………》

少し荒れる息を整え、ギユツと手を握り合う。

ゲームはこれで二度目となるが、それでも怖い事に変わりはない。

自分がすべき事は、見つからない事と彼らの怪我を治療する事。

それだけだと言うのに、カグヤの胸には不安が仄暗い影を落としてしまう。

「……………カグヤ様？」

震える彼女に気づいたのだろう、ジンが気遣わしげに声をかける。

これ以上心配をかけまいと、カグヤは精一杯の笑顔で彼に応える。

《大丈夫です。私も、＼ノーネーム＼のプレイヤーですから》

大丈夫……

その言葉を必死に噛み締めていると、ふと手を引かれて慌てて顔を上げる。そこには、普段と変わらぬ笑みを浮かべたままの十六夜がいた。

「ふうん……箱庭出身だっていうのに、こういった場にはなれてねえのか？」

《……申し訳ありません》

「ハッ……別に。帝から聞いてはいたからな。所持しているギフトも、芭蕉扇以外は戦闘で役に立たないって事も」

《……………》

そうなのだ。

カグヤが所持するギフトの中で、唯一戦闘向きなのは風を操る芭蕉扇のみ。

他のギフトはサポートには向いていても、一人で戦える様なモノは一切ない。

対照的に、帝は戦闘に属するギフトを多量に所持しているが、彼のギフトをカグヤは借りようとは思えなかった。

自分が、誰よりも戦闘に対して恐怖している事を知っているからだ。

申し訳なくなり、何も言えずに俯いていると、ポン、と頭部に重みを感じる。

それが、十六夜の手だと気付いた時、彼は変わらぬ楽しげな笑みで言う。

「問題ない。回復系ギフトつてのは、貴重な恩恵なんだろう？ そんなレアなギフト所持者がコミュニティにいるつてのは、それだけで前線で戦うプレイヤーには大助かりだ」

《十六夜、さま…？》

「戦闘は俺達に任せて、お前は御チビと後ろを守れ。戦えなくても、守る事は出来るんだろ？」

守る為の力……

その言葉に、カグヤは瞳を丸くする。

今まで、考えた事はなかった。

いつだって、『戦う事』しか考えていなかったカグヤにとって、『守る事』は頭にすんなかったのだ。

(私が……守る……)

それは戦う事と同じかもしれない。

それでも、今のカグヤを奮い立たせるには十分すぎる道の示し方だった。カグヤはその言葉を胸にしつかりと刻むと、真剣な表情で頷いて見せる。

《はい。私が皆さんを守って見せます》

「そうだ、それでいい。頼んだぜ？カグヤ」

《お任せください》

躊躇いはない。

瞳に闘志を漲らせ、カグヤはゆったりと微笑む。

と、耳を澄ませて周囲の気配を探っていた耀がピクリ、と反応した。

「人が来る。皆は隠れて」

緊張した声で警告。

如何に姿が見えないと言っても、物音や匂いまで消せるものではない。

耀の高性能な五感は、不可視のギフトに対抗する唯一の手段なのだ。獣の様に腰を落とした耀は、見えない敵に奇襲を仕掛ける。

「な、なんだ!?!」

驚愕の声。

耀はすかさず後頭部を激しく強打する。

その一撃で、訳の分からないままに失神した騎士。

倒れた彼から兜が落ちると、その姿が白日の下にされされた。

その様子を見て、耀が察する。

「この兜が不可視のギフトで間違いなさそう」

《多分、ハーデスの兜のレプリカだと思います》

耀が掲げる兜を隠れながら見て、カグヤが言う。

つまり、その兜を被れば“不可視”になれるという事だろう。

十六夜がジンへ投げる様指示しようとした時、カグヤが首を横に振る。



《それよりも、十六夜様がお使い下さい》

「……だが、御チビが見つければ俺達の負けは確定するぞ?。」

ルール上、"ノーネーム"側のゲームマスターであるジンが見つければ、その場で敗北は決定。

それを避ける為には、彼の安全を確保する事が最優先事項だ。

だが、カグヤは首を縦には振らない。

《不可視のギフトがゲーム攻略の鍵だとは思いますが、ですが、体格を考えれば子供のジンよりも、十六夜様の方が見つかる危険性が高いです。それに、レイオスへ挑む為には十六夜様の存在は必須。もし、見つかるべきなのであれば、このカグヤがすべき事でございませう》

確かに、現在まだ見つからないのは十六夜、ジン、カグヤの三名。

その内、レイオスに勝てる可能性があるのは十六夜だけだろう。

「……でも、見つかる可能性は排除できないよ？どうするの？」

不安そうに聞く耀へ、カグヤは暫し思考し、ジンの手を握る。

「カグヤ様……？」

ジンの声に取り合わず、カグヤは思考する。

姿を消す不可視、それは透過ではなく、唯見えなくなるだけのギフト。ゆつくりとカグヤが手を離れた瞬間、みるみる内にジンの姿が消えた。

その様子に、耀と十六夜が息を呑む。

「……ジン君、見えなくなってる？」

「……何をしたんだ？カグヤ」

《創造神リメイク・ギフトの悪戯を使用しました。一時的に、ですがジンのギフトに“不可視”の能力を追加したんです》

そういうカグヤの顔は、みるみる青褪めていく。

その様子に、耀が慌てて彼女の下へと駆け寄った。

「だいじよ——」

次の言葉が紡げなかった。

近寄った耀が見たのは、白魚の様に美しかった彼女の左手が——まるで焼け爛れたかの様に真つ赤に腫れていたのだ。

流石に、これには言葉を失った。

《……これが、リスクです。私はこのギフトを使う代償として、身体の一部をランダムに負傷するんです》

淡く笑んではいるが、その顔には脂汗が浮かんでいる。  
痛々しいその手を見つつ、耀が僅かに顔を顰める。

「……………春日部、作戦変更だ」

十六夜もカグヤの手を見詰め、小さく呟く。

「俺が不可視のギフトを使って、御チビと共にルイオスをぶつ倒してくる。春日部はカグヤと共にここで雑兵を足止めしてくれ」

本当であれば、後一つ不可視のギフトがあつた方が安全だっただろうが、今はそうしている事自体を惜しく感じる。

十六夜は、その場で痛みに耐えるカグヤを抱え、物陰へと移動させる。

この怪我では、彼女が戦う事はほぼ無理だろう。

それ以上に、早く治療させる事が第一かもしれない。

そうなれば、一刻も早くゲームに勝つ事が先決だ。

耀より渡された兜を被り、十六夜の姿が消える。

「悪いな、いいところ取りみたいで。これでも、お嬢様や春日部、帝とカグヤにもそれなりに感謝しているぞ。今回のゲームなんかは、ソロプレイで攻略出来そうにないし」

「気にしなくていい。埋め合わせは必ずしてもらおうから」

耀は平淡な声音で、取り立てを断言する。

カグヤは嬉しげに笑んで、小さく頷いただけ。

思わず哄笑を上げそうになった十六夜だが、今はそんな場合ではない。

「御チビ、行くぞ」

「はい」

どこからか声がした。

ジンが近くにいる事を気配で確認し、十六夜はルイオスがいる最奥へと走り出す。それを見送った時、前触れもなく耀が吹っ飛んで、壁に叩き付けられる。

「わっ……!!?」

《耀様!!》

倒れた耀へ悲鳴にも似た声を上げ、カグヤはふらふらと立ち上がる。

だが、次の瞬間、カグヤ自身も強い衝撃により、壁に叩き付けられてしまった。

ギシツと肋骨が軋む音と共に、肺から空気が失われた様な息苦しさを感じる。

ゲホツとカグヤの口から辛そうに咳き込む音が漏れる。

《ま、さか……本物のハーデスの兜……？》

幾ら油断していた節があるとはいえ、耀の五感を誤魔化せる筈がない。

つまり、この場に相手がいるのだ。

本物のハーデスの兜を持つ者が……

「カグヤ、大丈夫……？」

ケホツと咳き込む耀が、倒れ伏したままのカグヤを見る。

かなり重量のある鈍器で殴られて、お互いよく意識を失わないものだ。

とはいえ、カグヤは痛みのせいで簡単に意識が戻る為、ただ痛む場所が増えた程度の認識だ。

《耀様も、大丈夫ですか？》

「平気………と言いたいけど、結構辛い」

耀は辺りを警戒しつつ、苦しげに表情を歪める。

カグヤは満身創痍、耀とてダメージが色濃く残る状態。

何より、こちらは感知できずに、相手はこちらを視認しているという最悪の状況。どうすれば、と思考をフル回転させる。

と……カグヤは自分が至った結論に、思わず目を見開き、苦笑した。

どうやら、十六夜や帝の性格が自分にも移ってしまった様だ。

《耀様……柱にお掴まり下さい》

その一言で十分だった。

耀は何かを思ったのか、すぐさま柱へと手を伸ばし、必死に力を込める。

彼女が自分の言葉を信じてくれた事に内心で感謝し、カグヤは立ち上がる。

この状況で、一番弱っているのは自分だ。

なら、相手は先に自分を再起不能にしようとするだろう。

カグヤは右手に鉄扇を握る。

《手加減無用………全てを薙ぎ払いなさい芭蕉扇!!!》

一喝と共に、力の限り鉄扇を横薙ぎに振るう。

その瞬間、その空間全てを縦横無尽に放たれた風の暴力が襲い狂う。

その光景に、耀は風圧に逆らいながらも驚く。

前回のゲームで、カグヤが使用した風量の数十倍はあるのだ。

その暴力は、まるでダンプに突っ込まれたかの様な衝撃だ。

「ぐ、ぬう………」

苦悶の声と共に、何かが宙を舞う。

カラン、と兜が飛ばされる音と共に現れたのは、ルイオスの傍に控えていた側近の男だ。

彼は成すすべなく風の餌食となり、虚空で風の暴力を受けている。

だが、問題はこれからだ。

現在、カグヤは彼女すら制御出来ない程の風量を解き放ったのだ。

普段は、自分が制御できるレベルよりやや下程度で使用していた為、この状況はある



意味で厄介な状態。

つまり、この風は耀も……カグヤですら襲われている状態と言っても過言ではないのだ。

カグヤは全神経を研ぎ澄ませ、目を伏せる。

(大丈夫……だって、このギフトは譲って頂いて以来、ずっと私が使用してきたモノだもの)

戦う事が出来なくても、自分の身位は守れる様になりたい。

そう思い、ずっと隠れて精進し続けてきた。

す……とカグヤが手を伸ばす。

(風の流れを読んで……体を任せる……)

肌で感じる風を頼りに、ゆっくりとその身を安全圏へと移動させる。

それは、まるで舞うかのような美しい動き。

滑らかに風の隙間へと移動し、芭蕉扇を振る。

それによって生まれたそよ風が、荒れ狂う風を宥めていく。

暫くすれば、あれ程圧倒的だった風圧は嘘の様に薙いだ。

はあ……とカグヤの唇から熱い息が漏れた。

「カグヤ、大丈夫？」

すかさず、耀が彼女の傍へと向かう。

カグヤはそれに淡い苦笑だけを浮かべると、耀の肌に手を這わせた。

《敵が来る前に治癒します。申し訳ありませんが、私はこれで限界ですので後の事は……》

「うん。任せて」

力強く頷く耀に頼もしさを感じながら、カグヤは彼女の怪我を治癒する。

自分と同じくかなりの重量を持つ鈍器で殴られた傷は、簡単に痛みを取り払われ、彼女が手を離れた時には、完全に元通りとなっていた。

耀は体の調子を見つつ、笑う。

「うん、絶好調。ありがとう、カグヤ」

《いいえ》

淡く苦笑し、近くにあった柱へと寄りかかる様にして座る。

これが、自分の限界の様だ。

張り切つて雑兵を蹴散らしていく耀を見つつ、カグヤは囿役をやってくれている飛鳥と帝を思う。

彼らは怪我をしていないだろうか……。

特に、飛鳥はこの中では自分の次に脆い普通の少女。

そのギフトこそ強力な部類だが、肉弾戦には一番向かないのだ。

ぼんやりとそんな事を思っていた、次の瞬間

「r a …… R a、G E E E E E Y A A A A a a a a a a a a a a !!!」

空気を切り裂くような、強烈な不協和音。

不吉を告げるその叫びを最後に、カグヤの意識はプツリと途切れた。



「アルゴルの悪魔……マズイ!!飛鳥!!水樹をしまえ!!」

怒号にも似た声で、帝が吼える。

飛鳥は慌てて彼の言葉に従い、水樹をギフトカードの中へとしまう。

(くそっ……)

あのいけ好かないボンボンが考えそうな事を頭に浮かべ、帝が飛鳥の下へと走る。多分、彼の考えた正しいのであれば、時間がない。

「飛鳥!!」

帝は飛び掛かる様な勢いで彼女へと迫った瞬間、禍々しい赤い閃光が辺りに溢れ、飛鳥の意識が途切れた。



飛鳥が見た風景は、一転していた。

辺りには、石になってしまった騎士達が溢れ、華美な装飾品は色褪せて見える。

——彼女がいる空間は全て石へと変わり果ててしまっていた。

何故こうなったのか分からず、辺りを見回していると、ふと自分の後ろに人の気配を感じた。

慌てて振り返り……飛鳥は息を呑んだ。

そこに立っていたのは、青年だった。

月光の様な白い髪を後ろは短く切り揃え、モミアゲはそれと対照的に胸近くまで長く伸ばし、左側には淡蒼いメッシュを入れている。

身に纏うのは、ブーツとダメージ加工したジーンズ、そしてYシャツと黒のベスト、赤い紐と月のブローチで出来たループタイという、これまたアンバランスな出で立ち。

だが、その姿はこの世の芸術品と見紛う程に美しい。

「……貴方……」

呟く様に呟かれた飛鳥の言葉に、一瞥くれる程度の反応を示すと、青年はどこかへと走り去ってしまった。

その背へ、あ……と飛鳥が無意識に手を伸ばす。

だが、彼は振り返る事なくそのまま行方を晦ませた。

残ったのは、現状に戸惑う飛鳥のみ。

「……そ、そうよ！帝君！！帝君はどこ?!」

あの時、彼は自分の傍へと来ていた筈だ。

だが、その彼は何処にも見当たらない。

もしや、自分の代わりに石に……



そんな不吉な考えすら浮かんでくる。

どうすればいいか、頭が追いつかない中、飛鳥は冷静になろうと、自分が覚えている事を思い出していく。

あの不吉な声を聴いて、帝は慌てていた。

多分、あの声が彼が警戒すべきだと言った、元・魔王なのだろう。

帝の指示に従い、水樹をギフトカードへ戻した後、帝は自分へ飛び掛かってきた。

その後……

(……………え?)

赤い閃光が空間を満たす前、確かに何かを感じた。

ゆっくりと思い出していく内に、飛鳥の顔がみるみると赤くなる。

あの時、確かに感じたのだ。

——飛鳥の唇に、何かが触れる感触を。

「え?ま、まさか……………え!?!」

いや、でも、だからって……

グルグルと認めたくない情景が思い浮かんで消えていく。  
つまり、だから……いや、そうじゃなくて……

「——飛鳥？」

「きゃっ」

突然の声に、飛鳥の口から可愛らしい悲鳴が漏れる。

声をかけた主は、驚いた様に目を丸くした。

そこにいたのは、十六夜達と共に宮殿の奥へと向かった耀。

飛鳥は慌てて取り繕う。

「か、春日部さん？どうしてここに？」

「……えっと、帝に助けてもらったの」

帝のギフトは与える恩恵を無効化できない。

だが、与えられた事により恩恵が発動中なら、それを『モノ』に捉えて無効化できる  
様だ。

耀の後ろには、気を失っているカグヤを背負う銀狼がいた。

「おいおい、どうしたんだよ？石化して、意識でも持っていかれたのか？」

こちらは至って普通の反応。

これでは、一人悩んでいた自分が道化みたいだ。

ムツと顔を顰め、飛鳥は顔を逸らす。

「帝君こそ、レディを一人放置するなんて、酷過ぎるんじゃないか？」

「ん？悪い悪い。飛鳥の石化が解けたのを確認して、すぐに耀の下に走ってたんだけだ。丁度カグヤも一緒だったから、そのままここに連れてきたって事。どうせ、こんな状態じゃ敵はあのボンボンだけだと思うしな」

パタンパタンと忙しく動く尻尾。

どうやら、彼は飛鳥が意識を取り戻す前に二人を助けに走っていた様だ。

その時、ふと飛鳥は何かを思い出した様に二人を見た。

「ねえ、ここに来るまでに男の子を見なかったかしら？」

「……………？男の子？」

「ええ。私が起きた時に、傍にいたのだけど……真つ白な髪で、こう左だけが蒼かったと思うわ。目も空色と董色で左右違ってたかしら。凄く綺麗な人だったのだけど」

「それって、左側だけメツシユが入ってて、オッドアイだったって事かな？……ううん。ここに来るまでに会ってないよ。帝は？」

「いや……俺も会ってない」

暫し考える様に間を開け、帝が応える。

その様子に、そう、と飛鳥が頷いた。

と、ズンツと嫌な音を立てて宮殿が揺れる。

違和感を感じた帝は上空を見上げ、小さく舌打ちした。

「あの馬鹿、絶対こっちの事なんて構わず暴れてやがるな。飛鳥!! 耀!! 直ぐにここから離脱するぞ!!」

背に乗ったままのカグヤを背負い直し、帝は飛鳥の傍まで近寄ると、足を折る。

「お前の足じゃ、俺と耀について来れないだろ？俺の背に乗って、カグヤを支えてくれ」

今は文句を言っている場合ではない。

飛鳥は素早く頷くと、彼の背に跨り、カグヤを抱く様にして支える。

飛鳥が乗った事を確認すると、一度だけ耀へと視線を向け、帝が走り出す。不安定な足場を諸共せずに疾走する二人の様子は、やはり獣じみている。

そして、丁度全員が宮殿から離脱した時、彼らの背後で白亜の宮殿は崩壊を始めた。ガラガラと大きな音を立てて沈む建物を茫然と見つめ、帝は溜息を零した。

「……………無茶苦茶過ぎるだろ」

その眩きに、全くだ、と飛鳥と耀は内心で眩くのだった。

•

## 十章 穏やかな夜空

カグヤが目を覚ました時、酷い頭痛に襲われた。

それもそうだろう。

元とはいえ、自分よりも優れたプレイヤーであり、元魔王の肩書を持つレティシアが、メイド服姿で甲斐甲斐しく自分の世話をしていたのだ。

丁度様子を見に来てくれた黒ウサギから事情を聴くと、あのゲームは無事に勝利を治め、レティシアの所有権は「ノーネーム」に移ったらしい。

そこまでは良かった。

問題は、この後だった。

彼女が「ノーネーム」へ帰ってきた途端問題児三人は声を揃えて

「「じゃあこれから宜しく、メイドさん」」

もう、その一言でカグヤは再度卒倒した。

確かに、今回の功績は十六夜、飛鳥、耀の三人にあるだろう。

自分や帝が力を貸したとはいえ、最終的にはこの三人がいたからこそその勝利だと、カグヤは思っている。

だが、それとこれとは別だ。

《み、帝は?!帝は止めなかったのですか!!?》

「うううう、はいな。帝様は面白がるだけでした」

グスン、と黒ウサギ。

彼女としても、尊敬するレティシアが使用人として働く、という事実には打ちのめされてしまっている様だ。

当のレティシアはと言えば

「カグヤは先輩になるだな。これから、宜しくご指導もraitたい」

ウキウキと箒を片手にやる気十分。

本当に、彼らが来てから騒がしくなったものだ。



カグヤは現実逃避の為に、再度眠りにつくしかなかった。

☆  
★  
☆  
★  
☆

—— “ペルセウス”との決闘から三日後の夜。

子供達を含めた “ノーネーム” 一同は、水樹の貯水池付近に集まっていた。  
その数、一二十七人十二匹。

数だけ見れば、中堅以上のコミュニティとも呼べるだろう。

「えーそれでは！新たな同士を迎えた『ノーネーム』の歓迎会を始めます！」

ワツと子供達が歓声を上げる。

周囲には運んできた長机の上に、ささやかながら料理が並んでいる。

本当に子供だらけの歓迎会だったが、それでも三人は悪い気はしなかった。

「だけど、どうして屋外の歓迎会なのかしら？」

「うん。私も思った」

「黒ウサギなりに、精一杯のサプライズってところじゃねえか？」

「それに近いが……それだけって訳じゃねえよ」

ほれ、と頭に皿を乗せて器用に運んでくる帝。

彼から皿を受け取りつつ、三人が首を傾げる。

「……近いけど、違うの？」

「ちよつとだけな。ま、今は腹いっぱい食えよ。今日は普段よりもご馳走だぞ？」

ニシシと笑う帝。

確かに、彼が言う通り嘯かとはいえ、普段よりも沢山の料理がある。

だが、この「ノーネーム」は財政的には想像以上に苦しいギリ貧コミュニティだ。

三人が本格的に活動し始めても、これだけの子供達を養う事は、かなり厳しいと思っ  
ていいだろう。

まして、魔王との戦いや仲間達の救出もせねばならないのだ。

淡く苦笑を漏らす三人へ、帝は自分が食べていた肉から口を離す。

「そう気張るな。資金関係は、俺とカグヤでなんとでもする。お前らは力を蓄えて、魔王  
との戦いに備えろ。このコミュニティを破壊しつくした魔王は、「ペルセウス」の奴等  
なんてゴミと同意義程度にしか考えない程の強者だぞ」

「そりや、楽しみだ」

「十六夜なら、そう言うと思った。だがな。今のままじゃ、魔王には勝てないと思え。  
日々の精進は大事だぞ?」

「……うん。そういえば、カグヤは?」

キヨロキヨロと辺りを見渡す。

普段なら、帝と行動を共にしている筈だろう。

飛鳥も一緒になって探すか、彼女の姿はどこにもない。

そんな時、黒ウサギが大きな声を上げて、注目を促す。

「それでは本日の二大イベントの一つが始まります！皆さん、箱庭の天幕に注目して下さいー！」

十六夜達を含めたコミュニティの全員が、箱庭の天幕に注目する。

その夜も満天の星空だった。

空に輝く星々は、今日も燦然と輝きを放っている。

異変が起きたのは、注目を促してから数秒後の事だった。

「……あつ」

星を見上げているコミュニティの誰かが、声を上げた。

それから、怒涛の如き流れ星のラツシュだった。

その光景が流星群だと気が付いた時には、口々に歓声が上がった。帝が声を張り上げる。

「この流星群は、新たな同士達が勝ち取った戦果だ！ 同士が倒した『ペルセウス』のコミュニティは、敗北したが故に、『サウザンドアイズ』を追放され、あの星々から旗を降ろす事となった!!」

「なっ」

十六夜達三人が、驚いた様に帝を見る。

それに続く様に、黒ウサギが嬉しそうに言う。

「今夜の流星群は『サウザンドアイズ』から『ノーネーム』への、コミュニティ再出発に対する祝福も兼ねております。星に願いをかけるもよし、皆で観賞するもよし、今日は一杯騒ぎましょう♪」

嬉々として杯を掲げる黒ウサギと子供達。

だが、三人はそれどころではない。

「星座の存在さえ、思うがままにするなんて……ではあの星々の彼方まで、その全てが、箱庭を盛り上げる為の舞台装置という事なの？」

「そういうこと……かな？」

「おう。そういう事だな」

呆然とする二人に、帝はムグムグと肉を食べつつ答える。

「ここは、二人がいた『外』とは違う。この天幕から星座が無くなるうとも、二人がいた世界から星座が無くなる訳じゃない。そんな事が出来るのは魔王位なもんだ」

「そ、そうなの……？」

「ん……そうだな。ほれ、あそこの星座は確か三桁のコミュニティの旗が飾つてあるんだ。お前らの世界にはない星座だと思うぞ」

帝が鼻で示した先には、確かに二人の世界では見られない奇妙な形の星座がある。

あまりにも絶大な光景に、只々驚くしかない。

だが、十六夜だけは、感慨深そうに溜息を吐いた。

「……………成程な。アルゴルの星が食変光星じゃないところまでは分かったんだがな。まさか、この星空の全てが、箱庭の為だけに作られているとは思わなかったぜ……………」  
「くく……………少しは楽しめるだろ?」

感動した様に目を細める十六夜へ、帝が悪戯に成功した子供の様に笑う。

箱庭生まれである彼にとつて、これは普通の光景なのだが、外からきたばかりの彼らにとつて、これは驚く事なのだ。

昔、同じ様に星を眺めて驚いていた同胞を思い出し、帝も懐かしさを思う。  
本当に、生きてみるものだ。

「ふっふーん。驚きました?」

黒ウサギが嬉しそうに、ピヨンと跳んで十六夜の元に来る。  
十六夜は両手を広げて頷いた。



「やられた、とは思ってる。世界の果てといい、水平に廻る太陽といい……色々と馬鹿げたモノを見たつもりだったが、まだこれだけのショーが残ってたなんてな。おかげ様、いい個人的な目標も出来た」

「おや？なんでございます？」

「あそこに、俺達の旗を飾る。……どうだ？面白そうだろう？」

消えたペルセウス座の位置を指差し、十六夜が笑う。

その言葉に、黒ウサギは暫し絶句し、しかし直ぐに弾けるような笑顔で告げた。

「それは……とてもロマンが御座います」

「だろ？」

「はい♪」

旗を飾る……

それは決して楽な事ではない。

帝が覚えている限り、あそこへ旗を飾れるコミュニケーション等、本当に数える程度しかないのだ。

だが、これは何となくだが……帝はそれが実現しそうな気がした。自分が意識する以上に、十六夜を、飛鳥を、耀を気に入ってしまったからなのだろう。

そう思うと、帝は苦笑する。

それ程、長い付き合いではない相手をこれ程までに自分が信用している。

不思議な感情の芽生えは、思った以上にくすぐったくて……同時に、気持ちを引き締める。

彼らは、未だ原石。

これから、どんな困難が待ち受けるとも分からない。

だから、出来るだけ……そう、自分が出来る限りの事をして、育てるべきなのだろう。

嘗て、自分をコミュニティに迎えてくれた先代達が、そうしてくれた様に……

「帝」

ふと、名を呼ばれ、振り返る。

そこにいたのは、すっかりメイド服が板に付いたレティシアの姿があった。

「どうした？」

「カグヤの支度が整ったぞ。後は帝に任せる、と」

彼女の伝言に、了解、と短く答えると、丁度舞台になりそうな場所へと移動すると、パタン、と一回尻尾を振る。

「全員注目!!」

澄み渡った声を響かせる帝へ、全員の視線が集まる。

「これより、もう一つの大イベントを始める!!レティシア、準備はいいか？」  
「いつでも」

少し離れた場所で、何かを弄っているレティシアへ声をかければ、彼女はコクリと頷く。

その返事を確認し、帝は素早くその場から飛び退くと、足早に三人の元へと戻った。

不思議そうに、三人が首を傾げる。

「おいおい、まだ何かあるのかよ」

「黙って見てろって」

それだけ言うと、言葉は不要とでも言いたげに、忙しく彼の尻尾が揺れる。  
と――

シャン……………♪

「……………え？」

「…あれって……………」

飛鳥と耀が驚きの声を上げる。

ゆつくりと、先程帝がいた舞台へ移動してきたのは、絶世の美女。

まるで遊女を思わせる衣装と、煌びやかな簪に飾られ、淡い化粧で彩られた彼女は、同性である筈の彼女達でも、ほう、と感嘆の溜息が零れる。

シヤラン、と服に付けられた鈴が啼く。

《これより、演舞を御披露致します。どうぞ、心行くまでお楽しみ下さいませ》

上品そうに微笑む彼女は、まごう事なきカグヤだ。

その言葉を合図に、レテイシアが弄っていたモノから曲が流れ出す。

「……………わぁ……………」

「……………綺麗」

どこからともなく、感嘆混じりの賛美が飛ぶ。

それ程までに、彼女の舞は洗礼された美しさがある。

舞うカグヤから視線を外さずに、飛鳥が感嘆の声を呟く。

「凄いわ……………これ、日本舞踊かしら？」

「いや、それに近いらしいんだが、違うんだ。あれは、俺達の一族が代々受け継ぐ舞の一種でな。今、カグヤが舞っているのは、歓迎を意味するモノだ」

「他にもあるの？」

「ああ。古くから儀式を重んじる、ちよつと変わった独自文化を持つ一族でな。他にも豊穰祈願や雨乞い……そうだな、古代的な日本文化、と思ってもらって構わない。だが、それにカグヤなりのアレンジを加えているのは確かだ」

「だろ。俺もそうだったのには、それ程詳しくないが……もつと退屈そうな気がしたぜ」

「確かに。ゆつたりとした曲で踊る、つてのは眠くなる。でも、彼奴の舞はゆつくりだろうが、アップテンポだろうが……全ての種族を魅了するだけの力がある」

少しだけ自慢げに説明する帝。

それほどまでに、彼は妹を誇っているのだろう。

流星群を背に舞う彼女を觀賞し、その日の夜は更けていった。







☆オマケく扉を直しました！く☆

トン、カン、と屋敷の廊下に金槌の音が響く。

現在、黒ウサギの部屋の扉を破壊した十六夜と帝は、カグヤの指導の下、その扉を修理していた。

修理、とは言うが、ほぼ大事な部分が粉々になってしまった為、再度作成中という方

が正しいのかもしれない。

「あゝ……やりづらい」

帝は銜えていた釘を一つ取り、トントンと壁へ打ち付ける。

お座りの状態から、前足を器用に使い、扉の修理に勤しんでいる。

……どうみても、着ぐるみを来た悪ふざけをしているおっさんにしか見えない事は、この際黙っておくべきだろう。

「おい、わんこ。カグヤはどうしたんだよ」

「なんだよ、霊長類。彼奴なら、今日の夕飯の仕込みにいつてるぞ」

先程まで、彼らの後ろで監視していた彼女は、使用人としての仕事の為、現在席を外している。

部屋の主である黒ウサギは、別部屋に一時移り、飛鳥、耀と共にお茶会の真つ最中の筈だ。

しめた、と十六夜がニヤリと笑う。

「よし、ちよつとトイレに」

「ちよつと待て、霊長類。お前、逃げようつて参段じゃねえよな？」

ジトリ、と帝が睨む。

とはいえ、扉の制作作業はほど終了したとみていい状態までにはなった。

後は、蝶番をきちんとつけければ、終わりだろう。

ヤハハと十六夜が笑う。

「後は、わんこだけでも平気だろ。俺はちよつくら散歩にでも行ってくる」

「ふざけんよ、霊長類。寧ろ、こういった仕事はお前がすべきだろ？俺、狼なんだし」

「そんな器用な狼、見た事ねえよ」

「うるせえ。俺だって、好きで狼やってんじゃねえよ!!」

ガルルと唸る帝と、ニヤリと笑う十六夜。

このまま喧嘩という名のじゃれ合いになるか———とと思った刹那

ズバンツ、と二人の間に、何かが飛んできた。  
暫しの沈黙。

その後、恐る恐るといった様子で視線を向ければ……見事に刺さった竹串が一つ。  
どう考えても、第三宇宙速度に匹敵する速度で飛んできたそれは、弾丸の様にも見え  
た。

ギギツ……と油が切れたブリキ人形の如く、発射位置へと視線を向ける。

《……何をなさっているのですか？帝兄さん、十六夜様？》

そこには、般若が降臨していた。

普段と同じ愛らしい笑みは、絶対零度を思わせる冷笑へと変わっている。

その手に握られているのは、達筆で『ハリセン覇裏戦』と書かれた、白い武器。

さあ……と血の気が引いた。

「あ……カグヤ。俺達は決してサボっていた訳じゃないぞ？ほら、こうして扉もも  
う少いで元通りに」

《ふふふ……本当に、十六夜様も帝兄さんも、騒がしい事が好きなのですねえ？》

どうやら、弁解の余地はないらしい。

カグヤは黒ウサギより借り受けた対問題児専用武器、『ハリセン覇裏戦』を振り上げ

《少しは真面目にして下さい!!!この問題児様と馬鹿兄さん!!!》

スパアアアアン、と小気味良い音が屋敷に響いた。

あーら、魔王襲来のお知らせ？

## 十一章 やはりこうなる

月影帝の朝は、日が昇る前の事を意味する。

それは、この屋敷の一切を取り仕切っていたカグヤに倣つての事だ。

彼女は、使用人として主達が起きる前から掃除と洗濯、そして朝食の支度を始める。その為、帝は彼女と同じ時間に起床し、彼女の手伝いをする事が日課となっていた。

洗濯モノを洗濯用ギフトが付属された機材に突っ込み、慣れた量の洗剤を放り込んで、起動させる。

もう旧式なそれは、耳障りな音を立てつつも懸命に動き出した事を確認し、帝は溜息を零す。

(そろそろ、新しいモノに交換したいな。どっかの商店で、洗濯用ギフトがついた機材を賞品にしたギフトゲームをやってねえか?)

このオンボロが止まってしまえば、洗濯モノは全て手作業で洗わねばならない。

あれだけの子供がいるのに、全て手作業なんてしては、洗濯だけで日が暮れてし

まうだろう。

(北に行けたら、少しは変わるんだけど……)

自分達のいる東とは違い、北側はその環境故にモノに恩恵を込めて使用する事が多い。

そこならば、もしかすれば良いモノをギフトゲームの賞品としている可能性があるが、あつた。

だが、その為には路銀が必要となる。

正直、行って帰ってくるだけの路銀はこのギリ貧コミュニティには無いだろう。

帝は諦めた様に、淡く溜息を零した。

「……と、いけないいけない。もうこんな時間だ」

ふと、時計を確認し、帝は足早に洗濯室から出る。

目指すは、地下三階の書庫。

最近、そこには夜遅くまで書籍を漁る十六夜とジンがいるのだ。

帝はカグヤに頼まれ、彼らを起こし、自室へと運ぶよう言い付けられていた。

薄暗い階段を下り、重たい扉を開ける。

すると、少しだけ湿気を含んだ匂いが、帝の鼻へと入る。  
書庫独特の臭いだ。

「お〜い、十六夜にジン〜。朝になつてるぞお〜〜」

テケテケと走りつつ、辺りを見渡す。

すると、本棚の奥ばった場所に、山積みの本が目に入る。

どうやら、ここで眠っているらしい。

「お〜い、起きろ〜」

「……………ん……………帝か」

ふわあ、と十六夜が欠伸を一つ漏らす。

水没して壊れたヘッドホンを付けて、そのまま眠ってしまったらしい。

「御チビ、起きてるか？」

「……………く……………」



「こつちは、完全に爆睡してるな」

「まあ、俺のペースに合わせて本を読んでたんだから当然だな……」

ふあ、と十六夜が大きな欠伸を漏らす。

彼自身も、どうやらまだ眠い様だ。

十六夜の生活サイクルはかなり簡潔している。

毎日朝早く本拠を出て、帰ってきては未読の書籍を漁る。

ジンは書庫の案内も含め、それに付き合っていた。

書庫の案内位なら、帝がやると言ったのだが、彼は譲らなかつた。

ジンなりに、リーダーとしてお荷物にはなりたくない、必死に喰らいつこうとしているのだろう。

その意識を買い、帝もその辺りには口出ししていない。

「取り敢えず、ジンは俺が運ぶとして……お前も部屋で寝ろよ？」

「……ああ………うん」

大きな欠伸をもう一つ。

この様子では、この場で寝ようと考えていそうだ。

帝は溜息を一つ零し、ジンを背負う。

と、その場に慌ただしい足音が響きだし、帝と十六夜は互いに顔を見合わせる。

そこに現れたのは、飛鳥だった。

「十六夜君！何処にいるの!？」

「……………うん？お嬢様か……………」

取り敢えず、反応を示してみたが二度寝をしようとする十六夜。

その様子に、呆れた様に帝が指摘しようとした時……………飛鳥が動いた。

散乱した本を踏み台に、十六夜の側頭部へ跳び膝蹴り——別名・シャイニングウイ

ザードで強襲。

「起きなさい！」

「させるか！」

「グボハア!!？」

飛鳥の蹴りは、帝の背に背負われていた筈のジン＝ラツセル少年が、盾となる事で難を逃れた。

十六夜が、瞬時に彼を盾にし、ジンの側頭部を見事強襲。

寝起きを襲われたジンは、三回転半して見事に吹き飛んだ。

追ってきたらしいリリの悲鳴と、耀の驚いた声が書庫に響く。

「ジ、ジン君がぐるぐる回って吹っ飛びました!?!大丈夫!?!」

「……………。側頭部を膝で蹴られて大丈夫な訳ないと思うな」

「ジン……………葬式は和式か?洋式か?」

突然の事態に混乱しながらも、ジンに駆け寄るリリ。

顔色一つ変えずに合掌する耀。

何故かわくわくと葬式予定を考える帝。

ジンを吹っ飛ばした飛鳥は特に気にも留めず、腰に手を当てて叫ぶ。

「十六夜君、ジン君!緊急事態よ!二度寝している場合じゃないわ!」

「いや、今移動させようとしてんだが…」

「そうかい。それは嬉しいが、側頭部にシャイニングウイザードは止めとけお嬢様。俺は丈夫だから兎も角、御チビの場合は命に関わ」

「つて、僕を盾に使ったのは十六夜さんでしよう!？」

ガバツ!!と本の山から起き上がるジン。

「どうやら、生きていたらしい。」

「大丈夫よ。だつてほら、生きてるじゃない」

「……ちっ」

「デッドオアアライブ!?!というか、生きていても致命です!!なんで、舌打ちなんですか!? 帝様!!飛鳥さんは、もう少しオブラードにと黒ウサギからも散々」

「御チビも五月蠅い」

スコーン!つと、十六夜が投げた本の角がジンの頭にクリティカルヒット。

ジンは先程以上の速度で後ろに吹っ飛び失神。

リリは混乱極まり、あたふたしている。

仕方なく帝のとりなしで冷静さを取り戻し、彼共々ジンの介護を始めた。

と、そんな事など特に問題としていない十六夜は、不機嫌そうな視線で飛鳥を見る。

「……それで？人の快眠を邪魔したんだから、相応のプレゼンがあるんだよな？」  
「いや、だから部屋に戻れって」

一応はツツコンでみたが、彼に対して効果はない。

それよりも、快眠を邪魔された事に対して怒っている様だ。

十六夜は壮絶に不機嫌そうな声を飛鳥に返す。

わりと本気の殺気が籠った声だったが、飛鳥は気にしない。

彼女は、未だ眠たげな十六夜へ招待状を手渡す。

「いいから、コレを読みなさい。絶対に喜ぶから」

「うん？」

不機嫌な表情のまま、開封された招待状に目を通す十六夜。

その横で、帝も封筒を覗き込む。

「双女神の封蠟……?」  
 「白夜叉からみたいだな。あー何々?北と東の」  
 「火龍誕生祭」の招待状?」

「そう。よく分からないけど、きつと凄いいお祭りだわ。十六夜君もワクワクするでしょう?」

何故か自慢げな飛鳥に、ブルブルと腕を震わせて叫ぶ十六夜。

「オイ、ふざけんなよお嬢様。こんなクソくだらない事で、快眠中にも拘わらず俺は側頭部をシャイニングウイザードで襲われたのか!?!しかも、なんだよこの祭典のラインナップ!?!」  
 『北側の鬼種や精霊達を作り出した美術工芸品の展覧会及び批評会に加え、様々な主催者』がギフトゲームを開催。メインは『階級支配者』が主催する大祭を予定しております』だと!?!クソが、少し面白そうじゃねえか、行ってみようかなオイ!」

「……へえ。北の祭りって事は、創作系ギフトが結構賞品として出回るよな」  
 「ノリノリね」

獣の様に体を撓らせて飛び起き、颯爽と制服を着込む十六夜。

瞳を輝かせ、招待状を食い入るように見ながら尻尾を振る帝。

肝を冷やしながら見ていたリリは、血相まで変えて呼び止める。

「ま、ままま、待つてくください！北側に行くとしても、せめて黒ウサギのお姉ちゃんに相談してから……ほ、ほら！ジン君も起きて！皆さんが北側に行っちゃうよ！」

「……北……北側!？」

失神していたジンは、「北側に行く」の言葉で跳び起き、話半分の情報で問い詰める。

「ちよ、ちよつと待つて下さい皆さん！北側に行くつて、本気ですか!？」

「ああ、そうだが？」

「何処にそんな蓄えがあるというのですか!？此処から境界壁まで、どれだけの距離があると思つているんです!？リリも、大祭の事は皆さんには秘密にと——」

「『秘密?』」

重なる四人の疑問符。

ギクリと硬直するジン少年。

失言に気が付いた時には、もう既に手遅れだった。

振り返ると、邪悪な笑みと怒りのオーラを放つ耀・飛鳥・十六夜・帝の四大問題児。

「……そっか。こんな面白そうなお祭りを秘密にされてたんだ、私達。ぐすん」

「朝も昼も夜も問わず、必死に働いてる俺達に秘密にするとは。ぐすん」

「コミュニティを盛り上げようと毎日毎日頑張ってるのに、とつても残念だわ。ぐすん」

「ここらで一つ、黒ウサギ達に痛い目を見てもらうのも大事かもしれないな。ぐすん」

泣き真似をする裏側で、ニコオリと物騒に笑う問題児達。

隠す気のない悪意を前にして、ダラダラと冷や汗を流す少年少女。

哀れな少年、ジンIIラツセルは問答無用で拉致され、問題児一同は東と北の境界壁を  
目指すのだった。





箱庭二一〇五三八〇外門居住区画・“ノーネーム”農園跡地。  
じやりつ、と砂を踏みしめる音がした。

見渡す限り荒廃している白地の土地に、カグヤは顔を顰めた。  
嘗て、ここは沢山の作物によって美しい緑で埋まっていた場所。

だが、現在にはもう土地が死んでいる状態であり、雑草すら芽吹かない土地へと変り果ててしまった。

その姿を見る度に、カグヤの胸には悲しみが広がってしまう。

あれ程美しかった土地。

沢山の仲間達と笑い合いながら、汗を流しながら一生懸命に耕し、収穫を祝った場所。  
それを思い出すと、視界が涙で歪む気もした。

一瞬、物思いに浸かり、カグヤは嫌な思いを振り払う様に頭を振る。

今、くよくよしていても仕方がない。

再度袂に入れて置いたそのの中身を確認し、カグヤは黒ウサギの姿を探す。  
暫く歩いていくと、ぴよこんと特徴的なウサ耳が見えた。

その隣には、メイド姿が見慣れ始めたレティシアの姿もある。

彼女達も、この荒廃しきった大地を目に、酷く沈んだ面持ちでいた。

「箱庭 “最強種” の魔王——でございませうか」

黒ウサギの眩きに、ピタッとカグヤの足が止まる。

この修羅神仏の集う箱庭の世界に置いて尚、最強と謳われる三大最強種。

——生来の神仏である神霊。

——鬼種や精霊、悪魔の最高位である星霊。

——幻獣の頂点にして系統樹が存在しない、龍種の “純血”。

箱庭の最強種と呼ばれるこの三種は、もはや人智の及ぶ相手ではない。

ましてやその最高位となれば、外かいではお目にかかる機会すらないだろう。

「こんな下層すら襲う魔王といえば、彼の有名な “ルナティック・デス月夜の魔王” しか、私は知らないな」

「……それ程までに、恐ろしい魔王だったのですか?」

「黒ウサギも知って……はいないか。その魔王が滅ぼされたのは、もう千年より少し前の話だからな。だが、下層から始めた魔王で、一桁まで上り詰めた魔王は、その人物が最短だという噂だ」

「ひ、一桁!!?」

黒ウサギが息を呑む。

階層に置いて、その中心核へ近付く程に存在するコミユニティは強くなっていく。その為、一桁代とまでくればほぼ化け物クラスと言っても、全く問題がないだろう。と、レティシアが振り返る。

そこには、話に入れずに、ただ茫然と成行きを見守っていたカグヤの姿があった。

「おや？カグヤじゃないか。どうしたんだ？」

「え？カグヤ様ですか？」

話に夢中で気がつかなかったらしい黒ウサギが、慌てて振り返る。

カグヤは淡く苦笑した。

《すみません。お話し中だったようですので》

「いや、取るに足らない話だ。それより、私達に何か用でも？それとも、掃除のし忘れ部分でも見つかったのか？」

そう言って、渋い顔をするレティシア。

彼女は、この一か月カグヤより家事のイロハを徹底的に叩き込まれていた。

カグヤもレティシアが使用人となる事に、最初こそ戸惑っていたのだが、最終的にはやけっぱちにも近い勢いで吹っ切れ、レティシアの教育係として、厳しい指導を繰り返していた。

違うとカグヤが首を横に振る。

《あの、ですね。黒ウサギ、あの北側で行われる大祭の事なのですが……》

その言葉と共に、黒ウサギとレティシアが顔を顰める。

事の発端は、白夜叉より届いた招待状だった。

北で行われる“火龍誕生祭”。

大きな祭りであり、そこで行われるギフトゲームで優勝出来たなら、それなりに名も売れる様な大祭。

だが、現在の“ノーネーム”の財力では北へ行く事は無理だと判断した黒ウサギとジンは、先に控える南側の収穫祭に向けて路銀を貯める、という事を話し合い、この件は秘密という扱いとなった。

そこに丁度居合わせたカグヤ、リリ、レティシアの三名も黒ウサギよりきつく口止め

されていたのだ。

まさか、カグヤよりその件で話が出るとは思わなかったのだろう。

二人の反応に、カグヤは苦笑する。

《もう一度、考える事は出来ませんか?》

「カグヤ様……お気持ちは分かるのですが……やはり、今の財力ではとても……」

シユンとウサ耳を萎らせ、黒ウサギが申し訳なさそうに言う。

カグヤは袂に入れて置いたモノを取り出し、黒ウサギへと渡す。

不思議そうにそれを確認し、中身を見た時、黒ウサギは驚いた様に目を丸くした。

「か、カグヤ様!!これは……」

「ん……成程。最近、夜更けにどこかへ行っていると思えば、これの為だったのか」

「れ、レティシア様は知っていたのですか!?!」

「いや、何をしているか、までは知らなかった。でも、夜更けにどこかへ外出している事は、物音で少し、な」

慌てて問い詰める黒ウサギに、レティシアが苦笑する。  
もう少し説得しようと、カグヤが口を開いた時、少し離れた場所忙しない足音が響く。

「く、黒ウサギのお姉ちゃああああん！た、大変——！！」

本拠に続く道の向こうから、割烹着姿の少女が見える。

狐耳と二尾を持つ、狐娘のリリだ。

彼女は泣きそうな顔で、こちらまで走ってきている。

《リリ？》

「リリ!? どうしたのですか!？」

「じ、実は飛鳥様が十六夜様と耀様と帝様を連れて……あ、こ、これ、手紙！」

パタパタと忙しく二本の尾を動かしながら、リリが黒ウサギに手紙を渡す。

『黒ウサギへ。』

北側の四〇〇〇〇〇〇〇外門と東側三九九九九外門で開催する祭典に参加してき

ます。

貴女も後から必ず来る事。あ、後レテイシアとカグヤもね。

私達に祭りの事を意図的に黙っていた罰として、今日中に私達を捕まえられなかった場合、三人ともコミユニティを脱退します。死ぬ気で捜してね。

応援しているわ。

P/S ジン君は道案内に連れて行きます。後、乗り気な帝君もね』

《……脱退》

「……………」

「……………?」

「!？」

たつぷり黙り込む事三〇秒。

黒ウサギは手紙を持つ手をワナワナと震わせ、カグヤも肩をワナワナと震わせながら、悲鳴の様な声を上げた。

「《な、——……………何を言っちゃってんですか、あの問題児様方ああ————



!!!  
』

二人の絶叫が一带に響き渡る。

脱退とは、穏やかな話ではない。

彼女らは肝心な事を忘れていたのだ。

あの巨大な力を持つ新たな同士三人と、昔からコミュニティを支えてきた古株同士一匹は——世界屈指の最強問題児集団と苛めっ子だったのだと。

## 第十二章 逃げる問題児、追う兎

リリに手紙を預けた後、十六夜、飛鳥、耀、ジン、帝の五人は「ノーネーム」の居住区を出発し、二一〇五三八〇外門の前にある噴水広場まで来ていた。

今朝方からにぎわいを見せるペリベット通りの「六本傷」の旗印を掲げるカフェに飛鳥達は陣取り、外門の近隣を見渡していた。

「噴水広場の近くに来るといつも思うけれど……二一〇五三八〇外門のあの悪趣味なコーデイネートは、一体誰がしているの？」

飛鳥が二一〇五三八〇外門に不快そうな視線を向ける。

外門と箱庭の内壁の繋ぎ目である石柱には、巨大な虎の彫像が掘り起こされており、門の丈夫には今は無きコミュニケーション「フォレス・ガロ」の虎の旗印が刻まれていた。

ジンは溜息交じりに飛鳥へ説明する。

「箱庭の外門は、地域の権力者がフロアマスターの提示するギフトゲームをクリアする

事で、コーディネーターする権利を得ます。一種の、コミュニティの広告塔の役割もあるんですよ」

「そう……………それで、あの外道の名残が残っているの」

フンツ、と不機嫌そうに髪を掻き上げる飛鳥。

その様子に、帝が苦笑する。

「ま、この辺りは彼奴が一番牛耳ってたからな。そのコミュニティが解散して以来、ここ最近はその強いコミュニティが現れてない。だから、あの外門はそのままって事だ。勿論、俺達にも挑戦権はあるだろうが……………旗印が無いコミュニティが外門を飾っても、返ってくるのは批判だけだろうけど」

旗印も名前もないというのは、本当に不便である。

気を取り直し、全員がカフェテラスの席に向き直る。

「それで、北側まではどうやって行けばいいのかしら？」

「……………それは普通、出てくる前に調べておくべき事柄だよな？」

スカートからスラリと伸びた足を組み直し、平然と問う飛鳥へ帝がツツコむ。

久遠飛鳥は聡明な少女ではあるが、時折現実離れした感覚がある。

それは、彼女がずっと囲われながら育った事も原因の一つだろう、と帝は思っている。その飛鳥の隣で、耀が小首を傾げながら答える。

「んー……でも、北にあるっていうなら、兎に角北に歩けばいいんじゃないかな？」

「理屈としては間違っていないが……着く頃には、祭りは愚か、お前ら全員揃って老人だぞ？」

「……そんなに遠いのか？」

溜息交じりに答える帝に、今度は十六夜が首を傾げる。

どうやら、彼らはこの箱庭の地理をきっちり分かっていないらしい。

しめた、とジンがそこに勝機を見出す。

「皆さんは、北側の境界壁までの距離を知らないんですね。なら、説明する前に聞いておきますけど。この箱庭の世界が、恒星級の表面積だという話は知ってますか？」

「……………？え、恒星？」

飛鳥が素つ頓狂な声を上げる。

耀は表情を変えず、瞳を三度程瞬きする。

十六夜は首肯しながらも、ジンの言葉に眉を顰めた。

「それなら黒ウサギから聞いた。けど、箱庭の世界は殆どが野ざらしにされてるって聞いたぞ。それに大小は有っても、この都市以外にも町があると」

「そりゃ、有るだろ。ま、それを差し引いても、箱庭都市はこの世界最大規模の都市。箱庭の世界の表面積を占める比率は、他の都市とは比べものにならねえけどな」

「比率？」

ここで、飛鳥は不穏な気配を感じ取る。

その様子に、帝が苦笑した。

「なんだ、知らなかったのか？この箱庭での考え方は、比率が主だ。恒星の表面積と言っても、サイズは様々。そうだな……太陽と同等の大きさだと仮定して考えた方が、いい

かもな」

因みに、太陽と仮定して計算する場合、地球の約一三〇〇〇倍。実に馬鹿げた数字である。

十六夜は警戒しながらも、怪訝そうな表情で話を伺った。

「まさか、恒星の一割ぐらいを都市部が占めている……なんて、馬鹿な事言わねえよな？」

「そ、それは流石にありませんよ。比率といっても、その数字は極少数になります」

「そ、そうよね。それで、この場所から北側の境界線まではどのくらいの距離があるの？」

飛鳥が回答を急かせる。

ん、と帝が唸り、

「確か……ここは少しだけ北寄りだった筈だし……大体980000km位じゃないか？」

「「うわお」「」

三人は同時に、様々な声音で。

嬉々とした、唾然とした、平淡な声を上げた。

☆★☆☆☆

黒ウサギとレティシアの行動は迅速だった。

手紙を確認した後、農園跡地から戻った二人は、十六夜達がコミュニティの領地内に  
いないかを確認。



最後に宝物庫の鍵を持って下りた黒ウサギは、豪奢な扉と結界を解除。

その中にある、なけなしの資金を確認し、全員が待つ玄関前へと移動した。

そこには、既に確認を終えたらしいレティシアと、放心状態と言つてもいいカグヤ、そしてそれを看病するリリ、搜索を終えた年長組の子供達。

「食堂にはいなかったよ!」

「大広間、個室、貴賓室、全部見てきた!」

「貯水池の付近もいないっ!」

「お腹すいた!」

「それはまた後でな。……それで、金庫はどうだ?」

「コミュニティのお金に手を付けた形跡はありません。しかし、皆さんの自腹で境界壁

まで向かえる筈がございませぬ!」

「か、カグヤ様!大丈夫ですか!?!」

《……ええ。ごめんなさいね、リリ》

ふらふらと立ち上がったカグヤへ、リリが気遣わしげに付き添う。

だが、その目は死んだ魚の如き濁った色をしていた。

ふふふ……と彼女から、不気味な笑い声が眩かれる。

《そうですね……そんなに……》

「か、カグヤ様!? 気をしっかりして下さい!!」

流石に、これは異常すぎる。

怖がる子供達に変わり、慌てて黒ウサギがフオローに回る。

そんな黒ウサギの腕を、ガシツと掴み、

《どうやら……またお説教が必要そうですね》

ギンツとその瞳にドス黒い怒りの色が浮かぶ。

《お金がなければ、門の起動は不可でしょう。レティシアは、招待主である白夜王を押さ  
えに行つて下さい! 私と黒ウサギは、一応境界門に向いましょう!! もし、レティシアが  
止められなかったとすれば、境界門を起動させる必要性が出てきます! “箱庭の貴族”  
である貴女なら、境界門の起動にお金はかかりません。私には……これがありますの

少しだけ、悲しげにカグヤは袂に入れてあるモノを取り出す。

それは、美しい着物の布を利用して作られた巾着。

それを目に、ギユツと唇を咬む彼女は今にも泣きそうに見えて、レティシアと黒ウサギは互いに顔を顰めた。

だが、それもすぐに消え、黒ウサギの瞳には、嘗て無い程の怒りの火花が散っていた。

「あの問題児様方……！今度という今度は絶対に！！絶対に許さないのですよーッ！！」

怒りのオーラで髪を淡い緋色に染め、本抛の外に出るや否や、土埃を巻き上げて黒ウサギは爆走する。

その後ろを芭蕉扇を利用して飛ぶカグヤが、これまた疾風の如き速度で追っていくのだった。



☆☆☆☆

「いくらなんでも、遠過ぎるでしょう!？」

お馬鹿な数字を聞かされ、カフェのテーブルを叩いて講義する飛鳥。  
負けじと叫び返すジン少年と、よく分からないとでも言いたげな帝狼。

「ええ、遠いですよ!!箱庭の都市は、忠臣を見上げた時の遠近感を狂わせる様に出来ている為、肉眼で見た縮尺との差異が非常に大きいです!!」

「あのな。ここは一番外側なんだぞ?どう考えたって、一桁台のコミュニケーションが犇めく中心に、弱小コミュニティが近くある訳ないだろ。そんな事したら、いつだって狩り放題じゃないか」

だから、止めましょうってあれ程言っただんじやないですかーッ!!とジンが叫ぶ。  
考えてなかったのか?と帝が首を傾げる。

その隣で、十六夜は冷静に箱庭を考察する。

「……………そうか。箱庭に呼び出された時、箱庭の向こうの地平線が見えたのは、縮尺そのものを誤認させるようなトリックがあつた訳か」

彼らが召喚された時、箱庭の都市の縮尺を見間違つたのは、巨大だからという理由だけではなかつた。

一見して巨大な外観を持つ箱庭の都市だが、よく見るとより一層巨大な都市なのだ。具合が悪そうに黙り込む飛鳥だが、仕方なさそうに足を組み直して再提案する。

「そう。なら仕方がないわ。『ペルセウス』のコミュニティへ向かつた時の様に、外門と外門を繋いでももらいましょう」

「馬鹿言うな。『境界門』アストラルゲートを使うなんて、コミュニティを破産させる事と同意義だぞ？」

帝が顔を顰める。

——『境界門』とは、莫大な土地を有する箱庭を行き来する為に設けられた、外門と外門を繋ぐシステムの事である。

地域の権力者が外門の造形をコーディネートする利権を欲しがるのは、行商や興行、ギフトゲームの開催や出場等、移動の拠点として多く使われるからだ。

コミユニティの名前を広く宣伝するには、これ以上ないアピールだろう。帝の非難に続き、ジンも言う。

「外門同士を繋ぐ、境界門」を起動させるには、凄くお金がかかります！ // サウザンドアイズ” 発行の金貨で一人一枚！五人で五枚！コミユニティの全財産が金貨四枚です、もう大赤字ですよ!!」

流星に、こればかりは帝とて容認できない。

それを全額使えば、コミユニティにいる子供の何人かは確実に餓死するだろう。

二人の反論に、苦々しい顔で再度黙り込む飛鳥達。

「……980000 kmか。流星にちよつと遠いな」

軽薄な笑みを浮かべる十六夜だが、流星に打つ手がない様子。

コミユニティを破産させる訳にもいかないし、如何に彼らでも地球の二十五個分も歩

く訳にはいかない。

帝がいう様に、着いた頃には祭りは愚か、老人になってもおかしくはないだろう。ジンは必死に気持ちいを落ち着かせ、穏やかな口調で三人を諭す。

「今なら笑い話で済みますから……皆さんも、もう戻りませんか？」

「断固拒否」

「右に同じ」

「以下同文」

「だってよ、リーダー」

ガクリ、と肩を落とすジン。

その背を、帝がポンポンと叩いて慰めた。

だが、彼もどちらかと言えば問題児よりな立場な為、この行為は馬鹿にしている様にも見える。

飛鳥が勢いよく立ち上がり、ジンのローブを掴む。

「黒ウサギ達にあんな手紙を残して引けるものですか！」



「手紙……？おい、どういふ事だ？」

手紙、という言葉に、帝が怪訝そうに首を傾げる。

実は、帝と三人がここへ来る前に、一度だけ別行動をした時間がある。

三人曰く、準備だとの事だった為、帝は大人しく床に山積みとなっていた本を片付けていたのだ。

北側に向かうとなれば、それなりに時間がかかるし、上手く行けたならばそのまま滞在する事になる。

そう思えば、書庫の掃除位はしておくべきだろう、と生真面目に考えたのだ。

そういう所は律儀な狼である。

と、ジンが慌てて帝へ手紙についてを訴える様に説明する。

すると、帝の表情はみるみる険しいものへと変わる。

「コミュニケーションを脱退?!?!馬鹿か?!?!」

あらん限りの怒鳴り声に、飛鳥と耀が身を固くし、十六夜が軽く肩を竦める。

幾ら問題児寄りだとはいえ、彼は箱庭で生まれ、箱庭で育った者。

コミュニティの脱退等と言われれば、怒る事は必然だ。

だが、自分が怒鳴った所で今の彼らのどれだけの反省の色が出るだろう。

正直、帝はそういつた事が上手いとは思っていない。

それは、専らカグヤと黒ウサギの仕事だ。

はあ、と帝が肩(?)を落とす。

「……仕方ない。取り敢えず、白夜叉からの招待状だったよな？彼奴がただの親切心で送ってきたとは思えない。多分、それ相応の依頼と見るべきだろう。一旦、〴〵サウザンドアイズ〴〵に行ってみるか」

「おう！〴〵サウザンドアイズ〴〵へ交渉に行くぞゴラア！」  
「行くぞコラ」

ここまですれば、もう自棄なのだろう。

陰鬱に呟く帝。

ヤハハとこちらも自棄気味にハイテンションな十六夜に続き、その場のノリで声を出す耀。

一同は、〴〵サウザンドアイズ〴〵へ向かうという事で針路を取った。



☆☆☆☆

「サウザンドアイズ」支店。

良く合う割烹着姿の女性店員との一悶着を終え、毎度毎度の熱烈で少し馬鹿過ぎる白夜叉の歓迎を受けながら、一同は白夜叉の座敷に招かれた。

和室に着き、世間話もそこそこに、白夜叉は幼い顔に厳しい表情を浮かべ、カン！と煙管で紅塗りの灰吹きを叩いて問う。

「本題の前にまず、一つ問いたい。『フォレス・ガロ』の一件以降、おんしらが魔王に関するトラブルを引き受けるという噂があるそうだが……真か？」

「ああ、その話？それなら本当よ」

飛鳥が正座したまま首肯する。

白夜叉が小さく頷くと、視線をジンに移す。

「ジンよ。それはコミュニティのトップとしての方針か？」

「はい。名と旗印を奪われたコミュニケーションの存在を手早く広めるには、これが一番いい方法だと思いました」

箱庭の都市は巨大だ。

修羅神仏が群雄割拠するこの異界で、自らの組織の象徴<sup>シンボル</sup>——即ち、“名”と“旗印

”は、コミュニケーションの命とも言える大事なファクター。

それを補う為に、ジン達のコミュニケーションは“打倒魔王”という特色を持つコミュニケーションを造ろうというのだ。

ジンの返答に、白夜叉は鋭い視線を返す。

「リスクは承知の上なのだな？そのような噂は、同時に魔王を引き付ける事にもなるぞ」「覚悟の上です。それに仇の魔王からシンボルを取り戻そうにも、今の組織力では上層部には行けません。決闘に出向く事が出来ないなら、誘き出して迎え撃つしかありません」

「無関係な魔王と敵対するやもしれん。それでもか？」

上座から前傾に身を乗り出し、更に切り込む白夜叉。

その問いに、傍で控えていた十六夜が不敵な笑みで答える。

「それこそ望むところだ。倒した魔王を隷属させ、より強力な魔王に挑む。打倒魔王」  
を掲げたコミュニティ——どうだ？修羅神仏の集う箱庭の世界でも、こんなカツコい  
いコミュニティは他に無いだろ？」

「……………ふむ」

茶化して笑う十六夜だが、その瞳は相も変わらず笑っていない。

この男は一見して何も考えてない様だが、リスクを天秤に掛けて考えられるという程  
度には、白夜叉は評価していた。

「して……………おんしはどうだ？帝」

「……………俺が、コミュニティの方針を止めろと言える立場に見えるか？」

「いや……………だが、おんしは魔王との係わりを嫌っているだろ？」

その一言で、帝の表情が苦しげに変わる。

白夜叉の言葉の意味が分からない他の同士達は、不思議そうに首を傾げている。

やや間を置いて、帝が佇まいを正した。

「白夜叉。俺には恩義がある。このコミュニケーションに拾われて、もう数千年。俺は、今でも妹共々拾ってもらった日の事を忘れた事はない」

「だが、『打倒魔王』を掲げた以上、おんしにとつても、カグヤにとつても辛い未来が待っているやもしれん。いや、絶対におんし達の前に現れるだろう。それでも」  
「くどい!!」

一喝にも似た声で白夜叉の言葉を遮る。

彼女は暫し瞑想し、呆れた笑みを唇に浮かべた。

「そこまで考えての事ならば良い。これ以上の世話は老婆心というものだろう」  
「……悪いな、白夜叉」

少しだけ申し訳なさそうに呟く帝へ、白夜叉は優しく笑んで首を横に振る。  
そして、真っ直ぐとジーンを見た。

「その『打倒魔王』を掲げたコミュニティに、東のフロアマスターから正式に頼みたい事がある。此度の共同祭典についてだ。よろしいかな、ジン殿？」

「は、はい！ 謹んで承ります！」

子供を愛でる様な物言いではなく、組織の長として言い改める白夜叉。

ジンは少しでも認められた事にパツと表情を明るくして応えた。

「さて、では何処から話そうかの……」

カン。と煙管で紅塗りの灰吹きを軽く叩き、一息つく白夜叉。

何処から話したものと中庭に眼を向け、遠い目をした後。

ふっと思いついた様に話し始める。

「ああ、そうだ。北のフロアマスターの一角が世代交代をしたのを知っておるか？」

「え？」

「……へえ〜。つまり、あの爺さんは引退したって事か」

「うむ。急病で引退だとか。まあ亜龍にしては高齢だったからのう。寄る年波には勝て





設けられた制度だ。基本的な仕事としては、箱庭内の土地の分割や譲渡、コミュニティが上位の階層に移転できるかどうかを試す試験ゲームを行うとかだ。それとは別に、階級支配者には下位のコミュニティを守る義務がある。これは、秩序を乱す天災・魔王が現れた場合、彼らが率先して戦うって事だ。その義務と引き換えに、膨大な権力と最上級特権ホストマスターが与えられる」

「しかし、北は複数のマスター達が存在しています。精霊に鬼種、それに悪魔と呼ばれる力ある種が混在した土地なので、それだけ治安も良くないですから……」

ジンはそれだけ説明すると、悲しげに眼を伏せた。

「けど、そうですね。『サラマンドラ』とは親交があつたのですけど……まさか頭首が替わっていたとは知りませんでした」

「元盟友とはいえ、俺達が『ノーネーム』に墜ちてからは一方的に手打ちしてきてるからな。それで？ 頭首になりそうなのは長女のサラ様か……才能はないが、次男のマンドラ辺りとか？」

「いや。頭首は末の娘——おんしと同一年のサンドラが火龍を襲名した」  
「末娘!？」

は？とジンが小首を傾げ、帝が目を丸くして叫ぶ。

流石に、予測していなかったのだろう。

少し置いて、ジンは驚きのあまり身を乗り出した。

「サ、サンドラが!? え、ちょ、ちょっと待って下さい! 彼女はまだ十一歳ですよ!」

「あら、ジン君だつて十一歳で、私達のリーダーじゃない」

「そ、それはそうですけど……いえ、だけど、」

「飛鳥、今回の件は俺達と同じ様に見るな。今回ばかりは、俺でも納得できない」

「なんだ? まさか御チビの恋人か?」

「ち、違つ、違います! 失礼な事を言うのは止めて下さい!!」

ヤハハと茶化す十六夜、怒鳴り返すジン。

普段なら、それに帝が便乗してきそうなものだが、彼は沈黙を保ったまま、何やら考え込んでしまった。

全く関心の無い耀が続きを促す。

「それで？私達に何をして欲しいの？」

「そう急かすな。実は今回の誕生祭だが、北の次代マスターであるサンドラのお披露目も兼ねておる。しかしその幼さ故、東のマスターである私に共同の主権者ホストを依頼してきたのだ」

「あら、それは可笑しな話ね。北は他にもマスター達が居るのでしよう？なら、そのコミュニティにお願いして共同主権すればいい話じゃない？」

「……………うむ。まあ、そうなのだがの」

急に歯切れが悪くなる白夜叉。

ポリポリと頭を搔いて言いくそうにしていると、十六夜が隣から助け船を出した。

「若い権力者を良く思わない組織が在る。——とか、在り来りにそんな所だろ？」

「んー……………ま、そんなところだ」

途端に、飛鳥の顔が不愉快そうに歪む。

まさか、そんな陳腐な話が絡んでくるとは思わなかつたのだろう。

飛鳥の眼に見える程強い怒りと、落胆の色が浮かんだ。

「……そう。神仏の集う箱庭の長達でも、思考回路は人間並みなのね」  
「馬鹿いうな。箱庭の長ともなれば、人間以上に腐ってる」

飛鳥の言葉へ、帝が吐き捨てる様に言う。

その瞳には、怒りよりも深くドス黒い憎悪が浮かぶ。

ゾクリ……と一同の背筋に、冷たいモノが流れる。

「帝、よさぬか。飛鳥も手厳しい。だが、全くもってその通りだ。実は東のマスターである私に共同祭典の話を持ちかけてきたのも、様々な事情があつてのことなのだ」

申し訳なさそうな苦々しい顔で項垂れる白夜叉。

重々しく口を開こうとした白夜叉を、耀がハッと気が付いた様な仕草で制す。

「ちよつと待って。その話、まだ長くなる？」

「ん？んん、そうだな。短くとも後一時間程度はかかるかの？」

「それ不味いかも。……………黒ウサギ達に追いつかれる」

ハッ、と他の問題児二人とジンも気が付く。

一時間も悠長に留まれば、黒ウサギ達に見つかる事は避けられないだろう。

何より、彼女達とて馬鹿ではない。

“境界門”が使えないと分かっているだろうから、必然的に招待者である白夜叉の所を訪れると、彼女達も予測できるだろう。

ジンが咄嗟に白夜叉へ懇願しようとする——その前に、十六夜が捲し立てる。

「白夜叉！今すぐ北側へ向かってくれ！」

「む、むう？別に構わんが、何か急用か？というか、内容を聞かず受諾してよいのか？」

「構わねえから早く！事情は追々話すし、何より——その方が面白い！俺が保証する！」

十六夜の言い分に白夜叉は瞳を丸くし、呵カと哄笑を上げて頷いた。

「そうか。面白い。いやいや、それは大事だ！娯楽こそ我々神仏の生きる糧なのだから

な」

白夜叉は楽しげに笑うと、両手を前に出し、パンパンと拍手を打つ。

「——ふむ。これでよし。これで御望み通り、北側に着いたぞ」

「——……………は？」

その場にいた、全員が素っ頓狂な声を上げる。

それもその筈だろう。

北側までの980000kmという馬鹿馬鹿しい距離を、こんな僅かな時間で飛び越えられる訳がない。

……という疑問は一瞬で過ぎ去り、次の瞬間、嬉々として三人が一目散に店外へ走り出す。

その姿に、帝も苦笑しつつ店外へと走った。

——東と北の境界壁。

四〇〇〇〇〇〇〇外門・三九九九九九外門、  
サウザンドアイズ旧支店。  
三人が店から出ると、熱い風が頬を撫でた。



場所は平地ではなく高台へと移動した“サウザンドアイズ”の支店から、眼下に広がる街並みを眺め、彼らは瞳を輝かせる。

「赤壁と炎と……………ガラスの街……………?!」

飛鳥が感嘆の声を上げる。

帝も久々に見る北側の街に、胸を躍らせていた。

東と北を区切る、天を衝くかという程巨大な赤壁。

あれは境界壁だ。

そこから掘り出される鉱石で彫像されたモニメントに、境界壁を削り出す様に建築したゴシック調の尖塔群のアーチと、外壁に聳える二つの外門が一体となった巨大な凱旋門。

数年前に訪れた時と、何一つ変わらない景色は少しだけ嬉しい気分にしてくれる。

「へえ……………980000 kmも離れているだけあって、東とは随分と文化様式が違うんだな」

「人が住みやすくなってる東とは違い、北側は厳しい環境の中で生き抜く為のギフトが

発展したんだ。ここはこんなにも明るく、暖かな印象だが、其処の外門から一步外にでれば、見渡す限りの銀世界。とてもじゃないが、人が住める場所じゃない」

喜んで街を見渡す十六夜へ、帝が簡単に補足する。

白夜叉も、自分が褒められているかの様に自慢げに、胸を張っている。

「ふうん。厳しい環境があつてこそその発展か。ハハッ、聞くからに東側より面白そうだ」  
「……むっ？それは聞き捨てならんぞ小僧。東側だつていいものは沢山あるっ。おんしらの住む外門が特別寂れておるだけだわいっ」

だが、一転して拗ねた様に口を尖らせてしまった。

「ノーネーム」がよく利用する二一〇五三八〇外門は「世界の果て」と向かい合っている為、箱庭外で手に入る資源が少ない。

その為、力の無い最下級コミュニティでは発展に限度があるのだ。

「そうだな、と帝が笑う。

「いつか、別の東側都市に案内してやるよ。普段見ているペリベットよりもっと楽しい

モノが見つかるかもしれないしな」

それまでの間に、出来るだけ名を売る努力が必要だろう。

商業系コミュニティ相手には、それなりの信頼が絶対条件。

唯でさえ「名無し」扱いされる「ノーネーム」では、ゲームにすら参加させてもらえない危険性があるのだから。

ウキウキと街へ降りる話し合いを始めた時

「見イつけた————のですよおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお！」

ズドオン!!と、ドップラー効果の効いた絶叫と共に、爆撃の様な着地。

その声に、跳ね上がる一同。

大声の主は我らが同士・黒ウサギ。

「ふ、ふふ、フフフフ………！ようおおおやく見つけたのですよ、問題児様方………！」

淡い緋色の髪を戦慄かせ、怒りのオーラを振りまく黒ウサギ。

その姿に、帝は表情を引き攣らせた。

度々黒ウサギを苛めてきた彼ではあるが、ここまで怒り狂った姿を見た事がない。

どうやら、あの手紙が相当頭にきたのだろう。

危機を感じ取った問題児の中で、真っ先に動いたのは十六夜だ。

「逃げるぞツ!!」

「逃がすかッ！」

「え、ちよつと、」

十六夜が隣に居た飛鳥を抱きかかえ、展望台から飛び降りる。

その後ろを鬼の様なスピードで追う黒ウサギ。

耀は旋風を巻き上げて空に逃げようとした。

その瞬間、彼女が巻き上げた旋風よりも激しい疾風が、耀の身体を絡め取る。

「わ、わわ、……………！」

体のバランスを崩し、耀が落下する。

ズガンズガンズガン、と鋭い音を上げて、何かは耀のジャケットを二か所、そして帝の鼻先に突き刺さる。

——それは、何の変哲もない竹串。

だが、その竹串は第三宇宙速度も真つ青なスピードで飛来し、岩の地面に減り込んでいる。

ギギツと耀と帝が飛んできた方向を見る。

そこにいたのは

《どちらへ、行かれるのですか？耀様……………帝兄さん……………》

静かに小袖をはためかせるカグヤの姿。

彼女からも尋常ではない怒りオーラが漏れ、もう普段の般若を通り越し、閻魔の如き

迫力を纏っている。

流石に、これはマズイ、と帝と耀が慌てる。

「か、カグヤ……?」

「わ、悪かったよ！俺も手紙の事知らなかったんだ。だが、止めなかった事は認める!!だから、少し落ち着——」

スパンツ、スパンツ、乾いた音が響く。

二人は一瞬、何が起こったのか分からなかった。

やっと、カグヤが頬を打ったのだと気付いた時には、帝と耀の頬は赤くなり、ジンジンと痛みを発していた。

俯き加減のままにいるカグヤ。

そこへ、恐る恐る帝が様子を窺う。

「か、カグヤ……?」

次の瞬間、弾ける様にカグヤが顔を上げ……帝と耀は絶句した。

彼女は、空色の瞳に怒りの色を宿しながら——ボロボロと涙を流していたのだ。普段の彼女らしくない行動に度肝を抜かれていた時

《帝兄さんと耀様の馬鹿!!!大嫌い!!!》

叫ぶ様にそれだけ言うと、カグヤは芭蕉扇の疾風を利用し、街の方へと飛んで行った。残された二人は、ただポカン、とその後ろ姿を見送る。

どうして、こうなったのだろう。

全く状況が読めないまま、固まる帝と耀。

「……………おんしら、一体あの子に何をしたんだ？」

唯一人、怒った様な呆れた様な調子で、白夜叉が溜息を零した。

・



## 十三章 売り言葉に買い言葉

カグヤは一時、芭蕉扇での飛行をやめ、街中へと降り立つ。

どうにも、彼らを見失ったらしい。

煉瓦状の石造りで出来た建物を見渡しつつ、カグヤは耳を澄ませながら、残り二人の問題児を探す。

……この街並みに、カグヤは見覚えがあった。

それは、まだコミュニティが大きく拡大中だった頃。

先代を筆頭としたプレイヤー達と共に、カグヤは帝に手を引かれてここへ来たのだ。

普段とは違う風景、見慣れない人々。

その全てが、幼いカグヤには新鮮に写り、夢中で帝に質問した事を今でも覚えている。

その度に、顔を顰めて「あれは……」と言葉を詰まらせる兄を、コミュニティの同士達がからかっていた。

そして、兄は顔を真っ赤にしながら怒って、そのまま鬼ごっこの様に町中を駆けま

わったのだ。

あの頃は、わくわくしながら帝と一緒に鬼ごつこの様な追いかけっこに参加していたが、今は全く楽しくない。

寧ろ、カグヤの心には暗い影が彩り、気分を陰鬱とさせる。あれ程光り輝いて見えた景色が、今ではただの石ころ程度。はあ、とカグヤの口から溜息がこぼれた。

「私……箱庭に来て良かったわ」

ピタツ、とカグヤの足が止まる。

声は聞き覚えのある少女のモノ。

カグヤは周りの人々の間を縫う様にして、声の主を探す。

そこにいたのは、真っ赤なドレスワンピースが印象的な少女と、学ランを纏う少年……飛鳥と十六夜がいた。

カグヤの中で、黒い何かが疼く。

「なあ、お嬢様」

「何?」

「ハロウインが、元々は収穫祭だつて事は知ってるか?」

え? つと、飛鳥が首を傾げる。

「ついでに言うのだ。『ノーネーム』の裏手には莫大な農園跡地があつてだな。あの土地を復活させれば、コミュニティも大助かりだと思ふんだが………如何なものだろう?」

ふと、カグヤの頭にあの砂利しかない白地の土地が浮かぶ。

あの農園跡地が沢山の緑で埋まるのなら、それは素晴らしい眺めとなるだろう。

十六夜が笑う。

「農園を復活させて——いつか俺達で、俺達のハロウインをしよう——という提案なんだが、お嬢様はどう思う?」

樂しげに笑う十六夜。

その言葉の裏にあるものは、一つだけだろう。

「私達のコミュニティで……ハロウインのギフトゲームを主催する、という事？」

「ああ。箱庭で過ごす以上、やっぱり『主催者』<sup>ホスト</sup>は経験しないと」

十六夜の言葉に、ペアと瞳を輝かせた飛鳥は、感嘆の声を上げた。

「素晴らしい提案だわ！それならコミュニティも助かるし、とても楽しそうなもの！」

「ハハ、流石に話が分かるなお嬢様！じゃあ、俺達が最初に『主催者』をするギフトゲームはハロウインで予約しておこうぜ。あと、どんなアレンジをするかも考えておかないとな」

「そうね、そうね。私達が主催するハロウイン……ふふ。じゃあ、収穫祭を行う為にも、まず」

《農地の復活が先かと思えます》

「そうよね。農地が元に戻らないと、話にならないわね。それから……」

《でも、悩む必要はないと思いますよ？だって……お二人はコミュニティを脱退するの、で、し、よ、う？！》

え？、と飛鳥と十六夜が振り返る。

そこには、まるで亡霊の様に立つカグヤの姿があつた。  
ビクツと二人の肩が跳ねる。

「か、カグヤさん？手紙にも書いてあつたでしょう？私達を捕まえれば、私達はコミュニティにずっといるのよ？」

《そうですか。お二人にとって、コミュニティとはその程度の価値しかない、ただの烏合の衆ですか》

「……おい、カグヤ？」

流石に様子がおかしい。

取り付く島がなさすぎるカグヤの反応に、逃げる事も忘れて困惑する二人。

何より、カグヤは飛鳥と十六夜を見つけたにも拘わらず、二人を捕まえる素振りすら見せない。

カグヤの濁った瞳が、二人を移す。

《……私は、ずっと役立たずでした》

「ちよつと、カグヤさん？本当にどうしたの？貴女、具合でも……」

《私は兄の様に戦えません。ずっと、隠れて震える事しか出来ない愚か者です。それでも……それでも!!皆様のお役に立ちたくて!!でも、私程度ではゲームに勝つ事すら困難で!!だから、せめて……せめて皆様の行動だけでも支えられるようにと……》

「おい。落ち着けよ、カグヤ」

訳が分からないいでも言いたげに、十六夜がカグヤの肩に触れようとする。

だが、その手をパシッとカグヤの手が叩き、そのまま

パシンツ、パシンツ、と乾いた音。

「痛……え？」

飛鳥は叩かれた頬を押さえ、茫然とする。

こればかりは、十六夜も同じだった様で、彼も赤くなつた頬を押さえ、驚いた様にカグヤを見る。

彼女が覇裏戦<sup>ハリセン</sup>で殴る事はあったが、こうして直接手を上げてくる事は今までになかった。

あの覇裏戦は音はかなり大きいのが、痛みは対してないのだ。

だが、今叩かれた頬は真っ赤になり、ジンジンと痛んでいる。

だが、それ以上に……カグヤは泣いていた。

綺麗な空色の瞳は涙でキラキラと光り、頬を濡らす。

《十六夜様も、飛鳥様も大馬鹿者です!!!大嫌いです!!!御二人がお戯けで脱退すると言っているのであれば、カグヤはもう知りません!!!私の方が、コミュニケーションを脱退させていただきます!!!》

馬鹿つ!!と暴言を吐くと、カグヤは人混みの中へと身を躍らせていった。

いきなりの事でポカン、としてしまった二人ではあるが、ただ一つだけマズイと思う事がある。

——彼女がコミュニケーションを脱退すると言ったのだ。

あの真面目な彼女であれば、きっと本気で脱退するだろう。

サア……と飛鳥の顔から血の気が下がる。

このまま放っておく訳にはいかない。

「と、兎に角、カグヤさんを追いかけるべきね」

暫し混乱したが、それが大事だろう。

飛鳥はスカートを翻して彼女を追おうとする。

その時、

「お二人様!!逃がさないのですよおお!!」

タイミングが悪い事に、黒ウサギに発見されるのだった。





☆☆☆☆

場所は移り、〃サウザンドアイズ〃支店。

早々に捕まってしまった耀と帝は、お茶を啜りつつ、事の顛末を白夜叉へと話していた。

白夜叉は話を聞くと、呆れた様に扇子で肩の辺りをポンポンと一定のリズムで叩いた。

「……成程のう。おんし達らしい悪戯だ。だが、それではカグヤが烈火の如く怒るのも領ける……いや、あれは悲しんでいた、の方が正しいかもしれない」

「確かに、俺もやり過ぎだとは思ったよ。〃脱退〃だなんて、悪戯けにも程がある。でも、あそこまで反応するとは、流石に思わなかった」

はあ、と帝が溜息を漏らす。

普段から、ちよつとした悪戯程度なら彼女は怒りながらも、最終的には罰を与えて、困った様に笑っていた。

それが、まさか〃大嫌いだ〃と叫ばれた挙句、叩かれるとは思ってもみなかったのだ。耀が少しだけ拗ねた様に口を尖らせる。

「少しだけ、私もやり過ぎかな？って思った。だ、だけど、黒ウサギやカグヤだって悪い。お金がないことを説明してくれば、私達だって、こんな強硬手段に出たりしないもの」  
「……………なんじゃ？おんしら、あの子が路銀を支度していた事をしらのか？」

耀の言い分に、白夜叉が首を傾げる。

カグヤが路銀を準備していた…………。

その言葉に、耀と帝が目を丸くする。

「……………白夜叉、詳しく教えてくれ」

「ん？構わんが……………そうだなあ、あの子が私の元を訪れたのは、おんし達が『ペルセウス』とのギフトゲームを終えてから、数日経った頃だったか。突然、何か祭りはないかと尋ねてきたのだ。それで、近々北で祭りが催される、と教えてあげてな？」

白夜叉は困った様な笑みで、その日の事を語る。

まだ、火龍誕生祭が開催される、と確実に決まった訳ではなかった時だったが、カグヤはそれを大いに喜んだ。

そして、白夜叉に働き先の斡旋を頼んだのだ。

勿論、彼女には「ノーネーム」の使用人としての仕事もある。

その為、働ける時間は夜のみ。

そこで、白夜叉は「サウザンドアイズ」でも取引のある、それなりに儲かっているバーでの仕事を彼女に薦める事にしたのだ。

「あのような場所であれば、あの子の舞もいかせると思つてな」

そして、それ以来カグヤは日中は「ノーネーム」の使用人としての家事業務と、新たに仲間入りしたレティシアの指導、夜は遅くまでバーでの仕事に精を出していたらしい。

その甲斐もあつて、彼女は無事に路銀を全員分稼いだのだとか。

「……成程な。だから、最近日中に眠そうに目を擦つてた訳だな」

話を聞くと、帝は苦笑した。

確かに、あの妹がしそうな事だ。

多分、自分達に過度の期待を持たせぬ様、路銀が溜まってから打ち明けようと思つていたのだろう。

シユン、と耀が悲しげに顔を顰める。

「……知らなかった。カグヤ、私達の為に働いてくれてたの?」

「箱庭では、ゲームに参加出来ない者がプレイヤーを支える事が義務。一応、ゲームデビューしたつていうのに、彼奴は本当に律儀というか、なんとというか」

「ふふ。あの子らしいと思わんか?それに……帝。おんしの言葉もきっかけみたいだぞ?」

「……俺の言葉?」

「『あいつらに、もつと経験を積ませてやりたい』……カグヤはそれを実現しようと、陰ながら支える努力をしていたんだろう」

柔らかに笑む白夜叉へ、帝は暫し茫然とした。

確かに、前にカグヤと今後を話し合った時、自分が言つた事だ。

正直、新たに迎えた同士の實力は最下層では、可哀想なくらい能力を發揮できない様に見えた。

仮にも『打倒魔王』を掲げるコミュニティとして、経験は大事な財産。

彼らには、もつと質のある経験をさせてやりたい……

そう、確かに自分は言った。

だが、まさかカグヤがそれを気にして、白夜叉に相談していたとは思ってもみなかった。

黙り込む二人に、白夜叉は苦笑する。

「話は変わるのだが……おんしらに出演して欲しいゲームがある」

「私と……」

「……俺に？」

キョトン、と首を傾げる耀と帝。

白夜叉は先程のチラシを、着物の袖から取り出して見せた。

『ギフトゲーム名 『造物主達の決闘』』

・参加資格、及び概要

・参加者は創作系ギフトを所持。

・サポートとして、一名までの同伴を許可。

・決闘内容はその都度変化。

・ギフト保持者は創作系のギフト以外の使用を一部禁ず。

・授与される恩恵に関して

・ “階級支配者” の火龍にプレイヤーが希望する恩恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、両コミュニティはギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ” 印

“サラマンドラ” 印

「……？ 創作系のギフト？」

「人造・霊造・神造・星造を問わず、製作者が存在するギフトの事だ。北はその過酷な環境故に、魂と癒着しているギフトではなく、恒久的に使える創作系ギフトが重宝される傾向にあるんだ。だから、東と違ってその技術や美術的価値を競うゲームが結構行われている」

「うむ。おんしが父から譲り受けたギフト—— “ゲノム・ツリ” は技術・美術共に優れ

ておる。人造とは思えん程な。展示会に出しても良かったのだが、そちらは出場期限がきれておるしの。帝がもつ<sup>フエンリル・ラッグナロク</sup>神を喰らう大狼<sup>ノ</sup>も、見た目こそシンプルだが、それに宿る恩恵は強力無比。無効化系の恩恵の中では、かなり強力な部類だろう。おんしらの恩恵であれば、力試しのゲームも勝ち抜けると思うのだが……」

「そうかな？」

「二チーム参加してれば、必ずどちらかが生き残るだろ。ま、俺は余裕で勝ち上がれる自信があるが？」

ニタリと自信満々に笑う帝に、ムツと耀が顔を顰める。

彼は、耀が負けると暗に言いたいらしい。

「私だつて余裕。帝こそ、途中でバナナにでも足を取られて、負けちゃうんじゃない？」

「お、言ってくれるねえ。新人」

バチバチと見えない火花が互いに散る。

先程とは打って変わっての姿に、白夜叉は楽しげに笑う。



「うむ。その意気や良し」

「それで……参加に当たり、幾つか質問してもいいか？」

「うむ。ルールについてかの？」

「そ。このサポートについてだが……事前登録制か？」

「いいや。同じコミュニティの者であれば、変更は自由だが」

「ふうん。後、この『ギフト保持者は』の文。これは、サポーターも適応か？一部禁ずつてのは、どの程度まで禁止になる？」

「さてさて。質問を一気に並べるでない。まず、サポーターに関してじゃが、それはノードな。創作系ギフトを推奨するが、サポーターに強制はせぬ。次に、一部禁ずじゃが……それは、ある程度という事。創作系ギフトを持つていながら、自身に宿る恩恵ばかりを使う事を禁ず、程度に考えておればよい」

他に質問は？と問う白夜叉へ、耀が控えめに手を上げた。

「ね、白夜叉」

「なにかな？」

「その恩恵で……黒ウサギと仲直りできるかな？カグヤも、また笑ってくれるかな？」

幼くも端正な顔を、小動物の様に小首を傾げる耀。  
それを見て、やや驚いた様な顔の白夜叉と帝。  
しかし、次の瞬間に温かく優しい笑みで、彼女が頷く。

「出来るとも。おんしがそのつもりがあるのならの」  
「……そっか。それなら、頑張らなきや」

コクリ、と頷く耀へ、帝は笑みを噛み殺す。  
彼女達に好いてもらえている事を、妹はどれだけ自覚しているのだろう。  
そんな事を思いながら、ゆっくりと尻尾を振った。



☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆

カグヤはボンヤリとしながら、喧騒の中をトボトボと歩いていた。

今回の事で、あの三人や兄が全面的に悪いとは思わない。

隠していた黒ウサギやジン、そして黙って路銀を集めていた自分にも非はあつただらう。

それでも……カグヤの心中は穏やかにはなれなかった。

プレイヤーとしては役に立てたと思つた事はなかった。

だから、せめて彼らの為になる事を、と思つて初めた路銀も今は意味のない鉄くずですら思えてしまう。

ちやんと、理解しているのだ。

これが……八つ当たりの様なものだ。

別に、彼らが行きたいと駄々を捏ねた訳ではない。

自分に路銀を稼げと言つた訳ではない。

これは、自分で判断し、自分でしたいからしたのだ。

それなのに、彼らが勝手に出発し、  
“脱退”という彼らにとっての悪戯けで激怒して  
……

はあ、とカグヤの口から溜息がこぼれる。

《私……一体何をしているのでしょうか》

情けなくて、また涙が溢れる。

勢いに任せて、脱退まで宣言して……本当にどうしたらいいのだろう。

後悔、後に絶たずとは、本当によくできた言葉だ、とカグヤは内心で自身を嘲笑う。それにしても、とカグヤは現実から逃れる様に思考を切り替える。

こんなにも、感情を剥き出しにしたのは本当に久しぶりな気がする。

勿論、彼らがコミユニティに来てからは肉体的疲労感よりも、精神的疲労感の方が重症だったと思う。

元より、破天荒な兄のストッパーとして、あれこれ口出しする癖はあったのだが、ここまで誰かを追いかけては長々と説教し、罰を与える事は今までになかった。

それこそ、セクハラ紛いの行為をする白夜叉程度だっただろう。

(でも……)

毎日が辛いか、と言われればそれは違う。

無茶苦茶な問題児ではあるが、彼らは頑張り屋だし、優しい良い人々だ。

カグヤよりも上等で高質なギフトを所持しつつ、威張り散らす事もなく、コミユニ

テイの為に貢献してくれている。

だから……

(あ……)

思考が最初に戻った為、カグヤは顔を顰める。

これ以上は、堂々巡りもいところだ。

カグヤは考える事を止め、クルリと方向転換。

視線を上げた先に見えるのは、丘の上にある“サウザンドアイズ”支店。

悔やんでばかりはいられない。

あんな感情をぶつけただけの言葉で、彼らを傷付けたままではいけない。

帰って、話そう。

そう決め、一步踏み出す。

その時、視界の端に赤いドレスが翻る。

《……飛鳥、様?》

キョトン、とカグヤが目丸くする。

何かを追う様に走る彼女は、自分には気が付いていない様だった。  
カグヤは一旦、目的を止めて飛鳥の後は追う事にした。





☆☆☆☆

——境界壁・舞台区画。 “火龍誕生祭” 運営本陣営。

円状に作られたゲーム会場では、今当に決勝戦を決める試合の真つ最中だった。ゲームマスターを除いて、出場枠は4つ。

その内、既に2つはもう決まってしまっている。

会場は、熱気に包まれ、残り2枠を巡って凌ぎを削る参加プレイヤーへエールを送っている。

その内の一つに、春日部耀の姿があった。

『お嬢おとおお!!そこや!今や!後ろに回って蹴飛ばしたれええええ!!』

レティシア達についてきた三毛猫が、ボクシングのセコンド宜しく叫ぶ。

耀はその柔軟性を生かし、舞台上で大立ち回り。

相手のコミュニケーション—— “ロククイーター” の自動人形、石垣の巨人を翻弄している。

耀の数千倍はあろう巨体だが、俊敏性で耀にはついていけない。

それは、帝の眼から見てもよく分かった。

そして、そんな風に耀の試合を眺めている帝も、現在試合の真つ最中。

大振りのハンマーを振り回すドワーフを相手に、のらりくらりとやり過ごしていた。

「これで、終わり……………」

耀が勝負に出る。

鷲獅子から受け取ったギフトで石垣の巨人の背後へと飛翔し、その後頭部を蹴り崩す。

加えて耀は瞬時に自分の体重を「象」へと変幻させ、落下の力と共に押し倒す。

石垣の巨人が倒れると同時に、割れる様な観衆の声が響く。

『お嬢おおおおおお！うおおおおおおお！お嬢おおおおおお！』

三毛猫が涙を流しながら、耀の雄姿に雄叫びを上げた。

言語の分からない人から見れば、ただニャーニャーと騒いでいるだけにしか見えないが、耀には聞き分けられたのだろう。

嬉しそうに口元へ笑みを乗せ、三毛猫へ片手を上げて答えてみせる。  
これで、また一つ枠が埋まった。

「お、おまえ!!いつまで逃げて——」

「あ、悪い悪い……もう飽きたから」

耀が勝った事を確認していた帝へ、ドワーフが苛立った様に叫ぶと、当の本人はあつ  
けらかんと答える。

すると、一瞬帝の姿がぶれる。

刹那、ドワーフが持っていたハンマーがバキイツと凄まじい音を立てて砕け墜ちる。

「『ギフトの破壊』も勝利条件だろ?はい、お疲れさん」

ニシシと笑い、帝が勝鬨を上げた。

その場で膝を折り、無念だと嘆くドワーフと気の毒そうに眺め、耀が頬をふくらます。

「ふん。負けちゃえばよかったのに」

「はっはっは！まだまだ、ひよっこに負ける訳にや、いかんだろ？」

ニヤリと笑いながら茶化す帝へ、耀が唇を尖らせる。

まだ何か言いつのろうとした耀だが、宮殿の上から響いた柏手により、口を閉ざす。

シン……と静まる中、柏手の主——白夜叉が朗らかに笑いかけ、二人と一般参加者に声を掛けた。

「最後の2枠は『ブーネーム』出身の春日部耀と月影帝に決定した。これにて、最後の決勝枠が用意されたかの。決勝のゲームは明日以降の日取りとなっておる。明日以降のゲームルールは……うむ。ルールはもう一人の『主催者』<sup>ホスト</sup>にして、今回の祭典の主賓から説明願おう」

白夜叉が振り返り、バルコニーの中心を譲る。

彼女が変わって出てきたのは、真紅の髪を頭上で結び、色彩鮮やかな衣装を幾重にも纏った幼い少女。

帝が目を丸くした。

「……………マジでサンドラだよ」

龍の純血種——星海龍王の龍角を継承した、新たな「階級支配者」。

炎の龍紋を掲げる「サラマンドラ」の幼き頭首・サンドラ。

緊張した面持ちの彼女へ、白夜叉が優しく何かを話しかけている。

それに対し、一生懸命に頷くと、サンドラは大きく深呼吸し、鈴の音の様な凜とした  
声で挨拶する。

「ご紹介に与りました、北のマスター・サンドラ＝ドルトレイクです。東と北の共同祭典・火龍誕生祭の日程も、今日で中日を迎える事が出来ました。然したる事故もなく、進行に協力して下さった東のコミュニティと北のコミュニティの皆様には、この場を借りて御礼の言葉を申し上げます。以降のゲームにつきましてはお手持ちの招待状をご覧ください」

耀はポケットから招待状を取り出すと、帝にも見える様にしやがむ。

書き記されたインクは直線と曲線に分解され、別の文章を紡ぎ始める。

## 『ギフトゲーム名 “造物主達の決闘”』

- ・ 決勝参加コミュニティ
- ・ ゲームマスター “サラマンドラ”
- ・ プレイヤー “ウィル・オ・ウイスプ”
- ・ プレイヤー “ラッテンフィンガー”
- ・ プレイヤー “ノーネーム” より二名
- ・ 決勝ゲームルール
- ・ お互いのコミュニティが創造したギフトを比べ合う。
- ・ ギフトを十全に扱う為、一人まで補佐が許される。
- ・ ゲームのクリアは登録されたギフト保持者の手で行う事。
- ・ 総当たり戦を行い、勝ち星が多いコミュニティが優勝。
- ・ 優勝者はゲームマスターと対峙。
- ・ 授与される恩恵に関して
- ・ “階級支配者” の火龍にプレイヤーが希望する恩恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、両コミュニティはギフトゲームに参加します。

“サウザンドアイズ”印

“サラマンドラ”印』

このルールに、帝は首を傾げた。

多分、本来ならば四チームが全く別のコミュニティになる事を見越してのルールだったのだろう。

だが、決勝枠に同じコミュニティの選手が上がってしまった。

どうするつもりなのだろう、と考えていると、コホンと白夜叉が咳き込む。

「本来であるならば、総当たり戦を行う予定ではあったのじゃが……皆も分かっている通り、“ノーネーム”より二名の選手が上がってきた。その為、多少ルールの変更を申し上げる」

「変更……？」

「総当たり戦ではなく、全員が一斉に何ゲームが行い、そのゲームでより多くの勝ち星を上げたチームを優勝者として、ゲームマスターへ挑む権利を与えようと思う。勿論、同じコミュニティとはいえ共闘はルール違反とし、正々堂々競ってもらいたい」



つまり、仲間すら敵という事だ。

表情を引き締める耀とは違い、帝は楽しげに笑っていた。

つまり、このゲームで耀の力量を自分自身が図る事が出来るという事だ。

「手加減はしないぜ？ひよっこ」

「帝」そ……後で吠え面かかない様にね」

バチバチ散る火花。

これにて、本日の大祭はお開きとなった。

ゲーム終了後、何故か帝は白夜叉によって拉致られた。

それこそ、見事な手際で。

脇に居た耀は、帝が麻袋に詰められ、連行されるのは、笑みすら浮かべて見送った。

明日は絶対泣かす!!と胸に誓いつつ、現状を見る。

この場にいるのは、白夜叉と自分、そして「サラマンドラ」のサンドラ、マンドラ、憲兵が数名と……我らが問題児筆頭を含む「ノーネーム」メンバー。

察するに、十六夜が何かを起こし、そのせいで憲兵に拘束されたのだろう。

「……おい、一体今度は何をした？」

「ちよいと、時計台を一つ破壊した」

「胸を張って言わないで下さい、このお馬鹿様!!!」

スパアーン！と黒ウサギのハリセンが迸る。

その後ろで、ジンが痛い頭を抱えていた。

流石の帝も、これにはどう反応しているのか微妙な感じだった。

てつきり、北側のコミユニティが主催するギフトゲームを片っ端からクリアしていった的な問題かと思っていたのだ。

「……俺は、そんだけ派手に破壊活動をした同胞を褒めればいいのか？それとも、便乗すればいいのか？」

「どちらも違うでしょう!!?この苛めっ子様!!!」

スパアーン！と再度迸る黒ウサギのハリセン。

その様子に、白夜又は必死に笑いを嘔み殺しつつ、なるべく真面目な姿勢を見せる。だが、隣に鎮座させられた帝から見て、彼女の肩が笑みを我慢できずに震えている事がよく分かった。

サンドラの側近らしき軍服姿の男が鋭い目つきで前に出て、十六夜達を高圧的に見下す。

「ふん！ “ノーネーム” の分際で我々のゲームに騒ぎを持ち込むとはな！ 相応の厳罰は覚悟しているか!？」

「おいおい。なんでお前が決めてんだよマンドラ」

帝が呆れた様な声を上げると、男——マンドラがギロリと睨んだ。

「貴様とて、“ノーネーム” だろうか!! 引っ込んでいろ!!」

「俺は常識をわきまえろ、と言っただ。 “サラマンドラ” のトップはお前じゃないだろ? それなのに、マンドラ。お前が決める様な真似をすれば………サンドラ様の沽券に係わる」

怒るマンドラへ、帝は飄々と告げる。

彼に幾ら怒鳴ろうとも、どこ吹く風、暖簾に腕押し。

白夜叉は、扇子で口元を隠して一言。

「……簀巻きの狼に言われても、の？」

ブチッと何かが切れる音。

どうやら、帝の堪忍袋が裂けた様だ

「そう思うなら、俺を自由にしやがれ!!!この若作りババア!!」

「ば、ババアじゃと!?!私はまだピチピチだ!!このシスコン狼め!!」

「んだと!!やるのか、セクハラ魔人!!」

「上等じゃ!!表に出んか!!」

麻袋に詰められ、ピョンピョンと跳ねる狼と、扇子を振り回し怒る子供。

一体、何のギャグなのだろうか。

全く空気を読んでいない二人へ、黒ウサギがハリセンを煌めかせて一閃。事態は、呆気なく終結した。

コホン、とサンドラが咳き込む。

「えつと…… “箱庭の貴族” とその盟友の方。此度は “火龍誕生祭” に足を運んで頂きありがとうございます。貴方達が破壊した建造物の一件ですが、白夜叉様のご厚意で修繕して下さいました。負傷者は奇跡的に無かった様なので、この件に関して私からは不問とさせて頂きます」

チツと舌打ちするマンドラ。

意外そうに声を上げる十六夜。

「へえ？ 太っ腹な事だな」

「その厚意が無きや、お前犯罪者だぞ？ もしくは、魔王と間違われるぞ？」

このご時世、下界で建造物一件を破壊する様な行動を取るコミユニティ等、魔王以外に聞いた事がない。

「うむ。おんしらは私が直々に協力を要請したのだから。何より怪我人が出なかった事が幸いした。……とはいえ、仮に怪我人が出ていたとすれば、カグヤの出番となるが」

下層のコミュニティとしては、異例と言つてもいい程の強い治癒のギフトを持つ彼女なら、ある程度の傷等瞬時に治してみせるだろう。

だが、カグヤの名には十六夜も黒ウサギも表情を曇らせるだけ。

その様子に、帝は苦笑する。

多分、妹の事だから感情に任せて怒鳴り、そのまま自分でも取り返しがつかない様な事を叫んだのだろう。

今でこそ大人ぶつて見せているが、彼女ははれつきとした子供なのだから。

「……それで？ 態々俺はこいつらの失敗談を聞かされる為に、拉致されたのか？」

「……いや。いい機会だから、昼の続きを話しておこうと思つての」

白夜叉が連れの者達に目配せする。

サンドラも同士を下がらせ、側近のマンドラだけが残る。

この場に残ったのは、彼らを除いて十六夜、黒ウサギ、ジン、そして未だ袋詰め狼の帝の四人だけだ。

流石に、このままシリアスに突入される訳にはいかず、帝は側近達がいなくなった時を見計らい、その爪で袋を切り裂き脱出した。

「なんだ。もう終わりか？」

「俺を縛っておく理由でもあったのか？」

「なんだ、帝。お前、女の子に縛られる趣味でもあったのか？」

「んな訳ねえだろ、北京原人。テメエの眼は節穴か？」

「俺の眼は千里も見渡せる高性能だぜ」

ヤハハ、と笑う十六夜へ、もういい、と帝が溜息を零す。

今だけ……ほんの少しだけ、黒ウサギとカグヤの疲労感が分かる気がした。

サンドラは人が居なくなると、硬い表情と口調を崩し、玉座を飛び出してジンに駆け寄ると、少女っぽく愛らしい笑顔を向けた。

「ジン、久しぶり！コミュニティが襲われたと聞いて、随分と心配していた！」

「ありがとう。サンドラも元気そうでよかった」

「帝様も……御姿が変わられた様ですが、お元気そうで安心しました」

「この度は……って、固っ苦しいのは飽きたよな？おめでとう、サンドラ。階級支配者とは、凄い出世だな」

同じく笑顔で接するジンと、口調を砕けさせた帝。

サンドラは一層はにかんで笑う。

「ふふ。当然。魔王に襲われたと聞いて、本当は直に会いに行きたかったんだ。けど、父様の急病や継承式の事でずつと会いに行けなくて」

「それは仕方ないよ」

「寧ろ、来ない方がいい。サンドラは階級支配者なんだ。あんなモノを見せられれば、戦う事自体に恐れを成すと思う」

「……だけど、あのサンドラがフロアマスターになっていたなんて——」

「その様に気安く呼ぶな、名無しの小僧に狗畜生!!!」



彼らが親しく話していると、マンドラは獐猛な牙を剥き出しにし、帯刀していた剣をジンに向けて抜く。

それが、ジンの首筋に触れる直前、十六夜が足の裏で受け止め、その刃を帝が噛み砕く。

十六夜も帝も軽薄な笑みを浮かべてはいるものの、その瞳は全く笑っていない。

双眸には、鋭利な光が灯っている。

「……おい、知り合いの挨拶にしちや、穏やかじゃねえぜ。止める気なかつただろオマエ」

「当たり前だ！ サンドラはもう北のマスターになったのだぞ！ 誕生祭も兼ねたこの共同祭典に『名無し』風情を招き入れ、恩情を掛けた拳句、馴れ馴れしく接されたのでは『サラマンドラ』の威厳に関わるわ！ この『名無し』——」

「黙れ」

ガキツと顎が勢いよく閉じる。

帝のギフトが発動したのだ。

「今の俺程度でも、お前の口を閉ざさせる位なら出来る。仮にも、相手は元盟友。俺も手荒な真似はしたくない。……魔王によって滅ぼされたと言つてもいい俺達に対して、未だに盟友だと言つてくれるサンドラの優しさに免じて、な。だが、それ以上お前が俺達のコミュニティを侮辱すると言うなら……俺は何をするか分からないぞ？」

殺意すら籠った言葉には、脅迫じみた色がある。

一瞬にして温度の下がった部屋。

その空気を一遍すべく、鋭い柏手が跳ぶ。

「やめぬか、帝！」

「……………」

白夜叉が諫めると、帝は暫し睨んだまま、ゆっくりと息を吐き出す。

氷解し始めた空気に、ほっと誰かが胸を撫で下ろす。

「帝様、此度は……………」

「いい。俺もやり過ぎたと思う。悪かったな、サンドラ」

申し訳なさそうに縮こまるサンドラへ、帝も苦笑する。

「だがな、サンドラ。マンドラの言い分も一理ある。親しくしてくれる事は嬉しいが、お前には北を守る使命がある。その筆頭である『サラマンドラ』の頭首が、名も旗印もない俺達と、あまり親しげにする事は、お前自身のマイナスだと周りは捉えるだろう。それは理解出来るな？」

「……は？」

「礼節を重んじる事も大事だ。だが、階級支配者には、相応の威厳や誇りも大事な事。特にサンドラはその駄神とは違い、まだ齢十一。周りの大人は、お前を利用しようとして、馬鹿にしたりする可能性だってあるんだ。」

ジン、お前もだ。絶対に側近が居る前でサンドラに、馴れ馴れしくするな。甘える事と応える事は全く違うんだからな」

「……はい、帝様」

「……ま、プライベートは俺も知らぬ存ぜぬだからな。その時だけは、普段通り隣人友人として、仲良くすればいいさ」

叱られた様にシユンとする二人へ、帝は悪戯つぽく最後に付け加えて笑う。

その言葉に、パアと表情を輝かせるあたり、本当にまだ子供なのだろう。

話が大幅に脱線した。

軌道修正をすべく、白夜又は一枚の封書を差し出す。

「この封書に、おんしらを呼び出した理由が書いてある。……己の目で確かめるがい」

怪訝そうな表情のまま、十六夜が手紙を受け取り、開く。

その肩へと前足を乗せ、帝も封筒の中身に眼を通す。

そこに書いてあったのは――

『火龍誕生祭にて、  
“魔王襲来”の兆しあり』

絶句した。

十六夜の表情からも、笑みは完全に消え失せている。

帝ですら、息を呑んだ。

引き攣った表情で、白夜叉を見る。

「……正気か？」

それがやつとだった。

流れ作業の様に、手紙は黒ウサギとジンの手にも渡り、彼女達も絶句する。

そんな中、十六夜は鋭い瞳のまま、無表情に白夜叉へ問い返した。

「正直意外だったぜ。てつきりマスターの跡目争いとか、そんな話題だと思ったんだがな」

「何っ!？」

帝のギフトから解放されたマンドラが牙を剥く。

「いや、それは本来サンドラが襲名する前に行う事であって、部外者である俺達が立ち入る必要性はない。それに、そんな内容じゃ『打倒魔王』について覚悟を問われる意味が分からないだろ？ だよな、白夜叉」

「うむ。謝りはせんぞ。内容を聞かずに引き受けたのは、おんしらだからな」

「心得てる。……だよな？十六夜」

「ああ。それで、俺達に何をさせたんだ？魔王の首を取れっていうなら、喜んでやるぜ？つーか、この封書はなんだ？」

「うむ。ではまず、そこから説明しようかの」

白夜叉がサンドラに目配せする。

機密を話す合意が欲しかったのだろう。

サンドラが頷くと、白夜叉は神妙な面持ちで語り始めた。

「先ず、この封書だが……これは『サウザンドアイズ』の幹部の一人が、未来を予知した代物での」

「未来予知？」

「……成程。だから、この悪趣味な封書って訳か」

うげ、とうんざりした様に、帝が鳴く。

その姿に、十六夜が怪訝そうに顔を歪めた。

「どういう意味だ、シスコン狼」

「……お前は、俺に喧嘩を売りたいのか？あゝ……〃サウザンドアイズ〃 っていうのは、その名の通り、特殊な瞳を持つギフト保有者が多数在籍しているコミュニティだ。その中でも、未来の情報を自由に見れる奴がいてな。そいつは、あんまり親切じゃないんだ」

「親切じゃない？」

「分かりやすく言えば、『誰が起こした』も『いつ起こした』も『何故起こした』も分かっているのに、言わない。………ん？」

そこまで口にして、帝は自分が言っている事への信頼が失せた。

白夜叉が信頼を置く程の予言ならば、十中八九『ラプラスの悪魔』で間違いないだろう。

だが、相手が面白半分でこれだけの情報を寄越した、というのは聊かおかしい。

仮にも、〃サウザンドアイズ〃の幹部にして東の階級支配者である白夜叉が参加するのだ。

それなのに、この程度の情報しか与えないというのは、どうにも引つかかる。

帝が考えを纏めるよりも先に、十六夜が情報を整理し終え、一つの考えを口にする。

「事件の発端に一石投じた主犯は、既に分かっている。……けど、その人物の名を出す事は出来ないって事か？」

「うむ……………」

十六夜の言葉に、歯切れの悪い返事をする白夜叉。  
帝のその考えに、口元を引き攣らせる。

「おいおい、マジかよ……………それって、つまりは口に出せない程の立場を持つ相手って事かよ」

掠れる様な呟きに、ハッとする一同。

北側へ来る前に、白夜叉との会話にこう出てきた。

『幼い権力者をよく思わない組織が在る』と。

もしも、その人物が『口に出す事も憚られる人物』だというなら、それは――

「まさか……………他のフロアマスターが、魔王と結託して“火龍誕生祭”を襲撃すると!？」



ジンの叫び声が謁見の間に響く。

それは想像するのも恐ろしい事だ。

秩序の守護者である「階級支配者」が、その秩序を乱すという。

だが、帝が首を横に振る。

「それはない」

「どうして、そうと言い切れる？ 相手は、所詮脳みその有る何某なんだろ？ 秩序を預かる者が謀をしないなんて、幻想なんじゃねえのか？」

「確かに。俺もそれには同意する。『秩序の守護者』とか言いつつ、所詮は知恵を持つ者。陰謀、欲望がないだなんて、言わねえよ。だが……………」

そこまで言つて、帝は口を閉ざす。

勿論、ジンが言う事だつて一利ある。

まだまだ幼いサンドラが、フロアマスターの地位につくという事は、それだけでも敵が出てくるだろう。

だが、もつと帝が恐れている事がある。

もし、ここでその可能性を示唆してしまえば、確実に悲惨な事になる。

帝は暫し目を閉じると、頭を整理し直し、白夜叉へ問う。

「白夜叉。ずっと、気になってたんだが何故白夜叉へ共同のホストが回ってきた？」

「……北のマスター達が非協力的だったから、だと聞いている。そうでなければ、東のマスターである私に御鉢が回ってくる筈がない」

「その事は、〴〵サラマンドラも同じか？」

「はい。私もそう聞いています」

しっかりと頷くサンドラに、嘘をついている様子はない。

そうか、と呟き、考える事を止める。

この可能性が否定されるには、全く材料が揃ってはいないが、今はそれを考える事はやめるべきだろう。

それにしても、と今度は十六夜を見る。

「俺も正直、秩序の守護者つてのには否定的だが……白夜叉やサンドラの前で、それを平然というべきじゃないだろ？」

「おいおい。自分で言っておきながら、俺を叱るのか？」

「二応、だ。ほら、さつきから黒ウサギが大人しいせいで、俺とお前が問題起こしても対処してくれる苦勞人がいないだろ？仕方がないから、大人な俺がきつちり箱庭の常識つてのを教えとかないと、と思つてな！」

「お前が胸を張つても、しまらねえつて。シスコン狼」

「よし、その喧嘩買つてやる!!利子もたつぷりつけてやるから、表に出やがれ北京原人!!」

「シリアスをぶち壊すとは、何事ですか?!?!このお馬鹿様方ああああああ!!!」

スパパパーーン、と炸裂する黒ウサギのハリセン。

本当に、こんな時でもマイペースな問題児筆頭と苛めっ子先輩。

白夜叉は淡く苦笑しつつ、扇子で口元を隠す。

「確かに、おんしらの考えも一理ある。しかし、なればこそ、我々は秩序の守護者として、正しくその何某を裁かねばならん。主犯には、何れ相応の制裁を加えると、我らの双女神の紋に誓おう」

「『サラマンドラ』も同じく……けど、目下の敵は予言の魔王。ジン達には魔王ゲーム

攻略に協力して欲しいんだ」

やはり、そういう流れとなるのだろうか。

だが、「打倒魔王」を掲げた以上、この程度で二の足を踏んでいてはこの先やっていけない。

そして……これが、新生「ノーネーム」の初仕事である。

ジンは事の重大さを受け止める様に、重々しく承諾した。

「分かりました。「魔王襲来」に備え、「ノーネーム」は両コミュニティに協力します」  
「うむ、すまん。敵の詳細が分からぬままでの戦闘は不本意であろう。……だが、分かって欲しい。今回の一件は、魔王を退ければよいというだけのものではない」  
「いいって。「打倒魔王」を掲げた時点で、この程度の厄介事は覚悟してる。それに、白夜叉には、返しきれない恩義がある。そうだな、ジン」  
「はい」

緊張した面持ちで頷くジン。

白夜叉はその言葉に、柔らかな笑みを浮かべる。

「そう緊張せんでもよいよい！魔王はこの最強のフロアマスター、白夜叉様が相手をする故な！おんしらはサンドラと露払いをしてくれればそれで良い。大船に乗った気で  
おれ！」

哄笑すらあげ、双女神の紋が入った扇を広げる白夜叉。

少しだけ表情を緩めて快諾するジンの一方で、スツと眼を細めて不満そうな双眸を浮かべる十六夜。

それとは別に、何か思い迷う様に見つめる帝。

「何だ？やはり、露払いは気に食わんか、小僧」

「いや？魔王つてのがどの程度か知るにはいい機会だしな。今回は露払いでいいが——別に、何処かの誰かが偶然に魔王を倒しても、問題はないよな？」

挑戦的な笑みを浮かべる十六夜に、呆れた笑いで返す白夜叉。

「よかろう。隙あらば魔王の首を狙え。私が許す」

そう答えると、今度は帝へと視線を向けた。

「して、おんしはどうした？」

「いや……………やつぱり、いい」

「うむ……………おんしらしくない。聞きたい事を不躰に聞くのが、おんしの特権であろう？」

「……………聞きたくないから、かもしれない」

呟く様にそれだけ答える。

煮え切らない様子ではあったが、こうして交渉は成立。

その後、一同は謁見の間で、魔王が現れた際の段取りを決めて過ごした。

十六夜の発言を不謹慎だと告げるマンドラは、“ノーネーム”をゲームから追放する様に訴えたが、白夜又よサンドラに説き伏せられ、十六夜達は渋々協力を受け入れられるのだった。

その間……………奇妙な程に帝は一切、何も言葉を発する事はなかった。

•

## 十四章 蠢く影と見えない敵

——境界壁・舞台区画・暁の麓。美術展、出展会場。

カグヤは一定の距離を保ちつつ、飛鳥の後を追っていた。

流石に、あんな事をした後でどう話しかければ分からないし、何より彼女と会話しては、また勢い任せで何か言ってしまう様な気がしたのだ。

とはいえ、こうして彼女の後を追っているというのは、聊かストーカーの様な事をしている気がして、気分的にはあまり宜しくない。

取り敢えず、気分だけでも回復させようと、飛鳥の姿を視界の端に捉えつつ、カグヤは適当に観光する事にした。

洞穴の中にある展示場は、沢山のペンダントランプのおかげで、それ程暗い印象はない。

出展物には、流石に巨大なペンダントランプがシンボルなだけあり、沢山の趣向を凝らしたキャンドルグラスやランタン、大小様々なステンドグラス等が飾られている。

淡い炎の光を受け、キラキラと輝くそれらに、ほう、と感嘆の溜息がこぼれる。



(…………でも)

それと比べてしまうのは、元仲間達の事。

仲間の中には、そういった創作系が得意な人物がいたのだ。

よく、彼の工房に足を運び、その作業を見学させてもらっていた。

あの頃は、沢山のギフトが出来上がる様をドキドキしながら、眺めていた気がする。そして、その横にはいつでも帝がいた。

(帝がいるのは、当然ですよ。だって…………)

そう。あのギフト達は——

——異変に気が付いたのは、この瞬間だった。

ヒュウ、と。

大空洞に一陣の風が吹く。

その風は、あまたの灯火を一吹きで消し去ってしまう。

その瞬間、カグヤは今までになく戦慄した。

風を操るギフトを持つ、彼女だから感じる違和感。

なにより……この大空洞は出入口が一つだった筈だ。

そんな状態の大空洞で、これだけ強い風が吹く事は、先ずありえない。

それは、どうしても風の流れが淀み、その威力は半減するのだ。

「どうした!?!急に灯りが消えたぞ!」

「気を付けろ、悪鬼の類かもしれない!」

「身近にある灯りを点けるんだ!」

灯りが消えた大空洞は、夜よりも深い闇に閉ざされてしまった。

そんな中、内部の人間の叫び声だけが、不気味に反響した。

カグヤはすぐさま近くにあったランタンへ、備え付けられたマッチを使って火を灯す。

少しでも灯りが取り戻せたなら、それは現状の混乱を抑えられる筈。

だが、その瞬間――

『ミツケタ……ヨウヤクミツケタ……!』

怨嗟と妄執を交えた怪異な声が、大空洞で反響する。

反響の位置から推測して、もつと奥に主犯がいるのだろう。

そして、その奥にいるのは……

《っ……飛鳥様!》

慌てて、人影を押しつけカグヤが走る。

もみくしやになりつつ、奥へと進むにつれ、不思議な笛の音が彼女の鼓膜を揺らす。

『——嗚呼、見ツケタ……! ムラッテンフィンガー! ノ名ヲ騙ル不埒者ツ!!』

大一喝が大空洞を震撼させた瞬間、カグヤの耳に別の物音が届く。

初めは微かだったその音は、次第に大きく変わっていき、その数の多さに客が慄く。

「ね、ねず……ネズミだ!? 一面全てが、ネズミの群れだ!!」

逃げ惑う衆人の中で、カグヤの眼にも現状が映る。

それは地面を埋め尽くす程に大量のネズミの一軍が、一斉に襲いかかってきているのだ。

こんな細い洞穴を埋め尽くす群れに、誰が冷静でいられよう。

一瞬にして、大パニックへと陥り、我先にと逃げ惑う。

そんな中、必死に彼らとは逆方向へ進むカグヤは、状況の不利を悟る。

だが、ここで諦める程にカグヤは自分が諦めの良い性質ではないと知っている。

《……やるしか》

ない!!

そう自身に気合いを入れ、壁に足を掛けるとそのまま走り出す。

半円状に掘られたそれを、最小限の風を利用した走る。

丁度、壁を走る格好となるが、今はどうでもいい。

パニックを起こした最後尾に、自分が目的としている人物が見える。

飛鳥は必死に、“フォレス・ガロ”とのゲームで手に入れた白銀の十字剣でネズミに

応戦していた。

だが、元より武人ではない彼女では、数匹に傷をつける程度。

その間にも、彼女の身体にはネズミ達からの引つ掻き傷や噛み傷で細かい傷がついてしまっている。

「っ……自分達の巢に帰りなさい!!」

力を込めた飛鳥の声が響く。

本来であるならば、彼女が持つ「威光」のギフトによって、彼らは操られた様に巢へと戻っていくのだろう。

だが、ネズミ達の様子は一切なく、一心不乱に飛鳥へと爪を立てる。

《っ!?……飛鳥様から、離れなさい!!このネズミめ!!》

素早く芭蕉扇を広げ、カグヤが煽ぐ。

突如走った突風により、飛鳥の近くまで迫っていたネズミは、また洞穴の奥へと逆戻りになった。

だが、如何せん数が多すぎる。

この狭い洞穴では芭蕉扇をどれだけ振るおうとも、起こせる風に制限がかかってしま  
う。

それに、カグヤにはもう一つ不利な事がある。

風を使うという事は空気を動かすという事。

普段通りに疾風を巻き起こせば、真空が出来る恐れがある。

酸素は生き物が生きる為には必要なモノ。

それを失えば、自分とて唯では済まない。

「か、カグヤさん!?! どうして……」

《お話は後です!! 走って!!》

再度芭蕉扇を振るい、先頭を走るネズミを吹き飛ばす。

突然の登場に、飛鳥は面食らったがそれどころではない、と判断したのか、カグヤに  
言われるがままに走る。

カグヤは走り出した飛鳥をフォローしつつ、迫りくるネズミを芭蕉扇の突風で吹き飛  
ばし、状況を分析する。

先ず、相手が狙っているのは「ラッテンフィンガー」という人物、もしくはコミニティだろう。

それは、先程の怨嗟の声から察する事が出来る。

ならば、何故ネズミ達が執拗に飛鳥を狙うのか。

その理由として考えられるのは、敵が飛鳥を「ラッテンフィンガー」と勘違いしているか、飛鳥が誰かを庇っているかの二択。

カグヤは、後者の方が確率としては高い、と睨んだ。

《飛鳥様!!「ラッテンフィンガー」に由来する何かをお持ちですか!?!》

「え!?!ラッテンフィンガー!?!」

カグヤの問いに、ハツとして飛鳥が肩を見る。

そこには、小さなおんがり帽子の精霊が、必死の形相でしがみついていた。

どうやら、その精霊が「ラッテンフィンガー」なのだろう。

それならば、その精霊を振り落とせば、もう飛鳥が狙われる事はない。

だが、カグヤが口にしたのは別の言葉だった。

《飛鳥様、絶対にその子を振り落としてはなりませんよ!?!》

「ええ!! 当たり前でしょ!!」

怯え震えるその幼い精霊を振り落とす等、カグヤには出来ない。

それは、飛鳥も同じだったのだろう。

彼女は、服の胸元を大胆に開いて、精霊を中へと押し込む。

「むぎゅっ!?!」

「服の中に入っていないさい。落ちては駄目よー!」

兎に角、今は出口を目指す事が優先だ。

カグヤのフォローを受けつつ、飛鳥も出口へと続く一本道をひた走る。

だが、もう既に足元はネズミによって占拠されている状態。

幾ら、カグヤが芭蕉扇で吹っ飛ばそうとも、彼らは果敢に襲いかかってくる。

彼女達が纏う服には、防御のギフトが付与されている為、彼女達の身体を守ってはくれるが、剥き出しの肌はそうもいかない。



「っ……」

《飛鳥様!?!》

「だ、大丈夫よ」

強がつてみせてはいるが、その腕からは血が滴る。

彼女が纏う真紅のドレススカートは、腕の大半が露出している為に、格好の餌食とされてしまっている。

カグヤはその状況に表情を歪めると、すぐさま自身が纏う小袖を脱ぎ、彼女へと頭から被せる。

「ちよっ!?!カグヤさん!!?!これじゃ、貴女が……」

《主の肌を傷をつけたままにするなど、使用人の恥。大丈夫です。私、生傷には慣れていきますので》

上半身をサラシ一枚となった状態で、カグヤが笑って見せる。

小袖は剥き出しだった飛鳥の素肌を完全に覆い、彼女を怪我から守る。

だが、その分カグヤの肌には無数の傷をつけていく。  
どれだけ痛かろうとも、足を止めればネズミの餌食。

(このままでは……)

自分には、この状況を打開するだけのギフトも経験もない。

飛鳥と共に走りつつ、どうすればいいかを必死に考えていた刹那。  
影が這い寄り、無尽の刃が迸る。

「——鼠風情が、我が同胞に牙を突き立てるとは何事だ!? 分際を痴れこの畜生  
共ツ!!」

奔った影は、宛ら刃を持つ竜巻だった。

細い洞穴をミキサーの様に駆け巡り、鋭利な刃を思わせる先端は、魔性の群れを悉く  
肉の塵と化して呑み込んでいく。

瞬きの間もないこの一撃に、カグヤは表情を緩ませる。

間違いない、この一撃を自分は知っている。

安堵するカグヤとは対照的に、飛鳥は驚嘆の声を漏らす。

「か、影が……あの数を一瞬で……!?!」

二人で振り返る。

カグヤとしては見慣れた姿だったが、飛鳥には見た事のない姿に絶句する。

声から、彼女もレティシアが駆けつけてくれたのだと思っていたのだろう。

だが、あの愛らしい少女のメイドは、大人の女性へと変貌していた。

普段から綺麗だ綺麗だと賛美していた美麗な金髪も、愛用のリボンを解かれて煌々とした輝きを放っている。

真紅のレザージャケットと、拘束具を彷彿させる奇形のスカートを纏った彼女は、間違はなく——カグヤが知るレティシアⅡドラクレアその人。

レティシアは美麗な顔を怒りで歪ませ、吸血鬼の証である牙を獐猛に剥いて叫ぶ。

「術者は何処にいるッ!? 姿を見せろッ!! この様な住来の場で強襲した以上、相応の覚悟あつてのものだろう!? ならば我らが御旗の威光、私の牙と爪で刻んでやる! コミュニティの名を晒し、姿を見せて口上を述べよ!!!」

激昂したレティシアの一喝が響く。

しかし、返事もなければ気配もない。

あれ程の数がいいたネズミは、影が奔ると同時に退散したのだ。

カグヤが気配を探っても、全く何も感じない。

つまり、術者はもう逃げてしまったのだろう。

「貴女……レティシアなの？」

状況についていけないのか、飛鳥が震える声でその背に問う。

問われたレティシアは、特に気にする事なく平然と頷いて見せた。

「ああ。それより飛鳥。何かあったんだ？多少数がいたとはいえ、鼠如きに後れを取るとはらしくないぞ？カグヤも、なんだその恰好は。傷だらけじゃないか。小袖は……ああ、飛鳥に貸してしまったのか。使用人の鏡だとは思いますが、もつと酷い怪我をしていたかもしれないぞ？」

淡く苦笑し、レティシアが二人へ近寄る。

普段と変わらぬ口調、普段から見慣れた温和な表情だが、それでも先程の力を目の当たりにしてしまえば、感じ方は変わってくる。

未だ衝撃の抜けない飛鳥は、ポツリと呟く。

「……………。貴女、こんなに凄かったのね」

「は？」

小首を傾げるレティシア。

だが、それが賛辞だと理解すると、やや不機嫌そうに顔を顰める。

「あ、あんな主殿。褒められるのは嬉しいが、その反応は流石に失礼だぞつ。私はコレでも元・魔王にして吸血鬼の純血！誇り高き“箱庭の騎士”！神格を失ったとはいえ、畜生を散らすのは造作もない事。あの程度なら幾千万相手しても問題ないっ」

拗ねた様に口を尖らせるレティシア。

それに、カグヤが苦笑しつつ宥める様に彼女の背を撫でる。

その間、飛鳥は俯いたまま、表情を歪める。

「けど、私は……」

先程の醜態が、彼女にとって耐えがたいものだったのだろう。

辛そうに唇を咬む彼女に、カグヤはどう声を掛けるべきか、と言いあぐねていると、キュポンツ！と飛鳥の胸元からとんがり帽子の精霊が飛び出る。

「あすかつ！あすかあつ……!!」

「ちよ、ちよつと」

首筋に抱きつき、半泣きになりながら歓喜の声を上げる精霊に、飛鳥が躊躇う。

《……感謝、しているんだと思いますよ?》

「え……」

《飛鳥様にとつて、今の出来事は耐えがたい醜態だったと思います。でも……その精霊さんを守ったのは、飛鳥様なんです。私でも、レテイシアでもなく……》

この言葉が励みになるとは思えない。

自分には、ギフトについての知識は多い方ではない。

それでも、彼女がこの程度で終わる様な存在ではない筈だ。

何より……ジンが、黒ウサギが、そして兄である帝が認めたプレイヤーなのだから。

「それにしても、すっかり懐かれたな。日も暮れて危ないし、今日の所は連れて帰ろう」  
「そ、そうね」

飛鳥は躊躇いながら頷く。

これ以上の襲撃が無いとも言切れない。

三人と一匹の精霊は朱色のランプが照らす街を進み、  
“サウザンドアイズ”の店舗に  
戻るのがだった。





☆☆☆☆

——境界壁の展望台・サウザンドアイズ旧支店。

店先で飛鳥を迎えた女性店員が、飛鳥を湯船へと追い立てている頃。何事か、と顔を出した帝に軽く断り、先に支度された部屋へとカグヤは下がっていった。

着物の下からでも見えた細かな傷を考えて、彼女達が襲撃されたのだろう。

「……………馬鹿な事を考えないといいがな」

「……………何か言いましたか？帝様」

不思議そうに問うジンへ、帝はいいや、と短く答える。

現在、男性陣、女性陣に分かれ、入浴の真っ最中。

隣からは、何やら物騒な音が響いてきたが、今は気にする気にはなれない。

「それにしても……………これじゃ、全身タワシみたいな感じだよな」

モクモクと立ち込める泡を感じつつ、帝は深々と溜息を零した。

狼となつてしまつて以来、入浴はカグヤの補助がなければほぼ無理に近い。

その理由は……………全身が毛で覆われている事に由来する。

「ほ、本当に毛深いですね……………帝様」

「おいおい、御チビ様。それなら、いっそ丸刈りにしちゃえば、いいだけの話だろ？」

「おい、十六夜。お前後で覚えとけよ」

ヤハハ、と楽しみに笑う十六夜へ、帝が悔しげに呟く。

ネコ目イヌ属イヌ科の哺乳類、狼。

四足歩行を原則としたこの生き物では、どう足掻いても一人で全身を洗う事は困難。

そして、夏場には恐ろしい勢いで毛が抜けおち、冬場になればこれでもか!!という程毛が増える。

それに、ノミやダニといった害虫も住み着く始末。

そんな状態で、風呂に入らない等元人間である帝には、言語道断。

その為、こうして共に入ってくれる人間が必要となるのだ。

泡塗れとなった白狼、というヘンテコな絵面には、本人的にもあまり笑えないらしいが。

「それで？お嬢様がどうしたって？」

「……本当に、お前って感じがいいと言うか、回転が速いと言うか」

「おう。俺の頭はノーベル賞も狙えるレベルだからな」

「あ、さいで」

得意げな十六夜へ、帝は気の乗らない返事で流す。

暫く過ごす内に、それなりに聞き流し方が上手くなってきた様に感じるのは、気のせいだろうか。

「チラツとだが、カグヤの傷が見えた。どうみても、相手に言い様に遊ばれてたか、小型の獣に襲われたかの様な怪我だったんだよ」

「レティシアの話では、鼠の大群だったそうです」

「鼠……？お嬢様のギフトが通じない相手が、鼠つても変な話だな、おい」  
「……………いや、あながち間違いではないぞ？」

訝しげに言う十六夜へ、帝は暫し考えた後、話し出す。

「『靈格』つてのは、十六夜も黒ウサギからレクチャーされてんだろ？」

「ああ。聞いている」

「二応、確認の為に話すが、『靈格』つてのは、世界に与えられた『<sup>ギフト</sup>恩恵』。生命の階位だと言われている。これを得た者には、大体の共通点つてのがある。

一つ、『世界に与えた影響・功績・代償・対価によって得る』

二つ、『誕生に奇跡を伴う遍歴がある』

俺やカグヤの場合は、前者となる。その理由は分かるか？」

「『竹取物語』は日本最古の物語。それが数千、数百と語り継がれてきたから、てどこか？」

「半分は正解。十六夜が説明したのは、影響の一点だ。もう一つ……『竹取物語』には、神話が組み込まれている、てのも霊格を得た理由としてあげられる」

二人が生まれた一族のルーツ——『竹取物語』は作者不明であり、その物語には様々な逸話がある。

沢山の憶測、沢山の推論が存在するからこそ、その物語が与えた影響が、現在の箱庭において帝とカグヤの霊格を維持しているのだ。

「ふうん……それで、一度聞いてみたかったんだが、お前とカグヤはどれだけの霊格を持ってた？」

「俺も妹も神格持ち。まあ、カグヤは見ての通りの性格だから、プレイヤー連中から見れば宝の持ち腐れ、俺もこの『呪い』<sup>ギョト</sup>のおかげで飛鳥以下つてとこだな」

基本の法則として『伝承がある』という事は、『功績がある』という事。

因みに、前者は悪魔等の超常存在が多く、後者は人間が多い。

見た目こそ、十六夜達と大差ないが、帝もカグヤも歴とした超常存在に分類されるのだ。

「まあ、俺とカグヤの話は後々にするとして、飛鳥の霊格が鼠に劣るかって話だったな。結論から言つて、それは有り得る事だと判断出来る」

「それは、どうしてですか？ 飛鳥さんの霊格は、普通の人間に比べれば遥かに高い部類だと思います。神格こそありませんが、それでも潜在能力に関しては、十六夜さんや耀さんを凌ぐかもしれない、と仰っていたじゃないですか」

「確かに、飛鳥の素質には俺も思う所がある。だが、飛鳥の神格が通じない可能性が二つ挙げられる。

一つは鼠の中でも特異に霊格の高い存在だったというケース。『鼠』……正確には『子』<sup>ネズミ</sup>は干支にも数えられる神獣。鼠を象った神だつて存在するだろ？ 古くから子沢山の願掛けには、鼠が用いられる。

もう一つは、鼠が操られているケース。極端に言つてしまえば、術者が飛鳥より霊格が高い場合だな。

俺としては、後者だと思う。多分、レテイシアも飛鳥自身も、カグヤもそうだと思う

ているとは思う」

飛鳥は帝から見ても、そこその靈格の持ち主だ。

だが、それは人間から見ての話だ。

自分達のような超常存在から見れば、まだまだ子供程度。

それでも、帝は飛鳥を評価していた。

そして、同時に残念にも思えてならない。

「……ジン、コミュニティの蓄えはやっぱり厳しいのか？」

「はい。正直、レティシアや黒ウサギとも話していますが、やはり非生産者を抱えた状態では、かなり……」

「そうか……もう、宝物庫のギフトを全部売つてでも、資金を調達すべきなんじゃないのか？」

「おいおい……その必要はねえだろ。俺達で稼げばいいだけの話だしな」

ニツと笑う十六夜。

だが、帝はそれでは無理だと首を横に振る。

「十六夜も、飛鳥も、耀も十分すぎる働きをしてきている。それなのに、あまりにも蓄えが少なすぎるのは俺達がお前達の戦果に甘えている事に他ならない。コミユニティを支え、プレイヤーを支える事が義務である筈なのに、足を引つ張る現状。どうにかしないといけない。………それに、今後大金が必要になる」

「?………それは、何かを買うという事ですか?」

「それに近いが……いや、今は各個人が自分のギフトを伸ばす事に専念すべきだろうな。特に飛鳥と耀は、まだ発展途上。十六夜は………その破壊行動さえ押さえてくれれば、申し分ないんだけどなあ」

「おうーアリの一步程度には譲歩してやるよ」

ヤハハ、と哄笑を上げる十六夜へ、帝は溜息を吐く。

とはいえ、口ではこう言っているが、きちんと守ってくれるだろう事は、よく分かっている。それ以上の注意は無用。

寧ろ、これ以上口酸っぱく言えば、逆効果だろう。

何はともあれ、話はここで中断となり一同はのんびりと温泉を楽しむ事に専念した。





「いつやあ、申し訳ない。ほら、狼ってドライヤー使えないし?」

ご満悦で女性店員に毛並を整えてもらっている帝。

これも、普段はカグヤがしてくれている事だ。

こうして考えると、彼は妹がいなければ生活すらままならない、超ダメ兄としか思えないのは、黙っておこうと海苔煎餅を齧りつつ、ジンは内心で思う。

そんな中、十六夜は嬉々としてこの店がどうやって移転してきたのかを質問。

流石に、相手が客人となつてしまった以上は、店員として邪険には出来ないのだろう。嫌々な雰囲気を最大限に醸し出しつつ、店員は眉を顰めながらも応対する。

「ああ、この店ですか?別に移動してきた訳ではありません。アストラルゲート境界門”と似通ったシステムと言つて分かります?」

「いや全然」

即答する十六夜。

「そうだな……沢山の入口が全て一つの内装に繋がるになっている、と言えば分かりやすいか？例えば蜂の巣……ハニカム型を思い浮かべれば、いいかもしれない。イメージとしては、それに近い」

補足する様に、帝が言う。

“サウザンドアイズ”の店内が外観よりも、大きな内装となっている理由がそれだ。店は初めから、あの場所に存在していないのだ。

「へえ？つまり、本店も支店も全部兼ね備えている、という事か？」

「違います。境界門との違う点が、そこです。境界門は全ての外門と繋がっているのに対し、“サウザンドアイズ”の出入り口は各階層に一つずつハニカム型の店舗が存在しているの」

「ふうん？つまり“七桁のハニカム型支店”、“六桁のハニカム型支店”ってことか？」  
「そうだな。ただし、本店への入口つてのは一つしか存在しないらしい。因みに、ここは立地条件が悪くて、閉店した店で、今日は店主である白夜叉が共同祭典に参加しないといけないから、一時的に出入り口を繋げたらしい。ただし、店とは切り離してあるから、

東には戻れないからな」

「そうかい」

「あら、そんなところで歓談中？」

話が一区切りつくと、湯殿から飛鳥達が来た。

飛鳥達は備えの薄い布の浴衣を着ており、首筋から上気した桃色の肌を見せている。十六夜は椅子からそっくり返って、湯上りの女性陣を眺めた。

「……………おお？コレは中々いい眺めだ。そうは思わないか御チビ様？」

「はい？」

「黒ウサギやお嬢様の薄い布の上からでも分かる二の腕から乳房にかけての豊かな発育は扇情的だが、相対的にスレンダーながらも健康的な素肌の春日部やレイシアの髪から滴る水が鎖骨のラインをスウツと流れ落ちる様に視線を自然と慎ましい胸の方へと誘導するのは確定的に

「黙らんか、エロ餓鬼いいいいいい!!!」

スコオーロン!!!

黒ウサギと飛鳥が桶を手に、強襲するよりも早く帝が狼とは思えない程の美しいフォームで決めたシャイニングウイザードが十六夜を強襲。

そのまま、またもや狼とは思えない関節技が決まる。

「お兄さんは!!お兄さんはそんな子に育てた覚えはありません!!!」

「奇遇だな!俺もお前に育ててもらった覚えがねえぜ!!」

そのまま取っ組み合いを始める帝と十六夜へ、意味が分からないとでも言いたげに桶を下ろす飛鳥と黒ウサギ。

彼らの様子を見ていたレティシアが、苦笑気味に笑う。

「帝はふざける事はあつても、こういった話題には厳しくてな。昔から、仲間達がセクハラめいた事を口にしては、ああして怒っていたんだ」

「それって、どうして?」

「妹の教育に悪い!!だそうだ」

不思議そうに首を傾げる耀へ、レティシアは平然と答える。

「流石、シスコン狼ね。その名に恥じないシスコンぶりだわ」

「帝様は普段こそ苛めっ子様ですが、変態ではないんですね！黒ウサギはほっとしました」

感心はしているが、あまりにも恰好が悪い二つ名だ。

取っ組み合う二人を尻目に、痛そうに頭を両手で抱えているジンの肩に、同情的な手を置く女性店員。

「……………君も大変ですね」

「……………はい」

一方は、組織主力に問題児が多い。

一方は、組織のトップが最大の問題児。

そんな虚しい哀愁を分かち合っている二人は、ほぼ同時に溜息を漏らした。







☆☆☆☆

その後、レティシアと女性店員を除く全員が、来賓室に集まっていた。

未だに部屋から出てこないカグヤは、当然の事ながら欠席。

それに代わる様にとんがり帽子の精霊がこの場にいる。

白夜又は来賓室の席の中心に陣取り、両肘をテーブルに載せ、この上なく真剣な声  
で、

「それでは皆のものよ。今から第一回、黒ウサギの審判衣装をエロ可愛くする会議を」  
「始めません」

「始めます」

「始めませんっ!」

「いいぞお、もつとやれえ」

「否定的だったのではないんですか!? 帝様!!?」

白夜叉の提案に悪乗りする十六夜と、棒読みで煽る帝。

速攻で断じる黒ウサギ。

毎度毎度のやり取りではあるが、流石に呆れてしまった飛鳥だったが、例の真紅のドレススカートについて思い出した。

「そういえば、黒ウサギの衣装は白夜叉がコーディネートしているのよね？じゃあ、私が着ているあの紅いドレスも？」

「おお、やはり私が贈った衣装だったか！あの衣装は黒ウサギからも評判が良かったのだが、如何せん黒ウサギには似合わな。何より折角の美脚が」

「いや、それ以前にコイツに紅は似合わないだろ？イメージ的にも」

「白夜叉様の異常趣向で却下されたのです。とはいえ、以前にも紅は似合わないと帝様に散々言われていたのもあり、現在は箆笥の肥やしとなってしまうてたんですよ。黒ウサギはあのドレスはとても可愛いと思っていたのですが……飛鳥さんはとても赤色が似合うので、良かったのですよ」

「ふふ、ありがとう。黒ウサギの普段着ている服もとても似合っているわ」

飛鳥が御礼を言うと、むうつと複雑そうな表情を浮かべる黒ウサギ。それより、と帝が白夜叉の方を向く。

「黒ウサギの衣装云々ってことは、こいつに審判の依頼が来た、と解釈していいんだな？」

「あやや、そうなのでございますか？ 白夜叉様」

「帝は目ざとい。おんしらが起こした騒ぎで『月の兎』が来ていると公になってしまつての。明日からのギフトゲームで見られるのではないかと期待が高まっているらしい。『箱庭の貴族』が来臨したとの噂が広がってしまったえば、出さぬ訳にもいくまい。黒ウサギには正式に審判・進行役を依頼させて欲しい。別途の金銭も用意しよう」

成程、と納得する一同。

だが、帝は乗り気ではないらしい。

「黒ウサギが審判になれば、ゲーム参加は絶望的と思つていいんだな？」

「え？……あ」

“箱庭の貴族”と呼ばれるウサギ達には、“審判権限”が与えられている。

だが、その代わりにゲームへの参加が著しく制限されるのだ。

魔王襲来の話がある以上、戦力を減らされる事は正直痛い部分だと思つての言葉。

目を丸くする黒ウサギとは、対照的にニヤリと笑う白夜叉。

「うむ。そう思つてもらつて構わん。……それとも、黒ウサギが戦闘出来ぬ事で何か困つた事でもあるのか？」

「……いいや。相手のやり口がまだはつきりしてない状況なら、黒ウサギの“審判権限”が最後の命綱だと思つていいだろう。ま、大事には至らないと思つてる。白夜叉もいるし、俺も……奥の手は持つてる」

「ふふ……おんしも血の気の多い所は三年前と全く変わらん」

ククツと喉の奥で笑う白夜叉。

何はともあれ、黒ウサギが明日以降のゲーム審判・進行役を務める事が決まった。

後決めねばならないのは、

「それで、審判衣装だが、例のレースで編んだシースルーの黒いビスチェスカートを」

「着ません」

「着ます」

「断固着ませんっ!! あーもう、いい加減にして下さい十六夜さん!」

「いいぞお、もつとやれえ」

「またそのネタですか!!? 帝様っ!!?」

茶々を入れる十六夜と、またもや棒読みで煽る帝。

ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

一方で、全く無関心だった耀が思い出した様に白夜叉に訊ねる。

「白夜叉。私が明日戦う相手って、帝の他にどんなコミュニティ?」

「すまんが、それは教えられん。『主催者』がそれを語るのはフェアではなからう? 教えてやれるのは、コミュニティの名前までだ」

パチン、と白夜叉が指を鳴らす。

すると昼間のゲーム会場に現れた羊皮紙が現れ、同じ文章を浮かび上がらせる。

そこに書かれているコミュニティの名前を見て、飛鳥は驚いた様に眼を丸くした。

「『ウィル・オ・ウィスプ』に——『ラッテンフィンガー』ですって?」

「うむ。この二つは珍しい事に六桁の外門、一つ上の階層からの参加だな。格上と思つてよい。詳しくは話せんが、余程の覚悟はしておいた方がいいぞ」

「へえ……六桁、ねえ」

ククツと獰猛に笑う帝。

だが、それ以上に気になる名前前に前足を乗せ、十六夜を見る。

「この『ラッテンフィンガー』、お前ならどう解釈する?十六夜」

「解釈って……どうもこうもないだろう? 『ラッテンフィンガー』の『ネズミ捕り道化』の『コミュニケーション』だろ?」

「なら、明日の敵はさしずめ、ハーメルンの笛吹き道化つて所じやないのか?」

え?と飛鳥が声を上げる。

しかし、その隣に座る黒ウサギと白夜叉の驚嘆の声に、飛鳥の声がかき消された。

「は、『ハーメルンの笛吹き』ですか!」

「さて、どういう事だ小僧。詳しく話を聞かせろ」

「落ち着け、二人揃って見つとも無いぞ。まずは、十六夜達に説明が先だ」

二人の驚愕っぷりに、思わず瞬きする十六夜。

その間に帝が入り、二人を宥めた後に情報を提示する。

「唐突な話で悪いのだが——『ハーメルンの笛吹き』は、ある魔王の下部コミュニティだったものの名だ」

「何?」

「魔王のコミュニティ名は『幻想魔道書群』<sup>グリムグリモワール</sup>。全二〇〇篇以上にも及ぶ魔書から悪魔を呼び出した、驚異の召喚士が続べるコミュニティでさ。しかも、一篇から召喚された悪魔は複数。書物一つ一つに、同時のゲーム盤を持ち、確立されたルールに基づいてゲームを行う。………ハーメルンかあ。あの阿呆、俺とのゲームでは出した事なかったなあ」

「ちよっ?!? 帝様はお知り合いましたのですか?!?」

「うん? 言ってなかったか? 俺、結構暇になつてはギフトゲームに参加してたんだぜ?」

「——へえ?」

鼻歌でも歌いそうな程上機嫌に答える帝に、黒ウサギが絶句。

十六夜の瞳に鋭い光が宿る。

だが、事の顛末は簡単なモノ。

「とはいえ、かなり前に俺とは関係ないコミュニティに殺されたらしくてさ………ほんと、残念だと思うよ。絶対全二〇〇以上の魔書、全部のゲームをクリアして、隸属させてやろうと思ってたのにさ」

つまらなそうに話を締めくくる。

彼にしてみれば、遊び相手を失い、落ち込んでいる部類なのだろう。

それ以前に、魔王とお友達……という時点で、既に箱庭の常識から螺子が数本すつ飛ばしている気がするの、黒ウサギの勘違いではない。

コホンっ、と気を取り直す黒ウサギ。

「し、しかし十六夜さんは『ラッテンフィンガー』が『ハーメルンの笛吹き』だと言いました。童話の類は黒ウサギも詳しくありませんし、万が一に備え、ご教授して欲しい



のです」

緊張した面持ちは、もしも魔王が現れた時の事を警戒してのものだろう。

十六夜は暫し考えた後、悪戯を思いついた様にジンの頭をガシツと掴んだ。

「成程、状況は把握した。そういう事なら、ここは我らが御チビ様にご説明願おうか」  
「え？あ、はい」

一同の視線がジンに集まる。

ジンは十六夜にくつついて、共に書庫に籠っていた。

ならば、相当の知識を必死に詰め込んだ事だろう。

今現在、戦力としては最底辺である彼が活躍できる場合は、帝が考えても“知恵”を競うゲーム位だろう。

それなら、これはいい傾向だな、と内心で帝は感心した。

コホン、と一度咳払いするジン。

「ラッテンフィンガー」とはドイツという国の言葉で、意味はネズミ捕りの男。このネズミ捕りの男とは、グリム童話の魔書にある「ハーメルンの笛吹き」を指す隠語です。

大本のグリム童話には、創作の舞台に歴史的考察が内包されているモノが複数存在します。「ハーメルンの笛吹き」とは、舞台になった都市の名前の事です」

—— 一二八四年 ヨハネとパウロの日 六月二六日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、丘の近くの処刑場で姿を消した——

グリム童話の「ハーメルンの笛吹き」の原型となった碑文の冒頭。

これは、この話が実際にハーメルンで起こった事件である事を物語っている。

「グリム童話において、ハーメルンの笛吹き道化は、ネズミを操る道化師だったとされている。それに、防波堤に引っかからない工夫もしてくる可能性がある……：そうだろ？ 白夜叉」

「うむ。参加者が『ホストマスタ主催者権限』を持ち込めない状態にしてある以上、おんしが考えている事でまず間違いないのう」

「うん？なんだそれ、初耳だぞ」

不思議そうに首を傾げる十六夜へ、帝は淡く苦笑して、ルールの本が書かれていた羊皮紙を叩く。

すると、羊皮紙が光り輝き、別の文字が浮かんできた。

内容は誕生祭の諸事項らしい。

### 『§火龍誕生祭§』

・参加に際する諸事項欄

一、一般参加は舞台区画内・自由区画内でコミュニティ間のギフトゲームの開催を禁ず。

二、“主催者権限”を所持する参加者は、祭典のホストに許可なく入る事を禁ず。

三、祭典区画内で参加者の“主催者権限”の使用を禁ず。

四、祭典区域にある舞台区画・自由区画に参加者以外の侵入を禁ず。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下に、ギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイズ”印

“サラマンドラ”印』

十六夜は見せられた羊皮紙に眼を通し、小さく頷く。

「確かに、このルールなら魔王が襲って来ても、“主催者権限”を使うのは不可能だな」  
「うむ。まあ、押さえる所は押さえたつもりだ」

そっか、と十六夜が納得した様に頷く。

それにしても、と帝がジンの頭を乱暴に前足で撫でる。

「ジン！少しはリーダーっぽくなってきたじゃん!!」

「ちよっ?!?帝様!!お、重いです!」

「ん?……お、すまんすまん」

どうにも、人間だった時の感覚が抜けていない為、普通に撫でているつもりが、完全に襲っている様には見えない。

取り敢えず、重いと訴えられた為、ジンから離れた。

「情報は貴重な財産。もしかしたら、ジンは策士向きなのかもしれないな」

「策士、ですか？」

「そつ。俺は知識的にはあるんだが……どうにも、そういったチマチマした事は苦手だな」

「さて、なんにせよ、だ」

パンパンツ、と響く拍手。

それだけで、場の空気が一瞬にして引き締まる。

「サンドラの顔に泥を塗らぬ様、監視を付けておくが——万一の際はおんしらの出番だ。頼むぞ」

真剣な表情で言う白夜叉へ、〃ノーネーム〃一同は頷いて返す。

その後、各自明日に備えて解散という事になり、全員が席を立つ。

そんな中、飛鳥だけが未だにボンヤリと座っていた。

膝の上には、すやすやと寝息を立てるとんがり帽子の幼い精霊。

彼女は自身を“ラッテンフィンガー”だと語っていた。

それが、意味する事は一体なんなのか、今の飛鳥では全く分からない。

それでも、この精霊が悪い者には見えない、という事だけははっきりと思えた。

だが、皆に相談すべきだろうその事実を、飛鳥は言えずにいる。

「——飛鳥？」

ビクツと彼女の肩が跳ねる。

慌てて顔を上げると、そこには心配そうに覗き込む耀がいた。

その後ろには、不思議そうにこちらを見る十六夜と帝もいる。

「え？な、何かしら？」

「えっと、ね。十六夜とも話したんだけど、やっぱりカグヤの様子を見に行かないか、つて。でも、帝が止めとけつて言うんだけど、どうしようかな？つて話で」

要約すれば、十六夜と耀はカグヤに謝りにいくべきだと言い、帝は今はそのつとしてお

け、と言っていて、どうすべきかを話し合っている、という事だろう。

成程、と飛鳥が苦笑する。

「そうね……私もカグヤさんには、まだお礼もごめんなさいも言っていないわ。だから、春日部さんと十六夜君に賛成したいのだけど……」

「まあ、お前らの言いたい事は最もだと思うがなあ……機嫌損ねたカグヤってのは、お前らが思うより頑固だぞ？取り敢えず、耀は明日のゲームが控えてる訳で……十六夜と飛鳥だって、明日の不祥事に備えるべきだ」

「確かにそうだけど……」

不満げに唇を尖らせる耀。

仕草はないが、それでも飛鳥と十六夜からも不満そうな雰囲気伝わってくる。

(本当に……カグヤは良く好かれたもんだ)

妹を氣遣つてくれる彼らに、内心で感謝しつつ、帝は降参した様に笑う。

「分かった。なら、こうしよう。今日の所はこのまま解散」

「おい、それじゃ変わってねえだろ」

「その代わり、だ。俺が仲介してくる。俺に対しても怒っているだろうが……なに、問題ない。一応は兄だから、な。それで、明日絶対にカグヤを出させてくるから、その時にも話をしよってくれ。その方がカグヤも落ち着いて話せると思う」

だから、今日は大人しく部屋に戻れ。

そう笑う帝に、三人は暫し顔を見合わせた後、まだ納得できていない様子で頷いた。



☆☆☆☆

「全く……本当に愛されてるな、お前は。黒ウサギ同様に」

少しだけ呆れを含んだ声で、帝が笑う。

目の前には、布団がこんもりと盛り上がったモノ。

中には、言わずと知れた不貞腐れている妹。

部屋に入ると、彼女はダンゴ虫の様に丸くなり、亀の様に引き籠っていた。

どうにも、話したくないという拒絶反応の様だが、帝は構う事無く入室し、今日話し合った事を全てカグヤへと話した。

話し終えた後、モゾモゾと布団が動く。

《……魔王、ですか？》

微かに聞こえる『声』は、少しだけ掠れて聞こえた。

「ああ。どうにも、襲来は確定らしい」

《また……皆様が苦しむのですか？》

不安に揺れる声。

彼女は、コミュニティが事実上崩壊した事の顛末を知っている。いや、傍観者として見せられていた、が正しいのかもしれない。勿論、当事者であつた帝とて、あの惨劇を忘れた訳ではない。

「大変な事になる事は間違いないだろうな。それでも……勝つぞ」

自分に言い聞かせる様に、そして妹を励ます様に。

覚悟の籠つた言葉に、またモゾモゾと布団が蠢き、ヒョコツとカグヤが顔をのぞかせる。

彼女の目元は泣き腫らした様に赤くなっており、未だに空色の瞳が潤んでいる。

帝は苦笑すると、ペロリと彼女の目元を舐め、

「……しよっぱい。泣きすぎだ、馬鹿」

《煩いですが、兄さん》

カグヤが拗ねた様に唇を尖らせる。

少しだけ元気が出たのか、カグヤは寝ていた体を起こす。

《……皆様の様子はいかが？》

「お前を酷く心配していたぞ？確かにやり過ぎたとは思いますが、それでも許してやれ。俺も、お前が働いてでも必死に俺達の路銀を貯めてた事、知らなかったよ。悪かったな、カグヤ」

《いえ……言わなかった、私にも非があります。その……驚かせようと思ひまして》

少しだけ頬が赤くなったのは、恥ずかしいからだろう。

精一杯御持て成しようとも、所詮はギリ貧コミュニティ。

だからこそ、カグヤなりに考えて三人を喜ばせようと努力したのだろう。

パタリ、と帝の尻尾が揺れる。

「そっか……でも、無理はするなよ？お前だって、今ではコミュニティの主力メンバーな

んだからな？」

《はい。心得ていますよ、兄さん》

「よし……それで、カグヤに相談があるんだ」

《相談、ですか……？》

不思議そうに首を傾げるカグヤ。

兄が相談を持ちかけてくる、とは珍しい事。

それだけ、煮詰まっている様には見えないし、自分に出来る事は大抵帝も出来る事なのだ。

それなのに、自分に相談するメリットが見つからない。

帝は悪戯を思いついた子供の様な笑みで、持つてきていた「契約書類」を出す。

《造物主の決闘……ですか？》

「そつ！俺と耀が出場してるギフトゲームなんだが……勝てば、「サラマンドラ」から直々に報酬を貰えるらしい。北と言えば、創作系ギフトの多い地方。今後も魔王関係の事件に首を突っ込むなら、ギフトは多いに越した事はない。それに……俺は飛鳥に自信をつけさせてやりたい」

肉体的にハンデのある飛鳥は、十六夜や耀の様に前線での接近戦には向かない。

それに、彼女は武道の嗜みは皆無。

そうならば、彼女のギフトを生かす方法は……彼女が操れるギリギリの霊格を持つギフトを集める事。

「そうだな……狙い目は自動人形オートマターか自然現象系だな。燃烧とか氷結とか……突風つてもいいかもしれない」

《つまり、兄さんはこのゲームに優勝して、飛鳥様のギフトを手に入れたい、という事ですか?》

「それもある。もう一つは……これを機会に、すこおし耀と飛鳥を凹ませようと思つてな」

《凹ませる……ですか?》

「そつ。耀と飛鳥が現状の力で満足している、とは俺も見ていない。それに……彼奴ら個人プレイが多すぎる。この先、チーム戦やタッグ戦、軍勢戦レイドがあつた場合、真つ先に死ぬのは……あの二人だ」

《あの……十六夜様は?》

「彼奴は、ふざけている様に見える堅実だ。突拍子もない事を平然とやっているが、適材適所を弁えている。多分、彼奴はもう誰かから指南を受けてるんじゃないか？」

《あ、あれ程のギフトを持つ十六夜様を指南、ですか!?!》

ギョツとカグヤが目を見開く。

確かに、十六夜の知識量、才能は箱庭出身で、悪鬼羅刹を見慣れている筈のカグヤですら、驚愕させるほどのもの。

そんな彼を指南した人物……

全く考えられない。

「ま、とにかく、だ。カグヤには、俺のサポーターとして、ゲームに参加してほしい」

《で、でも、堅実に優勝を狙うなら、十六夜様にサポーターをお願いした方が……》

「いや、彼奴は無理」

きつぱりと否定する帝。

「考えてもみろよ。俺と十六夜が組んだら……ゲームそのものが混沌とするぞ?」

少しだけ明後日の方を向く兄に、カグヤは二人が参加する様を思い浮かべる。優勝する姿は容易に想像がつくのだが……如何せん、その途中経過が悲惨な有様しか思い浮かばず、失礼とは思ったがカグヤはブルリと体を震わせた。

《……本当に私で良いんですね？ 兄さん》

「勿論。それに……カグヤにはやってもらいたい事もあるしな」

《？……………はあ？》

ニタニタと笑う帝へ、カグヤはよく分からないままに頷く。そのまま、二人は明日に向けての作戦会議を夜通し続けた。

・



## 十五章 迷宮へいざ

——境界壁・舞台区画。 “火龍誕生祭” 運営本陣営。

割れる様な歓声を耳に、カグヤはその舞台裏で身体を固くしていた。

それはもう、見ているこちらが緊張してしまう程のガチガチ具合。

流星に、これには帝も笑ってしまった。

「おいおい、舞師であるお前がこの程度で緊張してどうすんだよ」

《ま、舞を披露するのと、ギフトゲームに参加するのでは、全くの別物です!!》

むうと唸る妹に、苦笑が浮かぶ。

こんな愛らしい姿を晒すのは、家族だけ。

まだコミュニケーションが無事だった頃は、からかわれる度に頬を膨らませていた。

パタリ、と帝が尻尾を揺らす。

「平気だって。お前は昨日話した通りにしてくれればいい。選手は俺、サポーターがお前。だから、無理に戦おうとせず、ただ作戦通りにしててくれれば、十分だ」

《う、上手くいけますか?》

「大丈夫だって。ほら、そんなに肩に力をいれるな。ゲームを楽しむ事だって、大事な仕事なんだぞ?」

ほれほれ、と尻尾でペシリペシリと叩けば、カグヤは少しだけ困った様に、でも安心した様な表情で頷く。

《それで、帝。『ウィル・オ・ウイスプ』の対策は、如何しますか?》

「抜かりない……と、言いたいところだが、早々に奥の手を見せる結果になると思ってる。もし、相手の選手がコミュニティのリーダーだった場合は、速攻で勝負を決めるつもりでいく」

《……兄さんでも、やはり厄介だと思っ相手なんですか?》

少しだけ不安そうに首を傾げる。

兄の実力を知るからこそ、こうまで言わせる敵に、カグヤは不気味な違和感を感じて

いた。

帝はんく、と考える素振りを見せ、普段通り快活に笑って見せた。

「いや、奥の手を見せるなら長期戦は避けたいだけだ。そうでなきや、この姿でも軽うく優勝してやんよ」

《……もう、それでは他の選手の皆様に失礼ですよ?》

「はいはい」

軽く諫め、カグヤが笑う。

ちよつとした雑談で、彼女の緊張も和らいだらしい。

ゲームに呼ばれるまで、後少し。

もう少しだけ、他愛ない会話を続けるか、と帝は尻尾を軽く振った。



☆☆☆☆☆

舞台の真中で、黒ウサギがクルリと回り、入場口から迎え入れる様に両手を広げた。

『それでは、入場していただきましょう!!第一ゲームのプレイヤー・“ノーネーム”の春日部耀!!』

三毛猫をジンに預け、通路から舞台に続く道に出る。

大きな闘技場に出た瞬間、彼女の登場に、会場からは割れんばかりの歓声が出迎えた。

「春日部さん!!頑張つて!!」

運営側のバルコニーより、飛鳥が大声でエールを送る。

耀はそれに応える様に手を振ると、黒ウサギがいる舞台へと登っていく。

『続きまして!! “ウィル・オ・ウィスプ”のアーシャ||イグニファトウスです!!!』

黒ウサギが別の入場口を示す。

その瞬間——耀の眼前を高速で駆ける火の玉が横切った。

「YA ッ F U F U U U U u u u u u u!!」

「わっ………!!」

『お嬢!』

ドスン、と耀は堪らず仰け反り、尻もちをつく。

頭上を見れば、火の玉の上に腰かけている人影があつた。

強襲した人物——“ウィル・オ・ウィスプ”のアーシャは、ツインテールの髪と白黒のゴシッククロリーターの派手なフリルのスカートを揺らしながら、愛らしくも高飛車な声で嘲笑た。

「あつはははははははははは! 見て見て見たあ、ジャック? “ノーネーム”の女が無様に尻もちついてる! ふふふ。さあ、素敵に不敵にオモシロオカシク笑ってやろうぜ!」







その中を、シャン、シャシャン、と一定のリズムで響き渡る鈴の音。

その音の原因を黒ウサギはいち早くウサ耳で感知すると、持ち直した笑顔で入場口に手を差し伸べる。

「三人目のプレイヤー!!同じく「ノーネーム」の月影帝!!!」

その声と共に会場を旋風が包み込み、その刹那――

「さて、派手にいくか」

楽しげにククツと笑う声。

誰もが意味が分からないと戸惑う中、風が止むと同時に舞台に現れた影二つ。

《皆様!!!機嫌麗しゆうございます!!!》

割れんばかりに響かせる『声』。

次の瞬間、会場は今までにない程の歓声が怒濤の様に押し寄せる。



「我ら兄妹、このゲームをサンドラ様へ捧げます!!どうぞ、楽しんで観賞して下さいませ!!」

彼らの宣言に、会場の熱気はピークへと達する。

カグヤは舞う様に軽くステップを刻み、扇を広げると笑んだ。

観客の目がカグヤへと集中する中、帝はコソリと離れると耀の傍に寄り、ククツと笑う。

「お前、いつまで無様な姿を晒すつもりだ?」

カチン、と耀の琴線に鋏が触れる。

耀は無表情のまま立ち上げると、軽く土を払った。

「客引きの為にカグヤを利用する帝には、言われたくない」

「はいはい………それで?お前のサポーターは誰だ?飛鳥…はバルコニーだから、レティシアか?それともジン?」

「ううん。私は一人で出るの」

「……………何？」

ふんつと顔を背ける耀。

先程までふざけた調子だった帝の声が、最後の方から雲行きが怪しくなる。

悪戯じみた笑みはみるみる也を顰め、その表情に苛立ちと侮蔑に違い色が浮かんだ。

流石に、この変化には驚いたのか、少しだけ耀の表情に驚きが映る。

「……………帝？」

「……………そうかい、そうかい。そりゃ、いい。お前がそのつもりなら、俺も凹ますなんて、甘い考えは持たない」

低く唸る様にそれだけ言うと、彼は耀に見向きもせず、スタスタとカグヤの横へ戻っていく。

興奮冷め止まぬ中、黒ウサギが静止を促すと、宮殿のバルコニーに手を向けて厳かに宣言する。

『——それでは第一ゲームの開幕前に、白夜叉様から舞台に関してのご説明があります。』

尚、もう一人のプレイヤー“ラッテンフィンガー”は、コミュニティの不祥事により、第一ゲームを欠席するとの連絡を受けております。ギャラリーの皆様は、どうかご静聴の程を』

刹那、会場かあらゆる喧騒が消えた。

バルコニーの前に出た白夜叉は、静まり返った会場を見回し、緩やかに頷いた。

白夜叉が挨拶を始めた時、帝がクンツとカグヤの舞衣装の裾を引く。

《……？兄さん、どうしました？》

「カグヤ、作戦変更。——徹底的にやる」

《え………？》

訳が分からない、と戸惑うカグヤ。

だが、それ以上は何も語らず、帝はただ白夜叉を見上げるだけ。

一体、どういう事なのだろう。

混乱したまま、再度帝へと問おうとした時。

パン！と会場一致で拍手一つ。  
その瞬間————全ての世界が一変した。

☆★☆☆☆☆

変化は劇的だった。

プレイヤーの足元は虚無に呑まれ、闇の向こうには流線型の世界が数多に廻っていた。

その世界の一つに、鷲獅子と戦った舞台があつた事に気づく。

(これは……白夜叉の……?)

耀はほっと肩から力を抜く。

これが、白夜叉のゲーム盤であるなら、不安に思う事は何も無い。暫しの浮遊感の後、バフン、と少し意外な着地音。見れば下地は樹木の上だ。

《……アンダーウッド》

辺りを見渡し、カグヤが呟く。

上下左右、その全てが巨大な樹の根に囲まれている大空洞。

どうやら、ここがゲーム会場らしい。

帝は足元を確かめる様に、軽く踏みしめ、感触を確認する。

(固くも弾力がある……それでいて、空間には湿度も十分)

帝があれこれ確認している間に、アーシャと耀は険悪なムードを更に最悪なまでに発展させ、既にアーシャは臨戦態勢を整えている。

隣で少し不安そうにあうあうしているカグヤを尻目に、はあ、とこれ見よがしに帝は溜息を零した。



「これだから……おい、餓鬼共<sup>ルーキー</sup>。少しはプレイヤーらしくしたらどうだ？これだから、ゲームの基本も知らない餓鬼共と一緒に嫌なんだよ」

《み、帝!!》

止めるのか、と思いきや、彼は平然と火にガソリンは愚か、ダイナマイトを投げ入れる。

勿論、二人の敵意は一遍に帝へと向かう。

空気が針の筈へと変わった瞬間、突如発生した切れ目より黒ウサギが、姿をのぞかせる。

そして、ホストマスターによつて作成された光輝く<sup>ギアスロール</sup>「契約書類」を振りかざした黒ウサギは、書面の内容を淡々と読み上げる。

『ギフトゲーム名 “アンダーウツドの迷路”』

・勝利条件 一、プレイヤーが大樹の根の迷路より野外に出る。

二、対戦プレイヤーのギフト破壊。

三、対戦プレイヤーが勝利条件を満たせなくなった場合（降参含む）

・敗北条件 一、対戦プレイヤーが勝利条件を一つ満たした場合。

二、上記の勝利条件が満たせなくなった場合。』

「――ジャッジマスター審判権限」の名において。以上が両者不可侵で有る事を、御旗の下に

契ります。お二人とも、どうか誇りある戦いを。此処に、ゲームの開始を宣言します」

黒ウサギの宣誓が終わる。

それが開始のコールだった。

全員が距離を取りつつ初手を探る。

勝利条件が複数ある以上、明確な方針が欲しかった。

だが、すぐに帝はそれを止める。

相手を舐めている訳ではなく、彼にとって方針は一つだけなのだ。

「カグヤ、頼んだ」

《……本当にいいんですね？》

少しだけ困った様に笑って、許可を促す。

彼はそれ以上なにも言わなかったので、作戦を本当に変更したのだろうか。諦めた様に扇を広げる。

明確な動きを見せたカグヤに、アーシャと耀が緊張した面持ちで構える。

《——誘いなさい、芭蕉扇》

服に飾られた鈴が鳴る。

扇を三度煽ぎ、風が空間を吹き抜ける。

荒れ狂う風の海。

その中で、耀とアーシャが飛ばされまいと足を踏ん張る。

だが……ふと、耀の頭に疑問が浮かんだ。

前回の「ペルセウス」とのゲーム。

あの時、カグヤが使った風はこんなにも穏やかだったのだろうか。

打撃を受け、痛みを負っていた自分は、必死に柱にしがみ付き、それでも本能的に大

惨事を予想していた筈だ。

なら、彼女の風の穏やかさはプレイヤーへの攻撃、とは思えない。  
それならば、彼女達の目的は……

「っ……しまった!!」

頭に浮かぶ回答。

耀は慌てて鷲獅子より受け取ったギフトで、旋風を巻き起こし、カグヤの風を乱しにかかると。

だが、その時には既に遅かった。

《……マップの暗記を完了しました、兄さん》

カグヤ本人が風を霧散させ、淡いため息を混ぜた『声』で帝に告げる。  
その瞬間、アーシャには驚きの、耀には悔しげな色を帯びた。

「カグヤの風を使って、迷路を攻略にかかるなんて……」

「気づくのが、遅いんだよ馬あ鹿」

ククツと帝が喉の奥で笑うと、素早くカグヤを背に乗せ、疾走する。

そう、彼女は初めから攻撃や牽制の為に芭蕉扇を振るった訳ではない。

彼女は、『誘いなさい』と告げていたのだ。

つまり、あの風はカグヤがマップを覚える為に使った風。

すぐさま疾走する帝を追う耀。

アーシヤは、いきなりスタートした“ノーネーム”二人を暫し啞然と眺めた後――

――ハツと我に返る。

そして、その後に残ったのはどうしようもない怒り。

「ふざけんなよ……“ノーネーム”風情!!とことんアーシヤ様を無視するっていうなら、加減なんざしねえ!!行くぞジャック!樹の根の迷路で人間と狼狩りだ!!」

「Y A H O H O H O h o h o ~ ~ !!」

怒髪天を衝くが如くツインテールを逆立てさせて猛追するアーシヤ。

その視線の先には、自分より少し早く走り出した耀の背と、それよりももっと奥に見



フトか…!?)

アーシャはジャックの業火の軌道が逸れた事に舌打ちする。

帝の背からチラリと背後へと視線を向け、そつと帝へ耳打ちする。

《次の枝を潜つて、右へ。……………帝、相手の事なんですが》

「分かっている。あのカボチャ頭は兎も角、プレイヤーの娘は大した事はなさそうだな」

少しだけ不安そうなカグヤへ、帝はその指示通りの進路を取りつつ、軽く頷く。

——Will o' the wisps と Jack o' lantern の伝承。

前者の伝承は、無人の場所で突如、青白い炎が生まれる現象。鬼火と云われるもの。

後者の伝承は、彷徨う死者の魂が形骸化された逸話。所謂幽鬼と云われるもの。

しかし、この二つの伝承には、それぞれに共通した逸話が残っている。

《伝承では、双方共に『名も無き悪魔が篝火を与えた』となっていていますよね？つまり、相手は……》

「あの娘は、コミュニティのリーダーとは違う。あそこのリーダーは、『生と死の境界に現れた悪魔』であり、篝火を与えた悪魔だ。その火力にしては、弱弱し過ぎる。多分、あ

の娘はコミュニケーションのリーダーが引き入れた地霊の一種だと推測する。だが………あのカボチャ野郎だけは、別格だぞ」

疾走しつつ、背後の様子を窺う。

距離としては、かなり引き剥がしてはいるが、それでも相手は耀と六桁コミュニケーション。油断しても勝てる、と言う訳ではない。

「あーくそ！ちよろちよろと避けやがつて！三発同時に撃ち込むぞジャック！」  
「Y A ッ F U U U U U u u u u u u !!」

アーシャが左手を翳し、次に右手の右手のランタンで業火を放つ。

先程より勢いを増した三本の炎。

だが、それに対して帝も耀もギフトを発動する気配なく、スルリとすり抜けて見せた。

「………な………!?!」

絶句するアーシャ。



カグヤは少しだけ眼を丸くすると、ちよいちよい、と帝の耳を引く。

《帝、今のは……》

「微かに燐の臭いがした。多分、俺ですら感じるんだから、耀も理解しているだろうさ。相手は可燃性のガスとかを利用して、攻撃してきてる」

そもそも、耀が風で炎の軌道を逸らした時に、帝の中には微かな違和感があった。

炎は風に煽られれば、更にその威力を増す。

勿論、炎以上の強風に見舞われれば、炎が消える事もあるが、耀が使ったのは本当に最小限の風のみ。

それでも、炎の軌道が逸れた、というのであれば、それは炎を誘導していた可燃性の何かを彼女の風が払った、と考える方が自然だ。

つまり、アーシヤが利用しているのは天然のガスや燐を発火前に霧散させているという事。

彼らの動きで、アーシヤは種を見破られた事を察し、悔しげに歯噛みする。

「くそ、やべえぞジャック……このままじゃ、逃げられる！」

「Yahoo……!」

走力では俄然、耀と帝が勝っている。

人間を乗せているというのに、どれだけ走っても彼の速度は落ちてはいないし、耀に至つては豹と見間違ふ健脚を駆使して、見る見る帝との差を詰めにかかっている。

そして、双方共にこの迷路の正しい道を把握している、と仮定して間違いないだろう。これでは、迷路の意味がない。

アーシヤは離れていく二人の背中を見詰め——諦めた様に溜息を吐いた。

「……………くそつたれ。悔しいが後はアンタに任せるよ。本気でやつちやつて、ジャックさん」

「わかりました」

え?と耀が振り返る。

まさか、とカグヤが息を呑む。

遙か彼方にいたジャックの姿はもうそこにはなく、気が付けば帝の進行方向、その前方に霞の如く姿を顕現させたのだ。

巨大なカボチャの影に、慌てて帝がボックスステップで後方へと距離を取る。

「嘘」

「嘘じゃありません。失礼、お二方」

ジャツクの真つ白な手が、耀を巻き込む様にして帝共々薙ぎ払う。咄嗟にかわそうとしたが、それでも間に合わない。

《きやつ……!!?》

「カグヤ!!」

樹の根の壁へと吹き飛ぶ際、カグヤの手が帝の背より離れる。

慌てて手を伸ばすが、狼の四肢では彼女を抱く事も出来ず、全員揃って叩き付けられる。

意識が飛びそうになる程の衝撃に、軽く眩暈や嘔吐感に襲われ、耀が咳き込む。

「っ……!!?」

「カグヤ、無事か!？」

《大丈夫、夫……で、す》

すぐさま近寄るが、カグヤの顔色は芳しくない。

それもそうだろう。

彼女は箱庭出身者であり、普通の人間に比べれば丈夫な方ではあるが、それでも普通の少女なのだ。

こうした、荒事になれている訳ではないのだから、本当であればこの痛みでも失神しておかしくはないだろう。

帝から見ても、妹が気絶していないだけ、もうこの場で褒めてやりたいくらいだ。

「さ、早く行きなさいアーシヤ。このお嬢さんと狼は私が足止めします」

「悪いねジャックさん。本当は私の力で優勝したかったんだけど……」

「それは貴女の怠慢と油断が原因です。猛省し、このお嬢さんや狼のゲームメイクを少しは見習いなさい」

「……あゝ、くそ。全くだぜ」

声を上げたのは、帝だった。

その語調は酷く苛立ち、怒りすら感じさせる。

だが、その怒りが向くのは……己自身。

「全力でやる……つて決めてたんだ。相手が如何に木っ端悪魔だからって、油断している理由にはならねえよな……!!!」

酷い苛立ちと焦燥感。

それは、全て己の甘さへと向かう。

今にも自分自身へ嘔み付こうとする様な気迫ある兄へ、カグヤが慌てて宥める。

《帝……ほら、私は大丈夫ですから》

「大丈夫なもんか。お前、頬に血がついてる」

え？とカグヤが目丸くし、自身の頬を撫でる。

そこには、確かに痛みを伴う傷が一つ。

だが、この程度の傷であれば、それこそ一日経過すれば痕すら残らず消えている事だ

ろう。

それでも、帝の苛立ちが止まらない。

「クソが……！女の子の顔に傷だと……」

《に、兄さん？落ち着きまししょう？げ、ゲームからお話が逸れている様な気が……》  
「ゲームより！！嫁入り前のお前の顔に傷がついた方が、一番の問題だ!!!」

いや、どう考えてもゲームの方が大事だろう。

呆然とするジャックとアーシャとは違い、耀は無表情で溜息一つ。

“ノーネーム”にとって、帝のシスコンは今に始まった事ではない。

だが、ここで固まっついては勝てる勝負も勝てないだろう。

逸早く復活したアーシャが慌てて走りだそうとする。

慌ててその背に追い縋る耀。

「ま、待つ」

「おっと……待ちません。貴女達は此処でゲームオーバーです」

ジャックが言う。

そして、ランタンから篝火を零す。

その僅かな火は樹の根を瞬く間に呑み込み、轟轟と燃え盛る炎の壁となった。

先程までとは比にならない圧倒的な熱量と密度に、耀は息を呑む。

帝はスウ……と眼を細め、ジャックを睨んだ。

「やっぱりな、お前は本物って訳か」

「ヨホホ……♪狼さんのご想像通り。私はアーシャイグニファトウス作のジャック・オー・ランタンではありません。貴方方が警戒していた存在——生と死の境界に顕現せし大悪魔！ウイラーザイグニファトウス製作の大傑作！それが私、世界最古のカボチャお化け……ジャック・オー・ランタンでございます♪」

陽気な笑い声を上げるジャックだが、カボチャの奥の瞳には先程までとは違う炎が灯っている。

明確な意思と魂。

そして威圧感。

その存在感に、カグヤは小さく身を震わせた。

(ジャック・オー・ランタン……これが、この世に生み出された不死なる怪物……)

勝てない……

そう、カグヤは思った。

このまま、例えば兄と耀が協力しあつたとしても、現状として勝てると思える要素が一切カグヤには思い浮かばない。

……今のままでは。

「——カグヤ!!」

鋭い声に呼ばれ、ビクツとカグヤの肩が跳ぶ。

慌てて顔を向ければ、そこにはジャックを睨んだままの帝の姿。

その瞳には、敵意がありありと浮かんでいるというのに、彼の口元は楽しげな笑みに彩られている。

ああ、そうだった、とカグヤは内心で呟く。

月影帝は——兄は昔から、好戦的過ぎるのだった。



カグヤは痛む体を見せ、ゆっくりと立ち上がる。

《呼びましたか？ 兄さん》

「悪いが、緊急時の作戦に切り替える。頼めるか？」

《……兄さん。昨日話し合いましたよね？ その作戦は、魔王が現れた時のみに発動する、と》

「丁度いい肩慣らしになるだろ？ それに……今日は凄く良い予感がするんだ」

ニシシ、と笑う兄に、自分の声等殆ど届いてはいないのだろう。

カグヤは溜息を一つ零し、淡く苦笑すると静かに首を縦に振った。

《分かりました。——カードを》

差し出されたカグヤの手。

帝はその仕草へ待ってました、と言わんばかりに笑みを濃くし、自身のギフトカードを彼女へ差し出す。

「穢れぬ乙女に忠誠を、暗き闇へ光の刃を」

静かに紡がれた言葉。

カグヤは呆れた様に苦笑をし——丁寧に、彼のギフトカードへと口付ける。宛ら、自身へと忠誠を誓う騎士へ、その思いに応える姫君の様に。

——次の瞬間

「え……っ!？」

「よ、ヨホホ……?」

眩い閃光が世界を白に染め上げる。

慌てて眼を庇う耀。

だが、ジャックはその光景に只ならぬ気配を感じ取ったのだろう。

すぐさま、光の中心——帝がいた場所へとランタンの篝火を差し向ける。

地獄を体現せし赤き業火。

そんなものを受ければ、死体すら残らずに炭となって地へと返るだろう。

「っ！帝！！カグヤ！！」

耀の音が響く。

「呼んだか？」

炎が一瞬にして凍る。

驚く程に冷静な声と共に、耀が見ていた世界が一瞬にして氷結で彩られていく。気が付けば、自分の吐く息が真っ白に変わっていた。

肌を指す冷気に、耀の脳裏で警鐘がなる。

「み、かど………？！」

彼を呼ぶ声が、頼りなく響く。

それもそうだろう。

耀の目の前にいたのは、サラサラと手触りのいい毛皮を持った銀狼ではなく――

――青年が立っていた。

月光の様な白い髪を後ろは短く切り揃え、モミアゲはそれと対照的に胸近くまで長く伸ばし、左側には淡蒼いメッシュを入れている。

身に纏うのは、ブーツとダメージ加工したジーンズ、そしてYシャツと黒のベスト、赤い紐と月のブローチで出来たループタイという、これまたアンバランスな出で立ち。

彼は空色と董色のオッドアイを楽しげに細め、小さく笑む。

「まさか、この程度で終わり……なあんて事はないよな？カボチャのお化け」

「月光の様な銀髪……空色と董色のオッドアイ……まさか、」

言葉を詰まらせるジャック。

その時、遙か前方より悲鳴にも似た声があがった。

「あ、アーシャ……!?!」

「クク………流石に、俺もコミュニティの看板を背負ってるもんでな。此処で、アンタとやり合ってる間に、ゴールされたら困るんで捕獲させてもらった」

分かるだろ？と、青年が足元で凍る樹の根を右足で何度か踏んで見せる。

つまり、彼女はこの冷気によって足を凍らされている、と判断すべきだろう。  
ポカン……と耀が目を丸くする。

「え？……み、帝……なの……？」

「んあ？おいおい、この場でボケられても、ツツコミしないぜ？」

「だ、だつて、帝は狼で………」

「……ああ、そうか。お前らつて、俺の姿を全く知らなかったんだつたな。悪い悪い」

ニシシ、と笑う彼は一応は謝る素振りを見せたが、全く悪いとは思っていないだろう。  
流石に、誰もついていけない状態なので、帝はニツと笑うと高らかに宣言する。

「そうだ。俺が月影帝！嘗て『箱庭の御子』と呼ばれた存在、『竹取物語』に所属する  
分家にして、最後の生き残り!!月影一族より『帝』の名を襲名せし存在!——それが、  
俺だ」

ふふん、と得意げに笑うが、箱庭に来て間もない耀にとつてはよく分からない話。  
だが、ジャックは違う。

その瞳には、驚きと畏怖、そして嫌悪が映る。

「……まさか、こんな最下層のゲームに元三桁のコミュニティが参加しているとは、思いま  
せんでしたよ。しかも、貴方の様な残虐凶暴なプレイヤーがいるとは……………生きていた  
のですね？」  
《ブラッド・デイトメア》  
「血染めの魔王殺し」

「……………懐かしい名前で呼んでくれるな、不死なる化物」

今まで楽しげだった声が、一瞬だけトーンを落とす。

その瞳に映るのは寂しさと悲しみ、そして後悔。

だが、その色もすぐさま消え失せ、傲慢な程の自信だけが映る。

「それで？お前は前方で拘束状態の地精を守りつつ、俺の妨害をする、でいいのか？」

「地精……？」

「おやおや……………お見通し、ですか？」

「当たり前だ。《ウィル・オ・ウィスプ》の炎は紛う事なき悪魔の炎。それを態々人間に  
も理解できる様に、化学現象としてお前達は発信してるんだからな」

「え…………？」

「流石は、と言うべきでしょうね。よく、我々について調べていますねえ」

ヨホホく♪と笑うジャック。

だが、耀だけが話に取り残されている。

「……カグヤも分かってた？」

《あ、いえ……私も帝に聞いた程度です。でも……伝承の内容にしては、霊格が少し弱いかなあ……程度には感じておりました》

淡く苦笑しつつ答えるカグヤ。

耀も、相手がリーダーではない以上、アーシャが生と死の境界に具現する悪魔ではない、位は分かった。

だが、それ以上についてはよく分かってはいなかった。

はあ、と帝が溜息を零す。

「ゲームにおいて、名前、能力、伝承は必須条件。知らなかったでは、一生かかっても上のコミュニティには勝てないぞ」



「……………帝は、アーシャの正体が分かったの?」

「燐を使ってる辺りで、な。何度も言うが、〃ウィル・オ・ウイスプ〃は伝承通り悪魔の炎。その発火に燐や天然ガスは不要。なら、彼女は何故それを必要としたのか……………理由は至極簡単。アーシャは悪魔ではない。彼女は何かしらの霊体だったのを、リーダーが引き取った。燐や天然ガスを使える辺りで、大地の精霊となり力を付け始めた……………で? どうだ? ジャック」

「……………悔しい程に聡明ですね、帝殿?」

「お褒め頂き、光栄でございます」

悔しげに言うジャックへ、帝は紳士らしく丁寧に頭を下げる。

その仕草は、完全に相手を馬鹿にしている様にしか見えない。

「……………でも、どうして、」

「おいおい、これ以上俺を失望させたいのか? 耀。〃ウィル・オ・ウイスプ〃について、調べが甘すぎるだろ。彼奴らは報われぬ死者の魂を導く功績によって、霊格を得ている。それならば、アーシャと呼ばれる彼女は、何かしらの天災や事故で死んでしまった

魂だろうき。だから、お前らのリーダーは引き取った……それが、当たり前であるかの様に」

「ええ、そうです。我ら蒼き炎の導を描きし旗印は、無為に命を散らした魂を導く篝火。救済の志は、神々に限られた領分ではないのです——!!」

ジャック・オー・ランタンは己が旗印を誇る様に腕を広げ、高らかに宣言してみせる。その姿は、彼がどれだけ自分のコミュニティを誇っているかが、よく分かった。だからこそ、帝は静かに首に下がったループタイの月を模したブローチを握る。

「……このゲームでは、創造系ギフトが主。だから、俺は自分に宿るギフトは一切使わない。今、俺が使えるのはこのブローチとピアスのみ」

「……あれ？帝が持ってた創造系ギフトは、「フィンリル・ラグナロク神を喰らう大狼」だけじゃないの？」

《いえ……》

不思議そうに首を傾げた耀へ、カグヤが苦笑する。

《帝が神を喰らう大狼を使い出したのは、狼になって以降です。……あのギフトは帝が

人間だった時に常備していたモノ。そして、兄さんがコミュニケーションで生きていく為に必須だった物です」

「コミュニケーションで生きていく為に……必須？」

《はい。それは——》

「カグヤ。お喋りは其処までにしておけ」

厳しい声音で、カグヤをたしなめる。

今はゲーム中であり、耀と帝は同じコミュニケーションだったとしても、現在は敵同士。相手に自分の情報を売る事は、自殺行為の様なモノだ。

カグヤもそれを理解したのだろう、少しだけ不満そうな表情をしたが、渋々頷く。

「……さてつと、お話はこんなもんで満足したか？」

ゆつたりと笑みを浮かべ、帝が一步前へと出る。

その手には徐々に強い冷気が集まりだし、一振りの日本刀を作り出す。帝はそれを強く握り締めると、その切っ先をジャックへと付きつける。

「ゲームのルールに乗っ取るなら、相手のギフトの破壊、及び迷路攻略。お前が俺の進行方向を妨害すると言うなら、俺はお前を破壊する以外に勝利条件を満たせない」

「貴方に、私が壊せると？ 聖人ペテロに烙印を押されし不死の怪物——このジャック・オー・ランタンが。」

「破壊出来ないまでも……再起不能にはさせてやるよ」

静かに宣言する声と共に放たれた、圧倒的な敵意。

彼はそう宣言した以上、ジャックを再起不能にさせるのだろう。

暫し二人は睨みあい……先に折れたのはジャックだった。

「……どうやら、貴方が現れた時点で私の負け、と思っただ方がよさそうですね」

戦意を喪失した様に腕を下げるジャック。

その姿に帝は刀を霧散させると、小さく苦笑した。

「そうしてくれると、俺としても有り難いかもな。流星にギフトとはいえ……アンタを破壊するのはちよつと、な」

「……………」

「……えっと、どうかしたか？」

あれだけお喋りだったジャックに黙り込まれ、帝が首を傾げる。

「いえ。……………風の噂で耳にしていた事実とは、大分違う方なのですな、帝殿」

「噂って……………いや、それは多分事実だ。俺がこうして、平和にゲーム出来ているのは彼奴らや、今の仲間達、それからカグヤが俺の傍にいるからだよ」

少しだけ寂しげに笑み、どこか懐かしそうに言葉を紡ぐ。

その姿には、彼がどれだけ前のコミュニティを大事に思っていたのかが、よく窺える。帝は一度深く息を吐くと、カグヤへと振り返る。

「カグヤ、道は？」

《あ、は、はい。右斜め前の根に沿って走れば、ゴールに辿り着ける筈です》

「了解。じゃ、後始末を頼んだ」

帝はヒラヒラと手を振ると、カグヤが示した根を疾走する。

その速さは狼だった時と全く変わらぬ俊足。

残されたカグヤは、芭蕉扇を握り直す。

《……耀様は、ギブアップなさりませんか？》

「うん……私は帝を追うよ」

《では、私は耀様を足止めさせて頂きます》

「……カグヤが？」

《ほえ？当たり前じゃないですか。兄の足なら、ゴールするまで五分くらいでしょうね。それまで、私は耀様をここへ留めて置けば、十分にサポーターとしての仕事をこなした事になります》

ニコツと笑うカグヤは、もう怪我の自己治癒が終わりに近いからだろう。

帝があれ程話していたのは、多分カグヤの自然回復を待ったため。

なら、未だにダメージの残る自分が追うのは、厳しい。

それに、と耀は自分の前に立ちほだかつたままのジャックを見る。

耀は彼に対して、今までの敵の中でも強敵だという事を肌で感じていた。

そのジャックが、帝との直接対決を避けた。  
つまり、彼にはそれだけの实力がある、という事だろう。

(……なんか、悔しいな)

首にかかったペンダントを握り締め、耀は現状を納得させていく。

普段から一緒にいる彼は、今まで自分達に切り札を見せた事がなかった。

つまり、彼にとつて今までのゲームはどれも、呪いの制限キットがあつても大丈夫だと判断出来たモノだったのだ。

それに……カグヤはこう言った。

力を使うのは魔王が現れた時、だと……。

自分も、帝が本気で潰しにかかった時点で……負けは確定していたのかもしれない。  
い。

そう思える程に、彼の敵意は凄まじいモノがあつた。

耀が暫しペンダントを見詰めていると、空間が霧散した。





☆☆☆☆

会場は、まるで夢から覚めた様な静けさだった。

ゲームの決着がついた瞬間、会場の舞台はガラス細工の様に碎け散り、円状の舞台に戻ってきていた。

呆然とする観客達。

その中で一人、黒ウサギは何事もなかった様に終了を宣言する。

『勝者、月影帝』

ハッと観客席から声上がる。

次に割れんばかりの歓声が会場を包んだ。

その声に、勝者である帝は静かに手を上げて応える。

おおと声上がる舞台の中心に立ち尽くす耀。

その隣にはカグヤとジャックが静かに近寄る。

「一つ、お聞きしても?」

「……………。何?」

「今回のゲームには、一人まで補佐が許されています。帝殿ならばカグヤ嬢が、アーシヤには私がいた様に。同士の手を借りようとは思わなかったのですか?」

「……………、」

耀は質問には答えず、静かに空を仰いだ。

その姿に、カグヤが少しだけ怒った様に眼を細めた。

《耀様、帝はゲームが始まる前に私に言いました。徹底的にやる、と。帝が怒った理由が分かりますか？》

「……………怒ってた？」

《はい。私もビックリする位に。今回のゲームには、耀様にも十分に勝機のある内容だったと私は思います。……………でも、それは耀様の補助にジンやレティシアといった仲間達がついた場合のみ、です》

「……………」

「私からも…余計なお節介かもしれません……………貴女の瞳は、少々物寂しい。コミュニケーションで生きていく上で、誰かを頼るシチュエーションというのは多く発生するものです」

「別に、皆と仲が悪い訳じゃ、」

《それでも……………単独行動ばかり取られては、私達は不安になります。耀様が私達を信用してくれていないのでは、と》

「そうですね。貴方は今まで、単独行動で傷を負う様な事はありませんでしたか？」

ぐつ、と耀は黙り込む。

それは手痛い指摘だった。

“フオレス・ガロ”のガルドと戦った時、一人で挑んでいたならば、死んでいたと思われる結果だった。

あの時、カグヤが庇ってくれたからこそ、自分はこうして五体満足でコミュニティの為にギフトゲームへと参加出来るのだ。

“ペルセウス”の時の様な総力戦なら兎も角、借りるべき力を借りていなかったのは、彼女の怠慢とも言えるだろう。

察したジャックが優しく諭す様な声音で言う。

「協調と一口で言っても、それらは積み重ねる事でしか実感出来ない様なモノです。お若い貴女にはまだ分からないでしょうけど……ああいや、どうにも説教臭い。カボチャだけにお節的な性分で！ 貴女の様に物寂しい瞳の子供を見ると、一声掛けずにはいられないのですよ。……彼にも、本当であれば声を掛けたいのですが」

「彼？………帝に？」

「彼も、貴女と同じく物寂しい瞳をしていました。いや……違いますね。疵付き過ぎて

どうする事も出来ずにいる怯えた子供の瞳、でしょうか」

ヤホホ!と笑って濁すジャック。

カグヤは彼の指摘を受け、未だに壇上で声援を浴びる兄へと視線を向ける。

何時だって笑ってくれる兄。

その姿に、自分はどれだけ励まされ、プレイヤーとして努力出来た事だろう。

だが、それと同時に危うさすら感じていた。

《……ジャックさんの言う通り、ですね》

「……?カグヤ?」

《耀様、先程私が話せなかった事をお話します。帝が普段から常備している創造系ギフトですが、あの首に下げているループタイに使われているブローチと、普段は髪に隠れて見えませんが右耳に一つ、銀の星を模したピアスがあります》

見えますか?と問われ、注意深く見詰めると、確かに彼の右耳にキラリと光るモノがある。

形までは確かめられなかったが、多分それが帝が言っていたギフトだろう。

《ブローチは十五ルミナス・ムーンの月と言います。月がその姿を変える様に、あのギフトは自分と相手、両者が持つギフトを十五まで記憶する事が出来、使用する事が出来ます》

「…物真似のギフトって事？」

《そうですね。ただし、その効力はオリジナルよりも多少威力、霊格共に劣るんだそうです。そして……一番兄が大事にしているのは、ピアスの方です。あれは新月ルナ・レスの戒めといつて、霊格を墜とす為にあるギフトです》

「霊格を……？」

そこで、ふと耀に疑問が浮かぶ。

今日、帝と戦ってみて分かったのだが、彼にサポートが必要だったのだろうか。

勿論、カグヤのマップ攻略能力には耀も危機感を覚えたが、その後の戦闘や移動は帝が殆ど行っていた。

逆に、カグヤが居た事で彼には自由が拘束されてしまっていた様にも見えた。

《兄がこの箱庭で一番嫌悪しているのは、己と魔王です。強過ぎる力は、その制御を間違えば簡単に命を奪ってしまおう。……私と兄さんがコミュニケーションに招かれた時、兄さんはずっと苦悩していました。強過ぎる力や自身が犯した罪に》

「……………ねえ、カグヤ。帝って、何者なの？」

それは、純粋な質問だった。

カグヤとは、何度となく自身の事を話していた。

だが、帝はいつだって自分達には何も語らず、回答を先延ばしにしながら笑っていた。それが、今まで気にならなかったのか、と問われれば答えに困るが、それでも彼が語るまでは黙っておくのがいい、と耀は思っていた。

しかし、こうして『敵』の立場になって、どれだけ彼を知らなかったのか、と思い知らされた。

《……………それは、兄に聞いて下さい。もし、兄が耀様を認めているのであれば、きっと答えてくれる筈です》

短い回答。

だが、それ以上はカグヤは何も言わず、ゆつくりと帝のいる壇上へと歩いて行ってしまった。

一人残された耀は、ただ静かに二人を見詰める。

その時、後ろから不機嫌そうなアーシャがやってきた。

「おい、オマエ！名前はなんて言うの？出身外門は？」

「……………。最初の紹介にあつた通りだけど」

突き放す様に言う耀。

しかし、アーシャはそれでも喰らいついた。

「あーそうかい。だったら私の名前だけでも覚えとけ、この『名無し』め！私は六七八九〇〇外門出身アーシャⅡイグニファトウス！次に会う様な事があつたら、今度こそ私が勝つからな！覚えとけよ！」

はい？と耀が小首を傾げる。

しかし、意図を問う前にアーシャはツインテールを揺らして、帝の方へと大股に歩いていく。

どうやら、彼らにも同じ事をするらしい。

ジャックがヨホホ！と笑って説明した。



「あの子、同世代の女の子に負けた事が無い子でしたから。ゲームそのものは帝殿の庄勝でしたが、貴女に対しても自分の力では勝てないと思っっているのですよう」

「それこそ、協調の勝利が云々かんたらだと思っうけど」

「ヤホホ！いや、全くその通り！」

カボチャ頭の怪物は額をピシヤリと叩き、一本取られたとばかりに哄笑を上げるのだった。

「……  
……  
……  
負けてしまったわね、  
春日部さん」

☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆

「ま、そういう事もあるさ。気になるなら後で、お嬢様が励ましてやれよ」

気落ちする飛鳥と、軽快に笑う十六夜。

だが、その瞳は真つ直ぐに帝へと向いており、どこか楽しげにも見える。

ふむ、と白夜叉が唸る。

「全く……ここで、大々的に自分の正体を明かすとは、帝もまだまだ子供だな」

「おい、白夜叉。帝が呪いギフトを解除出来るって知ってたのか？」

「ふふ、当たり前であろう？あやつに解き方を教えたのは、他ならぬ私だからな」

えっへん、と胸を張る白夜叉。

その反応に、十六夜と飛鳥が怪訝そうに顔を顰めた。

「どどういう事かしらっ？」

「うむ。帝が受けた呪いギフト、ウルヴス、サーガ呪われし狼ギフトには、解除法が二つだけ存在しておる。一つは

月の周期。これは、月の出ている間のみギフトの効力が弱まり、元の姿に戻る事が出来るといふもの。これに関しては、帝自身も分かっていたようじやな。

そして、もう一つ……それは、穢れ無き乙女の接吻だ！」

「せ、接吻？接吻って、あの………」

「ふふふ……そうだと!!帝は女性にキスしてもらえば、いつでも元の姿に戻れるのだ!!」

ババーーン!!と効果音が聞こえる程のドヤ顔で言い放つ白夜叉。

それとは逆に、顔を真っ赤にしていく飛鳥。

「ふ、不純だわ!!破廉恥にも程があるじゃない!!」

「そうか?そういうベタな展開で、気が付けば愛が芽生える、みたいなフラグが簡単に立つ、御手頃設定じゃねえか」

「だ、だからって、女の子の唇をなんだと思っているのよ!!」

軽く流す十六夜へ、飛鳥が怒鳴る。

それもそうだろう。

飛鳥は人間である帝を見たのは、これで二度目。

そして、今までずっと頭の隅に残っていた唇の感触の謎が解き明かされたのだ。

その内容は、昭和女子代表の飛鳥にとって、屈辱的なモノ。これを、大人しく聞いている、等とは出来ない。

「おいおい、たかがカードへのキス位で、どうしてそんなに怒鳴るんだよ、お嬢様」  
「か、カードでも、乙女の大事な唇が……え？カードに接吻？」

呆れた様に言う十六夜。

その言葉に、今まで騒いでいた飛鳥に急ブレーキがかかる。

「なんだ、おんし気づいておったか」

「当たり前だろ？と、いうより今のゲームでカグヤがカードにキスしてたのがぼつちり見えたからな。つまり、彼奴が元の姿に戻る条件つてのは、彼奴が所有するギフトカードへ女性が口づける、つて事でいいんだな？」

「あら？そんなの？」

「うむ。ただし、それには欠点があつてな。解除時間がランダムになる。つまり、長い時は一週間でも、一か月でも、半年でも元の姿を維持できるが、最悪の場合は一時間や一分という事もありうる最終手段。そして、この解除法はペナルティも存在してな。

元の狼姿に戻った後、何があっても24時間は人間には戻れない」

「つまり、本当にヤバくなった時だけの抜け道って事か？」

「そう思ってくれても構わんよ」

それにしても、と白夜叉は舞台へと視線を戻す。

業火と不死の烙印を持つ幽鬼ですら、帝を恐れ、自ら降伏する事を選んだ。

それに対し、白夜叉は臆病だとは思わない。

寧ろ、そうしてくれた事に内心でほっとしていた。

(全く……簡単に火が付くところは、昔から変わらん)

そのせいで、最悪の事態を予測せねばならないこっちの身にもなってほしいモノだ、と白夜叉は内心で毒づく。

だが、それは杞憂であるとも思っている。

彼は、白夜叉が睨みを聞かせていた頃の『彼』ではない。

少しづつではあるが、仲間の為、プレイヤーの為を思い、ゲームでの立ち回りも変わってきている。

その姿を見る度に、まるで自分の子が成長していく様な心境となり、嬉しく思えた。

「……………おい、白夜叉」

「……………うむ？なんだ？」

名を呼ばれ、白夜叉の意識が十六夜へと向く。

だが、彼の視線は遙か彼方、箱庭の空に向けられていた。

十六夜は怪訝な表情で白夜叉に問う。

「ア・レ・は・な・ん・だ・？」

「……ん、今回は期待できそうだな」





帝は観客の歓声に応えた後、自身のカードを見て苦笑した。

彼の持つブラッディダークのギフトカードに刻まれた“呪われし狼”の文字。

それを塗りつぶす様に、デジタル文字の数字が時を刻んでいる。

彼が狼に戻るまでのタイムリミットを示すそれは、帝が人間に戻った瞬間から数えて十日と刻まれている。

つまり、今日から数えて十日間は人間で居られる、という事だ。

《帝？》

「十日間以内に魔王が現れてくれれば、俺としても問題ないんだが……………カグヤ、火龍誕生祭って後何日だっけ？」

《日数ですか？えっと……………あれ？》

考える様に腕を組んだカグヤの視線に、見慣れない黒が映り込む。

不思議そうにそれを掴むと、黒い封書である事が分かった。

ゾクツとカグヤの背筋に寒気が奔る。

《う、嘘……………》

黒く輝く ギアスロール 契約書類”。

それは、カグヤにとつて二度と見たくはない真つ黒な思い出の産物。

顔を真つ青にして震えるカグヤへ、帝が慌てて彼女の肩を抱くと、その手に持った”  
契約書類”を開封する。

中には、こう書かれていた。

『ギフトゲーム名 “The P I E D P I P E R o f H A M E L I N”

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台区画に存在する参加者・主催者の全コミュニティ。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

グリムグリモワール・ハーメル

ン『印』

天空より雨の如く降り注ぐ黒い封書。

その光景に、誰もが絶句し、恐れを抱く。

その空気は会場を飲み込み、膨張した空気が弾ける様に誰かが叫び声を上げた。

「魔王が………魔王が現れたぞオオオオオオオ———!!!」

・

## 十六章 黒き風の暴拳

最初の変化はすぐ身近に起こった。

突如として、帝の身体を黒い風が包み込み、カグヤを弾き飛ばす。

《きやつ……!?!》

「つ!?!カグヤ!!」

手を伸ばした時には、もう遅かった。

帝の周囲を囲む様に球体へと変化したそれは、彼の動きを完全に封じていた。

「くそっ!!」

すぐさま手に冷気を集中させるが、全く力が発揮できない。

流石に、コレばかりは帝も絶句した。

(ギフトが使えない……まさか、封印されたって事か?)

ゲームが始まって、まだ全く時間が経過していない状況で、まさか逸早く自分が拘束されるとは思ってもいかなかった。

それ以前に、あの黒い封書には白夜叉の名はあっても、自分に関する記述はない。だというのに、自分が封印される事は相手側の不備だと思っていいたいだろう。

未だ、混乱状態の頭。

そんな時、バルコニーの方から悲鳴が上がる。

ハツとして顔を上げると、其処にはバルコニーからはじき出された仲間達の姿。チツと短く舌打ちした。

「きやつ……！」

「お嬢様、掴まれ！」

空中に投げ出された飛鳥を、すぐさま十六夜が抱きかかえて着地する。その視線は、もう既に次の事柄へと移っている。

「チツ。『サラマンドラ』の連中は観客席に飛ばされたか」

『ノーネーム』一同は舞台側へ。

『サラマンドラ』一同は観客席へ。

《い、十六夜様!! 飛鳥様!!》

「カグヤ……おい、どうなつてやがる。なんで、帝まで白夜と同じ状況なんだよ」

「それは、俺が聞きたい。……だが、のんびり状況確認が出来そうな状況じゃねえよな」

帝が鋭く周辺を見詰める。

会場は阿鼻叫喚。

誰もが我が身可愛さに、会場から逃げ出そうともがいている。

このままでは、魔王が襲う以前に怪我人が出るだろう。

流星の状況に、軽薄な笑みを浮かべている十六夜の眼は、何時もの余裕が見えない。

帝も、この状況には流星に参っているのだ。

「魔王が現れた。……そういう事でいいんだな？」

「はこ」

振り返って問う十六夜へ、黒ウサギが真剣な表情で頷く。

その言葉で、その場にいた全員の表情に緊張が走る。

「……簡単に状況を確認するぞ」

必死に自身を落ち着け、帝が言う。

“ノーネーム”一同の視線が、彼へと集まる。

「まず、黒ウサギに問う。この状態、白夜叉のホストマスター“主催者権限”が破られた、と言う訳じゃないな？」

「はい。黒ウサギがジャツジマスターを務めている以上、誤魔化しは利きません」

「次……カグヤと耀に問う。この状況で敵だと思える相手の人数は？」

「……ごめん。これだけ混乱していると、匂いも音も役に立たない」

《……多分、2〜3人位だと思います。私の風を、何かが乱しているせいで、はつきりと確信は持てませんが》



「上々だ」

「……これまでの事を考えると、連中はルールに則った上でゲーム盤に現れている訳だ。……ハハ、流石は本物の魔王様。期待を裏切らねえぜ」

「おいおい、状況を見て笑えよ。俺は洒落にならない状態なんだぜ？」

こうして会話しているが、帝の周りには黒い風が動きを制限し、ギフトも満足に使えない。

そのせいか、帝が茶化す言葉には普段の戯けた雰囲気は一切ない。  
緊迫した声で飛鳥が問う。

「どうするの？ここで迎え撃つ？」

「ああ。けど、全員で迎え撃つのは具合が悪い」

「俺もそれには、同意だ。俺と白夜叉が封印状態、サラマンドラとは孤立。正直、現状は魔王側に有利だと思っ正しい」

「では、黒ウサギがサンドラ様を捜しに行きます」

「…そうだな。黒ウサギはサンドラと合流。十六夜とレティシアで、魔王連中の足止めしてくれ」

「……あら、また面白い場面を外すのね」

不満そうに口を尖らせる飛鳥。

だが、それに構える程状況は芳しくない。

「なら、お前はとう魔王と戦うつもりだ？」

「どうって……」

「飛鳥、お前は武人じゃない。お前が持つギフトでは、魔王を支配する事は絶対に出来ない。その状況で、お前はとうやって戦うつもりなんだ？」

厳しい言葉に、言葉が詰まる。

悔しげに表情を歪ませる飛鳥へ、帝は淡く苦笑した。

「頼むよ、飛鳥。お前は耀と一緒にジンを護衛しつつ、白夜叉の元へ行ってくれ。『ギアスロール契約書類』に指名された以上、白夜叉にはゲームマスターとしての権限がある。今後の事を考えると、彼奴とも話し合う必要がある」

「……………分かったわ」

「うん。任せて」

「お待ちください」

動き出そうとする一同へ、声がかけられる。

振り返った先には、同じく舞台上に上がっていた「ウィル・オ・ウイスプ」のアーシャとジャックがいた。

「大凡の話は分かりました。魔王を迎え撃つと言うなら我々「ウィル・オ・ウイスプ」も協力しましょう。いいですね、アーシャ」

「う、うん。頑張る」

前触れもなく魔王のゲームに巻き込まれたアーシャは、緊張しながらも承諾する。

「それなら……カグヤと一緒に住民の避難誘導をしてくれ。こんな混乱した状況では、何時怪我人が出てもおかしくはないし、身体の小さな奴は死ぬ可能性もある」

「ヨホホ♪分かりました」

《でも、帝。貴方はどうするつもりなんですか？》

「俺の事はいい。自力で脱出する手段を探すつもりだ」

《でも……》

「カグヤ、聞き分けてくれ。お前のネームバリューなら、混乱した状況でも目に付く。それに『声』が一番通りやすいのは、お前だろう？」

《………分かり、ました》

少しだけ不安そうに、だが最後にはしつかりと頷く。

これで、全員がすべき事が分かった。

一同は視線を交わして頷き合うと、各々の役目に向かって走り出す。

逃げ惑う観客が悲鳴を上げたのは、その直後だった。

「見ろ！魔王が降りてくるぞ!!」

上空に見える人影が落下してくる。

ギリッと帝が奥歯を噛み締め、十六夜が両拳を強く叩き、レティシアに向かって振り返って叫ぶ。

「んじや行くか！黒い奴と白い奴は俺が、デカイのと小さいのは任せた！」

「了解した、主殿」

「絶対に深追いはするなよ!!相手が自分より上手だと思つたら、情報収集のみに専念しろ!!」

「ヤハハ、わかつてらあ」

楽しげな哄笑を上げ、十六夜が舞台会場を碎く勢いで境界壁に向かつて跳躍。

レティシアもそれに続く様に、漆黒の翼を広げて飛び立つ。

その姿を見送り、帝は自分を取り巻く黒い風を調べ出す。

触るだけでも弾かれる手は、ジンジンと痛み、ギフト無しでこの状況を打倒する事は絶望的だと思つていいだろう。

(兎に角、今はヒントが欲しい。何か……………)

辺りを彷徨わせていた帝に、黒い羊皮紙が映り込む。

もしや、と先程持っていた羊皮紙を取り出し、書面を確認する。

案の定、先程までルールを綴っていたそれに、別の文字が浮かんでいる。

『※ゲーム参戦諸事項※』

・現在、プレイヤーの参戦条件がクリアされていません。  
ゲームへの参戦を望む場合、参戦条件をクリアして下さい。』

「……………おいおい。俺はプレイヤーとして封印されたつての何か？」

流石に、この状況は予想していなかった。

狙われるのだとしたら、サンドラか白夜叉が普通だ。

だが、十六夜や黒ウサギの口ぶりからして、サンドラはどこかへ吹っ飛ばされただけで、特に封印が課せられている様な状況ではないようだ。

つまり、こうして封印状態となったのは東の階級フロアマスター支配者である白夜叉と、帝のみ。

そこが、どうにも帝は納得が出来なかった。

見えた影は四つ。

そのどれにも、帝は見覚えがなかった。

そして、自分への恨みがあると言うなら、絶対に相手側は自分の名を名指ししてくるだろう。

だが、今回名指しされたのは白夜叉一人。

(つまり……俺の封印は、白夜叉のオマケと考えるべきか?)

それなら、相手の目的も少しではあるが見えてくる。

「ギアスロール契約書類」に書かれたコミユニティ名はハーメルン。

そして、鼠に襲われた飛鳥とカグヤ。

そこから導き出せる事は、今回のゲームが「ハーメルン」の伝承に由来したゲームだ  
という事。

だが、「ハーメルン」の碑文に白夜叉を封印する様な記述はない。

つまり、勝利条件の内どちらかが、白夜叉の封印を解く鍵だ。

(そうか………相手は白夜叉を封印したんじゃない。奴らは)

思考が纏まった瞬間、ビクツと帝の身体が痙攣した。

驚いた様に視線を上げた先は、現在仲間達が向かったであろうバルコニー。

微かではあるが、聞き慣れない笛の音が帝の鼓膜を揺らす。

「**耀……飛鳥?!**」

微かに響く二人の『声』。

その音の内、一人分の音が一切聞こえなくなる。

帝は眼を見開き、逸る心臓を押さえつける様にグツと拳で押さえつける。

「飛鳥!!聞こえてるなら、バルコニーから顔を出せ!!飛鳥!!」

必死さの入り混じった声で、彼女の名を叫ぶ。

だが、それに応えたのは、見慣れた真紅のドレスを纏う少女ではなく……白装束の女だった。

「え?嘘お……白夜叉以外にも、封印されてる人間がいるなんて」

驚いた様におどける彼女は、バルコニーから降り立つと、繁々帝を見詰める。

その女を睨めつけ、帝が唸る。

「テメエ……俺の仲間達はどうした?」

「仲間?……あんな、もしかして、あの赤いドレスの子とか、グリフォンのギフトを使う女の子とかかしら?」



「……………飛鳥に何かしたのは、テメエか。道理で『声』が聞こえなくなる訳だ」

怒りに銀髪を戦慄かせ、殺気を漲らせる。

底冷えする様な視線も、封印されていれば、唯の檻にいる猛獣程度。

そんなものは、恐れるに値しない、と女は笑う。

「ふふ。どんなに凄んでも無駄よ。封印ルールに囚われた君なんて、全然怖くないんだから」

そう、この封印がゲームに則って行われているというならば、これは云わば箱庭の力。それを敗れる程、帝も自分の存在が大きいは思っていない。

だが、だからと言って大人しく解除される事を待つ、等今の帝にその選択肢は存在しない。

黒い風へと拳を叩き付け、グツと奥歯を噛み締める。

女は、既に勝利を確信しているのだろう。

悔しげに歪む彼の表情へ、高らかに笑い声を上げると、芝居がかった仕草で大きく両手を広げる。

「さあ！我々、グリムグリモワール・ハーメルン」のゲームはコレからが本番よ！最高に過激な歌劇オペラを始めましょう！」

ゆっくりと唇へ持っていく銀のフルート。

奏でられるは魔笛の旋律。

高く、低く、妙なる音色は舞台会場に留まらず、境界壁の麓を徐々に呑み込んでいく。  
（魔笛………いつが、ネズミ捕り道化？………なら、この笛の音は………っ!!）

☆  
★  
☆  
★  
☆  
☆

《……………え?》

異変が起きたのは、その直後だった。  
ゆっくりと浸透する魔笛の音に、カグヤの胸に不安が募る。

《は、早く避難を!!》

この音には、底知れない悪意が感じられる。

早く戦えない者達の避難を完了させなければ、被害は広まるばかりだろう。

彼女の『声』に応えるかの様に、誘導を手伝っていた『サラマンドラ』のプレイヤー達も避難誘導を速める。

その時だった。

「ぐ………GUWOOOOOOOOOOOOOO!!!」

突如上がった獣の咆哮。

ハツとしてカグヤが振り返ると、そこには血走った赤い瞳で彼女へと襲いかかろうとする『サラマンドラ』の同士。

慌てて回避すると、変わる様に別の同士が襲い来る同士を押しさえつけにかかると。

「お、おい！どうしたんだ!?!」

「GUWOOOOOOOOOOOOOO!!!」

暴れる同胞。

だが、暴れ出したのは彼だけではない。

「きやあああ!!?」

「うわあああ!!?」

「GYA O O O O O O O O O O O O O O O O!!」

理性を失った瞳で、守るべき者達へ襲いかかる。

その惨劇は、もはや正気の沙汰とは思えぬ現状。

カグヤ自身、悪い夢でも見ているのかと思える様な状況なのだ。

(意識を乗っ取られてる……?もしかして、この笛の音が原因?)

微かではあるが、カグヤの鼓膜を揺らす甘美な音色。

そこに潜む悪意は、仲間達を暴徒化させ、同士討ちや破壊行動へと走らせる。

《……掻き消して、芭蕉扇!!》

カグヤはすぐさま芭蕉扇を構えると、多量の風を生み出し、避難場所を覆う。

もし、この笛の音が原因だとするならば、風を操るカグヤは天敵とも言える存在。

風によって、音を掻き消せれば暴徒達は沈静化できると予想したのだ。だが、それは甘い考えだった。

「GYA a a a A A a a a a a a !!」

《っ…》

雄叫びを上げ襲い来る火蜥蜴。

混乱する状況で必死に攻撃を交わしつつ、芭蕉扇の風で空気を乱してみるが、現段階で操られている同胞達は戻る気配はない。

(一度操られている者達には、効果が薄い……う…でも、それならどうすれば……)

風の手を緩める事なく、カグヤは必死に思考しつつ、攻撃を交わす。

避難場所に收容された人々が、未だに暴徒化していない事から、操られていない者達が、新たに操られるといった事にはならない様だ。

つまり、それはカグヤの考えが正しかった事を意味する。

なら、今操られている同胞を救う手だては？

(やはり、音の発信源を叩かない限り、状況の打開は……………)  
「カグヤ嬢!!」

鋭い声にハツとして、カグヤが顔を上げる。

背には固い感触があり、目の前には三匹もの火蜥蜴。

思考に没頭し過ぎて、逃げ道を間違えた様だ。

声を掛けてくれたジャックは、アーシヤと共に暴徒化した同胞達にどうすればいいのか、と困惑したまま応戦している。

その状況で、自分の救援を期待するのは絶望的だろう。

ジリジリと迫る包囲網。

風を利用して飛翔する事も考えたが、それを予備動作なしに行う事は出来ず、なによりこの背にしている壁は、避難場所のモノ。

もし、自分が下手な交わし方をすれば、彼らは避難場所の壁を破壊し、中で震えている非戦闘参加者を容赦なく襲うだろう。

(ダメ…………逃げられない…………!!)

ここは、自分に与えられた役目。

それを放棄しようなどは、カグヤには考えもしない選択肢。

多少の怪我を覚悟して、芭蕉扇を強く握る。

手足が体に付いていられたなら、御の字だと思えと自分に言い聞かせて。

丁度、カグヤが覚悟を決めた時、それを見計らったかのように三匹の火蜥蜴が飛び掛かる。

——その瞬間

『やめろおおおおおおおおおおおおお  
!!!!!!  
』

聞き慣れた声が、世界を静止させた。





## ☆☆☆☆

魔笛とは別に響く『音』に、帝は耳を塞いだ。

この行動が無駄だとは自覚しているが、それでも反射的にそうしてしまうのだ。

だが、脳へと直接響く『音』に対して、それは意味をなさない。

どれだけ抵抗しようとも、彼が“帝”である限り、彼が“月影”の名を持つ限り、それは逃げられない業。

「く、そ……………っ」

込み上げる吐き気を自身のプライドで押さえ込み、割れそうに痛む頭で必死に思考を

回す。

響く『音』の中には、普段から聞き慣れた『音』もある。

だが、その『音』でまともに聞こえるのは、十六夜と黒ウサギ位なモノだろう。他の仲間達の音は弱々しく、現状が劣勢だという事がよく分かる。

帝は必死に息を整え、震える手で右耳のピアスを掴む。

手から感じる固い感触。

彼はゆつくりと数回深く呼吸し

——耳・朵・ご・と・ピ・ア・スを引・き・千・切る。

「っ……!!」

脳天を突き抜けるような痛みと、飛び散った鮮血。

それだけが、今の帝を繋ぎ止める方法。

だが、それはあまりにも異常過ぎる。

フラフラと頼りない足で自身を支え、黒い風の結界へ手を振れる。

もし、自分の考えが正しいのであれば……

「……………『み……………』一時……………『へ……………上』」

微かに紡がれる言の葉。

次の瞬間、彼を拘束していた風が何事もなかった様に霧散していく。この現状に、ラッテンは魔笛を奏でながらも驚愕した表情を向ける。

(嘘…… “契約書類” のルールを跳ね除けた!?)

ギフトゲームにおいて、箱庭の審判は絶対。

そして、それを定めた “契約書類” は内容を変更する為にはホストとゲームマスターでの話し合いが必須。

だというのに、目の前の彼はその手続きを一切せずに封印を解いてみせた。

規格外……なんて言葉では測れない行為。

「ああ………やっぱり………そういう事か」

ククツと笑う声は、完全に正気を失っている様に響く。

彼は目の前で笛を奏でるラッテンに眼もくれず、そうする事が当たり前の様にクルリ

とバルコニーの方へと方向転換。

フラフラと頼りない足取りでその近くまで歩む。

もしや、白夜叉の封印も解くつもりなのか、とラッテンは演奏を中断するか悩む。

だが、それは意味のない事だった。

彼は数歩歩いた後、足元から何かを拾い上げる。

それは、白夜叉やサンドラが挨拶の際に使っていた音量調整のギフトが付属された  
拡散機<sup>マイグ</sup>。

それをしっかりと持ち、彼は自分で吸えるだけの息をありったけ肺へと溜めると、そのま

ま『やめろ』おおおおおおおおおおお  
!!!!

喉が壊れんばかりの音量で、叫ぶ。

キーン、と耳鳴りがする様なそれは、一気に区画全てへと響き渡り――

残ったのは、静寂。

いきなりの事に、ラッテンは眼をむく。

そう、彼はその一言で戦闘を中断させたのだ。

しかも、魔王である自分の主を含めて、だ。

こんな事が現実起こるのだろうか。

予想外の事態。

だが、彼女の中に恐怖が生まれる。

彼をこのままゲームに参加させてはいけない。

このままでは……狩られるのは自分達だ。

肩で必死に息をする今なら、自分でも殺せるかもしれない。

己が恐怖に従う様に、ラッテンが拳を振り上げ——その時、激しい雷鳴が鳴り響いた。

「そこまでですー！」

振り上げた拳が、彼の髪を風圧で揺らす。

当たるギリギリで止められた拳に気を留める事無く、彼はゆつくりと視線を上げる。

この雷鳴は……

どこか高い建物の屋根、幾度も轟く雷鳴を発していたのは、軍神・帝釈天より授かつ

たギフト——  
//ヴァンジュラ 疑似神格・レブリカ 金剛杵”を掲げた黒ウサギである。

黒ウサギは輝く三叉の金剛杵を掲げ、高らかに宣言する。

「ジャッジマスター審判権限」の発動を受理されました！これよりギフトゲーム「The PIED PIPER of HAMELIN」は一時中断し、審議決議を執り行います！プレイヤー側、ホスト側は共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行して下さい！繰り返します——」

「……………間に合った」

黒ウサギの宣言を聞き、彼は安堵した様に笑う。

強く体に残る熱と疲労感に、ゆっくりと薄れる意識。

(俺が今出来る精一杯は……………これっぼっち……………とはな)

倒れる寸前、彼は自身に対して自傷的な笑みを送る。

意識が完全に闇へ沈む寸前、誰かが自分を呼んだ様な気がした。

暗  
転





☆☆☆☆

——境界壁・舞台区画。大祭運営本陣営、大広間。

宮殿内は、負傷者で溢れ返っていた。

嫌な予感が胸を押しつぶしそうな中、カグヤは必死に仲間達の姿を探す。

暫く彷徨っていると、見知ったウサ耳が目に見え込んでくる。

《黒ウサギ!!十六夜様にジンも!!ご無事でしたか!?!》

「カグヤ様、ご無事でしたか!?!」

「カグヤも無傷……とはいかなくとも、それ程酷い怪我はしてない様だな」

元氣そうな十六夜と黒ウサギの姿に、ほっと胸を撫で下ろす。

《……他の皆様は?》

「実は……十六夜さんと黒ウサギを除けば、満身創痍です。飛鳥さんに至っては姿も確

認出来ず……すみません、僕がすっかりしていれば……」  
「……おい、帝はどうした？彼奴、まだ封印状態なのか？」

軽く辺りを見渡し、十六夜が問う。

一度、舞台区画を経由して中に戻ってきた十六夜は、封印されていた場所に帝の姿がない事は確認してある。

てつきり彼の事だから、交渉テーブルに着く為の根回しでもしているかと思った。だが、返ってきたのはカグヤの震える声。

《兄は……ここにはいません》

「どういう意味だ？」

《兄は……重症を負い、今は「サラマンドラ」よりお借りした一室で、治療を受けています》

「み、帝様が……重症!？」

有り得ない、とでも言いたげに、黒ウサギが悲鳴を上げる。

あの狼姿ならばあり得る事だが、人の姿へと戻った帝がそう簡単にやられるとは思え

ない。

だが、カグヤの様子は尋常ではない。

彼女は必死に毅然と振る舞おうとしているが、その体は震え、空色の瞳も涙を溢さんと必死に押さえている状況。

それほどまでに、彼は重症なのだろう。

チツと十六夜が舌打ちする。

「……………命に別状はないんだな？」

《つ……………分かり、ません。私が……………駆け付けた、頃には……………もう……………》

後半から、涙声に変わったカグヤは、そのまま嗚咽を漏らす。

その言葉で、ジンと黒ウサギの表情に緊張が走る。

怪我や病を癒すギフトを持つ彼女にすら、手に負えない重症。

それは、つまり相手側魔王のギフトによって引き起こされた効力の危険性がある、と

いう事。

カグヤが所持する治癒系ギフト ラファエル “大天使の祝福” は、どんな怪我也病も治癒できる強

力なギフトである反面、与えるギフトによって齎される病には効果が薄いという欠点が

ある。

《兄より……言われてきました。私も、出来る事なら、交渉の席に参加したのですが》  
「ああ……そもそも、審議決議つてのは何の事だ？」

「『主催者権限』によって作られたルールに、不備がないかを確認する為に与えられた、ジャッジマスターが権限の一つでございます」

「ルールに不備？」

《はい。元々は、奇襲を仕掛けてくる事が多い魔王への対策に作られた権限だそうです。真偽を確かめる前に発動させる事が出来、ゲームマスターより異議申し立てがあつた場合に、『主催者』と『参加者』でルールに不備がないかを考察する事が出来るんです。……簡単に申し上げますと、タイムアウトの様な行為ですね》

「ほお……？無条件でゲームを仕切り直せるなんて、かなり強力な権限じゃねえか」

思わず感心の声を上げる十六夜。

しかし、黒ウサギとカグヤの表情は複雑なまま。

「いえ、そうとも限らないのですよ。審議決議を行つてルールを正す以上、これは」

主催者<sup>ホスト</sup>”と参加者<sup>プレイヤー</sup>”による対等のギフトゲーム。……えつと、単刀直入に説明しますと、”このギフトゲームによる遺恨は一切持たない”という相互不可侵の契約が交わされるのですヨ”

《つまり、このゲームで死人が出ようとも、負けようとも……相手への報復目的のゲームを挑む事を禁止する、という事になります。負ければ誰も助けてはくれない、という意味です》

「ハッ、最初から負けを見据えて勝てるかよ」

十六夜が失笑すると、大広間の扉が開いた。

大広間に入ってきたのはサンドラとマンドラの二人だ。

サンドラは緊張した面持ちのまま、参加者に告げる。

「今より魔王との審議決議に向かいます。同行者は五人です。——まずは箱庭の貴族”である黒ウサギ。サラマンドラ”からはマンドラ。その他に”ハーメルンの笛吹き”に詳しい者がいるのならば、交渉に協力して欲しい。誰か立候補する者はいますんか？」

参加者の中にどよめきが広がる。

童話の類は知られている範囲が極めて狭い為、伝承の障り程度であれば知る者は居るだろうが、細部に詳しい人間は少ないだろう。

誰も名乗りでない中、カグヤが真つ直ぐに挙手する。

《私達がいいます!! 〴〵ハーメルンの笛吹き〴〵ならば、我が 〴〵ノーネーム〴〵リーダー、ジン 〴〵ラッセルを含む三名がいいます!!》

「……は？」

「おう! 〴〵ハーメルンの笛吹き〴〵についてなら、このジン 〴〵ラッセルが誰より知っているぞー!」

「ちよつ!十六夜さん!?!カグヤ様まで!?!」

カグヤの発言に、便乗する様に声を上げる十六夜。

それに驚くジン。

十六夜は悪戯半分本気半分で捲し立てる。

「めっちゃ知ってるぞ!兎に角詳しいぞ!役に立つぞ!この件で 〴〵サラマンドラ〴〵に貢

献できるのは、〃ノーネーム〃のリーダー・ジンⅡラッセルを措いて他にいないぞ！」「ジンが？」

《それに、我がコミュニティには、〃グリムグリモワール〃のギフトゲームを何度となく完勝してきた同士がいます！この現状において、我々以上の適役者はいません!!》

キョトン、とした顔を向けるサンドラ。

そんな中、カグヤが畳みかける様に言葉をぶつける。

ここまで積極的に売り込む事は、かなり珍しい。

普段よりも覇気がある彼女の姿に、十六夜がニヤリと笑う。

「……他に申し出がなければ、〃ノーネーム〃のジンⅡラッセルにお願いしますが、宜しいか？」

サンドラの決定に、再度どよめきが広がる。

「〃ノーネーム〃が……？」「何処のコミュニティだよ」「信用出来るのかしら」「決勝に残っていたコミュニティか？」「ありえねえ」「おい、他に立候補者は——」



《《 黙りなさい!! 》》

普段よりも低い怒声に、場の空気が一瞬にして凍る。

温厚な彼女らしからぬ声。

どうにも、北側に来てから彼女の沸点が普段よりも低くなっている様だ。

とはいえ、自分達の命運を決めるゲームの交渉テーブルに、“ノーネーム”が着く事に不安になる事は予測できた筈だ。

だが、その姿勢が今のカグヤの琴線を逆なでする。

《不満があるなら、名乗りを上げなさい!! “ノーネーム”が不安だというなら、自分が出ると前へ出なさい!!》

厳しい叱咤に、誰もが顔を見合わせ、俯く。

彼らとて、自分が出た所で何の役にも立たない事を自覚してはいるのだろう。

流石に、これ以上カグヤも怒鳴る行為はしなかつたが、その表情は曇ったままだった。

深々と自分を律する様に息を吐く彼女へ、十六夜が軽く肩を叩く。

「落ち着けつて。彼奴らが、名乗りを上げる事なんて、ありえない……そう分かってんだろ？」

《……それでも、可能性があるなら挑まなければ、相手に服従する事と同じです》  
「……………おい、少し頭を冷やせ。そんなんじや、帝の代役なんて勤まらないぜ？」

ポンポンと再度彼女の肩を叩き、十六夜はジンの傍へと戻っていく。

どうやら、未だに困惑状態のジンを説き伏せに行つたのだろう。

カグヤは少しだけ視線を下げ、袂へ手を入れる。

指先は直にお目当てのモノへと当たり、カグヤはゆつくりとそれを取り出す。

彼女の手に握られているのは……………赤い紐を通してループタイにしてある月のブローチ。

兄の部屋を出る前に、カグヤが無断で失敬してきたモノだ。

(……………兄さん)

何時も傍で守ってくれた兄は、今は頼る事は出来ない。

両手で包み込む様に握ると、額に付けて眼を閉じる。

ここからは、十六夜達と共に自分が前線で戦わねばならない。

不安に心臓が握り潰されそうになりながら、カグヤは心を鎮める。  
(絶対に……負けられない。絶対……)

「——カグヤ様？」

ふと、声をかけられ、カグヤは顔を上げる。

その先には、交渉テーブルへと向かおうとする仲間達の姿。

心配そうに声を掛けた黒ウサギが、気遣う様に彼女の肩へ手を伸ばす。

「御加減が悪いのですか？やはり、ここは黒ウサギ達に任せて……」

《大丈夫です、黒ウサギ》

やんわりと微笑みながら、カグヤは黒ウサギの手を断る。

逃げ出したくなる弱気な自分に叱咤すると、持っていたループタイを首にかけ、カグヤは彼らと共に交渉の席へと歩を進めた。



☆☆☆☆

——境界壁・舞台区画。大祭運営本陣営、貴賓室。

「ギフトゲーム”The PIED PIPER of HAMELIN”の審議決  
議、及び交渉を始めます」

敵かな声で、黒ウサギが告げる。

十六夜達の対面には、白黒の斑のワンピースを着た少女が座り、その両隣に軍服のヴェーザーと白装束のラッテンが立っている。

カグヤは、十六夜とジンの後ろで直立しつつ、注意深く彼らを睨む。

（「ラッテン」と「ヴェーザー河」……サンドラ様のお話では、巨兵は「シュトロム」と言っていた。……それなら、帝をあんな目に合わせた張本人は、間違いなく魔王である彼女）

招かれた部屋は、豪華な飾り付けが施された貴賓室だった。

テーブルには、既にサンドラ、マンドラ、ジン、十六夜の順で座り、カグヤはその後ろに立つ。

使用人である彼女が、席につく事はない。

それは、本人たつての希望だ。

そのせいだろうか、ジンが時折後ろにいるカグヤの姿を気にしている様で、時折視線を後ろへと向けてくれる。

その姿に、隣に座っている十六夜が呆れた様に、軽く肘で横腹を突いている。

「まず、<sup>ホスト</sup>主権者側<sup>に</sup>に問います。此度のゲームですが、  
「不備は無いわ」

斑の少女は言葉を遮る様に吐き捨てる。

「今回のゲームに不備・不正は一切ないわ。白夜叉の封印も、ゲームのクリア条件も全て整えた上でのゲーム。審議を問われる謂われは無いわ」

静かな瞳とは裏腹に、ハッキリとした口調で話す斑の少女。

「……………受理してもよろしいので？黒ウサギのウサ耳は箱庭の中枢と繋がっております。嘘を吐いてもすぐ分かってしまいますヨ？」

「ええ。そして、それを踏まえた上で提言しておくけれど。私達は今、無実の疑いでゲームを中断させられているわ。つまり貴女達は、神聖なゲームにつまらない横槍を入れているという事になる。——言ってる事、分かるわよね？」

涼やかな瞳で、サンドラを見詰める。

対照的に、サンドラは齒噛みした。

「不正がなかった場合……主催者側に有利な条件でゲームを再開させろ、と？」

「そうよ。新たなルールを加えるかどうかの交渉は、その後にしませう」

「……わかりました。黒う」

《お待ちください》

審議を取ろうと、サンドラが黒ウサギを見る。

その瞬間、その声を遮ったのは——カグヤだった。

「……カグヤ様？」

《ジン、発言の許可を頂いても？》

「は、はい！」

礼儀として、一応コミュニティのリーダーであるジンへ許可を求める。

彼は慌てて頷く。

その隣で、十六夜が少しだけ楽しげに笑う。



「おい、カグヤ。お前、今の発言に異議申し立てがあるのか？」

《はい。申し訳ありませんが、私から先にお話させて頂きたいと思います》

挑発的な笑みに、カグヤは涼やかな笑みで応える。

途端、斑の少女が怪訝そうな眼でカグヤを睨む。

「貴女……誰よ」

《『ジン||ラツセル率いるノーネーム』出身、使用人をさせて頂いています。月宮カグヤ、と申します》

礼儀正しく一礼するカグヤ。

だが、その瞳は氷塊を思わせる程に凍り付き、敵意を滲ませている。

《結論から、申し上げます。このゲームに不備は一切ないでしょう》

「なっ……」

「……へえ」

平然と紡がれた言葉にマンドラが絶句し、斑の少女が楽しげに笑う。

ジンも驚いた様に目を丸くしているが、その隣にいる十六夜は少しだけ不思議そうな表情を向けている。

きつと、彼には不正に該当する内容までは、分かっているのだろう。

カグヤは柔らかな笑みで、十六夜へ話しかける。

《十六夜様は、こういった交渉には初めてでしたね。どの程度がゲームの不正に該当するか、よく分かっていると思います》

「ああ。正直、どの程度が引つかかるのか、よく分からない」

《……少し、ご説明致します》

カグヤが佇まいを直す。

《十六夜様も知つての通り、ギフトゲームは参加者側の能力不足、知識不足は不備だと認められません。例え、不死を殺せと命ぜられようとも、殺せない方が悪いのです。今回のゲームは、クリアの必須と思われる“ハーメルンの笛吹き”の伝承に対する知識です

が、知らない方が悪いのです。》

「へえ？そりや理不尽だ」

《今回のゲーム、サンドラ様が考える不備とは、白夜王の封印だと思います。彼女は、参加を明記しながらも、参戦は出来ないとなっています。これには、本来もつと明文化された要因が必要と思われる……そうですね？》

「はい」

「確かに……記されていたのは『偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ』の一文のみ、だもんな」

しっかりと頷くサンドラに、十六夜が納得した様に呟く。

そう、今回参加者が不備だと指摘するのは、白夜叉の封印に関する項目だ。

その解除法が明確な明記がない状態で、彼女の参戦が認められないのは、確かに不備だと叩かれても仕方がないだろう。

だが、それは違うとカグヤは否定した。

《魔王側に問います。このルールに不備はないのですかね？》

「くだいわ。白夜叉の封印はルールに則って、しかるべき力が働いたという結果よ」

平然と頷く斑の少女。

その言葉に、カグヤはクスリと笑みを浮かべる。

《では、問い方を変えます。……その封印は白夜王のみですか？》

「……その筈よ」

カグヤの問いに、斑の少女は怪訝そうに表情を歪めつつ、頷く。

その瞬間、後ろに控えていたラツテンが慌てた様に少女へ話しかける。

「マスター!!ちよつとま——」

《黒ウサギ、先程の回答に審議を!!》

それを許さぬ様に、カグヤのその声を遮り、黒ウサギへ畳みかける。

早急な要望に、黒ウサギは暫し驚いた様に目を丸くしたが、すぐに瞑想を始める。

ピクリピクリと動くウサ耳。

チツとラツテンが舌打ちした。

暫しの沈黙。

ゆっくりと眼を開けた黒ウサギは、満面の笑みで頷く。

「箱庭からの回答が届きました。カグヤ様の言い分を受理します。主<sup>ホ</sup>催<sup>スト</sup>者<sup>〃</sup>側<sup>〃</sup>が嘘をついています」

「なっ……」

驚いた様子を睨く斑の少女。

それとは逆に表情を綻ばせるサンドラとジン。

十六夜が上機嫌に口笛を鳴らす。

「へえ……してやったり、てやつか？」

《はい》

しっかりと頷き、カグヤも嬉しそうに笑う。

悔しげに歯噛みした少女は、キツと後ろに控えていたラッテンを睨む。

「どういう事？」

「じ、実は……………」

《白夜王の他に…………一名。彼女と同じ様な状態に封印されたプレイヤーがいました。――

――私の兄です》

鋭く彼らを睨む、カグヤが告げる。

そう、今回のゲームでは名指しされた白夜叉だけではなく、プレイヤー側の帝までもが封印されていた。

それは、どう考えても相手側の設計ミスだっただろう。

そして、彼が封印された事を知るのは仲間である“ノーネーム”と現場に居合わせたラッテンのみ。

彼女も、まさか其処を突いてくるとは思っていなかったらしく、魔王である少女へは告げていかなかったのだろう。

その油断を、まんまとカグヤが逆手に取ったのだ。

これにより、ゲームの主導権は参加者側へと大きく傾く。

だが、それでもゲームは主催者側が主導を握る事は変わらない。

それでも、相手の思い通りになる事だけは免れられるだろう。

斑の少女は少しだけ苛立った表情で、黒ウサギに視線を向ける。

「それで……ゲームの再開は何時まで伸ばせるの?」

「日を跨ぐ、と?」

サンドラが意外な声を上げた。

これには、マンドラも同様だった様だ。

彼らに、このまますぐにでもゲーム再開を持ち込まれれば、敗北しているのは参加者側。

「ジャツジマスターに問うわ。再会の日取りは最長で何時頃になるの?」

「さ、最長ですか? ええと、今回の場合だと……一か月でしょうか」

「そう、なら——」

「待ちな!」

「待つて下さい!」

《ダメです!!》

十六夜とジンが同時に待ったをかけ、カグヤが悲鳴にも似た声で否定する。三人とも、その声には緊迫したモノが混じっていた。

「……………なに？ 時間を与えてもらうのが不満なのかしら？ そちらの方が、有利になる様に譲歩してあげているのよ？」

「いや、有り難いぜ？ だけど場合によるね。……俺は後でいい。御チビ、先に言え」

「はい。主催者に問います。貴女の両隣にいる男女は『ラッテン』と『ヴェーザー』だと聞きました。そして、もう一体が『嵐』シユトロムだと。なら貴女の名は……………『黒死病』ペストではないですか？」

「ペストだ?!」

一同の表情が驚愕に歪み、一誠に斑の少女を見詰めた。

——『黒死病』とは、十四世紀から始まる寒冷期に大流行した、人類史上最悪の疫病である。

この病は敗血症を引き起こし、全身に黒い斑点が浮かんで死亡する。

グリム童話の『ハーメルンの笛吹き』に現れる道化が斑模様であった事。

そして、黒死病が大流行した原因である、ネズミを操る道化であった事。



この二点から、〃一三〇人の子供達は黒死病で亡くなった〃という考察が存在するのだ。

「ペスト……そうか、だからギフトネームが ブラック・パーチャ 黒死斑の魔王！」

「ああ、間違いない。そうだろ魔王様？」

「……………ええ。正解よ」

涼やかな微笑で斑の少女——ペストが頷く。

「お見事、名前も知らない貴方。よろしければ、貴方とコミュニティの名前を聞いても？」

「……………〃ノーネーム〃、ジンⅡラッセルです」

コミュニティの名前を聞いたペストは、チラリと背後に立つカグヤにも視線を走らせ、小さく笑む。

どうにも、相手側は〃ノーネーム〃でありながらも、恐ろしく手強いプレイヤーが在籍している様だ。

「そつ。後ろの使用人も含めて、覚えておくわ。………だけど、確認を取るのが一手遅かったわね。既に、参加者の一部には、病原菌を潜伏させている。先に日取りの選定を言質したのは、私達。その意味………分からない訳ではないでしょう？」

交渉において、先に口にした事が前提として話が進む。

今回、自身が不利になる危険性を感じたベストは、先にゲームの日取りを一か月後だと公言した。

つまり、参加者側はどうかしてこの発言を撤回させねばならない。

カグヤの顔色が真っ青に変わる。

《一か月なんて………ほぼ、プレイヤー全員が死滅します!!それに………彼は………兄はそこまで持ちません》

呻く様に呟く言葉。

その言葉に驚いたのは、十六夜とジンだった。

二人の顔色も一瞬にして青に変わる。

「カグヤ、どういう意味だ？」

《……既に、黒死病を発病したプレイヤーがいます。兄です。……多分、持つて三日が限界だと……お医者様に言われました》

ゾツとした。

既に、感染者が発病し、いつ死んでもおかしくない状態だというのだ。

そうでなくとも、黒死病は発病まで最短で二日。

重病人がいるなら、もっと早く発病する危険性もある。

参加者側の表情が凍りつく中、ペストは涼やかな笑みで問う。

「此処にいる人達が、参加者側の主力と考えていいかしら？」

「……………」

「マスター。それで正しいと思うぜ」

黙り込む参加者に代わり、ヴェーザーが答える。

「なら提案しやすいわ。——ねえ皆さん。此処にいるメンバーと白夜叉。それらが、グリムグリモワール・ハーメルン」の傘下に降るなら、他のコミュニティは見逃してあげるわよ?」

「なっ、」

《お断りします!!!》

真つ先に怒声を上げたのは、カグヤ。

その瞳には、烈火の如き怒りが滲み出している。

「あら、私は貴方達の事が気に入っているのよ? サンドラは可愛いし、ジンは頭いいし………それに、貴女も綺麗だし」

「私が捕まえた紅いドレスの子もいい感じですよ、マスター♪」

ラッテンが愛嬌たっぷりと言うと、"ノーネーム"のメンバーの顔が強張る。

「ならその子も加えて、ゲームは手打ち。参加者全員の命を引き換えなら安いものでしょ?」

微笑を浮かべ、愛らしく小首を傾げるベスト。

しかし、その笑顔の裏にあるのは真逆の意。

従わなければ皆殺しだと、この少女は言っているのだ。

戸惑う一同。

しかし、十六夜とジン、カグヤは冷静に状況を考えていた。

「……………これは白夜叉様からの情報ですが。貴女達、グリムグリモワール・ハーメルン

“はもしや、新興のコミュニティなのでしょうか?”

「答える義理はないわ」

即答だった。

しかし、それが逆に不自然さを浮き彫りにしてしまう。

十六夜はすぐさま察して畳みかける。

「成程、新興のコミュニティ。優秀な人材に食欲なのはその為か」

「……………」

《沈黙は是となりますよ、魔王》

厳しく追及する声を上げる。

ペストは笑みを消し、眉を歪めて二人を睨んだ。

「……………だから何？私達が譲る理由はないわ」

《いいえ、十分な理由だと思えますよ。何せ……………一か月も時間が経てば、ほぼ全員が死滅するのですから》

「カグヤ様の言う通り。僕も一か月間生き残れるとは思えない。それに、貴女達だって、優秀な人材を無傷で手に入れたいと思っっている筈です。違いますか？」

追及の手は緩まない。

更にジンが畳み掛ける様に言う。

「死んでしまえば手に入らない。だから貴女はこのタイミングで交渉を仕掛けた。実際に三十日が過ぎて、その中で失われる優秀な人材を惜しんだんだ」

断言して言い切る。

今回に限ってだが、ジンはこの解答に絶対の自信があつた。しかし、ペストはそれでもなお憚然と言ひ返す。

「もう一度言うけど、だからなに？ 私達は最初に再開する日取りを言質した。つまり、今からでも自由に変える権利がある。一か月でなくとも……二十日。二十日後に再開すれば、病死前の人材を、」

「では、発病したものを殺す」

ギョツと全員がマンドラへと視線を向けた。

その瞳は真剣そのものだ。

だが、その言葉に笑みを浮かべる人物がいた。

——カグヤだ。

《では、最初の見せしめは兄、ですか？》

「ああ、例外は認めない。誰であろうとも……サンドラだろうと、箱庭の貴族”だろうと、この私であろうと”」

《………そうですか》

真つ直ぐと言葉を紡ぐマンドラへ、カグヤは淡い苦笑を浮かべると、クルリと方向転換し、出口の扉へと歩み出す。

その姿に、慌てて黒ウサギが待ったを掛けた。

「か、カグヤ様!!どちらへ——」

《——兄を殺して参ります》

平然と返ってきた言葉。

その一言に、全員が絶句する。

彼女は一体、何をしようというのだろうか。

何故、平然と——誰よりも慕う兄を殺す、等と言うのか。

その疑問が、参加者側の表情を一気に曇らせる。

クスリ、とカグヤが優雅に笑む。

《元より、兄に言い付けられていました。「もし、参加者側が魔王に降るといふ判断をつ



けるのであれば、その時は首を斬れ」と《  
「そ、そんな……」

言葉をつまらせるサンドラ。

これが、ブラフだと思いたいが彼女の瞳が本気だと、雄弁に語っている。  
そして、それがカグヤが兄である帝に言い付けられた事なのだろう。

「か、カグヤ様！それはあまりにも乱暴すぎるのでは……」

《これも、兄が望んだ事です。……そして、私が決めた事》

「あら……出来るの？貴女に」

引き留めようとするジン。

面白がる様に笑うペスト。

《やりませぬ。そして……私自身も共に果てませぬ。私とて、魔王のコミュニティに降る位ならば、この場で首を斬った方がマシですので》

過激すぎる宣言。

空気が一気に緊迫する中、十六夜は何かを思いついたのか、黒ウサギへと言葉を投げる。

「黒ウサギ。ルールの改変はまだ可能か？」

「へ？……あ、YES！」

黒ウサギも何かに気が付いた様に、ピン！とウサ耳を伸ばす。

「交渉しようぜ、ブラック・パーチャ黒死斑の魔王”。俺達はルールに“自決・同士討ちを禁ずる”と付け加える。だから、再開を三日後にしろ」

「却下。二十日」

即決を下される。

しかも、数字は全く変わっていない。

理想的な期間は、例の謎解きの事も考えて一週間以内。

だが、仲間が瀕死である今、三日以内にする事が最優先だと思ってもいい。

他に交渉出来るモノはないかと見渡し、黒ウサギと目が合う。

「今のゲームだと、黒ウサギの扱いはどうなってるんだ？」

「黒ウサギは大祭の参加者ではありませんでしたが、審判の最中だったので十五日間はゲームに参加出来ない事になっています。……主催者側の許可があれば別ですが」

「よし、それだ魔王様。黒ウサギは参加者じゃないから、ゲームで手に入れられない。けど黒ウサギを参加者にすれば手に入る。どうだ？」

「……………二週間」

「ちよ、ちよつとマスター!? 『箱庭の貴族』に参加許可を与えては……………」  
「だって欲しいもの、ウサギさん」

焦るラツテンに素っ気ない一言で返答する。

黒ウサギを引き合いに出しても二週間で限度。

だが、これ以上に相手が食い付く交渉道具があるのだろうか。

全員が思考を巡らせる中——カグヤが口を開く。

《ジャツジマスターに問います。現在、月影帝の処遇はどうなっていますか？》

突然の問い。

確か、彼は封印状態から何かしらの行動を行い、プレイヤーとして復帰している筈だ。それなのに、彼女は一体何を知りたいというのだろう。

訳が分からない……………

そう困惑する中、黒ウサギは自慢のウサ耳をピクリと震わせると、驚いた様に目を丸くする。

「は、箱庭より回答です。月影帝は……………ゲーム参加者にいません！」

「なっ……………!？」

その言葉に、全員が目を丸くする。

確かに、あの時振ってきた“契約書類”の範囲に彼が含まれていた。

だが、箱庭の回答には彼は存在しないモノと扱う様になっている。

全く意味の分からない矛盾。

だが、その場でジンが何かを思い出した様にあ、と声を上げた。

「も、もしや、帝様は『離脱権限』を発動させたのですか？」

「……『離脱権限』？」

聞き慣れぬ言葉に、十六夜が首を傾げる。

《そういえば、十六夜様は私と帝の存在を御存じではありませんでしたね。……十六夜様、帝が人の姿となった時、どう自己紹介したのかを覚えておられますか？》

「……確か、『竹取物語』の生き残りだとか、『箱庭の御子』だとか言ってたな」

《はい。私達『竹取物語』には、一つだけ特別な特権が与えられています。それが『離脱権限』です》

『離脱権限』とは、『竹取物語』の血を引く者達にのみ与えられ、効力は参加者となった時のみ発動する特殊権限。

これは、一度だけゲームから離脱出来るといふものだ。

《元々は、特殊過ぎるギフトを一子相伝で受け継いできた一族が、魔王側に利用されない様に齎された特権だそうです。私も、兄も滅多な事では使わない様にしていますか……》

「ふうん……つまり、黒ウサギが持つ『ジャツジマスター審判権限』を発動させなくても、仕切り直しが可能って事か」

《はい。ただし、発動は一度のみという諸刃の剣です。そして、無条件に発動させて離脱出来るのは一族の血縁者のみです。本来であれば、兄も然るべき手続きの元、『ノーネーム』をゲームから除外するつもりだったのかもしれませんが……》

しかし、その手続きを行う前に病魔に倒れたのだろう。

少しでも視線を下げ、項垂れるが、すぐさまその瞳がペストへと向けられる。

《交渉材料として、兄は最適だと思います。魔王である貴女は新米でしょうから、知らないとは思いますが……後ろに控えているお二人ならば兄——月宮夜光やこうを御存じですよね？》

「っ!？」

普段とは聞き慣れない名前。

だが、その一言でヴェーザーもラッテンも眼を引ん剥く勢いで見開く。

しかし、それは「サラマンドラ」のマンドラも同じだった。

信じられない、とでも言いたげにカグヤを見詰め、今にも嘘を問いただしそうな勢いが窺える。

「ハハ……まさか、『魔王殺し』が『ノーネーム』に在籍してるなんてな」

「……どういう意味なの？」

怪訝そうに首を傾げるペスト。

「俺達も、前のマスターに言われてた事がある。『絶対に『魔王殺し』に単体で挑むな。存在自体を抹消されるぞ』ってな具合に」

「そうそう。前のマスターだけでなく——私達の姉妹魔道書も悉く負けちゃって……前のマスターが負けるなら、彼奴だろうなってぼやく位に強いプレイヤーですよ」

《魔王のギフトゲームに単体で挑み、完勝する……それ故に付いた通り名が『魔王殺し』

“ですが、現在は重病人として闘病生活が必須となっております。ゲーム復帰も、無理でしょう”

「……つまり、だ。『魔王殺し』の異名を持つ彼奴も、現在は重病人として床に臥せ、ゲーム参加は絶望的。だが、ゲームの日数を縮めてやれば、死なずに……しかも、戦わずに手に入る。どうだ？」

カグヤの目配せを受け、十六夜が更に切り込む。

相手とて、強力な手駒を戦わずして、しかも無傷で手に入る。

その為にはかなりの日数を縮めねばならないだろう。

思案する様に腕を組むペスト。

しかし、彼女が口を開く事はなく、沈黙だけが空間を満たしていく。

やはり、材料として弱いのだろうか。

不安が参加者側に広がった時——ジンが意を決して口を開く。

「それなら、ゲームに期限を付けます」

「なんですって？」

「再開は一週間後。ゲーム終了は……その二十四時間後。そして、ゲーム終了と共に



主・僱者の勝利とします」

ゴクリ、と黒ウサギやサンドラ達が息を呑む音が貴賓室に響いた。その間にジンは、呆然と成行きに目を丸くしていたカグヤへと振り返った。

「カグヤ様。……一週間です」

《ほ、ほえ?》

「一週間、絶対に死者を出さないで下さい。できますか?」

真剣に見つめる彼の瞳。

カグヤは暫し瞑想し——胸へと右手を置くと、恭しく頭を垂れる。

《お約束します。月宮の名に懸けて、私の誇りに掛けて……一週間、絶対に誰も死なせません!》

「……これで、参加者側に一週間は死者が現れません。それでも、今後現れるであろう症状やパニックを想定した場合、精神的にも体力的にもギリギリで耐えられる瀬戸際。そして、それ以上は僕らも耐えきれない。だから、全コミュニケーションは、無条件降伏を呑み

ます」

如何ですか？と畳み掛けるジン。

それは、ほぼ最低ラインで必要な時間を確保し、尚且つ死者を出さない参加者側の希望と、無傷で人材を手に入れたい主催者側の希望の丁度中間位の内容。

確かに、それならば理想的だと思ってもいいだろう。

それに、ラッテンやヴェーザーが危険だと言うプレイヤーは、現在参加出来ない状態であり、重病人。

ゲームへ参加されては厄介だろうが、ゲーム参戦が絶望的な今ならば、ゲームを仕掛ける事なく手に入れられる。

確かに理想的だ。

そう、理想的ではあるが——面白くはない。

(……………気に入らないわ)

ペストは不愉快だった。

一見して合理的に話が進んでいるが、何もかもが参加者側の目論見通りになってい

る。

それが気に食わない。

それに、とペストはサンドラ達「サラマンドラ」ではなく——「ノーネーム」へと視線を向ける。

この現状を作り出したのは、他ならぬ「名無し」達。

そして、魔王として若輩者である自分でも分かる程に、この「ノーネーム」には貴重な人材が揃っている。

自分の名前をいい当てた事といい、この交渉といい……真つ直ぐにジンを見詰め、ペストが問う。

「ねえ、ジン。もしも一週間生き残れたとして……貴方は、魔王ワタシに勝てるつもり？」  
「勝てます」

間髪開ける事無く、ジンが即答する。

それは、脊髄反射に近い答えだったのかもしれないが、それでも自分の同士が負ける事等疑わない澄み渡った瞳をしていた。

それが余計に——ペストの神経を逆撫でした。

「……………そう。良く分かったわ」

ペストは不機嫌な顔を一転させ、にっこりと笑った。  
そんな華が咲いた様な笑顔で、

「宣言するわ。貴方は必ず——私の玩具にすると」

瞳は壮絶な怒りを浮かべた。

ゾクリ、とカグヤの背に冷たい汗が滑っていく。

次の瞬間、激しく黒い風が吹き抜け、参加者達が顔を庇う最中、主催者——  
黒死斑の魔王”は消えた。 ”

完全に気配が立たれ、ここに存在しない事を確認すると、カグヤはその場でクタリと  
へたり込む。

「か、カグヤ様!?!」

《す、すみません……………腰が、抜けました》

あはは、と乾いた笑みで答える彼女は、先程の毅然とした態度が嘘の様に弱々しい。今まで、ずっと張りつめていたモノが全て音を立てて崩れていくかの様に……カグヤにとって、この交渉は必死だったのだ。

「それにしても……まさか、カグヤから『殺す』だの、『交渉材料』だのという言葉が聞ける日がくるとはな」

《あ、はは……全て、兄の入れ知恵ですよ？》

「ハッ、だろうな。どう見ても、オマエのガラじゃないだろう？」

《はい。なので……もし、止められなかったら、本当に兄を殺しにいかないといけなくなる所でした》

「カグヤ様、無茶をし過ぎですよ!!」

未だ床に座り込んだままのカグヤを、黒ウサギが助け起こす。

だが、今のカグヤには自身の身体を支える事は、困難な程に足が震えてしまっている。いや、足だけではない。

手も、身体も、心すら——今更襲ってきた恐怖によって、マトモに使える状態

ではないのだ。

《……見苦しい姿を晒して、すみません》

「そんな事なのです!!カグヤ様は、プレイヤーとして立派に立ち向かっていました!!  
この黒ウサギが証人ですヨ!」

《黒ウサギ……》

「お前、初めての交渉だったんじゃないかねえのか? 普段は、帝がいけしやあしやあと高説を述べてそうでもないな」

《はい……》

十六夜の指摘通り、普段の交渉には帝が投入される事が多い。

ゲームの経験、そして知識の豊富さはコミュニティの中でも信頼されていたのだ。

カグヤは、その姿を見る事はあっても、自分がその席に立とうとは思った事がない。

兄の後ろに隠れ、兄に守られ……兄に愛されて育った自分が、戦える程強い生き物だとは思えない。

だが、それでも――

《私が……守るんです》

「カグヤ様？」

《守りたいんです。帝も、耀様も、飛鳥様も、十六夜様も、ジンも、黒ウサギも、レティシアも……私は、自分の手が届くならば全てを守りたいんです》

だから、もう逃げたくない……。

そう呟く彼女の瞳には、誰よりも強い信念と闘志が爛々と輝いていた。

—— 一瞬、十六夜はその瞳に言いなれない不吉さを感じ取っていた。

『ギフトゲーム名 “The PIED PIPER of HAMELIN”

・プレイヤー一覧 現地点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台区画に存在する参加者・主催者の全コミュニティ（“箱庭の貴族”及び“箱庭の御子”を含む）。



・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉（現在非参戦の為、中断時の接触禁止）

・プレイヤー側・禁止事項

・自決及び同士討ちによる討死。

・休止期間中にゲームテリトリー（舞台区画）からの脱出を禁ず。

・休止期間の自由行動範囲は、大祭本陣営より500m四方に限る。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・八日後の時間制限を迎えると無条件勝利。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

・休止期間

・一週間を、相互不可侵の時間として設ける。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下に、ギフトゲームを開催  
します。

『グリムグリモワール・ハーメルン』印』

•

## 十七章 太陽と月

——境界壁・部隊区画。大祭運営本陣宮、隔離部屋個室。

閑散とした空気が立ち籠める部屋で、春日部耀は目を覚ました。発熱でぼんやりとした頭のまま、視線だけを巡らせる。

“ノーネーム”としては破格過ぎる待遇のこの部屋は、元々別の人間の為に割り当てられた病室。

その人物は未だ……耀の隣で、苦しそうな息で昏睡したまま。少しだけ寝汗でべたついた気持ち悪さを、寝返りで誤魔化す。

——と

「……………十六夜？」

「お、起きたか。容体はどうだ？」

十六夜が首だけ振り返る。

どうやら、彼は自分達が眠るベッドの脇で本を読んでいたらしい。

彼が何を読んでいるのかは、寝たままの耀には分からなかったが、きつと今回のゲームに役立たせる為のものだろう。

あの交渉から、既に六日が経過した。

現在、"ノーネーム"内で黒死病を発症したのは、耀と帝の二人のみ。

本当ならば、もつと手伝いたかった耀だが、周りへの感染拡大を防ぐ目的と——  
一人、病人達を救おうと奮闘する彼女の迷惑とならない為に、こうして隔離部屋での養生を余儀なくされた。

それだというのに、全く気にする様子もなく部屋に侵入し、呑気に本を広げている十六夜の姿を、耀は呆れた様子で見つめる。

「ゲームクリアの、目処はたった?」

「んー……大まかには分かっているんだが、核心には至っていないってとこだな」  
パラリ、と本を捲って肩を諫める十六夜。

ゲームが再開されるまでの時間は、残り僅か。

——明日の夕方には、強制的に開始されてしまう。

しかし、一週間という期限が終わろうとしても、参加者側の意見は一向に纏まる気配

を見せずにいた。

次々と倒れる同胞と全く理解されない謎解きにより、参加者達の士気は上がる事なく、明日は我が身かと怯えている。

この状態で、本当に魔王打倒が果されるのだろうか。

そんな不安を抱えて、全員が明日のゲームに消極的なのだ。

「大体の考察は終わってる。だけど、其処からの解釈に意見が分かれている感じだ」

「……………具体的には？」

体を起こしつつ尋ねる耀へ、ほい、と十六夜は紙を見せる。

彼が考察したメモ用紙の様だ。

ラッテンⅡドイツ語でネズミの意。ネズミと人心を操る悪魔の具現。

ヴェーザーⅡ地災や河の氾濫、地盤の陥没などから生まれた悪魔の具現。

シウトロムⅡドイツ語で嵐の意。暴風雨などによる悪魔の具現。

ペストⅡ斑模様の道化が黒死病の伝染元であったネズミを操った事から推測。黒死

病による悪魔の具現。

・偽りの伝承・真実の伝承が指すものとは、一八八四年六月二十六日のハーメルンで起きた事実を右記の悪魔から選択するものと考察される。

「……………？此処まで分かっているのに？」

「ああ。此処まで分かっているんだが……………」

十六夜の言葉の切れが悪くなる。

どう説明すべきか、と思考を巡らせ、出来るだけ分かり易い言葉を選んでポツポツと話し出す。

「春日部は以前、黒ウサギが俺達を召喚した時に言っていた、『立体交差平行世界論』って奴を覚えているか？」

「うん、知ってる」

「あれは箱庭に呼ぶ召喚式の種類で、多岐結集型って奴のパターンらしい。要約すると——『異なる自称が時間平行線で起きているにも拘わらず、結果が集約するクロスポイント』と言えは分るか？」

「うん。時間平行線の交差点クロスポイントである数式 $\alpha$ を求める数式 $\Omega$ が複数個あるってことだよね？」

お?と一瞬首を傾げる十六夜。

「まあ……要点的にはそういうことだが。なんだ、春日部の説明の方が黒ウサギの説明より分かり易いな。お嬢様に説明するときはその方がいいさ」

「そう。それで?」

「つまり——」

「……殺害法数式 $\Omega$  || ヴェーザー数式 $W$  || ラッテン数式 $X$  || シュトロム数式 $Y$  || ベスト数式 $Z$  || 130人の死絶対数 $\alpha$ であり、この連結式が彼奴らの霊格を実力よりも底上げしている。そして、今回の勝利条件はその中で $||$ が繋がらない考察が偽りか真実かって事になる」

突然入ってきた声に、二人は目を丸くして声の主へ視線を向ける。

声を発したのは——さっきまで昏睡していた帝だ。

彼は腫れぼったい臉を無理に押し上げ、ゆっくりを汗で額に付く髪をかき上げた。



「帝!? 大丈夫?」

「大丈夫、とは言い難いな。自分でも、よく意識が回復したもんだと思うよ」

しかも、このタイミングで。

そう告げて、彼は苦笑した。

「随分と勿体ぶった登場じゃねえか」

「真打は遅れて登場ってな。十六夜が悩んでいるのは、〃ハーメルンの笛吹き〃の伝承に特定した真実が存在しない事から、真実だと証明する手段って感じか?」

帝は体を起こす事なく、首だけを十六夜へ向ける。

確かに、大昔の事を現代に生きる十六夜が突き止める術はない。

ケホツ、と耀が咳き込んだ。

「真実は置いといて、十六夜は、どれが偽物だと思ってる?」

「数式ズトだ」

即答だった。

それだけは自信を持って断言できると、表情が物語っている。

「神隠し、暴風、地災。どれもが刹那的な死因であるにも拘わらず、黒死病だけが長期的死因として描かれている。『ハーメルンの笛吹き』は二二八四年六月二十六日という限られた時間内で一三〇人の生贄が死ななければいけないんだ」

—— 一二八四年 ヨハネとパウロの日 六月二六日

あらゆる色で着飾った笛吹き男に一三〇人のハーメルン生まれの子供らが誘い出され、丘の近くの処刑場で姿を消した——

その回答に、帝はゆっくりと頷く。

「黒死病の潜伏から発症までの期間は、二日から五日。俺みたいに体が極端に弱い130人がいたとしても、一日で発症、その日以内に死亡するなんて事はあり得ない」

「……?」  
「『……?』<sup>ブラック・パーチャイ</sup> 黒死病の魔王」が偽物のハーメルンなら、彼女を倒せばいいんじゃない?」

「それも考えた。だけどそれじゃ、第一の勝利条件と被るんだ」

あの契約書類ギアスロールに書かれていた勝利条件は二つ。

ハーメルンの魔王の打倒と、例の謎かけだ。

確かに、あの一文が盛大なブラフだと割り切ってしまうのは簡単だが、それは余りにもリスクが有り過ぎる。

「それで？お前から見て、その一文はどこまで解読出来てんだ？」

「部分的に、だな。『偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ』……この伝承とは一対の同形状であり、『砕き』『掲げる』事が出来る物と推測される。なら、考えられるのはハーメルンの碑文と共に飾られた、ハーメルンのステンドグラスだ」

その回答に、耀は大きく目を見開き、帝は感心した様に薄く笑う。

「ステンドグラス……なら、もしかして、彼らが祭りに潜入した方法って、」

「そうだ。今回のゲームには参加者でも主催者でもないにも拘らず、祭りに参加できる別枠が存在していたのさ」

—— “主催者権限を持つ者は、参加者となる際に身分を明かさねばならない”

—— “参加者h主催者権限を使用する事が出来ない”

—— “参加者でない者は祭典区域に侵入出来ない”

これらのルールに抵触せず、尚且つ独立した意思を持つ参加枠とはつまり、

「——美術工芸の出展物、グリモア だろ？ 魔道書が本限定とは言われてない。今回のハーメルンはステンドグラス状の魔道書であり、それを美術工芸として出展してきたか……随分と回りくどい事しやがる」

ハツ、と帝が毒づく。

今回の場合、ジャックがいい例だろう。

彼は出展されたギフトの一つでありながら、独立した意思を持って火龍誕生祭に参加してる。

十六夜がサンドラに確認したところ、十六夜達とは別枠の “ノーネーム” 名義で出展されたステンドグラスが、一〇〇枚以上も登録されていた事が判明した。

その事実には、一瞬だけ帝の表情が曇る。

「100枚も、か？」

「ああ。100枚も、だ」

帝の問いに、十六夜も思うところがあるのだろう。

含みを持った言葉で、帝の問いに答える。

それにしても、と耀は感心半分、呆れ半分で二人を見つめる。

「十六夜は……一体どんな頭の仕組みをしてるの？帝も、だけど」

「ん？見たいか？」

「見たい見たい」

「見せるかよ！」

「いや、頭の仕組みって……見せるにしても、どうやるんだよ」

「えつと……かち割る？」

「グロッキー!?!可愛く小首傾げても、言ってる事犯罪だからな!?!」

コテンと首を傾げる耀に、帝がうわつとでも言いたげに顔を顰める。

ヤハハハ！と笑う十六夜。

「…………でも此処までが限界だな。いや、正直参った。多分、展示された偽りのステンドグラスを砕いて、本物を掲げろって事なんだろうが……真偽の目処があやふやで、ペスト以外のどのステンドグラスを砕いて掲げればいいのか分からん。なんせ、100枚以上もある。もう最後は天に運を任せて、明日のゲームで魔王を倒すしかねえのかな」

天を仰ぎ、苦笑を洩らす。

現在の時刻から見て、ゲーム再開までの時間は24時間を切っている。

コミュニケーションへの伝達、纏め上げる為にはもう方針を伝えねばならない。

これ以上遅くなれば、サンドラが幾ら頑張ろうとも団結させる事は困難だ。

「『真の芸術は己が宇宙に在り』か。いやいや、中々言い得てるぜ。このハーメルンの碑文もその側面がある。様々な考察と推測を擦り合わせる事で想像力を刺激し、グリム童話の様な物語が創造されてきたんだろうが……今必要なのは真実だけ、白夜叉」

その会話は、きつと帝達がない時に行われたモノなのだろう。

自棄を起こしているかの様な十六夜に、耀はふつと口元に笑みを浮かべる。

「……………おい春日部。参ってる本人の前で笑うのはどうよ？」

「ごめん。だけど十六夜がそんな風に拗ねるのは珍しいなと思つて。何時も自信満々で傲岸で自己中で周りの迷惑を全く気にしない唯我独尊な十六夜のそんな姿を見て、正直スツキリ」

「本音出しまくりか。いい根性してるぜ。……………フン、重病人の横で鬪病は寂しい思いをしてんじやねえかと思つた俺が馬鹿だったってことか」

え？と十六夜を見る。

彼の言い分に、帝は苦笑した。

「悪かつたな。好きで重病人してんじやねえぞ？」

「だろうが……………病は気からつてな。身体が病むと心も病むもんだ。それに、カグヤの様子から、もう一生目を覚まさないかもしれないみたいな悲惨さを感じりや、顔出さない訳にはいかねえしな。それだつてのに、酷い言われ様だぜホント」

やれやれ、と十六夜は肩を竦め、手元の本を広げ直す。

耀はバツが悪そうに頭を掻いて、

「……………本当にごめん。君は私が思うより優しい人だ」

「おう。俺の優しさに全米が涙してもいいんだぜ？」

「前言撤回」

ばつさりと斬り捨てた耀に、ヤハハ！と笑って返す十六夜。

くくつと帝が苦笑した。

「そう、だな……………十六夜、視点を変えた事あるか？」

「視点を变える？」

「そうだ。白夜叉と俺が封印された原因については、もう考えはまとまってるのか？」

ゆつくりとした口調で問う帝に、十六夜は暫し考えた後に、首を横に振る。

未だ、白夜叉の封印は持続しており、接触も禁止されている。

結局のところ、どうして二人が封印され、また帝だけが封印を破ったのかについては謎なのだ。



ゲホツ、と帝が苦しげに咳き込む。

「ゲームの勝利条件は二つ。魔王打倒と例の一文だ。どう考えても、魔王打倒は白夜叉の封印条件にはならない。そもそも、魔王を倒す事で解除される条件なら、俺が封印から抜け出せる筈はないからだ。なら、封印のトリックは後者である一文だろうな」

「でも、帝。ハーメルンの碑文に、夜叉を封印する様な一文があるの？」

「耀、まずその考えが間違ってる。いいか、相手は俺も封印したんだ。ホスト側が指定した白夜叉だけでなく、な」

「つまり………お前はこう言いたいんだろ？お前と白夜叉の共通点は何かってな」

十六夜の問いに、帝は静かに首肯した。

魔王側は、白夜叉以外のプレイヤーが封印された事に酷く驚いている所があった。

元より、このルールは白夜叉個人に発動されたものなのだろう。

なら、何故帝は囚われたのか。

全く考えていなかった切り口に、十六夜はその答えを脳内で探す。

そして、ふと気になる事を思い出した。

「なあ、帝。お前は帝なのか？」

全く意味の分からない問い。

一体何を言っているのかと、耀が顔を顰める中、帝だけは少しだけ嬉しそうに笑う。

「お見事。そこに、俺が封印を解いた鍵が眠ってる筈だ」

「え？ どういう事？」

「耀、俺がお前とのゲームで姿をさらした時、こう言ったのを覚えているか？ // 月影一族より『帝』の名を襲名せし存在”って」

そういえば、そんな風に言っていた気がする。

だが、それがどんな意味があるのだろう。

全く容量を得ない会話に、耀が痺れを切らすよりも早く、十六夜が目を見開いた。

「そうか！ 『帝』 っていうのは、ギフトの意味だったのか！」

「え？ どういう事？」

「つまり、俺が名乗っていた『帝』には、ギフトとしての役割もあつたんだ。竹取物語に

において、『カグヤ』は月の使者であり、食物と穀物を司るトヨウケビメをモデルとしてい  
ると言われている為、彼奴には食物や穀物に関するギフトの他に、月の運行を司る使命  
がある。月の運行に關していうなら、『カグヤ』が權威だろうな。そして、『帝』にも同  
じ意味が付与される。『帝』とは天照大神の血を引く存在だ。つまり、帝には太陽の神で  
あるという事になるな」

「白夜又は太陽の主権を持つてゐるつて話だ。なら、帝と白夜又の共通点は」  
「『太陽』つて事だ。十六夜、ハーメルンを抜きにして、考えてみる。違和感はないか？」

確信を突く様な問い。

帝が示す違和感の正体。

十六夜は反射的に手にある本を速読し始め、黒死病に関する知識をありつたけ脳内で  
反復する。

—— “黒死病” とは、十四世紀から始まる寒冷期に大流行した人類史上最悪の疫病  
である。

この病は敗血症を引き起こし、全身に黒い斑点が浮かんで死亡する。

グリム童話の “ハーメルンの笛吹き” に現れる道化が斑模様であった事。

そして、黒死病の流行元であるネズミを操る道化であったこと。

この二点から、 “一三〇人の子供達は黒死病で亡くなった” という考察が存在する――

……………本当にそうか？

帝は、言った。

“ハーメルンを抜きにして考えろ” と……

(……………。十四世紀と寒冷期？)

十六夜の頭に浮かんだのは、病状や潜伏期間ではなく――黒死病が流行した年代記だ。

ハーメルンの碑文が一二八四年。

黒死病の大流行が始まったとされるのが、一三五〇年以後の数百年。

つまり、黒死病の最盛期とハーメルンの碑文は――時代背景が合わない事になる。

(まさか……………ペストは碑文のハーメルンと無関係の時代から来た悪魔なのか……………!?)

何故気が付かなかったのか。

ペストは最初から、自分はハーメルンの魔王ではないと名乗っていた。つまり、彼女が持つ黒死病の属性は、ハーメルンとは無関係だったのだ。何かに気付いたらしい十六夜の様子に、くくつと帝が喉の奥で笑った。

「黒死病が大流行した原因は、太陽が氷河期に入ったが故に起こった寒冷期。相手は、純度100%太陽に恨みを持つてるだろうな」

帝の言葉を受けて、十六夜は獰猛な笑みを浮かべる。

これで、全ての謎が一つの線となって十六夜の中に現れた筈だ。

太陽の運行を司る白夜叉、そして太陽そのものの意味を持つ帝が封印されたのは、太陽が氷河期——即ち、太陽の力が弱まっていたとされる年代記をなぞったゲームルールが組み込まれていた為だろう。

それ故に、帝は何らかの手段で『帝』を失い、それ故に封印する理由がなくなったのだ。

十六夜は黒死病の本を強く握り締め、*“偽りの伝承”*の意図を理解する。

「なら、連中は二二八四年のハーメルンじゃなく……ああクソッ！帝に言われるまで、

どうして気付かなかった!?完全に騙されていたぜ、ブラック・パーチャー「黒死斑の魔王」!!つまり、お前達はグリム童話上の「ハーメルンの笛吹き」ではあっても、本物の「ハーメルンの笛吹き」じゃなかったってことか……!!!」

興奮した様に立ち上がり、すぐさま部屋を飛び出していく。

その際、十六夜は一度だけ二人に振り返った。

「悪かったな、帝!おかげで、謎が解けた!後は任せて、二人揃って仲良く枕を高くして寝てな!」

「そうさせてもらおう。後は頼んだ」

「うん。頑張つてね」

コホツ、と咳き込みながら十六夜を見送る耀と、怠そうに寝たまま軽く片手を上げる帝。

耀には、一連の会話がよく分かっているはいなかったが、それでも十六夜が何か糸口を見つけた事だけはわかった。

後の事は彼らに任せ、耀はベッドの中に潜り込む。

「ぐふっ……!!」

十六夜がいなくなったのを感じたのだろう。

帝が体をくの字にし、苦しげに咳き込む。

その際、押さえている手には赤い液体が付着する。

否、その色は赤と言うよりも黒に近いものとなっていたが。

「帝、大丈夫?」

息する事さえも出来ずに苦しむ彼に、耀はゆっくりとその背を擦る。

元より、彼は発病してから一週間という長い時間を必死に戦い続けている。

カグヤから三日も持たないと言われた時、ジンや十六夜、黒ウサギが動揺したのと同じ位、耀も動揺した。

医者に言わせれば、ここまで生きている事は奇跡に近い確率なのだろう。

「……………悪い」

「ううん。苦しい時は、お互い様」

ある程度息が落ち着いたのか、小さく謝罪する帝に、耀は気にするなという様にその背をポンポンッと二回叩く。

その仕草に、帝は淡く苦笑すると、ベッドサイドに置かれたタオルへと手を伸ばし、血で汚れた手と口元を丁寧に拭うと、クルリと反転して耀の方へと向き直る。

「耀は落ち着いてるな」

「私、ずっと病院で暮らしてたから」

「……そっか」

それ以上、何も言う事はなく、帝は耀の髪へと手を伸ばす。

優しく撫でる手は、普段見ている狼としてのものではなく、ちゃんとした人間の――男の子の手。

それが、少しおかしくて耀はくすり、と笑った。

「なんか……変な感じ」



「だろいな。お前らは俺が人間だった時の事を一切知らない。狼の方がしつくりくるだろ？」

「うん。帝は、シスコン狼の方がとつても似合う」

「……………それは喧嘩を売ってんのか？なら、高く買うぞ」

スツと目を細め、口を曲げる帝。

その様子は、狼だった時と大差がなく、それもおかしくて、耀は笑みが抑えられなくなる。

「今は遠慮する。ちゃんと治ってから、ね？」

「だな。……………ほんと、嫌になるよなあ。肝心な時に、相手の効力エフエクトに嵌るなんて」

「そうだね……………帝は、体が弱いのか？」

「ん？……………まあ、アルビノ種だからな」

「アルビノって、あの？」

アルビノとは、動物学におけるメラニン生合成に関わる遺伝子欠損から引き起こされる遺伝子疾患。

主に体毛や皮膚が白くなったり、瞳に色素が不足する為に赤眼になる等と言った症状がある。

つまり、彼の銀髪はそこからくる部類なのだろう。

「昔から、俺は体が弱くてさ。仲間達が色々と体を治す方法を探してくれたが、全く意味を持たなかった。本来プレイヤーじゃないカグヤまで必死に探してくれたんだけどな」

「カグヤも?」

「リメイク・ギフト創造神の悪戯」も ラファエルも、元々は俺の身体を治す為に、カグヤが必死にゲームで勝ってきてくれたものだ」

自分や仲間黙っていなくなる時は、大概ギフトゲームに挑む時だった。

どちらも高位のギフトであるが故に、そのリスクは普通のギフトゲームよりも危険で、高いものだった事は容易に想像がついた。

それでも、カグヤは必死にゲームで勝利をおさめ、帝の元に帰ってきては彼の身体を治そうとギフトを使う。

その姿に、何度帝は苦悩しただろう。

自分のせいで、最後の肉親が危険な橋を渡ろうとしている。

その事実が……どうしようもなく辛かった。

「好意は素直に嬉しいと思った。でもさ、自分のせいで誰かが……大事な家族が危険な事をしてるって、想像以上に堪えるんだよ。今回は成功したからいい。でも次は？もし、万が一にも負けたら……殺される事だってありえる」

「……そうだね」

自分も病人だったから分かる。

もし、自分の大事な人が自分の為に危ない事をしていたとしたら、耀も同じ気持ちだっただろう。

だが、自分がカグヤの立場なら……きつと、同じ行動をした。

それは、帝とて同じだったのではないか。

そう思うと、やりきれない思いが胸にふつふつとわいてくる。

それにしても、

「なんでだろ、今日の帝はよく話すね」

「……………病人だから、かもな」

「病気になるよ、饒舌になる？」

「寂しいからに決まってるだろ？」

「当たり前だ、と言わんばかりにキョトンと耀の問いに返答する帝。

その姿が、普段のものとは全く違うせいで、耀は吹き出してしまった。

——そして、二十時間後。

火龍誕生祭・運営本陣営に、活動出来る全てのコミュニティが集結する。  
“黒死斑の魔王”との、ラストゲームが始まろうとしていた。

☆  
★  
☆  
★  
☆

——境界壁・舞台区画。大祭運営本陣宮、大広間。

黄昏時の夕陽に染まる舞台区画の歩廊は、今や人一人いない。

それもそうだろうな、とカグヤは外を眺める。

魔王が襲来したのだ。

そんな呑気な真似が出来るのは、きっと帝位なものだろう。

その彼も、今は床に臥せてしまっているが……

現在、宮殿の大広間に集まった人員の数は、僅か五〇〇程。

一週間前に屈服を強制された者や、ジャック等の『出展物粹』には参戦資格がない事が判明し、病魔に冒されていないメンバーを集めたのだが、それでも全体の一割未満という心許無さ。

それでも、死者が一人も出ていないのは、偏にカグヤが所持するギフトの恩恵だと言つても過言ではないだろう。

その証拠に、三日と持たないとまで言われた帝は、現在も苦しいながらも生きている。

カグヤは日が沈むのを視線で捉えながら、クルリと方向転換し、歩き出す。

今頃、ジンやサンドラ達が参加者達へ方針を伝え、纏め上げている事だろう。

非戦闘員にも違いカグヤも、本来であればその中に紛れている筈だった。

だが、彼女はそれを是としなかった。

カツン、と下駄が鳴く。

「あ……カグヤ様」

宮殿の上、丁度屋上として開放されている辺りに、黒ウサギはいた。

彼女も、今回は審判役としてではなく、一プレイヤーとしての参加が認められている。だが、カグヤは名を奪われる前から現在まで、黒ウサギが戦う姿を見た事がない。

案の定、とても言うべきか、胸に組んだ両手は微かに震え、ピンと立ったウサ耳は若干弱弱しく見える。

どう声をかけるべきなのか。

カグヤが考えあぐねていると、

「どうした黒ウサギ?」

ひゃつ!と不意の声に、ウサ耳と尻尾を跳ねさせて驚く。



そして、自身の胸元を見て、二度驚く。

気が付けば十六夜の手が背後から、腋の下を通って胸に伸びていたのだ。

「な、何をやっているのですか、このお馬鹿様ッ！」

「胸を揉もうとしてるんだぜ、黒ウ」

サギ、と続く前に、ズバンツという音が十六夜の頬すれすれに響く。

その発信源は、第三宇宙速度も真つ青な速さで竹串を放つ、カグヤの姿。

ニコニコと微笑んでいるが、怒っている事は明白だ。

十六夜はすぐさま、軽薄な笑みを浮かべて両手を上にあげた。

「たく、北に来て以降、カグヤの沸点が低くなってる気がするの、俺の勘違いか？」

《いえ、確実に低くなってますね。私も、自分が思った以上に感情的になり易い事に今、初めて気づかせて頂きました》

「そうかいそうかい、そりや感謝しろよ？」

ヤハハ！と悪びれる事なく笑う十六夜に、黒ウサギはどっと疲れを感じ、肩を落とす。

カグヤも頭が痛くなったのだろう、溜息を一つ零すとこめかみの辺りを擦った。

「……………それで？何を思いつめた様な顔をしてたんだ？」

へ？と質問に一転、黒ウサギの言葉が詰まる。

その姿はカグヤも見えていた為、彼女も氣遣わしげに黒ウサギへ視線を向ける。

まさか見られていたとは思わなかったのだろう、黒ウサギはウサ耳をほんのり紅くしてそっぽを向く。

「べ、別に何でもありませんっ！ゲーム開始を前に、武者震いしてただけでございませぬ」

「ふうん？俺はてつきり、人生初の大舞台に緊張で震えていたんだと思っただが？」

ニヤニヤと笑いながら十六夜が指摘すると、ぐぬぬと黙り込む黒ウサギ。

十六夜も、彼女達“箱庭の貴族”が“ジャッジメント審判権限”を持つている為に、ギフトゲームへの参戦は少ないと感じているのだろう。

だが、黒ウサギの気鬱な理由はそこではなかった。

「た、確かに緊張していないと言えば、嘘になります。しかし我々『月の兎』は帝釈天の眷属。いざ戦いになれば、後はこの身に流れる血脈が自然と戦いに順応するでしょう」  
 「ほう？じやあ手が震えていたのは別の事だど？」

茶化す十六夜だが、黒ウサギの表情は固いまま。

その様子に、カグヤは心当たりがあった。

《負けた後の事を……考えていたのですか？》

「……………はいな」

カグヤの言葉に、黒ウサギは瞳とウサ耳を伏せ、ゆっくりと頷いた。

箱庭において、珍しい話ではない。

魔王によって滅ぼされたコミユニティが、再度復興しようとした矢先に、別の魔王によって滅ぼされる。

自分達の場合、ここにいる全員がプレイヤーであり、残るのは小さな子供達のみ。

そうなれば、事実上『ノーネーム』は壊滅したと言ってもいいだろう。

そうになった者の末路など……考える必要すらカグヤには感じなかった。

「カグヤ様……黒ウサギは飛鳥さんと耀さんにも、申し訳なく思っているのです」

ふと、黒ウサギの瞳が遠くを映す。

「十六夜さんは、白夜叉様の忠告を覚えていますか？」

「忠告？」

「飛鳥さんと耀さんに向けられた言葉です。『魔王のゲームの前に、力を付けろ。お前達では——魔王のゲームを生き残れない』、と」

その言葉は、カグヤの知らないもの。

つまり、コミュニケーションに所属し、ギフトを鑑定してもらった時にでも投げかけられた言葉だったのかもしれない。

そういえば、とカグヤは思う。

帝も同じような事を言っていた気がする。

彼は思いの外、飛鳥と耀に気を配る様子があった。

それは偏に、二人が一番危うい立場にいる事を分かっていたからこそそのモノだったの  
だろう。

カグヤはその言葉の真意を、全く分かってはいなかった。

それは黒ウサギも同じであり、彼らが来てからの一ヶ月。

現在の状況に陥るまで、その言葉を軽んじ、コミュニケーションの生活の為だけにギフト  
ゲームを紹介してきた。

カグヤ自身、経験を積ませたいと言った兄の言葉を実現させる為に路銀を稼いでいた  
が、もっと身近の難易度が高いギフトゲームの存在を一切考えた事はなかった。

如何に最高の才能を持っていたとしても、それに似合うだけの経験も知識も持たせる  
事が出来なかったのだ。

その油断が、二人の少女に牙を向いた。

「黒ウサギは今日までその忠告を軽んじ、皆さんの溢れる可能性に目が眩んでいたの  
です。……………この一ヶ月で皆さんが『ノーネーム』にもたらしてくれた恩恵キブトの数々は、劇  
的に生活を変えてくれました。もう水不足で困る事はありません。食事のやりくり  
に悩む事も少なくなりました。『お腹がすいた』と訴えるあの子たちを見て、心苦しい思い

をする事は皆無です」

全てを奪われ、苦しむ日々が続いた。

あのゲーム以降、ずっと眠っていたカグヤには分からない黒ウサギの苦労があつた筈だ。

それを、カグヤも苦しく思っていたし、何も力になれない己の無力さを恨んだ日もあつた。

幼き仲間が為に身を獣に墮とした兄。

きつと、十六夜達がこなければ、自分達で持ち直す事など出来なかつたであろう現状。

奪われた仲間が帰ってきた。

“打倒魔王”を掲げ、コミュニティの為に尽力してくれた彼らの存在。

そんな彼らの優しさに……黒ウサギもカグヤも甘えていたのだろう。

その結果がどうだろう。

今、“ノーネーム”で戦えるのは四人。

その内、リーダーでもあるジンはほぼ戦う力のない子供。

元魔王であるレティシアも、以前の様な力は持っていない。

万全の状態で戦えるのは、多分ここにいる三人だけだ。

キツと黒ウサギが顔を上げる。

「…………十六夜さん。一つ、お願いがございます。聞いてもらえますか？」

「聞くだけなら自由だな。…………なんだ？」

「魔王の相手は、この黒ウサギに任せてはいただけないでしょうか？」

真摯さに、静かな怒りを込めて黒ウサギは十六夜に頭を下げる。

「十六夜さんが魔王とのゲームを心待ちにしていた事は承知しております。しかし、どうしても…………黒ウサギは、魔王に一矢報いてやらねば気が済みません」

ザワツと黒ウサギの髪が鬨志で戦慄く。

黒い髪が一瞬にして淡い緋色のの光に包まれ、軍神の眷属に相応しいオーラが見て取れた。

その様子に、クツと十六夜が喉の奥で笑う。

「勝算は？」

「あります。いえ、むしろ最高の愛称とも言えるギフトを黒ウサギは所持しております。例え相討ち事になろうとも、必ずや魔王の首を——」

「なら却下だ」

《ダメです》

「ふにやつ!!？」

即決を出す十六夜と、芭蕉扇で黒ウサギの頭を叩いたカグヤ。

鉄で出来ているそれは、確実に黒ウサギの脳天をつき、脳を揺らす程の激痛を与えた。あまりの激痛に、頭を押さえブルブルと震えだす。

「か、カグヤ様まで、いじめっ子様と一緒に行動をとるなんて……!!」  
《頭を冷やすのに、丁度いいかと思ひまして》

涙目で睨む黒ウサギに、カグヤは平然とそう答える。



「ま、悲観するなつて事だろ黒ウサギ。お前が考えている程状況は悪くない。連中の狙いを忘れたか？『優秀な人材を出来るだけ多く手に入りたい』。それが奴らの狙い。なら必然的に、奴らの行動はタイムオーバー狙いの消極的な時間稼ぎになる………そして、それが奴らの隙になる」

ハッ、と黒ウサギも気が付いた様に息を呑む。

《十六夜様の推測が正しいのであれば、相手はステンドグラスを守りつつ、自身の身を守らねばならない筈です。そうなると、数の多い此方がバラけてしまえば、自然とあちらもバラけます》

「そこを狙う……カグヤも分かってきたじゃねえか」

《プレイヤーとしての経験は浅いですが、ゲームを見てきた数は黒ウサギにも負けなかつもりです。それに……私も魔王には一泡吹かせてやりたいので》

グツと胸元に下げた月のループタイを握る。

今はまだ容体は安定しているが、いつ悪化するとも分からない。

出来る事なら短期決着が望ましいだろう。

カグヤが一步前へ出る。

《十六夜様、魔王を抑える役目を私にさせてはいただけませんか？》

「おいおい、お前まで黒ウサギと同じ事言うんじゃないだろうか？」

微かに表情を歪めた十六夜に、カグヤは微笑んで首を横に振る。

《いいえ。今回の場合、各個撃破が前提です。私には、ヴェーザーとラツテンのどちらも倒す事は困難です。十六夜様は、私をジンの補佐につけようとお考えでは？》

「ああ。まず、サンドラと黒ウサギで、ブラック・パーチャー黒死斑の魔王<sup>〃</sup>を確実に抑える。その間に俺とレティシアがヴェーザーとラツテンを倒す。主力が集結したと同時に、黒ウサギの切り札でトドメを刺す。——必勝策としてはこれが最良だろうか」

確かに、それが正しい選択だろう。

その中で、回復系ギフトを所持するカグヤが怪我人が出る確率があり、尚且つ主力の傷を癒す為に安全を確保する事を考えれば、ジンやサンドラが指揮をするステンドグラス破壊部隊に組み入れた方がいい。

だが、カグヤはそれを嫌がる。

《最終局面を考えれば、私の回復系ギフトは最後の手段だと思えます。ですが、相手は魔王です。幾ら回復系ギフトの中では上位とも言える恩恵だろうとも、『与える側』のギフトには対抗できません》

だからこそ、耀や帝は床に臥せている。

もつと優秀な——それでいて神格のあるギフトならば、彼らの病を打ち消す事が出来たのだろう。

それが、口惜しい。

《一つだけ、奥の手が御座います。ただし、それは私一人ではとても出来ません。サンドラ様や黒ウサギ、十六夜様にレテイシア……皆様がいて、初めて意味のある力となるものです。ですから、私に魔王を抑える側に入れては頂けませんか？》

真摯に訴えるカグヤに、十六夜は暫し瞑想し——  
——楽しげに笑った。

「ハハツ、楽しくなってきたなおい」

「いい、十六夜さんは……それでいいのですか？」

誰よりも魔王とのゲームを楽しみにしていたのは、十六夜だ。

それ故に、戸惑いを感じた黒ウサギが慌てて十六夜に問う。

「別に構わねえよ。魔王と戦う機会はまた別に来る。今回は特別に譲ってやる。帝釈天の眷属の力つて奴を、今回は楽しませてもらうさ。勿論、カグヤの秘策つてのものな」

ニヤリと笑う十六夜に、カグヤはフワリと微笑み、黒ウサギは力強く返す。

「了解です。帝釈天様によって月に導かれた『月の兎』の力。とくとご覧くださいまし」

《月宮の名に恥じぬゲームメイクをお見せいたします》



☆★☆☆☆

ゲーム開始時刻になり、主催者側は再開前の確認を行っていた。

布の少ない白装束を揺らし、ラツテンは配下のネズミに情報を収集させていた。

「マスターマスター。どうやら連中、私達の謎を解いちゃったそうですよー？」

軍服のヴェーザーは、黒い短髪を掻きながら愚痴る。

「チツ。ギリギリまで最後の謎は解かれないだろうと踏んでたんだがな」

どうやら、相手は予想に反して優秀なプレイヤーが存在していたらしい。斑模様のワンピースを揺らしてペストは立ち上がり、後ろで両手を組む。

「……構わないわ。最悪の場合は皆殺しにすればいいだけよ」

悠々としたその姿勢のまま、ヴェーザーとラッテンに振り返り、

「——ハーメルンの魔書を起動するわ。謎が解かれた以上、温存する理由はないもの」

ペストの言葉に、二人は凶悪な笑みを浮かべて立ち上がる。

「ふふくん。いよいよもって盛り上がってきましたねーマスター♪」

「おい、油断するなよラッテン。参加者側には『箱庭の貴族』もいる。それに、『魔王殺し』は封じても、月宮は健在だ」

厳しい声音のヴェーザーに、片眉を歪ませて振り向くラッテン。

「……………やっぱり凄いの？ 『月の兎』 って」

「ああ。一度戦っている所を見たが、並の神仏じゃ歯が立たん。アレは正真正銘、最強の眷属だ。授けられているギフトの数が違う。それに、月宮といやあ 『竹取物語』 のリーダー格だった一族の姓だ。使用人とか言ってたが、あの女も厄介だぞ。俺とお前じゃ、とても抑えられんだろうな」

苦い顔で呟くヴェーザーとラッテン。

ペストはそんな二人に、微かに笑いかけた。

「そつ。なら魔書の他に、もう一つ策を設けるわ」

「策？」

ペストは悠然と歩み寄り、綺麗な指先を伸ばしてヴェーザーの額に押し付ける。

「ヴェーザー。貴方に神格を与えるわ。開幕と同時に、魔王の恐怖を教えてあげなさい」



•